女人藝術

全女性進出行進曲發表

NYONINTAISHI


日活超特作
謎の人形師
原作 佐々木三津三
監督 志波西果
非常警戒
監督 阿部豐
淺岡信夫
夏川靜江
小杉勇
主演
大河内傳次郎
快演
新春公開


内面艶消
新マツダ
もちよく明るく
電氣がお徳
新マツダ
瓦斯入電球

全女性進出行進

—禁轉載—

女人藝術第三卷新春號

曲當選歌詞發表

の頁

大衆 増大



てにヤシロ・トツエビソ――官法司の人婦



アレキサンドラ・コロンタイ氏



カザリン・マンスフィールド氏



オルツイ夫人



ルイズ・ミユツセル氏



グラツイア・デレツダ氏



クララ・ツエトキン氏



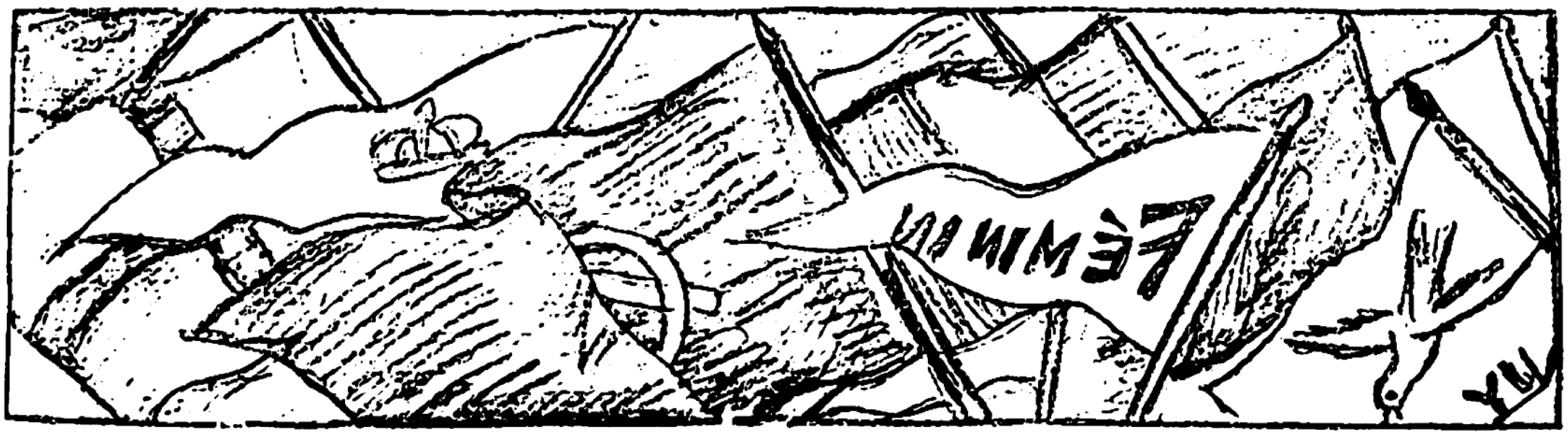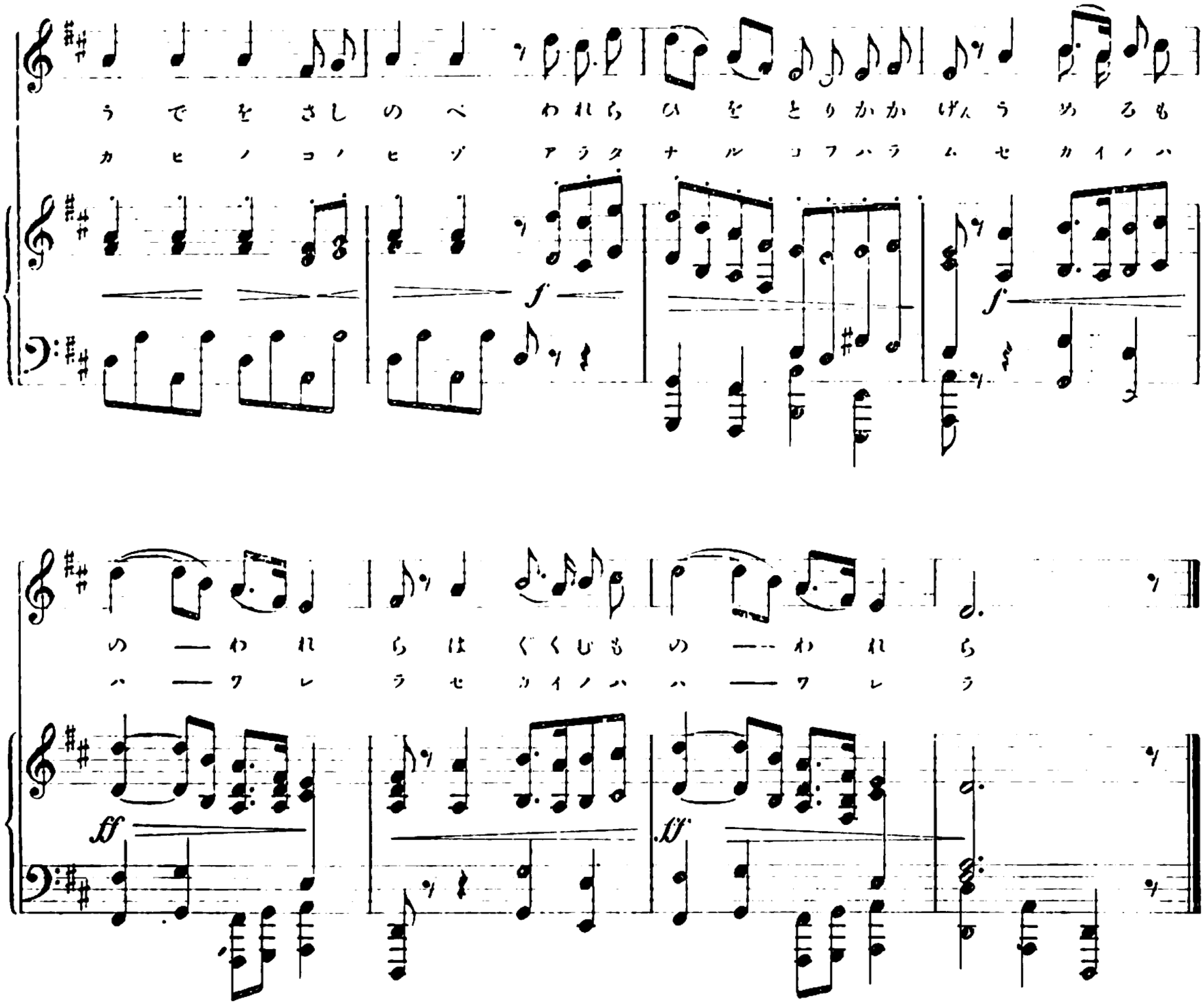






東京市電總罷業

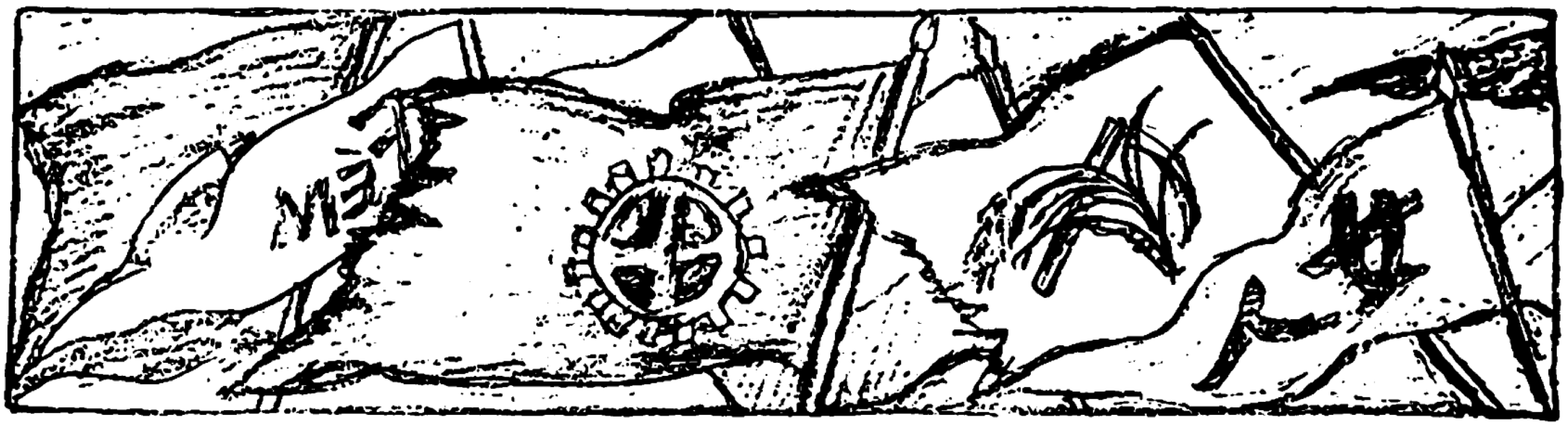
東京市電従業員は、賞與の割減、昇給無期延期に反對して、十二月六日總罷業を決行した　その日市電バスの女車掌達は敢然として最も勇かんに闘つた。右側は罷業當日若松町車庫の前に集つた彼の女達　右下は爭議團本部で食事してゐるところ。左は圓太郎の車掌に早變りした女事務員。
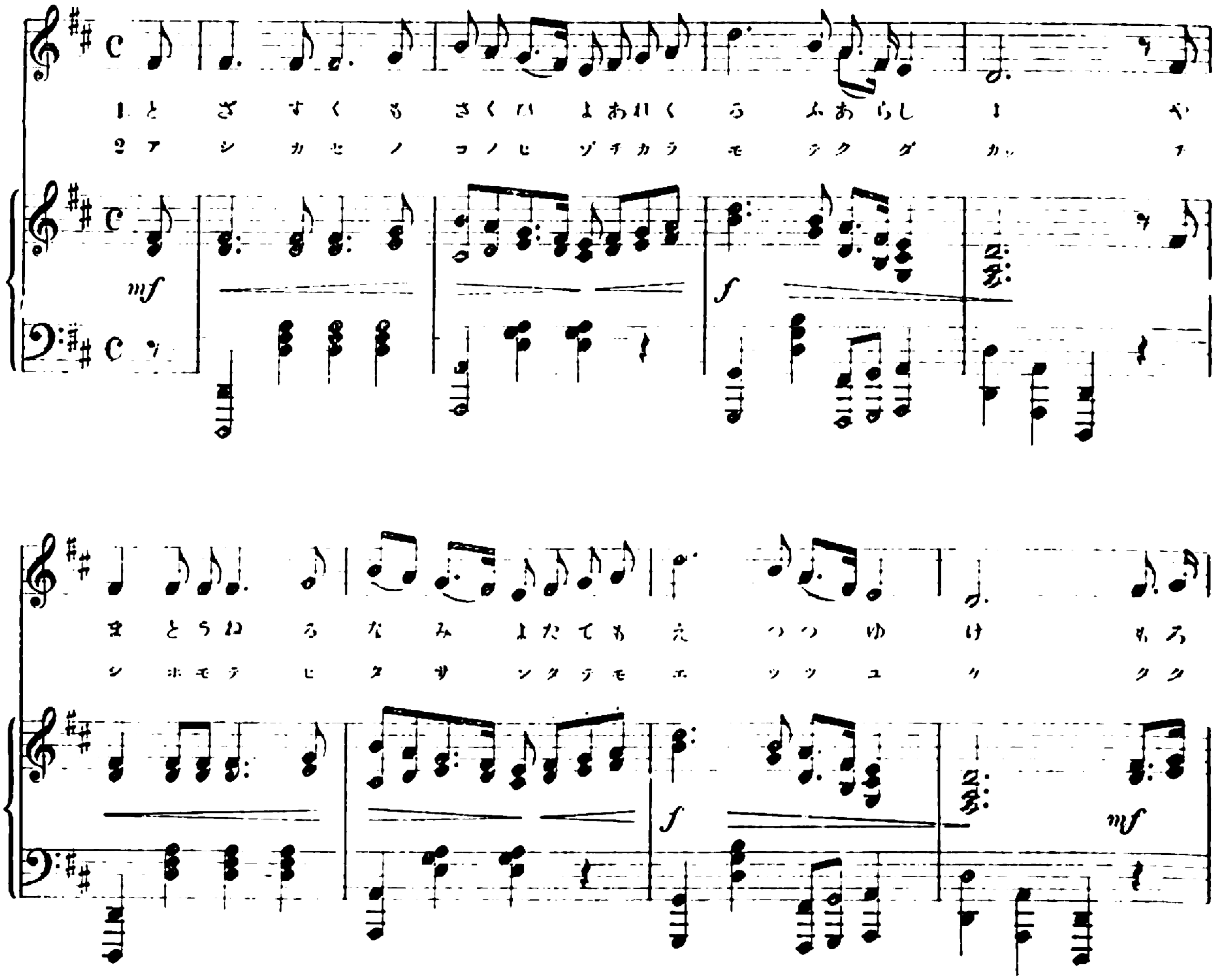


松田解子氏作歌
山田耕作氏作曲

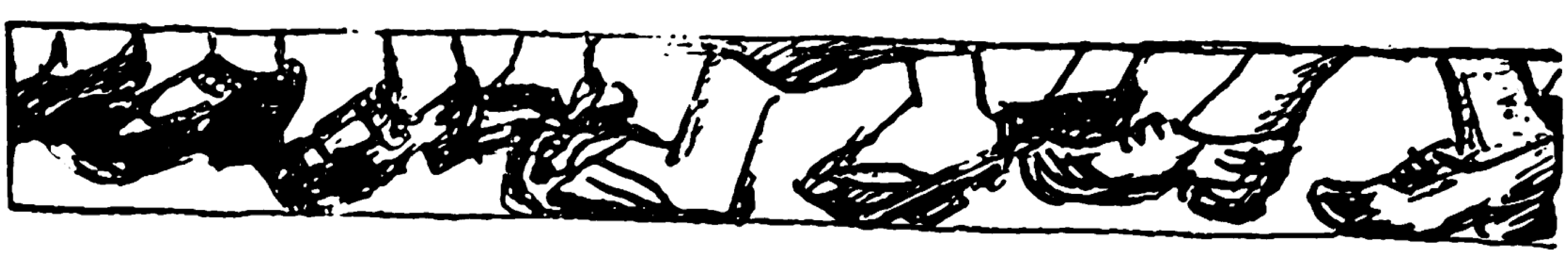






全女性進出行進曲


鋭く・力強く
1 と ざ す く も さ く い よ あ れ く る ふ あ ら し よ や
2 ア シ カ セ ノ コ ノ ヒ ゾ チ カ ラ モ テ ク ダ カッ ナ
ま と う ね る な み よ た て も え つ つ ゆ け も ろ
シ ホ モ テ ヒ タ サ ン タ テ モ エ ツ ツ ユ ク ク ク
mf
f
f
mf





松田解子

一、住所　東京府下伊豆大島差木地村二

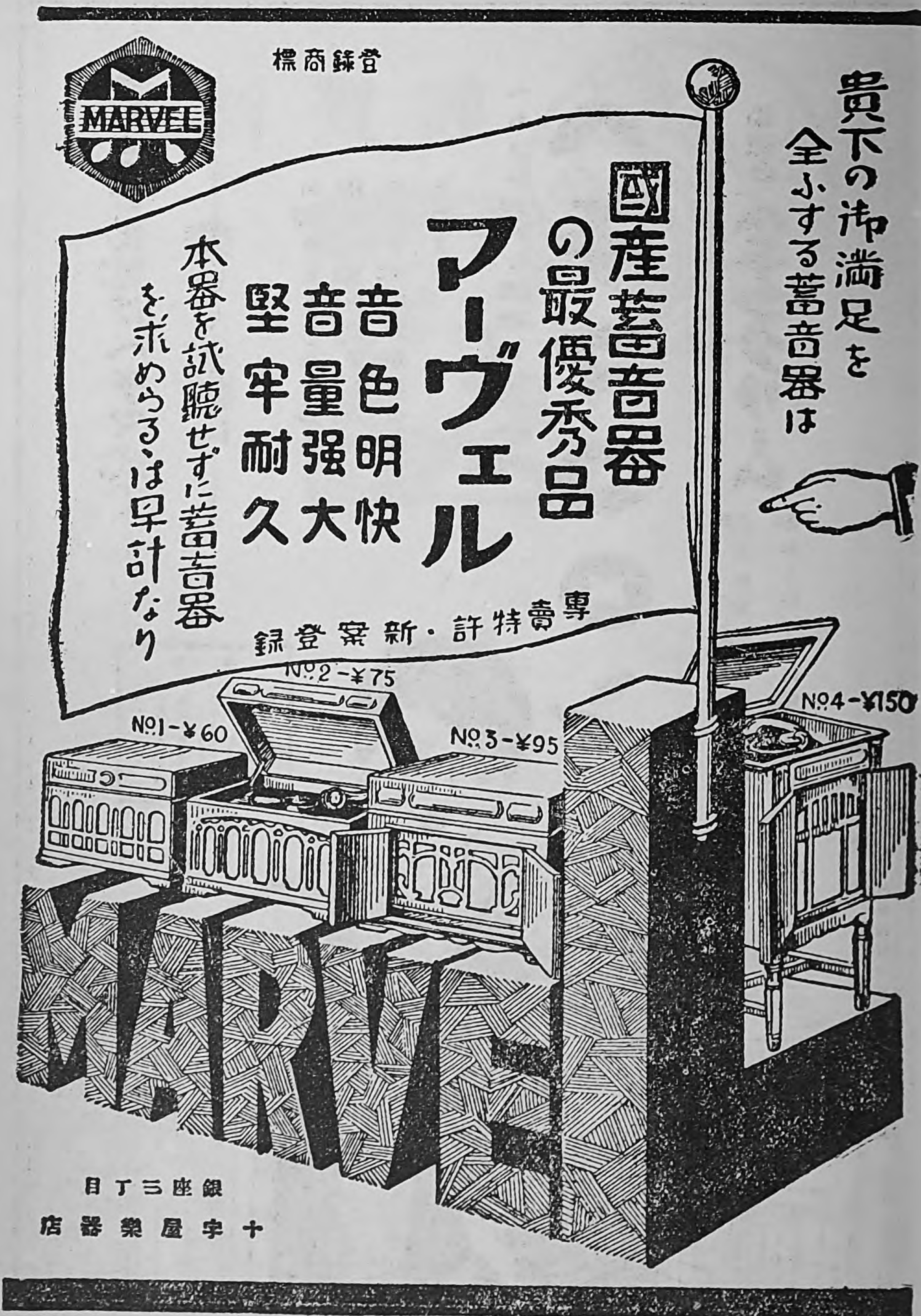
一、一九〇五年生れ。秋田縣荒川鑛山で育つた

一、秋田女師二部卒。ペスタロッチを逆立ちせしむること三度。其の間、内職、女工、ルムペン的街頭闘争、飢餓、そして島流し。現在清算途上

一、文藝公論、戰旗、女人藝術及創作時代等に、創作、詩を發表した事がある



この時計は本社で取次ぎいたしますから御申込み下さい


貴下の御満足を
全ふする蓄音器は
國産蓄音器の最優秀品
マーヴェル
音色明快
音量强大
堅牢耐久
本器を試聴せずに蓄音器を求めらるゝは早計なり
專賣特許・新案登録
登録商標
MARVEL
No.1-¥60
No.2-¥75
No.3-¥95
No.4-¥150
MARVEL
銀座三丁目
十字屋樂器店

今年もお化粧はヘチマ式で……

……美しく幸福に……

お肌をととのへきめを細かに色を白くし白粉のとき水にお髭剃のあとによい

へちまの水から発明した化粧水

ヘチマコロン

姉妹品

ヘチマクリーム

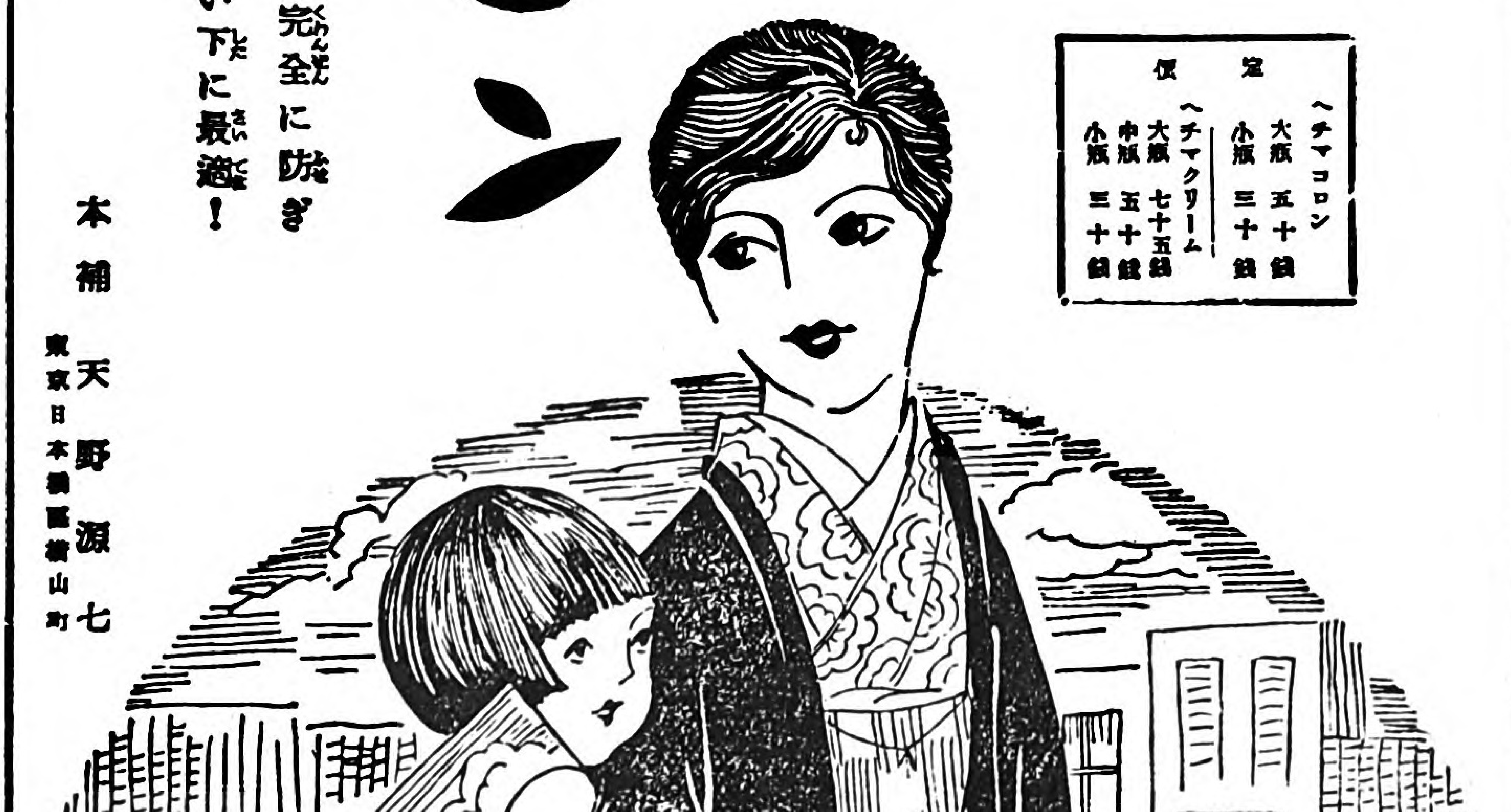
肌あれを完全に防ぎ

粉おしろい下に最適！

定価		
ヘチマコロン	大瓶	五十銭
	小瓶	三十銭
ヘチマクリーム	大瓶	七十五銭
	中瓶	五十銭
	小瓶	三十銭

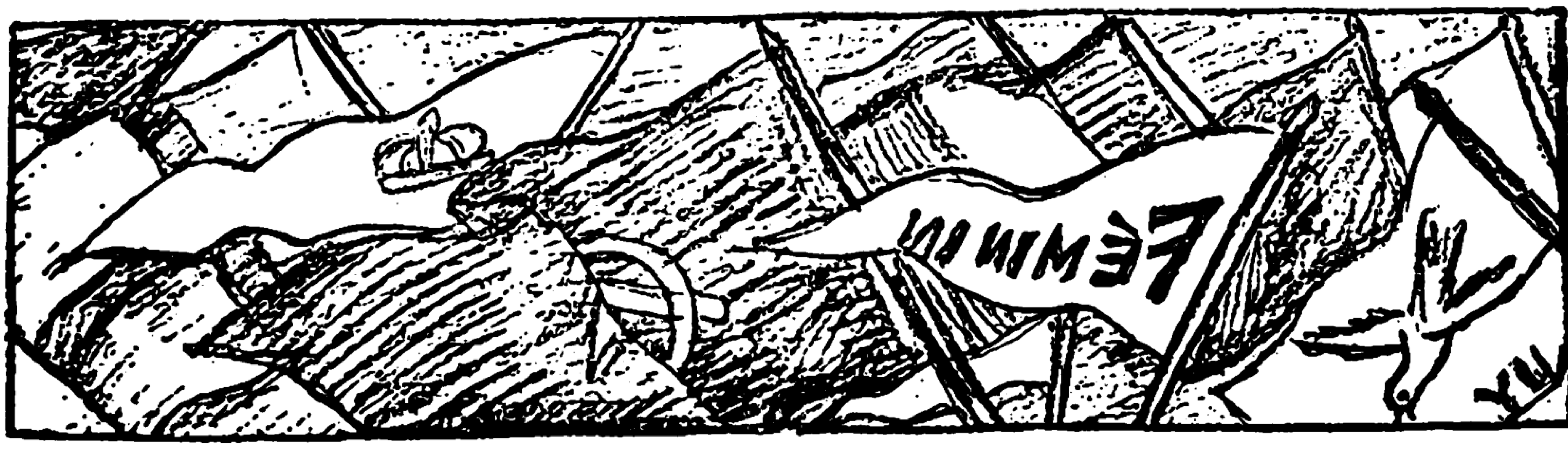
本舗 天野源七

東京日本橋区横山町



NYONINGEIJUTSU.





發表

世紀ここに二千年我等未だ今日まで女性を鼓舞する歌を持たず。今やこの全女性進出行進曲を得て女性抱負の偉大を語る。讃すべきかなこの歌！ 燦たるかな我等！ 重く厳しき使命の前に眞に力強く生きる合唱を誓はう。

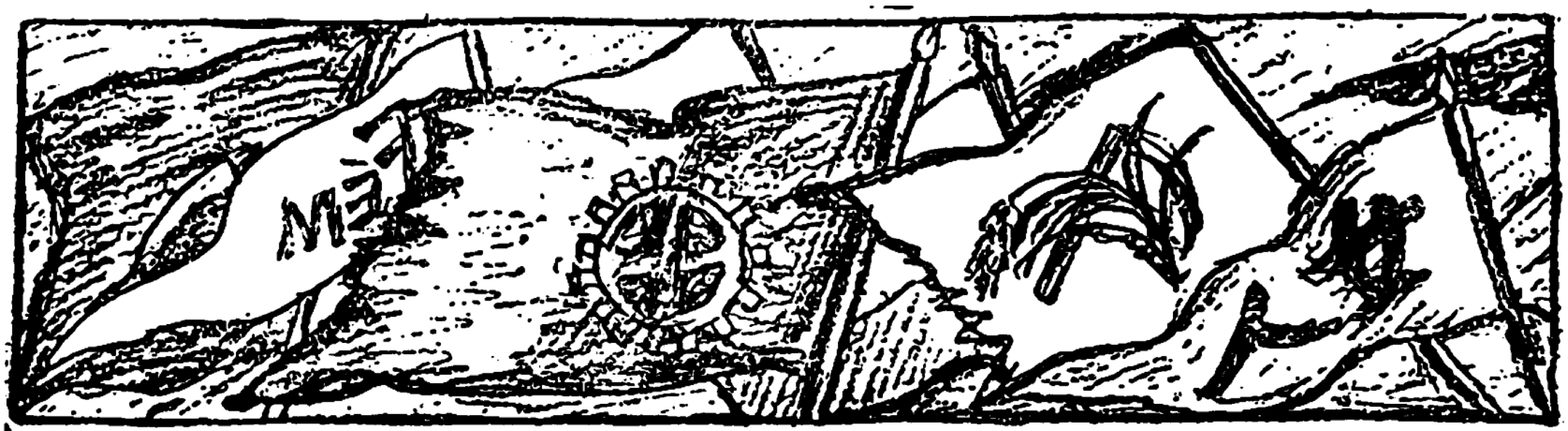
全女性進出行進曲

二等當選（賞百圓）

松田解子
東京府下伊豆大島差木地村

鎖す雲　裂く陽よ
荒れ狂ふ嵐よ
山脈とうねる怒濤よ





起て！燃えつゝ行け！
双腕を指しのべ
われら炬火をとりかゝげん
　産めるものわれら
　育くむものわれら

足枷のこの日ぞ
力もて砕かん
血潮もて浸さん
起て！燃えつゝ行け
闘ひのこの日ぞ
新たなる世をはらむ
　世界の母われら
世界の母われら





清水市入江三丁目
三等（十五圓）若杉香子

横濱市中區藤棚町九十八
（十五圓）飯塚かよ子

東京市外杉並町高圓寺一六八
（十五圓）澁田紗綺子

選外佳作（十人）

本誌一年分圖書券・附屬賞品

大阪市西成區皿池町
中村佐香枝

山形縣名高局區內
古宇田とし

對馬國嚴原町
小田村梅子

靜岡縣田方郡伊東町
杉山美都枝

兵庫縣城崎郡三椒村
加悦泉子

福島縣安達郡二本松町
古川陽子

東京市外杉並町
米田三千枝

横濱市鶴見潮田町
坂本春枝

札幌市南七條西四丁目
落合百合

支那上海海寧路長源里
友永初代

三等　若杉香子（清水市）

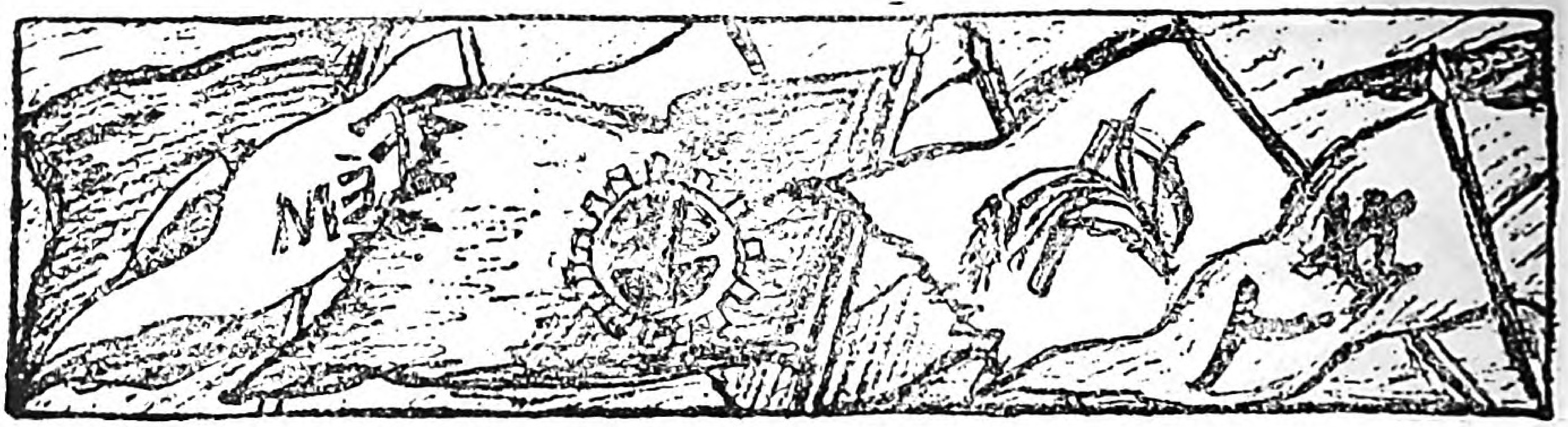
集へ、女性よ
團結は常に力だ
偉いなる使命のまへに
燃えさかる生命の焔
太陽のあくなき熱を
吾等の上に奪ひかへさふ

集へ、女性よ
團結は常に力だ
新らしい希望のまへに
ほとばしる命の流れ
奔流の絶へざる力を



吾等の上に奪ひかへさふ

集へ、女性よ
團結は常に力だ
澄み透る無限の空虚に
萬象を生む女性の誇り
地に充つる命の榮を
吾等の上に奪ひかへさふ



三等　飯塚かよ子（敦賀市）

若き叫びは
焔吐き
見よ、堂々と
我等起つ

若き希望は
太陽と燃えて
行け、堂々と
目指す道

若き力は
地を揺すり
あゝ、堂々と
女人あり

三等　池田紗綺子（東京市外）

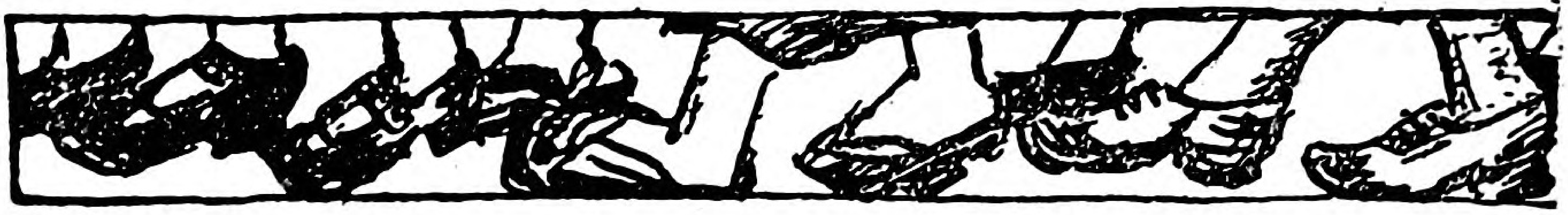
燃ゆる日輪　おお！打仰げ
興る世紀の　光芒ぞ、女性
愛と力の
炬を振り翳し
街頭に職場に
眞幸きく進まん

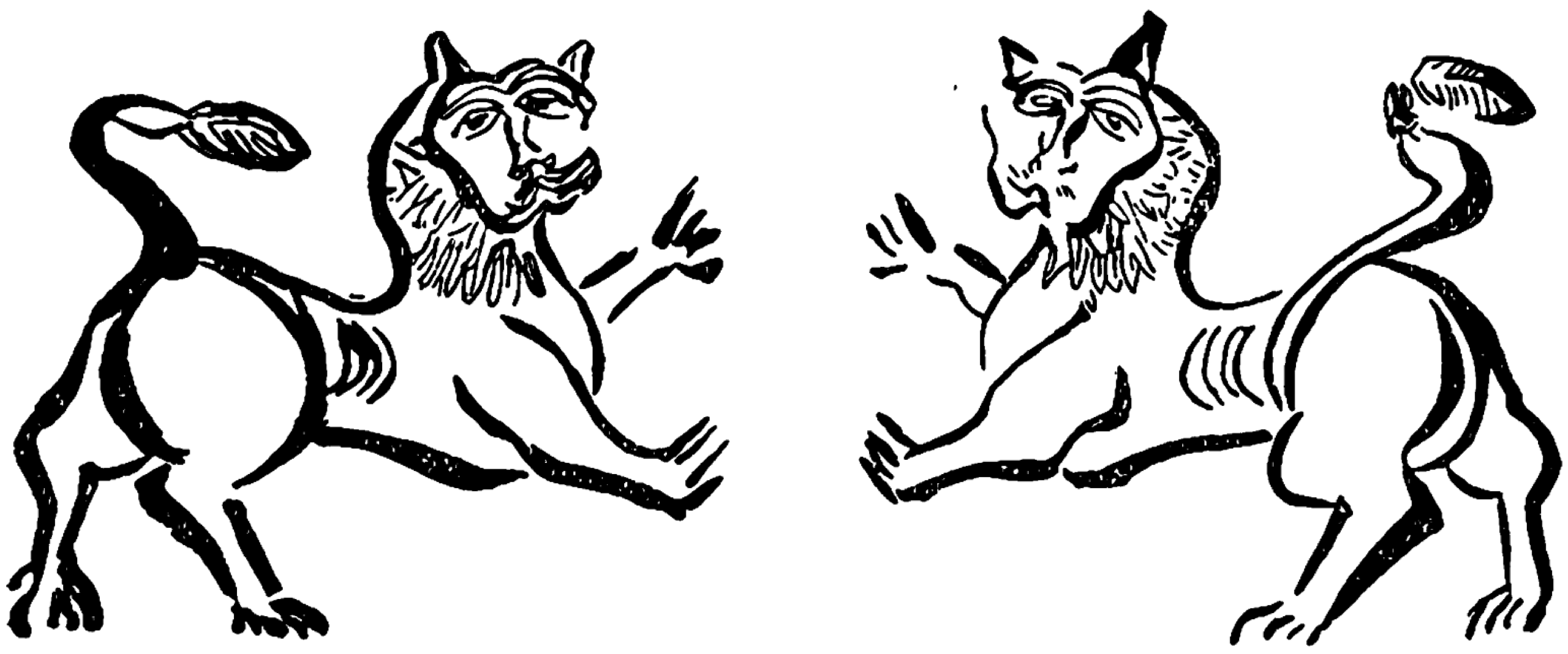
燦く大地　おお！踏鳴らせ
黎明を吼ゆる　嵐ぞ、女性
強く正しく
鐵鎖を碎き
久遠の矜持を
讃へて進まん。

應募者二千八百名に對し既報のごとく各社より好意ある賞品をよせられたるを割附す

改造社　圖書券百枚
平凡社　同
新潮社　同
文藝春秋社　同

賞品は本誌發行後一週間を經て發送す





シモン・プランタの望

（佛）ロベエル・デイユドンネー作
正宗乙米譯

懷手して暮したい、シモン・プランタは此樣な馬鹿氣た野心を抱いて居た。彼は二十年間生活の爲に仕方なく仕事のまゝに農家で働いて居た。或時は甘菜大根ぬきをやつたり、刈入れをしたり、又は麥打ちの仲間に投じた事もあつた。毎晩屋根部屋で睡り乍ら、彼は彼の疲れた四肢を粗末な寢床に伸して、

「此樣なくらしは一日も早く緣切りにしなきや」と呟いた。

村の内に年とつた一人者が居た。テイオ爺さんと云つてちつぽけな家に住むで居た。誰も昔彼が市場で何を商つて居たかはつきり知つて居なかつた。彼は其の小屋同然の家を買ひ取つて居て、その小さい花壇に水まきをして了ふと散歩する外用事が無かつた。

シモン・プランタはテイオ爺さんの生活程すばらしい物は世界にないと考へた。勿論此の爺さんがブラ〳〵してゐられるのは可成りの貯蓄が有るからだつた。

「己あやつぱり不幸だ」

とシモンは繰返した。と云ふ意味は彼に從へば、「自分は爺さんよりもつと幸福でもよい筈だ」と云ふのだつた。

やがて彼は一つの或考に執拗に捉へられた。即ち、テイオ爺さんを絞殺すること。暫の間彼は其の大金を家の隅にかくしといて、ほとぼりがさめた時分に氣分を變へると云ふ口實で或日村を離れ、他國でさゝやかな家を買つて、彼の理想的生活を初めるだらう――被害者の金で懷手して――。

世間の人達はテイオ爺さんは余り金はなかつたんだらうとか、又は盜人には不明な位を持つて居たんだと考へたらう。だがプランタは自分の想像通りにきめて掛つて居た。プランタは決して自分の持物を公證人に託したり書類を買つたりする人間ではなかつたから。

誰でも働きたいと云ふ望が有れば土地を買ふだらう、然し完全に休養仕様ときめこんだら小箱に小金をためて、減さない爲に極くちびくくと自分の死に際迄十分有る様にするものではなからうか？

三ヶ月の間此の日傭人は彼の計劃を考究した。十一月の或夕暮れ、――白耳義人が砂糖大根ぬきに大勢やつて來て居た――彼は門を押開けてテイオ爺さんの喉首に飛びかかつた。被害者は聲一つ立てる隙が無かつた。死骸を部屋の隅に轉しといて、シモンは家中の財産調べをした。驚くべき本能が彼を一箇の箱の方へ連れて行つた。その中には紙幣で六萬フラン以上、金貨、銀貨、等も澤山有つた。その他はつきり價の知れないガラクタの汚しい紙幣も雜つて居た。シモンは其様な物迄一つ餘さず、仕事を手早く片付けて了ひたいのでかき集めた。彼は再び門を閉じ、彼のあばらやに歸つてごく靜かにねむつた。朝早く彼はその寶を一箇の袋につめ、鼠の奴等が紙幣を嚙りに來られない様に二本の大梁の間にかくした。

二人の白耳義人が逮捕された。彼等は彼等の無罪を證明する爲にあらゆる手段を取つて遂に許された。世間の評判が二三の罪人を指定した。だが誰も畑から畑へと生活に餘念なく麥打機を手にして仕事をあさつて居るシモンに考へ及ばなかつた。冬になつて人々は砂利車の上に甜菜擦碎切の不氣味な果肉を滿載して居る彼の姿を見かけた。彼が巴里に旅立つたのはやうやく春になつてからで、テイオ爺さんが死んで半年も騷いでもう殆んど人の記憶に殘つて居ない頃だつた。巴里で彼は着物や下着を買ひ、身奇麗にしてからコンピエーニュ地方へ出發した。何故なら彼は時々其の地方で働いた事が有つたから。で彼は二三の舊知のある村に歸つた。そして彼が少しばかり遺産を相續した事を語り、ごく粗末な家を買つた。何の後悔もなく彼が其様にも長く熱望した所の幸福な生活を享樂した。

二三週間の末にはその邊では誰も彼に就て何の懸念も持たなくなつた。彼は四十八歲だつたが外氣と勞苦とで彫刻された百姓に特有な老人の顏貌を持つて居た。彼は百歲迄生き延びる事を豫想して、一ヶ年間に消費し得る定額をきめた。最い間彼は彼の勘定を幾度もやりなほした。夜になると彼は金をいぢりまはして肉體的悅に等し

い物を感じた。だがあまり長く生きる積りなので一年に費へる金は僅かだつた、彼は年とつて身體がきかなくなつて、一文無で人々に物乞ひするみじめさを望まなかつた。だが同じ事にも厭いて流石に一日の長さが彼を苦しめた。彼は牧場の草刈人や刈草乾の人達を見に行つたり、又は村へ出向いて出入商人と無駄口をきいたりした。

「まあ立派な御身分ですなムシュウ、プランタ」と彼等は云つた。

彼は謙遜だつたから誰にも反感を持たれなかつた。決定的に彼は手を汚す事をしなかつたので人々は「何せ食ふだけ持つてるんだからな、俺達とはたいした違さチエ畜生!」と云つた。

急に彼は彼が金持だと云ふ評判をしてる事を知つて危險を感じて震へた。何時か貧乏な悪漢が昔の彼の様に彼の財産をかぎつけるだらう。彼のドル箱の前に座つて居る慾深い爺さんをぶち殺すのは一擧手一投足だ。彼がした事は又他の人が出來る筈だ。彼は其の運命から彼自身を防禦する丈の十分な强さの自信が持てなかつた。彼は今となつて眞に人々の魂迄凝視し、彼等の秘密の考を追求し、其の計畫を捉へ様とした。

日が暮れると彼は門や窓にしんばり棒をかひ、毎日彼の寳の位置を變へる事を百姓に見る執拗さで行つた。

「奴等がよし己の命をとつたつてこの金をおめ／＼取らせてたまるもんか」と彼は私語いた。麥折切の酒に酔つた馬鹿者が街で彼に突當つて彼を侮辱した。シモンは大急ぎで家に歸つて夜中長い間道を通る遲歸りの村人達の足音にびくついて居た。

彼は痩せた。彼の目は窪み、一寸した物音さへ彼を驚かせた。彼は一寸外出したと思ふと直ぐ歸つて來た。——悪漢が彼の家に押入つて居ないかと氣づかひ乍ら——。終に彼は金を肌身に着ける事にした。彼は彼のチヨキの裏に大きなポケツトを作つて紙幣を捻ち込んだ。だが貨幣はチヤラ／＼鳴つた。で彼は袋を作り土と混ぜた。

彼の着物が突起したので、「シモンさん、一體何を背負つてなさる」と人々は質問した。彼は赤面しモジ／＼した。彼は又他の方法を見付けなければならなかつた。

彼は門や窓をメ切つた後、やつとパン丈買ひに外出した。が直ぐ家に歸り午後ねむくてたまらなくなると、門の扉に椅子を立てかけ、彼の目を覺さない限り誰も侵入出來ぬ樣に工夫した。

恐らく誰も彼の事等穿鑿しつこは無かつたんだが、あまりにも疑ひ深い不安な彼の樣子を見て、人々は彼の多額の財産を評價して市場の歸りに居酒屋等で其れを話題にした。

「プランタ爺さんは金の上でお目出度くなるぜ。爺さんにとつちやすてきな寢床さ。」或夜自動貨車が彼の住居から二三メートルの所で止つた。二人の者が庭の垣を越へて飛び込むだ。肩で戸をたゝき破つた。彼等の豆電燈は一人の縊死人が高いストーブの前にぶら／＼してるのを照し出した。灰の中には紙幣のはしや半燒の銀行切手等の破片が散らかつて居るのを二人の探檢者は見出した。

混沌

（英）Ａ・Ｅ・コパアード
村岡花子譯



1

ウヰトマンの一家――母親と息子と娘――は收獲(みいり)のいい農場に暮してゐた。途方もなくちつぽけな場所のくせに、ばかばかしく騒々しい農場だつた。下女にとつては、明方から晩まで「フエミイ、これしてお呉れ」と「フエミイあれは出來たのかい?」の連續だつた。夜から朝までの間でさへも、一種のあわただしさがただよつてゐた。半病人のウヰトマン後家だけがいくらかは落付きらしいものを見せてゐたが、それだつて本物ではなかつた。毎日毎日、大きなお臀をどつかりと据ゑて、編物とゐねむりの合間には、灰色の顔を上げてぶつぶつ小言を言ひながら、蜥蜴(とかげ)のやうなまなざしで、哀れな餌物を眼鏡ごしににらみつけてゐるのだつた。主婦をやつてゐた娘のアリスは大きな顔だつた。からだ全體が顔に見えるほどに威壓的な顔だつた。「鷄に玉蜀黍を遣るんだよ、フエミイや――焚付(たきつけ)がなくなつてるぢやないか、おい、フエミイ――馬具部屋へ罠を掛けたのは誰だい?――さつさと出ておいでつたら――鍋(なべ)はみがけたのかい? まだだつて?――何をぐづぐづしてるのさ? さつさと遣るんだよ。フエミイ、今朝は忙しいんだよ。せつせと手傳つて呉れなくつちや困るぢやないか!」アリスは廊下を吹きまくる風のやうに、呶鳴りまはつた。勤勉の大瀧は家の中を流れるだけではなかつた。外部(そと)には外部(そと)で一聯隊の兵隊でもやり切れないほどの仕事があつた。地主の仕事と云へば、大抵、ほかの地主仲間といろいろに談合

して、先の長い仕事を氣永にぼつりぼつりと遣つてゐさへすればいいのだが、ウヰトマンの息子グラストンベリイは全く違つてゐた。彼はエネルギーの化身だつた。明けても暮れても働きどほしで、註文と命令と、小言と不平と、惡口が口一杯につかへてゐた。フエミイ・マヂガンはかういふ所に奉公してゐた。そこでは誰だつて休む人なんかなかつた。人間も錠前も家畜も樽もみんな農場と世帶の仕事に魅入られてゐた。仕事は虎のやうに、人々に執念深く喰ひ込んだ。ウヰトマン一家の者たちはそれを苦にしなかつた——さういふ虎に喰はれるのを喜んだ。

　これを六七年も續けたあとで、アリスはカナダへ歸つて、昔の戀人と婚禮した。ウヰトマンの一家はカナダから移住して來たのだつた。アリスがゐなくなつても、フエミイの重荷はちつとも減らなかつた。洗濯ものと縫物とつぎものは相も變らず多かつたし、とても間に合ふ筈のない汽車を追ひかけて、乳の車を出させられたり、一匹しかない馬の蹄鐵がこはれてしまつたり、さういふ事はいつでも同じだつた。ウヰトマンは手傳の者たちが普通のあるきかたをしてゐるのを見ると腹を立てた。「納屋へ飛んでつて、熊手を持つて來い」とか、「乾草小屋へ走れ、ぐづぐづするな、急ぎだぞ」と言つたやうな、調子だつた。いくら悠長な牝鷄でも彼のとほりみちへ二度とうろついては來なかつた。使用人なんぞは血と肉で出來あがつた道具としか考へなかつた。然し、その道具の樣な人間共でも、時々は主人の絶間ない鞭に反抗した。グラス・ウヰトマンは邪魔や反對を嫌つた。或日、腹立ちまぎれにギヤザコールといふ、間抜けでのろまの馬方をたたきのめした。この爲に彼は一月の禁錮に處せられた。

　グラスの判決が下つた次ぎの日、後家のウヰトマンと二人きりの家でフエミイは、いつものとほりに早く眼をさました。霧のふかい九月の朝だつた。サムソンは息子のダニエルと搾乳場で桶をがたがた言はせてゐた。フエミイは重苦しい氣持で、着物を着た。こんな陰氣な家で働かなくても……と思つた。臺所ではきりぎりすが跳ね廻るし、屋根裏にはあぶらむしが一杯、蜘蛛と鼠は家中ゐない所はなかつた。屋根の低い、古ぼけた、細長いこの家は梯子段を下りて行くと、壁は秋の濕氣でしみが附いてゐるし、手摺りや欄干は黴でぢくぢくしてゐた。フエミイは貴婦人になつて、婚禮して、十五階もあるお邸に住みたいと思つた。

　彼女は十四の時に、養育院からウヰトマンの家へ引取られて來たのだが、仕合にも身體が大きくて丈夫だつた。それから七年經つた。仕合な事に、ウヰトマンの農場では食べものには不自由しなかつた。其處でたつた一つのいい事は食べものが充分だつた事だ。然し、食事だけでは物事の滿足は得られなかつた。その農場は人々の血と肉を喰みつくした。その上に時々は、思ひもかけぬ事件が起つて來て、更　又血の汗を搾らせた。それはちやうど張り切つたごむ紐を一杯にひつぱつて置いて、いきなり手を放して、ぴいんと言は

せるやうなものだつた。

此朝が其通だつた。ウキトマン後家は寢床の中で死んでゐた。その急變に面して、フエミイの上に新しい意識が起つて來た、それは責任の意識だつた。恐怖はなかつた、悲しみもしなかつた、驚きもしなかつた。この事件は彼女に何かしらの關係はあつたのだが、彼女自身はまるで、無頓着で何の不自然さもなく、農場の女主人になつてしまつた。窓をあけて外を見た。少し離れた所に少年が一人赤い頸卷を持つて門のわきに立つてゐた。

「おい——おい、かつぷ、かつぷ！」野原の牛を呼び立ててゐた。のそりのそりと起き出して、機嫌よく少年の方を眺める牛もあれば、まるつきり彼の聲を無視して蹲まつてゐるのもあつた。神妙に動き出したのも一二頭はあつた。「おい——おい、かつぷ、かつぷ！」

「あいつは怠け者だよ」フエミイは獨言を言つた。「あんな奴は追出しちまはなけりやあ……。ダニエル！　こつちへお出でつたら。ダニエル！」あらつぽく手を振つて叫んだ。「早く來るんだよ！」

警察と醫者へダニエルを使に出した。取調べの結果、イギリスには一人も親戚のない事が分つた。フエミイよりほかには證人もなかつた。葬式が濟んでから、監獄のグラストンベリイにフエミイから通知の手紙を出したが何にも返事はなかつた。畑の仕事は彼女の指揮の下にどんどん進んだ。自分が仕事の壓迫から自由になつたのは喜んだが、ほかの人たちの身體までも安易(らく)にさせるやうなフエミイではなかつた。後家のウキトマンの鍵と金箱を握つて、二人の男と少年に一週一週の賃銀を拂つてやつた。大麥の刈入も濟み、燕麥(オーツ)の積み上げも終り、根の切込みも出來た。乳車も毎日彼女の指圖で送り出された。男たちはいつでも彼女に追立てられてゐた。

「怠け者ばつかりで、ちつとも間(ま)に合やしない」空つぽの部屋に向つて呟くのだつた。「時間ばつかりむだにするんだから、泥棒も同然さ——全く泥棒だよ。こつちが骨まですりへらす位働いてたつて、あいつらは何とも思はないんだ。何もかもみんなわたしの肩にかかつてゐるんだからねえ！　あいつらと來たひにやあ、出來る事なら、相手の身體の皮迄もはぎ兼ねないんだ——が、さうはさせないよ」

穀物から食事から鷄卵(たまご)まで、フエミイはするどく見張つた。あんまり監視がひどいのでサムソンがふくれ出した。そこで、ウキトマンの息子の鐵砲と彈丸(たま)を出してやつて機嫌を取つた。彼女が言ふには、「ひまがあつたら、兎を一二匹打つて來てお呉れ」日の暮方までに、サムソンは一匹の兎も打てなかつたので、鐵砲と彈丸(たま)を幾日も持つてゐた。フエミイは愉快だつた。農場の陰氣さはすつかり取り去られた。庭には乾草が積み上げられた。池にはあひるが一杯泳ぎ、野原には羊や牛が遊びたはむれ、木々にはまだ葉が附いて居て、鳥が鳴いた。畑もそのまはりの物も、何もかもが美しかつた。玉蜀黍を庭へまいてやると、牝鷄どもが一齊に寄つて來る、仔豚は夢中で穀物を口に頬張つて、鼻をつまらせながら喧嘩さわぎでかけ

つて來る。それから又改めて、一粒づつ鐵のやうな顎で嚙みこなす。その間にまじつて、まつしろな若鷄が氣取りかへつて、靜々と歩いては玉蜀黍の種子をちよいちよいつまみ上げる――一つ、二つ、三つそして、貴婦人のやうな様子でそれを呑込む。寒い朝、停車場から飛んで歸つて來る仔馬にフェミイは時々林檎を持つて行つてやつた。仔馬はたまらない歡喜に、ふうふう呼吸をはづませて立つた、鼻から吹く呼吸がつめたい空氣の中へ、煙の出る喇叭のやうな形をゑがいた。やがて、仔馬の皮膚の上に不思議な音を立てて、小さな液體の玉があらはれる、するつとすべつて、横腹をつたはつて土の上へ落ちる。その中に、全身からぼたぼた水が落ち始めてつひには下の地面がびつしより濡れてしまふ。

「畜生つ！　あいつらば勝手にぐづぐづしてて、間に合はなくなると、これをめちやくちやに急がせるんだな、可哀相に！　横着者めらが、旦那が歸つて來たら、そのまんまぢやあゐられないから……。覺えてるがいいや」とフェミイは言つた。

村の親切者の誰かれが、「フェミイや、此の頃はどうして暮しておいでだね？」とでも訊ねて與れたら、返事はいつもきまつてゐた。「ええ、まあ、どうやら仕事を片附けては居ますが――何しろ、あの男たちぢやあね！」その人が言葉をつづけて、何にもフェミイが苦勞して仕事を片附ける義理はないとでも言はうものなら、彼女は肝をつぶしたことだらう。フェミイにとつては、正直といふことは、小さな子供が安息日を聖日だと思ふほどに神聖な德であつた。村人はみんな蔭では彼女の馬鹿正直を哂つた。然し、結局、智慧は行程ではなくて、結果であり、木の實である。人間は賢くなれる者ではない、唯、幸運になり得るだけだ。

彼女の幸福の最後の日に、養育院の院長と教誨師が雉子を射つので、農場の中まではいつて來た。午後になつてから、フェミイは二人に遇つて、翌日のウヰトマンの御馳走のために鳥を二羽頼んだ。養育院は其處から遠くなかつた。西にむかつた丘の上に建つてゐたから、夕方になると、一つ一つの窓がみんな入日の光を受けて、建物全體が煙のない火の箱のやうに燃え立つた。フェミイはそれを大變に美しいと思つた。

2

男たちは時間どほりに仕事に來た、フェミイもあんまり用が多くて仔馬に林檎をやるひまもなかつた。臺所を掃除して、桶だの鐵砲だの馬具だの、そのほか種々の雜多のがらくた道具を捨てた。家中どこを見ても、やりたい仕事ばかりだつた。いつ監獄から歸つて來るのか時間がわからなかつたので、幾度も庭木戸へ出ては道のむかふを眺めた。吹き降りの夜だつたが、今朝はすつかり晴れた。唯、風が收まつてゐなかつた。もみがらの間に、つやつやした栗が交つて落つこちてゐた、その中に水松の紅い蕾も見えた。枯葉ががさがさ音を立てた。無花果の葉は黒いぼろになつてゐたが、蕪嗇な椽の

葉は黄色い星の様に舞つてゐた。茶色の畑に眞白な蕪菁(かぶら)が積んであつた。その後は青々したうまごやし丘で、それから後は青空と卷き雲だけだつた。雨に洗はれた蕪菁は乳白に光つた玉の様だつた。

やうやくの事で彼があらはれた時、フエミイは自分の眼を疑つた。グラス、ウキトマンは肥つてはゐなかつたが、頑丈な身體の三十男で、大きい、子供子供した顔と、平べつたい禿頭(はげあたま)と持つてゐた。今日の彼は黒い顎鬚が濃く生えてゐた。空腹ではあつたが、何よりも先に髭を剃りたがつた。臺所の鏡の前に立つて、最初鋏で摘んで置いて、それから殘りの髭に剃刀を當てながら言つた。

「厄介な事が持ちあがつたぢやねいか――妹は死ぬし、母親(おふくろ)はアメリカへ行つちまふなんてさ。一體、どうしたらいいんだ？」

フエミイの笑つてゐる顔が鏡にうつつた。

「笑ひごとぢやねいぜ、馬鹿な奴だなあ！」といきり立つた。

「何がをかしいんだ？」

「笑つてなんかゐません。死んだのはおつかさんです」

「うん然うだつた、死んだのは母親(おふくろ)だ」

「アメリカへ行つたのはアリスさんです」

「然うだ、アメリカ行きはアリスさんだつた。それでいいから、さつさと何か食はせて呉れ。仕事の工合はどうなつてるんだ？」

フエミイは仕事の大體を話した。ウキトマンは怖い顔をして、戀人のことを訊ねた。

「ロサは此の邊へ出て來たかい？」

「いゝえ」フエミイの返事を聞いたきりで、何にも言はなかつた。ロサの家の人たちはいやに見識ばつてゐたから、フエミイの考では監獄から出て來た人間なんか相手にしさうに思へなかつた。だから、今の彼の言葉には驚かされた。然し、そんな事は口に出さなかつた。ところが、それとはまるで反對で、ロサはそのうちにやつて來て、戀人同士の間はすべて元通になつた。フエミイは身分の高い人達にそれ程の人情と赦しがあらうとは思つてゐなかつた。

ほかのすべての事も以前のとほりだつた。容赦のない、忙しい生活がふたたび返つて來た。ウキトマンは損をした時を取返さうとして、加速度的の勢で農場にかかつて行つた。フエミイの一二週間の安樂な時は、忘れられない黄金の夢になつてしまつた。桶や鐵砲や馬具がいつの間にか又臺所へ投げ込まれた。蜘蛛とあぶらむしと鼠が以前よりも殖ゑて來た。ウキトマンも一層頑固で邪險になつた。時が經つても彼は平靜にならなかつた。彼の身體(からだ)の中には一種の精力がみなぎり、血の中には湧きかへる唸りがあつた。然し、二人の間柄變化して來た。フエミイは彼を恐れなくなつた。唯、一心に服從して家の中では女として働き、畑へ出ては男のやうに働いた。二人は一緒に食事をした。かうした不調和な交はりの間に、女は默々として男を愛し始めた。

或る四月の夕方、畑から歸つて來た男は、フエミイが晩飯の支度

をもしないで、窓下の長椅子の上で正體もなく熟睡してゐるのを發見した。馬具の包みを投げ出しながら、不機嫌に呶鳴り立てた。意外にも、彼女は身動きもしなかつた。やや拍子拔けがして、そばへ寄つて見た。彼女は横向きに寢てゐた。袖から肩へかけて、着物が大きく破れてゐた。柔かさうな肌が蠱惑的だつた。靴は床の上にすべり落ちてゐた。唇は受口にむすばれてゐた。

「こいつ、中々別嬪の牝馬だぜ。加減がわりいんでもあるまい、くたびれてるんだ。無理もねいや―

フエミイは眼が醒めなかつた。ふいとした氣持から、彼は女を抱き上げた。臺所からかかへ出して、よろけよろけ梯子段を上つて行つて彼女の寢臺へ寢かした。又、階下（した）へおりて蠟燭のあかりでパイと麥酒（ビール）の晩飯を食べた。食べながら、一二度口の中でつぶやいた、

「ちよいと別嬪の牝馬だぞ」

食卓を濟まして伸びをした時、新しい氣持が湧いた。給仕盆に食物（たべもの）と、麥酒を一杯と臘燭を載せた。重い長靴と脚絆を脱いで、給仕盆をフエミイの部屋へ運んで行つた。そしてその儘出て來なかつた。

3

フエミイの生活の中にかうして流れ込んで來た新しい關係は、全體から言つて眼に見える變化は起さなかつた。ウキトマンは彼女に對して變らなかつた。フエミイはどこまでも彼を主人として服從した、もちろん愛情からでもあつたが、極端な忠義心から、いささかの汚名をも彼に着せたくなかつたからだつた。男がロサとの關係をつづけてゐるのをも氣にとめないらしかつた。

眞夏に近い頃の或る夕方、グラストンベリは暗くなつてから歸つて來た。フエミーば暗い臺所にゐた。彼を見ると直ぐ言つた。

「旦那さん」男は彼女の前に立つた。

「事件（こと）が起つちまひました」

「やかましいや。世界がめぐつてる間は、何かしら事件（こと）は起つてらあな」

「わたしの事です。出來ちまひました――あかんぼが――旦那さん」

彼は棒立ちになつた。背中が明るい方へ向いてゐたので、フエミイには彼の表情が見えなかつた。多分、彼女を抱きしめたがつてゐたのかも知れない。

「早く燈火（あかり）を附けろ」いつものとほり、ぶつきら棒な調子だつた。「うまさうな匂がしても見えないんぢや面白くない。おらあ、見える物が好きだ」

フエミイは臘燭をともした。二人は無言で食事をした。濟むと、食卓から離れた所へ行つて、足を長く伸ばして組み合けし、兩手をかくしの中へつつ込んで、女があとかたづけをしてゐる間ぢゆう、ぢいつと考へ込んでゐた。やがて、頑丈な腕を女の腰に卷いて自分の方へ引き寄せ、膝の上へすわらせた。

「お前、さつきの話は間違ないのかい？」

それは確かだつた。

「全くだな？」全く確かだつた。

「さうときまつたらばだ――」と此處で溜息をついて、「おれたちは婚禮するんだ」女は飛びあがつた。「いけません、いけません！　婚禮なんか出來やしません。そんな事が出來るもんですか――婚禮なんか――ミス・ボウチヤムプがゐなさいます！」ちよつと間を置いてから、やや亂れた聲で言ひ足した、

「あのお方があなたのほんとに好きな人です、旦那さん」

「さうだ！　それにやあ違ひはないが、あの人とは一緒にやなれない」彼の聲は鋭かつた。

「お前の話がほんとなら、おらあ、あとへは引かねいよ。婚禮するのがまつすぐな道だ」

　彼の大きな手は膝の上にあつた。臘燭が足の上に光の波を投げかけた。彼は火の氣のない爐を見詰めてゐた。

　「だけど、そりやあ、いけません」女はぼんやりした調子で、不安げに言つた。あなたは指環もあのお方に上げたし、約束もしなさつたんです。わたしのために、それをふいにするのはよかありません。旦那さん、わたしの方は大丈夫です、ほんとに大丈夫です」

「お前はそれほど頓間なのかい？　何でもいい、婚禮するんだ。ロサの事なんか、つべこべ言ふな――おらあ、あとへは引かねい」言葉を切つたが、直ぐあとを續けた「ロサの奴今度はおれの方へ向き返つて來るだらうよ、いい氣味だ――どうだい、お前にもわかつたらう？　ぼんやり者め――だがな、あいつ、今更おそいや」

　フエミイは眼を伏せた。

「旦那さん、あなたが好きなのはあのお方です」

「お前と子供はどうするんだ？　此處にやあゐられないがな」

「そりやゐられやしません」女は震へてゐた。

「おらあ、曲つた事はやりたくねい。婚禮するよりほかにやあ、方法はねい。おらあ、かなり嬉しいんだ。人間の一生なんて物あ、どうせ、上つたり、下つたりさ。おらあ、滿更、いやでもないんだ」

　ロサ・ボーチヤムプには無論のこと、誰にも言はずに、二人は戸籍吏の所へ行つて、婚禮の手續を濟ました。フエミイの位置の變つた事は何にもほかの變化は伴はなかつた。ウキトマンの妻となつたのは、彼の活動力と結婚したやうなもので、一圖にその流れの中へ卷き込まれて行つた。乳搾りもやれば、豚の餌にする、きたならしい混ぜものも煮るし、恭菜もきざむ、料理はもちろん、時には風の吹く野良で耙までも引いた。一緒には寢ながらも彼女は依然として下女であつた。時々、彼はフエミイを「かはいい牝馬や」と言つて呼んだ。そんな時、彼女は男が自分を好ましく思つてゐることを感じた。然し、大抵の時、彼には何のやさしさもなかつた。彼女は家畜と同じやうに扱はれた。彼は自分の求める物を知つてゐた、それを得るのはたやすかつた。ほんのちよつとの間、フエミイの胸の

中に、ささやかな夢の花が咲き始めたとしても、それは蕾のままで凍つてしまつた。はかないあこがれも、やがて全く彼女の眼の中から消え去つた。そして、彼女はロサ・ボーチャムプがまだ附いてゐる事を感づき始めた。どこか野原の暗闇の中でグラストンベリイはロサとあひびきしてゐた。フエミイは何とも思はなかつた。

正月にはいつて、フエミイは男の子を生んだが、生れ落ちると、その子は死んでしまつた。グラスは腹を立てた、馬をなくしたのと同じやうに腹を立てた。彼は騙されて、つまらない婚禮をしてしまつたと思つた、それを烈しく嫉しかけたのはロサだつた。それでもフエミイは平氣だつた。農場は彼女を鷲づかみにして、肉をも血をも吸ひつくしてゐた。

ウキトマンは町へ出かけるところだつた。肥つた栗毛の馬の上から呶鳴つた。

「廊下から鞭を持つて來るんだ！　いつだつて出してあつた事はありやしねい！」

フエミイが鞭を持つてあらはれた。「わたしも連れてつて下さい」

「馬鹿言ふない！　何しに行くんだ？　一時間もすりやあ歸つて來らあ。あひるの面倒も見なきやあならねいし、蓆も分けなきやならねいぢやないか」

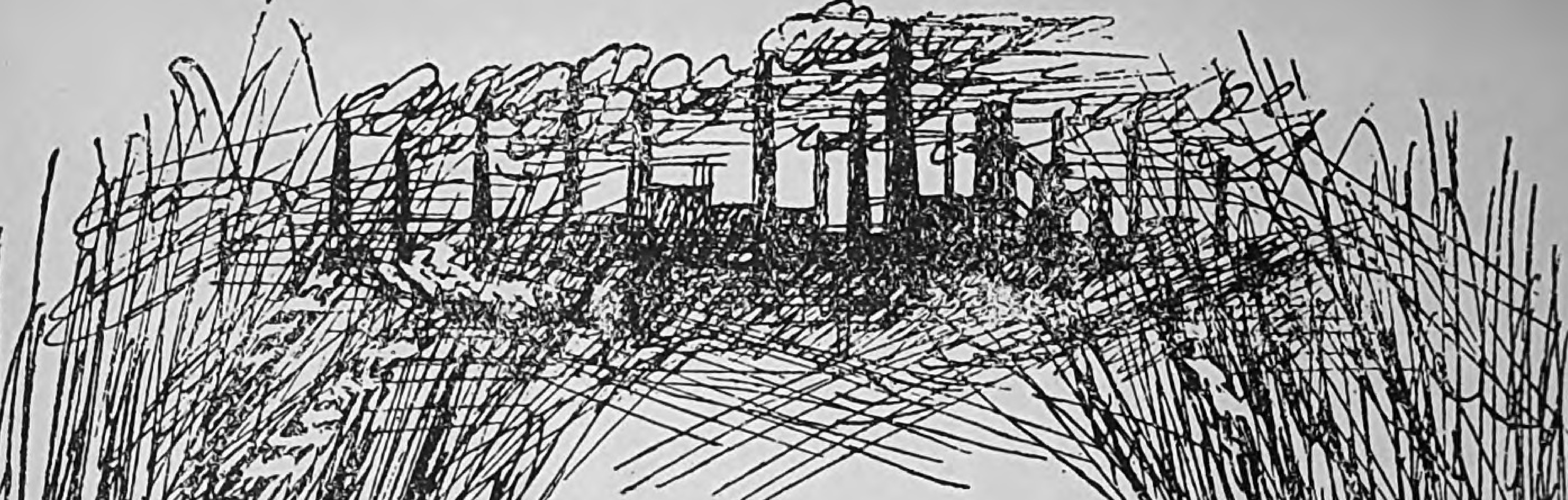
彼女は怖づ怖づした眼で夫を見詰めた。

「第一、留守番に困るぢやねいか。戸じまりが利かねいのを承知だらう――鍵がなくなつちやつたから――。引込んでるんだ！」

彼が鞭を鳴らすと、馬は風を切つて走り去つた。

夏の間にフエミイは病氣にかかつた。腕が恐ろしく腫れあがつたのだつた。醫者が度々見舞つた。傷をした指が病牛の乳を搾つたのが原因で、丹毒を起したのだ。看護婦が來たが、フエミイは自分が助からない事を知つてゐた。苦痛にあえぎながら、彼女は生れてから始めての我儘を言ひ、勝手をふるまつた。それは柔かく、なまめかしい六月の宵で、月が不思議なほど美しかつた。夜啼鳥が情熱の花環を空氣の中へ投げかけてゐた。彼女は寢床の上でそれに聽き入りながら、悲しい喜ばしさでグラストンベリイが監獄にゐた間の追想にふけつた。何といふすばらしい孤獨であつたらう！　自分はすべての事を一番いい方法で處理し、めざましく働いたのだつた。娘の時代にも、結婚の生活にも、平和といふものを味つた事のない彼女ではあつたがやつぱりいつまでも、此の儘で進みつづけたかつた。騷ぎ立つ浮世の海は寸時も流れを止めなかつた、夜の間にも休息はなかつた――唯、闇があつたばかりだ。今はもう、何事も起る筈はない。すべてをロサ・ボーチャムプに遺して行くのだ。グラストンベリイの姿は見えなかつた――ロサに逢ひに野原へ行つたのかも知れない。夜啼鳥が歌つた、そして、外は大變あかるかつた。

「ねえ、看護婦さん」死んで行く女はうめいた「わたしは一體、何しに生れて來たんでせう？」



南葛日記

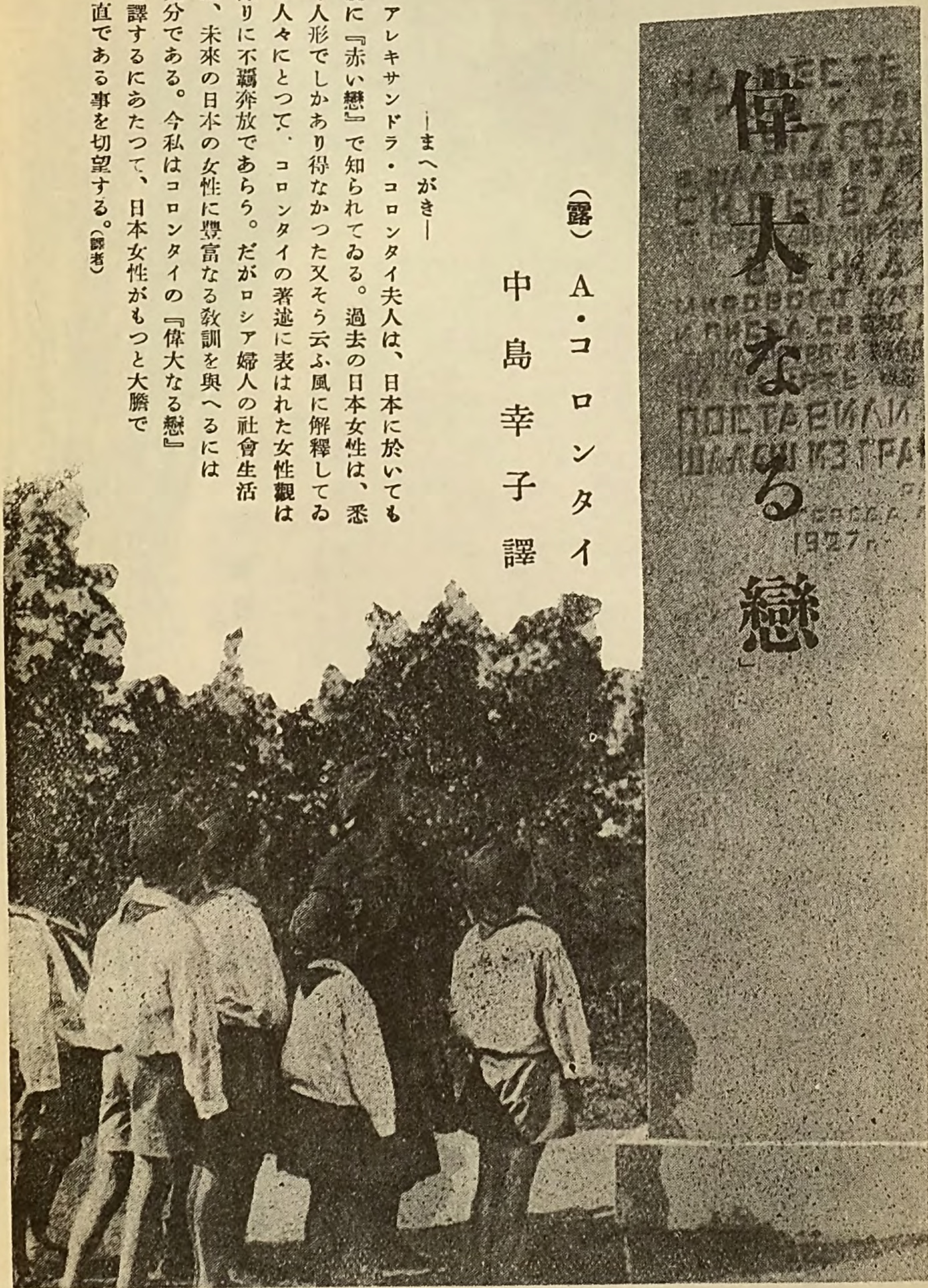
織本貞代

「七月三十一日」カウツキーのパンフレットの中に資本主義の發達は「婦人町」を造り出すと云ふとが書いてあつた。龜戸は實際婦人町だ。東京府の調査に依ると金町に次ぐ婦人過剰町で男の數よりも女の方が遙に澤山だ。夏の夕龜戸銀座の十三間通りを歩けば殆んど行人の全部は婦人だ。それは東洋東京兩モスリン日清紡の女工を先頭とする婦人の一大集團だ。妾も南葛の勞働運動に飛び込んで最早數年になる、そして妾の願は此の一大集團を組織と統制を持つた軍隊に編成することにある。だが此の願望の何パーセントが報いられたであらうか。南葛の勞働運動と云へば我國の社會運動に大きな意義を持つてゐる。古くは大杉榮の本陣であつたし、大正十二年の震災前後に於ては平澤計七、川合義虎等の南葛勞働組合の活潑な運動が行はれた所だ。勞働運動史上に大波紋を惹起した第一次總同盟の分裂は南葛勞働組合の口火から生れたとも見られるのだ、が之等の指導者が失はれての後の南葛は勞働運動の地線から全く姿を沒した。妾は南葛を再び階級戰上に浮きあがらせたいのだ。妾は只自分の爲し得る範圍の陣地を守つて行からそしてその陣地を勞働女塾に置かう。明日は塾の開校だがこの塾を支持する東洋モスリン從業員組合には何だか一大ストライキが迫つてゐる樣だ。

八月七日—もう八日の一時半だ、何んと云ふ愉快な日だらう。漸やく寝ついたと思つた妾を今朝も呼び覺ましたのは洋モス工場から轟いて來るメーデー歌であつた。ストライキは始まつたと飛び起きるともう工場から運轉がピタリと止つたとの報導を受けた。大勝利の解決の萬歳は午後十二時に工場の廣場から傳はつて來た。妾はこの萬歳の聲と共に塾の責任が重くなつたのを感じた。ラッサールは云ふ「科學と勞働階級それは地球の兩極である。この兩極を結び付けてこそ眞の幸福な世界は生れると」兩極の結合は私の責任だ。



「偉大なる戀」



（露）A・コロンタイ

中島幸子譯

―まへがき―

アレキサンドラ・コロンタイ夫人は、日本に於いても旣に『赤い戀』で知られてゐる。過去の日本女性は、悉く人形でしかあり得なかつた又そう云ふ風に解釋してゐる人々にとつて、コロンタイの著述に表はれた女性觀は餘りに不羈奔放であらう。だがロシア婦人の社會生活は、未來の日本の女性に豐富なる敎訓を與へるには充分である。今私はコロンタイの『偉大なる戀』を譯するにあたつて、日本女性がもつと大膽で卒直である事を切望する。（譯者）

1

總じてこれは極めて久しい以前の出來事であつて、その時まだ人間は、戰爭の恐怖に就いては何も知らなかつたし、又革命の著しい變化などは朦朧としてゐる遠い未來にあつたのである。

其れ等の年代にあつては、ロシアはツアー時代の暗黑な反動の襲擊に悶へてゐた。此の小さい劇の登場人物は、男女の移住民たちであつて、彼等は祖國の悲慘な民衆を救助しやうとした政治的活動が原因で追放されたり、逃亡して來た人達ばかりである。

以來、新しい世界がロシアにも展開するやうになつたのであるが、これらの不憫な人間の悲劇は、現在も尙存在してゐる。

そこで吾々はそれを學んだり、理解することに努力しなければならないのである。

——十五章中の四章まで——

最後に彼女が彼れに會つてから七ケ月、それはもう永い無限の七ケ月と云ふものが經過して了つた。抑も兩人が離別した時、二人は今後決して二度と會はないやうに堅い決心をしたのであつた。

彼は頭を彼女の肩に凭たし掛け、苦悶にたへられずに兩眼を閉ぢながら、彼の決心を彼女に告げた。そうして彼には此れ以上踠き苦しんだり、兩人の戀愛が生んだ不斷の鬪爭を支持したりして行く氣力は盡きてゐたのであつた。彼女が彼をジット見詰めたとき、彼の顏貌は隨分心配と苦痛に瘦せ衰へてゐて、その意氣地ないところに感傷的な子供らしさと弱々しさがあると思はれた。

醫師の診斷に依ると、彼れの妻は重い心臟病に冒されてゐるのだから、絕對に安靜にしてゐなくてはならないし、又少しでも興奮させてはいけない狀態だつたのである。

『ね！　若し僕が少しでも妻に不安を與へたなら、それこそ僕は自分を犯罪人か死刑執行人の樣に感ずるに相違ないよ。僕は妻に恢復のできる機會を與へて、無常な死から救はなければならないのだ、解つたかねナターシャ？　最早僕は此れ以上の瞞着は出來ないんだ、僕には子供だつて有るのだもの、そうしてあのサーシャの銳い小さな兩眼は邪推し始めたし……子供達は、僕自身の心臟も魂も總べて一緒に、無制限に彼等に屬してゐるのだと感じてゐるに違ひないのだ。』

『でも其れは可能なんですか？セニヤ！　貴下はわたし達二人の關係がこんなになつても、まだあなたの家庭にもどらうとなさるの？　そしてあなたは、私達御互ひが此んなにも接近した親しい間柄だと云ふことをもお忘れになることが出來て？　貴下は私達を結合させた完全な此の形容もし難い理解を何處か他で發見できるのでせうか？』

彼女の氣遣はしい抗議には、別に彼女自身についての思慮はなか

つたのである、只彼のことに就いて、彼の前に置かれた生活に就いてだけなのであつた。

『だと云つて、他にどんなことが出來るといふのかね！　僕は、僕はどうしたら良いのかわからない。ナターシャ、僕の心は言葉で云ひ表はし得ない程、冷へ切つてゐるのだし、ああどうも悲慘だ！』彼れはナターシャを自分の腕にずつと近く引き寄せて、默つて兩限を閉ぢた。『ナターシャ、僕にはほかに方法はないね、』彼はさも厄介な誘へを追ひ拂ふかのやうに、彼の唇を探し始めた。それはナターシャを宥め、賺さうとする接吻なのだ。けれどもナターシャの心は、心配でいそ／＼とそれに應じやうとはしなかつた。

ナターシャは、恰も訴願するやうな男の抱擁を、無意識に拒んだのでもあつたし、又氣にも障つたのだけれども、それを頭から拒絶することは出來なかつた。

陰氣な雨の降つてゐる日に、兩人は別れることになつた。ナターシャは成るべく早朝の列車で、出發したいときめてゐたので、彼が未だ靜かに安眠つてゐるベッドから抜け出てもう起きてゐた。彼女は自動的に着物を纏つたり、持物を荷造つたりしながらも、時々彼を凝視した。今や彼女の魂は、悲しみにすつかり凍つて痲痺してゐた。

『もう行く？』彼女が帽子を冠り、上衣を着てから別離の挨拶を陳べやうとしてゐた時、彼は驚愕のあまり尋ねたのであつた。

彼女に男のベッドの傍に腰掛けて？　丁度母親が病氣になつてゐる自分の子供をいとほしむ樣に、彼れの前額を靜かに撫でた。

『ナターシャ、何故そんなにいそいで去らうとするのです？　お前は今朝どうしても行かなくてはいけないのですか？　まあ、夕方迄居なさい、そして僕の立ち去るのを見てから、夜汽車でもいゝじやないですか、』それは、彼れを戀する二人の女性の自己抹殺的な氣持と張合によつて、素なしにされた男の氣まぐれであつた。

彼女は此んなことを回想して見た。他の時だつたら、恐らく彼女は出發を延期するやうにと云ふ彼の抗議に對し、僅かそれが一時間でも情けの籠つた態度で應じたであらう。けれど、どう云ふものか、けさの此の出立の不吉な時には、彼の要求は不正なものに思はれたのである。

『なぜ私が朝の列車を選んだかは、貴下は御承知の筈ですわ、私が夕方迄待つたら明日の、黨の會合に遲れるじやありませんか？』

『若し御前が遲れたら……？　夫れが大きな不幸だとでも云ふのですか？　彼等はお前が出席しなくとも濟ますでせう。』

セニヤはナターシャをベッドに引寄せて接吻はしたけれども、彼女は男の甘言を堅く拒絶してしまつた。あだかも長い、美しい針で刺したかのやうな刺痛が彼女の心臓に透入した。無思慮の注意が如何に殘酷に彼女を害したかを、彼れは決して悟らないのだらうか？彼女の任務のみが、彼女に此の最後の挽回できない破滅、此の最後

の別離に耐へしめる力を與へることが出來るに相違ないと考へねばならない時、彼等の共同目的に對する彼女の任務をそんなに輕々しく言ふことが、同志には出來るのだらうか？

窓外の見慣れぬ土地の珍らしい風景を、雨の美しい網を通して眺望しながら永久に彼から彼女を運び去つた列車に坐つてゐる時、彼女は尙も心の中の不安な、鬱陶しい傷ついた感情に悶へてゐた。彼の不親切な言葉つきや、彼が彼女の任務を蹂躙した、あの出放題な態度は、此の最後の決定的な離別の煩悶を蔽つてしまつたのである。

此れは、彼女の任務、に彼が結びつけた程重大だつたのであらうか？『彼等(同志)は彼女がゐなくともやつてのけたであらう！』その考へは、依然として變らなかつたし、又決して振り捨てられないであらう。物影がなくなり、旅客達が一人一人自分の目的地に到着して、車内が森閑となつた夕方になつて、始めて彼女は自分達の別離のみじめさを感ずるやうになつた。彼女はあの男の柔和な思慮に富んだ理智的な眼を、二度と再び見ることは出來ないことなど思ひ巡らすと、もう何もかも堪へられずに啜り泣いた。そうして、男の微笑、あの自信のあるばかりではない、一般から讃へられたあの男の顏貌に、奇妙にたゝえられた温和な微笑に對して歎いた。

別れに際して、兩人は手紙を決して差し出さないこと、再びお互ひに會ふなんてことはしない約束を結んだのであつた。

『若し貴下が私を必要の場合……只あの……何處かの……世間に生きてゐることを忘れずにね』と云つて彼女は彼を慰藉しやうとはしたものゝ、彼女はとてもそれを云ひ終へることは出來なかつた。併し彼女に對する彼の深い恩を感ずるやうな容貌は、彼が理解を持つてゐるのだといふやうに思はれた。

其の時は一切がもう避け得られないのは明瞭でつた。今彼女は、人が久しい後まで愛人の死を摑み得ない樣に、それが眞實だといふことはどうしても信ずることは出來なかつた。

二人が別れやうと決斷したのは、今度が初めてゞはなかつた。然し、何時も沈默が二三週間も打續くと、氣狂ひじみた戀慕、自己譴責、及びきたてるやうな歡喜で充滿してゐる電報か手紙かゞ彼女のところに屆いて來たので、彼女は彼のもとにかへつて行つたのであつた。實際、彼には彼女が必要だつたのだ、彼れは自分の觀念を明瞭にしたり、仕事を計畫したりする場合、手助けになる彼女と一緒にやる幾時間もの豐富な議論をいさかひのために仕損つてたのである。

此んな別離の後では、一度ならず彼女は彼の仕事が提起した或る困難――いはゞ以前に考究した問題の繼續であるが――に突入したところの、別に挨拶の禮式も認めてゐない手紙を、うけとつたのであつた。こんな手紙は、相變らず新しい集合に對する勸誘的な口實でむすばれてあつた。彼女が彼の仕事にとつて、如何に緊要なもの

であるかと云ふことは、彼等相互の多くのローマンスが、此の保證に据へられてゐることよ！

けれども此度ばかりは彼から一行の手紙も、一本の寄信も屆かずに、何日かは過ぎ、そして何ヶ月かは飛び去つて了つた。彼女は拂ひのけた無關心に打ち克たうとするため、反抗的な執拗さで活動に突入した。少しづゝ彼女は自分の仕事を、同一の問題のために生活し、同一の利害に應じてゐる他の人々と一緒に行つたので、彼女の挫けた精神は囘復する樣になつた。從つて彼女は彼の男の事について一度も考へなくてもいゝ樣にもなり、又こんなことでは濟まないのじやないかしらなんてことには少しも頓着しないやうな日が間斷なく去來して行くので、彼女は自分ながら驚愕してしまつた。只過度の努力で、疲勞しきつて、夕方おそくなつて彼女の居間、あの獨身婦人の淋しい室を開ける時は、あの古い分りきつた懷郷病が、彼女の胸を一ぱいにしたのであらう。

時折、身體がすつかり疲憊してゐるにも拘らず、その疲れ果てた身體を思案したり彼に慰安を求めやうとする孤獨の見棄てられた魂を思ひ出すやうな長々の胸のドキ〳〵する手紙をしたゝめた。『セイーシユカ、セイーシユカ、何とまあ恐しく私がひとりでゐるかと思つて下さい。何故、貴下は私を捨てたのですか？　こんなに孤獨でゐるのは、本當に心を挫くものです。貴方には私の友達も同志も殘してあるのです。私は喜んでアニユタさんに總べて貴下の孤獨、總べての貴方の親切、それから貴方のあたゝかい抱擁を與へたのではありませんか。』

けれど、彼女は此等の手紙をば一通だつて投函したことはなかつたのである。でもそれに依つて彼女の心を、氣樂にしたし、彼れに對する彼女の憂惱を注ぐことが出來るのだと云ふ慰安を彼女に與へた。かうして彼女が手紙をものしてゐる時、外形上は慥かな思ひやりが兩人の間に來たと云ふこと、若し彼れがそんなに遠方にゐるのでなく、たゞ兩人が同志として、又友達として逢ひ得るやうに、同じ都會に住むだけでも親切と理解とを發見するに違ひないなんてことをはつきりと感じた。

此んな場合は、彼れと一緒にゐた時に、彼女を惱ましたところの不安をも忘れたし、彼が傍にゐると決して消へたことのない困却も心細さをも忘れるだらうし、更に又人生に直面して孤立でゐなければならないことをも考へる必要もなく、さうして共通の重荷を支へるために强がる必要もなかつたのであらう。彼女が彼と一緒に暮らしてゐた時は、二倍もの精力を要したこと、又彼が疲れ果ててゐるのを何時も感じなければならないことをも今は忘れて、別に何の束縛もなく、彼女の好きこのんだ仕事にもどつて行くことの出來るのを喜んだ。

孤獨な此の身慄ひする樣な時間が過去の挫折に對し、薔薇色の緞帳(カーテン)を引張つたのは、全く不思議である！

彼女は別に益にもならない手紙の一つに大のやうなことをかいた。『私は自分が寡婦のやうに思ふのですわ、私達が一體であるかの樣に仕事をしたり、考へたり又感じたりした場所を彷徨しました。私達は、少くとも思考に於いて、魂に於いて一體でした。そうじやなくつて？　あなた、そんな日はもう二度と還つてはこないのですね？…あのときは、私達の心に火を放つて情熱を燃やしたほど精神が密接になつてゐたのでした。…幾度も幾度も此の友情關係が私達に與へて呉れたあの耀かしい灼けるやうな輕い翼のついた幸福を上品にした、邪惡の戀を呪はんとしました。若し私達が戀人にならずに、友達丈けの關係だつたらセニヤ、貴下は私から離れては行かなかつたでせう。』

然し彼女の一體になつた精神や魂に對する信頼が、事實と矛盾した時には、恐ろしい幻滅を感ずることもあつた。當時の記憶は、輕蔑や殘酷な無分別までも回想させたので、友人關係すら妄想であるかのやうに思はれた。

『私が戀愛を理解する樣に、私を、此の私を本當に愛したのであらうか？』ナターシヤは此の自己分析の憐れな場合に、恐ろしいほどの獨り言を云つたりした。『若しほんとうに私を愛して呉れるなら、どうして彼れは私を彼の魂の外に引き裂くなんて出來たのであらう。どうして此んなにも簡單に、彼の魂の外に私を家庭のない者として放擲することが出來たのだらうか？…私がこんな苦難に落ち込んでゐるのをどうして感ぜずにゐられるのだらうか？　私達の間には接近もなかつたり、理解も…イエそんなことは私の想像の虚想です。私自身の要求から生れた、人爲的なものです…どんなに多くの精力と力とそして貴重な時間とを此の夢が貪り食べたことでせう。』彼女が彼のために、自分を勝手にするやうになつてから、他人の仕事と責任とを顛覆させたり、重要な會議にも出席しなかつたり、又彼の傍に居たために遲れたりして、どんなにか彼女の仕事に害を崇らしたらうと云ふことなどを回想して、彼女は忿然となつたのである。信念の強い、良心ある働き手としての彼女の評判は、此んなことがあつてから、取りかへしのつかない害毒を被つたのであつた。

彼女の心の奥底で、のつぴきならない戀の價格のために、彼を叱つたりした。此の永い自省の時間に於いて、彼に對する彼女の感情の消ゆることのない眞實、それから彼女の傷ついた心につもつたり、或ひは揉み消されたりした所の悲哀をば彼に知らせたのである。

2

或る學問的な會合のあつた時に會つてから直ぐのことであるが、未だ二人の馴染みの重ならぬ時、彼女に贈つた彼れの寫眞——勿論古いものではある——が彼女の居間のあちこちに點在してある書籍

や紙の堆積や原稿の中にあつた。

兩人の最初の會見を思ひ巡らしたとき、彼女は屢ゝ微笑をもらした。彼の姓名や仕事に就いては以前から熟知してゐたのだが――彼女は彼の理論を通俗化した數册のパンフレットを書いたこともあつたし、又一般に同志の一人だと思つてゐたが――彼女は決して知り合つた仲ではなかつたのである。

『貴女は今晩此處へ來られる方を御存知ですか？』その當時、彼女の親しい友達だつた男が彼女に尋ねた。『貴女の尊敬してゐらつしやるあのセエミヨン、セエミヨノウイチですよ』

『まあ、ほんとう？　ね、どうぞその方に會はせて下さいな、何處にその方はゐらつしやるのですか？　私は、是非共その方にお會ひしたいのです!!』彼女はその男に會へる見込みでにこにこしてゐた、そうして渇望の樣子は全るで小娘のやうに思はれた。

『直ぐにね！　直ぐにね！　ねーその方は何處にゐらつしやるのですつて？』

『氣を落着けなさいよ！　そんなにまあ…貴女はきつと失望しますよ。』彼女の友達は明らかに此うした彼女の興奮が氣に喰はなかつたらしく思はれた。『あの男は、特色のない人物ですよ、男としては…』

『それがどうしたと仰有るの？　私がその方に興味を持つてゐるとでもおつしやるのですか？』

彼女は耐へられないやうに、肩をすくめて『時々貴下は鈍まなことを云ふのね。』

『そりや―貴女が希望でしたら、勿論僕はあの男を紹介しますが』そう云つて彼女の友達が立ち去つて行つた間に、ナターシヤは自分の思想が類似してゐるあの男に會ふことが出來るのだと云ふ悦びと、好奇心に微笑をたゝえながら待つてゐた。彼女に彼を紹介しやうとしてゐる、友達の企圖に捲き合つてゐるセエミヨン、セエミヨノウイチ、を見た。そうして結局は友達が氣の進まない犠牲者の腕を掴んで、彼女の方に牽つぱつてきたので、彼女は非常に興味をそゝらされて了つた。

『あの方はきまり悪がつていらつしやるのだわ』彼女は心の中でそんな辨解をした。その後も始終、彼女はセエミヨン、セエミヨノウイチをば無作法だが、感傷的に訴へる態度をもつた極めて例外的な種類の人物だとして眺めた。

其れ以來、彼女は屢ゝ彼と逢つた。そうして逢ふ度每に、無意識な春の樣な幸福の芳香に充滿させられてしまつた。

二人が知己になつた最初の年には、彼女は別に心淋しいなんてことは知らないで濟んだ。彼女の途上にある一切の阻害を凌駕するやうな勇氣とか、強硬とか力とかに對する信頼…其處には、心配や氣味の悪いことや又不幸さへもあつたか、然し放縦的な欣喜のためにすべてが美化され、酸化されそして純粋なものにされた。…障

害？…彼女は如何なることにも不撓不屈であつた。彼女の生活の方法は、勇ましい向ふ見ずの途上にあつて、その屈曲するたびに、希望に滿ちた彼女の前進を唆かした——高く——高く…。

『貴女に屬する家庭もなく、魂もなく、よくまあ獨りでゐられるものですね』こんな事を彼女の友人達は訝しがりながら尋ねるのだつた。殊に婦人はそんなことを聞いた。

彼女は自分の思ひやり深い性質にそぐわない、無作法な友達とは凡ての交渉を斷つて了つた。

『こんな風に生活して行くと、氣がめ入りませんか？　私なら憂鬱になりますよ。』こんな言を彼女の友達が云つた時、彼女は陽氣に笑つて返答した。いや全く反對である、一人で暮らすのは素的である、しかも氣儘に外出が出來るから尙更のことである。彼女は自分の翼が錯亂させられるやうな衝突のために束縛を蒙らない故に幸福な獨身婦人であるのをほんとうに悅んだのである。彼女は仕事を持つてゐる以上、他には別に何ものも必要ではなかつた。生活は非常に愉快な、何とも云へぬ程の魅力ある悅ばしさであつた。

獨身生活？　彼女の心に密接してゐる友達が有りとしたなら？けれど、彼女は友達のことを語る時は、必ず彼のことを考へた。それればかりでない、彼れの妻のこと又子供のことなども考へて見た。彼女は、彼の妻子もつまりは彼の一部分だと云ふので愛した。勿論、プチブル的な樣子には時々おどろかされたけれども、しかしアニユタの女らしさと、獨身婦人が暮らしをして行く標準に就いて理解のないのが氣に入つたのである。けれどもアニユタは、質素な善良な人であつたし、とりわけ正直な人間であつた。何事かを計畫するにあたつても、ごまかすといふことは、少しもなかつた。何か喋べる時でも、心にもないことは、決して言はない性質だつた。そして彼女は自分の夫に對しては、殆んど宗教的な敬虔さで崇拜してゐた。その敬虔をナターシヤ自身も理解できたし、分擔した位ひである。どうして彼を愛さずにゐられやうか？　あの立派な大膽で正直な思索家を！

時々、アニユタは、ナターシヤの前で獨身者を揶揄するやうに、自分達の結婚の多幸を誇示するいつもの習慣を、いくらか態とらしく話したのは實際である。

『貴女は、ほんとうにお氣の毒で御座いますわネ、伴侶者のない御婦人の生活はどんなものでせうかしら？　きつと御婦人の生活が廻轉するために必要な樞軸が缺けてゐるでせうね、そうで御座んすわ、セニヤの樣な夫を持つても、それが誰れにも幸福だとは云へませんものね、結婚はあながち幸福とは限らないのです。でも私のやうに、結婚してから十二年間もまるでまだ蜜月の樣なものにとりましてはね、から申しましても幸福を必要となさらない貴女の樣な方方には、本當に無價値かも知れませんわ…それを想像して御覽遊ばせな…セニヤは現在も私をそれはもうおかしい位、愛してゐて

思れるのですもの…貴女にしめしてゐる通りに…此んなことは、他人様にお話し申しあげるにはどうかと考へるのですけれど、でも、貴女は、私の親しい御友達で御座いますからね、…』

そして彼女は、ナターシャにどんなに彼女の夫が、彼女を愛してゐるかを知らすために、セエミヨン・セエミヨノウイチとの夫婦生活の事までも、細かに物語つたのである。

此んな不謹愼な懇意のために、不快を感じさせられたナターシャは、一種特別な憤恚の感情で、アニユタにばかりでなく、セエミヨノウイチにまでも邪魔しやうと思つた。幾分、正式に結婚した夫を想像することは、友達であり、思想家である人の愛する顔を曖昧にするやうに思はれた。こうした種類の話をアニユタが物語つてから幾日間と云ふものは、ナターシャはその印象が漸次に拭ひ清められるまで、彼を避けたのであつた。

屢々、アニユタが一定の目的のため、飽き飽きするやうな親密さを話してゐるのではないかと思はれもし、又、恐らくナターシャを苛責するために、勝手に捏造した、美しい話をするやうでもあつた。然し結局は、これ等は留針で突いたほどであつた。そんなことは、彼女の仕事に翼を與へ、生活に、闘ひに、勇氣を與へる處の一層増加して行く親交の陽氣な幸福の中では、消滅してしまつたし、又忘れられても了つた。一方彼女の獨身生活の孤獨に光輝をも與へた。

遂に、しかも突然、豫想もしないのに、情熱は爆發したのであつた…結局そんなにも突然だつたのか？ 過去を振りかへるなら、ナターシャは、その存在を意識する久しい前に、もう彼等二人の心には萠芽し、成長してゐたのだといふことを見ることが出來た。生活のことに就いては、十分に心得てゐる彼女にも、時々自分は決してローマンチツクな戀愛事件の網には引つかからないことを、笑ひながら主張したが、いざこうなつて見ると、狼狽してしまつた。ナターシャが二度と戀をしないことを誓つたことと之がどんな關係があるのか？ 彼女が疼痛や傷に近よらないやうにしたことと之がどんな關係があるのか？ 又御互ひに理解するための此の兩人の爭闘と失敗とはどんな關係があるのか！ 彼女は只共同の仕事と責任から生ずる友情や理解だけを欲してゐたのだといふことを、云ひ張つたとてそんなことは何うでも宜いのである。生活は、異つて決定してしまつた。

3

混雜する列車の三等仕切車に乘つて、他の都會で催される黨の會議に、一緒に旅行したことがあつた。彼を自分の傍から離すのを非常に厭がつた彼の妻は、旅行を中止させるために、澤山の口實を設けたのであつた。

ナターシャが彼の意向を確めるために、夕方遲くから彼等の家庭

を訪づれた時にはセエミヨン・セエミヨノウイチは未だどちらとも定めてはゐなかつた。

『ほんとうのことを云ふとね、僕には缺席しやうと思ふだけの積極的な言譯はないのです、若し僕が缺席したなら彼等は（反對黨）私の出席しないのを都合の良いことにして、吾々の動議は目茶苦茶にされるでせう……でも……僕は行くことが出來ないやうにも思はれるのです。ウイッチユシヤは病氣なのだし、アニユタは殆んど立つことが出來ないんです、實際、彼女は過勞のため弱り切つてゐるのです。ですから彼女をおいてきぼりにするのは僕の良心に濟まないのです、然し……貴女は、明朝停車場に行く途中でもう一度立ち寄つて下さるといゝと思ふのですが……恐らく……』

停車場への路は、實は非常に違つた方角であつたが、然しナターシヤは立ち寄つた。

彼の妻は、不機嫌な顔をしてナターシヤを迎へた。彼の極まり悪るさうな顔つきは、豫定が變更したといふことを明かに示してゐた。

彼れは、ナターシヤに、行かないことに決定したことを話したが、直ぐ語をついで、もう一度彼の會議に出席することが如何に緊要なことであるかを彼女に證明した。

『僕の缺席は、重大な結果を惹起するでせうね、動議が無効にされるのも知つて居ます……だが……一方……ウイッチユシヤはまだ熱があるんですし、そしてアニユタは具合が悪るいらしいのです……實際非常な不幸ですよ、僕は……然かも此の重大な會議のあるのに……』

『きつと、私達は首尾よくやれませうよ、』そして彼女は彼を安堵させる様に『貴下の希望を成就させるため、私達の身の及ぶ限りを盡しませう、ですから御安心遊して』彼女には彼が一緒に行きたがつてゐるのだといふ理由が直ぐには推量できなかつた。

彼女は停車場へと急いだ、提出しやうとしてゐる動議をことこまかに數時間思索ができるから却つて一人の方がいゝと思つて、少しも氣に觸はらなかつた、そしてそれを採用して貰ふための計畫を廻らしてゐた。

眞冬の寒さが、身にしみてきた。ナターシヤは兩手をマッフに深くつゝ込んで、寒い停車場のプラットホームをあつちこつと活潑に歩いてゐたが、心は來るべき仕事のことでいそがしかつた。彼女は緊張してゐたが、自信があつた。精神は切迫してゐる闘ひの悦びで震へてゐたし、彼女は喜びの音づれを得るため飽くまで彼女の提案に對して戰はんと思つてゐた。

『ナタルヤ・アレキサンドロウナア！　ナタルヤ・アレキサンドロウナア！』

ナターシヤは急いで聲のする方に向きかへつた。

『結局、きましたよ、』

セエミヨン・セエミヨノウイチは重く喘ぎながら、彼女の前に立つてゐた、彼の兩眼には悦びの氣まぐれな光りが現はれてあつた。

『やはり、僕は振り離してきましたよ……實際、殘酷でした……アニユタには氣の毒でしたが……然し……』

彼れは慣れ慣れしく、彼女の腕を取つた、が彼女は彼の顏に現はれてゐる狡猾な得意の妙な表情を驚いて見つめてゐた。

鐵道の仕切車は、もう大混雜を極めてゐた、それ故二人はどうしても互ひにぴつたり接觸して坐らなければならなかつた。

セエミヨン・セエミヨノウイチは金縁眼鏡に妙に人を瞞すやうな眼でもつて、ナターシヤをじつと眺め續けてゐた。

ナターシヤは當惑した。その上彼が彼女に觸れた時、彼の手が震へてゐるのを認めて、一層狼狽して了つた。彼の精神の亢奮は、平靜な彼女にひどく感染した。そして互ひにさぐつたり、避けたりする眼は惱ましたり唆かしたりする快い有頂天の流行の樣に、自分達の言葉を語つてゐたし、又その眼は、彼女を傍に腰かけてゐる男にます〳〵結びつけるやうにしたのであつた。

長い時間、停車するステーションでは、兩人は息をつくために下車した。彼等は此の美しいが併し心を惱殺するやうな夢から逃れ得たので氣晴しの溜息をしながら、鋭い冬のすが〳〵しい空氣を呼吸した。煤煙で暗くなつた都會は遠くの方になつてゐた。

二人は平凡なことを語つたりしたため、息苦しい緊張は幾分ゆるんできたので、再び混雜した列車にもどらうなんて氣持ちには少しもなれなかつた。

けれど二人が再び仕切車にもどると、いたづらの激しい子供が矢で魔法をしはじめた。蒸暑い雰圍氣とそれにどうしても接近しなくてはならない二人の體は、抵抗し得ないうつとりした氣分を引き起した。セエミヨン・セエミヨノウイチはナターシヤの手を探つたが、彼女は强ひて退けやうともしなかつた。彼は口籠りながら、自分の家庭生活、妻の難澁なこと、健康が勝れないこと、それから彼女の法外な嫉妬などを話しだした。

然し彼はアニユタのことを語つてゐるのではあるが、彼れが正しくナターシヤを戀してゐるんだと云ふことは理解できた。彼は常にアニユタを愛してゐるといふよりも、むしろ憐んでゐたのである。事實、彼女が氣の毒だつたから結婚したのであるけれども、彼女は少しも彼を理解しなかつた。彼は全(マル)で彼の妻の傍に、思想と大望とだけを持つて自分自身を閉鎖してゐる他人のやうに、暮してきたのだつた。そんな時に、ナターシヤが現はれたので、彼の何もかもが變つてしまつたのである。生活は、輝かしく悦ばしくなつた。そして最早、孤獨ではなかつた。彼女は彼の魂の鍵のやうでもあり、幸福には無くてはならぬものになつて了つた。彼女に對する彼の愛は幸福を苦痛の色々な段階と經過したけれども、決して彼は彼女も亦

彼のことを顧慮して呉れるのだなんてことは、望みもしなかつた。彼は戀に焦れた學生の様に、彼女の前にくると身震ひした。彼は自分達を紹介して呉れた友達に對し、猜忌的な苛責を嘗めたかを彼女は知つてゐるだらうか？　兩人の間が割れた時、どんなに悦んだか？　最近になつて、彼はいかに彼女をやさしく、そして絶望的に戀したかを彼女は知つてゐるのだらうか？

彼女は、物も言はずに驚いて、彼の言葉を傾聽し、そして悦んだ――ほんとうに悦んだ――とは云へ、此の告白が彼女に懸念を引き起したにも拘らず……。

然し彼女はも早傍に腰をかけてゐる此の男の情の籠つた容貌の中に單に友達である思想家の顔を見出すことは出來なかつた。此の新しい變つたセニヤは、彼女があんなに好きだつた子供らしい微笑を持つた男とは、何んて相違してゐたのだらう！

新しいセエミヨン・セエミヨノウイチは、彼女の傍にぴつたりと腰かけ、しかも今は大膽に彼女の眼を捜した。すべてそれは何うなつたか？　今の彼にとつて彼女の無い生活は不可能だつたのだ。けれどそこには彼の家庭や子供があつたのだ。アニユタ――彼は決してアニユタと別れたくは無かつたのだ、

『私達はどうしませう。何かしなけりやいけないのかしら？　なにか私が要求したのかしら？　私は貴下の友達になるだけで幸福だつたのです』

『僕の愛する人！』彼はその周圍の人々が驚いてゐることなど忘れて、彼女に抱きついて顳顬に接吻した。『貴女と一緒にゐることは愉快だ……とても愉快だ』

彼女は微笑を唇にうかべたが、兩眼は泪でいつぱいであつた。

『あたしは幸福のために泣きたい位ひですの』そう云つて彼女は自分の心を打明かした。

彼は、彼女に近づいて耳語いた『僕の大切な、僕の愛するナターシヤ！』

彼等が目的地に到着した時、兩人は夢の様にぼんやりと列車から下り立つた。其處では幾人かの同志が、二人の泊る旅館へと護衞しながら案内して行つた。それから暫くして二人は會議に出席したのであつた。

第一日は、別に騷ぎもなく經過した。抑制してゐる亢奮のため極度に緊張してゐるナターシヤと、セエミヨン・セエミヨノウイチとは、同情ある同志達のひやかし口調と笑ひの裡に旅館にもどつてきた。彼女は、彼等の誰も彼れもに好意をもつた。その日の反對者にでさへも彼女は親しい友達であり、同志であつたのである。彼女は悦びに醉つてゐた、そして自分と同様に幸福な他の人々と笑ふことを欲してゐた。彼女は、此の光榮ある日が終焉しないことを望んだ。今日は彼女は幸福であるが――何時までもそれが續くとは限らない。彼女は愛のために、苦樂をなめねばならないのであらう。

あゝそのことは、彼女が豫期するよりも早かつた。

會議の最後の日であつた。三晩も不眠狀態でゐる此のきりのない議論の三日間の緊張は、ナターシャの心身にこたへ始めた。

彼女は書記としての自分の仕事に全力を集中したり、又時には氣障な演說を連發する妙な人々の考へを理解して、それを正確に記錄したりするには隨分と骨の折れるものであつた。

彼女が會期の終りに、その日の經過に關するノートを讀んでゐる時、彼女は反對者の一人を誤つて引用したらしかつた、そのために言葉の意味が曲解されたのであつた。そこで反對者側は非常に立腹して了つた。

彼等は、反對黨側で、巧妙な策略をめぐらしたといふことを極力主張した。

ナターシャは、心細い程當惑してしまつた。突然、セエミヨン・セエミヨノウイチは、彼女の不注意を詰るために、彼女を攻擊し始めた。勿論彼女には、それが反對者側の誹謗から、味方がまぬがれるためにしてゐるのだといふことは充分わかつてゐた。彼は、自分達が全然それには黨派として關係がないのだと云ふことを立證するために、凡て之はナターシャ一人に責任があるのだと主張した。會議が終つてから全部一緒に旅館へ行つて、又猛烈に議論を鬪はした。ナターシャは只獨り泪の流れるのを懸命に抑へ樣とつとめながら沈默してゐた。同志達が歸つて了つてからせきくる悲しさのため、泣きながら彼女は彼に抱かれた。彼女は自分の泪を說明しやうとはしなかつた。けれどセニヤとても彼女の思つてゐることを理解してゐるのだらう、そして彼女の不幸な誤謬がもたらした情勢をはかなんでゐてくれるに相違ない。

だのに、何故そんなに強く彼女を譴責する必要があつたのだらうか 勿論彼女は彼が自分の黨派の利害をば、彼女の個人的感情の上に置かねばならぬことは了解してゐたので‥‥彼女はそう云ふ風に自分が理解してゐることを彼に告げやうと思つた。が告げた結果彼は又そうしたことに或る遺憾や或る後悔を述べるに違ひないだらう。願はくば、彼等には彼女のごまかしから、かゝる不利益を與へたのだと云ふことを信じさせやう。只彼だけは獨り彼女の誤りからだと云ふこと、つまり彼女の極度の疲勞に責任があるのだと云ふことを知つてゐてくれるに違ひない。

『セニヤ、貴下は理解して? そうじやなくつて‥‥ネ 理解してゐて下さる‥‥?』

『勿論、僕はわかつてゐますよ、僕の愛する御嬢さん、僕は貴女が僕から離れる事の苦しいのは知つてますが、さりとて僕達はどうするつてことも出來ませんからね』

彼女がそのことばを、正確に聞いたとしたなら?‥‥彼 の泪はとまつて了つた、そしてさも理解できない樣に、彼を凝視した。

『別れることを考へるなんて、僕を苦しめること位ひは貴女も知つてゐる筈だ』彼はそんなことを云つた『然しネ、吾々は御互ひに愛し合ひたい……貴女はやはり平常の通り訪問して呉れるでせうね……さもなきやアニユタは、二人の間に何事が起つたことを訝かしがりますよ、ネ、さあもう泣くのをお止めなさい。あゝ僕は終日どんなに貴女を慕つたことだらう！　ナターシヤ、僕に接吻をして下さい』

　そんな後で、彼女は彼に自分の泪の理由を告げることが出來たであらうか？　若し彼女が打ち萎れ切つてゐるそんなみじめな場合に、彼が彼女の不幸の理由をも理解せずに、二人が離れる前に、彼が最後の抱擁をしやうとする氣になつたら——彼女は彼に理解させやうと希ふことが出來ただらうか……？

　彼は、彼女の頰につたふふたつの大きな泪を、接吻で拭ふてやつた。

　『泣くのは御止し、ネ僕の可愛いゝ娘！　二人は又逢ふでせうから』

　列車で二人は他の幾人かの同志と一緒であつた。煤煙ですゝけた大きな都會の停車場に、再び二人がもどつてきた時、そこで二人は正式に左樣ならをした……他人としての。

4

　今、過ぎ去つた日を追憶すると、彼女はその當時よりも一層明かに、自分の不幸の理由が解つてきたのである。彼女が自分の部屋に入つた時に流した、堪へがたい泪は、初めて戀人から捨てられた女のやる瀬ない泪ではなかつたことを、今知ることが出來たのである。それは、心に突き刺さうとしてゐた多くの物思ひのうちでの、最初のものゝ悲哀の泪であつた。幾度も傷ついた心が、戀することを止めることや、愛が無思慮と誤解を蒙るために、どうしても癒へることのない傷口から、一滴づゝ徐々に流れやうとしてゐることを、セニヤは理解しないことがあつただらうか？　淋しい七ケ月の反省の後に、ナターシヤは、自分の落着きのない理由もわかり始めたし、又情熱のコップの底には、慚愧の殘物があつたのだと云ふことをも知るやうになつた。幾度も〳〵彼女は、魂を正直にしめさうと思つて、彼のところに來たのであつたけれども然し只彼は彼女を見るだけで、內部から彼に達しやうとする聲には、氣を留めやうとは、決してしなかつた……彼はその婦人を、腕に抱くことは抱いたが、彼女の魂は、彼女の最奥のものは彼にその腕をさしひろげても無駄であつた。たゞ寂寥のみが殘るだけで、忘れられて了つた。彼は曾て、ナターシヤを知つてゐたのだらうか？

　確かに、彼の精神は、つまらぬ用心で一ぱいだつた。つまり彼の生活は惠まれなかつた。彼は斷へず物質的な不幸、財政的な逼迫の雰圍氣に惱まされ、その上彼の時間と精力を割かすことで、何時も

能率を妨げてゐた口やかましやの妻に依つて、苦しめられた嫉妬と疑惑の雰圍氣に生活してゐたのである。

『昨日はね、殆んどアニュタは錯亂してゐた』……こんな話しは二人が一緒に過した忍び時間のいくらかを暗くした又『彼女がモルヒネを嚥下らうとしてゐるのを、僕が具合よく行きあはして阻止したのです、僕達はどうしたら良いのかしら、ナターシャ？ そんな事からのがれるためには、何んとか方法はないものかしら』セエミョン・セエミヨノウイチは彼女が愛する人の頭を、柔かく愛撫してゐる間に、彼女の膝に頭を何時もうづめるのであつた。最初の中は、彼女も自殺未遂の話しをきいて身震ひしたが、あんまり度々なので、しまひには心配をせずに寧ろ馬鹿／＼しくなつてきた。けれども亦彼女は一面此の突飛な行動をするアニュタを笑ふ氣持ちにはなれかつた。そして眞面目に濟まないと思つた。然し彼女が、彼の貴重な時間を空費させたり、かまつてゐる餘裕のないのに、何時も何時もつまらぬ心配に氣をとられたりすることは――どうも赦すことは出來なかつた。此んな風にエネルギーと氣力を、毎日心づかひに費すのは、餘りに貴重すぎるといふことを考へやうともしないのは、彼女が、あの人の偉大なことに少しも理解がないのではなからうか？

ナターシャは、自分自身で出來る仕事なら、何事でも勞を惜しまないで彼のためにつくしてやつた。彼女は決して彼女の心配や苦難を、彼には知らせはしなかつた。彼の前では氣も挫けたり又そうでもなかつたりした。彼女に對する彼は、何時も親切でしかも深い充分の理解があつた。彼女は彼がもつと偉大な且つ重要な責任を果すやうにしてやるために、彼の重荷を、自分の背に背負つて、思想家を、此の仕事家を、自由にしてやりたかつた……

『お前はなんて強いのでせう、何んて立派なんでせう』彼は溜息しながら云つた。『お前は世の中を獨立でやつて行けるのです、お前はアニュタと比較すると、實に違つてゐるよ、あの女は、僕の保護がないと失敗するでせう。』

ナターシャは、子供に對するやうに、彼を笑つた、彼が關係してゐる處では、彼女はわざと弱かつたのか？ 彼女は、彼の庇護者であり、慰藉者であり、光明と愉快をもたらす者であるに相違ない。家庭で心配したり泪を流したり、些細な苦勞をしてから、ナターシャの傍にくると、初めて祭日を見出したに相違ない。

不幸が彼の女の行手に潜んでゐるやうだつたり、此の自分で課した役割に對して、我慢できない場合には、憤激する時もあつたし、反亂の精神が湧いてきたりもしたのであつた。何故、彼はアニュタを憐れむのか？ 確かにナターシャの生活は容易だとは云へなかつた。……彼女には仕事があつた。――困難でありながら單調で厭な、しかも責任のある仕事があつた。他の人は、彼女の價値を認め、そして評價もした。だが、セニヤはそれについて曾て一度でも

考へたであらうか？

『おゝセニヤ、私の愛する人、私は非常に疲勞してゐるのです』時にはナターシヤは彼女の苦痛の加重に對し、少しの同情でも求めやうとしたことさへもある。『彼等は（他の黨徒）私に反對して眞の追撃を設けました、あなたは彼等の新しい決意をおきゝになりませんか？』

『どうかそんなことの話しは止してお呉れ、ね止さうよ、本當にそんなことに躍起になる程の價値はないからね。それより、僕の現在の困難を話さうよ、アニユタは又も病氣になつてネ、醫者の云ふには、絶對的な安靜が肝要なんだそうです。それで子供のためには保姆を雇はなくてはならないのですが？ どうしてそれが出來やうか？ 御覽の通り現在僕は困窮してゐるのです。おゝナターシヤ、僕がアニユタを眺める時――彼女の瘦せ衰へるまで働くのを見る時又僕と子供のために、完全に犧牲になつてくれるのを見るとき、僕は何だか自分が犯罪者でもあり、利己主義者でもあり又全く無價値な無頼漢でもあるのを悟るのですよ!!』

彼れが――彼女の偶像が――彼女の生活の光明が、そんなつらひ生活を送つてゐる場合に、ナターシヤは自分のことを考へることが出來ただらうか？ ナターシヤが何時も何時も、彼等の戀の贈與人であり、彼が受取人であることが、セニヤに想ひ出される場合には、自己の困難からのがれて、靜かに氣晴しする餘裕などは、極めて稀にしかなかつた。

『ナターシヤ、僕は吾々の戀が、お前には苦痛以外何にも稗益しないのを知つてゐる。お前が愛をうけるだけに、お前を愛するのは餘りに利己的なんだ。何時かきつとお前は僕がどんなにお前の愛情を濫用したかを知るやうになつて、僕を飽きるやうになるだらうよ、ナターシヤ、そんな場合、僕は、どうなるのだらう？ お前はお前の僕に對する戀の意味が解らないでせう。』

『セニヤ、私知つてゐると思ひますわ、若しも知らずにゐたなら、そんなこと忍ぶことが出來るとは思ひませんもの』

『ナターシヤ、僕が何時もお前に示さなくつとも僕は親友ですよ、おまへ信じてくれますね‥‥之迄往々、二人の間には大きな割れ目があつただらう‥‥お前が僕から去つて行くやうな氣がするのです、お前はお前自身の何事でも僕に話さうとはしないだらう、だからネ、ナターシヤ、僕は氣持ちが惡いんです、お前は吾々の間の此の密接な理解、此の絶對的な信頼及び正直が、僕に對するお前の愛のうちで最も尊いものであることを知らねばなりません。』

『さうです、セニヤ、凡てのうちでそれが最も重要なことなんです。私達は相互ひに理解しなければなりません。私達は、相互ひに、胸に浮んだ考へを知らねばなりません。私は二人の間の一致を見損つたゝめに、どんなに心を痛め、どんなに不幸であつたかは、貴下には判らないでせう？‥‥此んな場合は、私は冷かになつてしまつ

て、云ひ得ない程落膽するのですの。御願ひです。あなたは私の此の女らしい性質よりももつと優しくして下さいな』

『頓馬さん』

『セニヤ、貴下のおつしやる通りですわ、私は貴下に話さない或るものがあるのです。勿論、私自身にだつてわからないんですけれど、でも私は何にもかも打ち明けたいのです』

『お前は、それを僕に是非話しては吳れませんか！　本當ですか、お前が僕に隱してゐるものがあるなんて？』

『いいえ、貴下には御解りになりませんの、秘密といへば秘密ですけれど、それは私を困らせる單純な、あまり重要でない出來ごとなんですの、だけど私何んとなく貴下に御話しすることを躊躇してゐるだけなのです』

『それなら、何故お前は困るといふのですか？』

『そうですね、例へば同志アントンの訪問などは、私を困らせるのです。彼は最近非常に度々私に逢ひにくるのです…こんな格好で…數時間も私を眺めるし――ね、あなたはそれが御解りになる筈ですわ、私はそれを憎むのです、でもね、私は彼が訪づれてくるのを拒絶することも出來ませんの　何故つて、私達は一緒に働いてゐるのですもの、しかも彼はね、淋しがつて居りますの…一寸氣の毒ですわ』

『ナターシヤ、彼の訪問は、お前と一緒にやつてゐる仕事と、どんな關係なんですか？　それは僕のわからないことがあると思ふがね。お前は全體心配しすぎるのじやないですか、あの男がお前の部屋に腰かけて、幾時間も戀に寂しい眼で、お前を見つめてゐる、するとお前が彼を憐れむ！　こんなことで他人を苦しめる人間をのぞくのは、別に困難はない樣に思はれるがね、無論、彼との交際が好きなんだつたらいゝさ…』

『セイ！シュカ、貴下はどうしてそんなことを仰有るの？…私を何故そんなに誤解なさるのです？』ナターシヤは心の裡では憤慨したのだけれども、表面笑つて云つた。

嫉妬…同志アントンに對する…親しい悦びに充ちた魯鈍者！　彼は結局、彼女が彼を偶像化した此の數ケ月を知らないのじやないか？　彼は、彼女の考へを支配してゐた。いくらか故意に屈身してゐる彼の體つきは、此の世の中で、何ものにもたとへることの出來ない程、彼女に訴へたのだつた。セミヨン・セエミヨノウイチと比較できる人が他かにあらうか？　水晶のやうに、明朗な魂を、誰れが他に持つてゐるだらうか？　彼のやうに論理的に、立派に物を考へる人が他にあらうか？　あの人の嫉妬に對しては、彼女は時には隨分不快に思つたこともあつたが、彼女は決しておこることの出來ない程の、あどけないところがあつた。

演奏會の時、ヴアイオリニストに對してさへ、彼は嫉妬を抱いて家にかへる途中、ふくれつ面らをしたではないか？　そして彼は獨

りでブッブッ云つて彼女に「自由」を與へなかつたではないか？又彼女が電車の中で、車掌と冗談を交はした時になしたあの恥ずべき様子を忘れて了つたのだらうか？

『婦人と云ふものは、戀に陷らずに男を見ることが出來ないものでせうか？』こんな出來事が濟んで彼が正氣になつた時、彼女は笑ひながら詰問した。そんな時は、彼は彼女になした不都合を意識して、いくらか羞かしそうに笑つた。

然し、ナターシャは、自分の過去を彼が良く知つてゐるからこそ、こんなにも邪推されるのだと思つた。

『お前は僕に、彼れを愛してゐると云ひましたね――あの黑い髮の毛の男を――ね、どれ丈愛してゐるのですか？　僕を愛して吳れると同じやうにですか？』

『勿論もつと…若しもつと私が彼をあなたより以上愛してゐるとしたなら、そんなに氣輕に彼に暇を出せたでせうか？　貴下はお解りでせう、それでもまだあなたには私があなたを愛してゐることが信じられないのですか？　頭が良くてゐらつしやるのにあなたは時々まぬけなさるのね！』

『他の男たちは、皆んな僕より口の上手なものばかりだし、それに婦人の機嫌をとることを知つてゐるのだからね。僕は騎士になる方法は少しも心得てはゐないんだよ、ナターシャ』

『でもね、何故私があなたをそんなに愛してゐるかわかり切つてゐるでせう、セイーシュカ、貴下はそんな風ですから大膽なのですわ』

『大膽！　お前が勝手に擇んだ美事な大膽だらうよ！』彼は嘲弄し當惑した。然しそれにも拘らず、彼は彼女の斷言に宥められた。

ナターシャにとつて、此等の場面は漠然と感情を害ふ痕跡をのこした。彼等の不信が、彼女に引き起こした不幸に對して、他の者を容赦なく非難する彼が、どうして彼の嫉妬を制御できないのかは、彼女にもどうしても理解出來なかつた。未だ知り合ひの淺い時に、彼女が自分の過去を後悔した場合などは、しば〳〵慰めをしたし、又他の者が彼女の感情を不快にしたり、侮辱したりした時などは、彼女にとつて、彼は唯一の庇護の避難所であつた。彼はよく愼んだし、男には稀な程の理解をもつて彼女につくしたのであつた。彼女は良くからかひながら、彼をセイーシュカと呼んだのであつた。

――過去の反響…。

此の過ぎ去つた日の、友達であり、親友であるセニヤと、違法の夫としてのセニヤとは、全然異つた二人の人間の様だつた。ナターシャは二人が別れて以來經過した此の七ヶ月に此れがいよ〳〵明瞭に解つてきた。

彼等を別れる様にしたのは、彼女が考へてゐる此の失敗だけなのか？　彼女が二人の生活を迴想した時、他の醜い記憶がおこつてきた。それは彼女に恥をかゝされた時もあつたのである。彼の善良さ

を罵つたり、誤用したりするアニュタさへ、親切で、思慮深い彼が、ナターシヤの場合には、信じられない程無慈悲だつた。誰れもいまだ彼女を、そんなに、殘酷に氣をわるくさせたことはなかつた。それが無意識に行はれたのだと云ふ心證は、それを緩和したが、然し暴行の意味は拭はふとしても拭ひ去ることは出來なかつたのである。それは同志が二人を案内した、小さい旅館に泊つた最初の夜に起つた出來事だつたのである。

同志達が歸つてから、彼女は幾度も此れが本當かと云ふことを震へながら考へて、自分の部屋にいそいで去つて行つた。彼は彼女を愛してゐるのだ！　此の大膽な思想家、あの稱讃されてゐて、一般から愛されてゐる革命家が、彼女を愛してゐるのだ！　淸い偉大な、計り難い幸福！

彼女が寢やうとする前、手に齒ブラシを持つてゐた時、ドアを敲く音がした。彼女が返答をしないうちに、セエミヨン・セエミヨノウイチが部屋に入つてきて勝手に錠をかけて了つた。膽を潰したナターシヤは、口の中に齒磨き粉を一ぱいにして、彼を見詰めながらつつ立つてゐた。

『小供のやうに何だつて貴女は滑稽な顏つきをしてゐるのです』そう云つて、ナターシヤの仰天した當惑など、少しもかまわずに、彼は彼女を腕に抱いた。

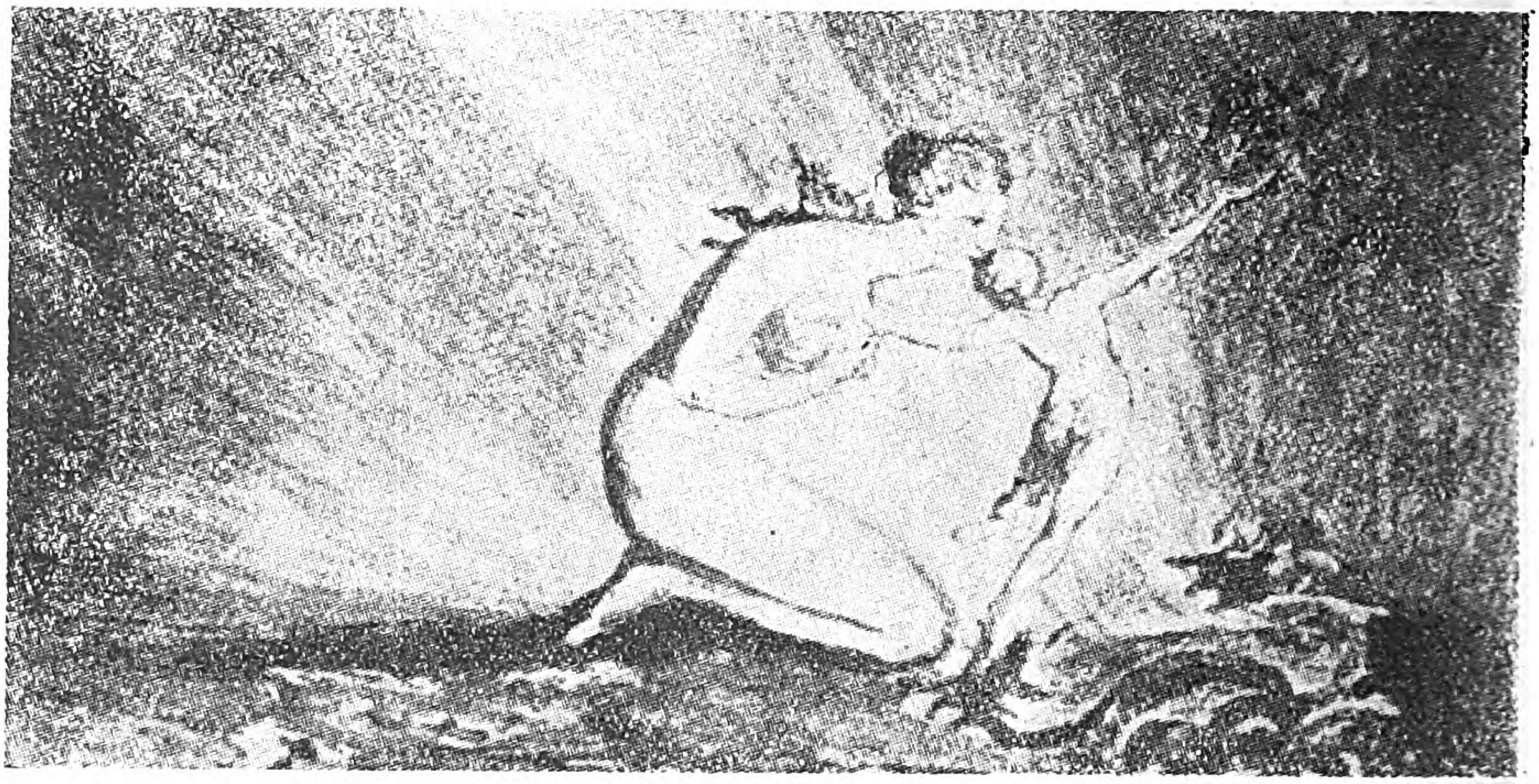
『薄荷（ハッカ）の香ひですね』そう云つて彼は笑つた。

『待つて下さい！　ね、口の中の齒みがき粉を洗はせて……下さい』

彼女は、何んと云つていゝか解らなかつた――彼女は單に肉體的に不快な、厭やな樣子から脫れやうともがいた。然し彼は粉で一ぱいな彼女の口に接吻したばかりでなく貪慾なさぐるやうな接吻を彼女の頭や裸はな肩にまで浴びせかけた。第一夜は！……、彼女は彼の愛撫には別になんの感應もおこらなかつた。彼女が第一夜の彼の猛烈な情熱を回想した時、只彼女は薄荷（ハッカ）の齒みがき粉の風味と、不快な砂障りを想ひ出した丈けである。燃へあがつた情慾に疲れ果てて、彼がついにぐつすり寢込んだ時、彼女は自分の肩に凭りかゝつてゐる彼の頭に云ひしれぬ戀慕で凭れた。

憐み深い親切が、心におこつてきて、始めて彼に對する彼女の愛がよみがへつてきた。欽慕に滿みた彼女は、美しい頭の且つ思慮に富んだ彼れの額にやさしく觸れながら接吻した。

然しそれから後彼女が彼に與へた愛には、決して肉體的な欲望や、燃ゆる樣な慾情はなかつた。彼女は古代の尼僧か、寺院で僧侶に自から捧げた時の樣な深遠純粹の悅びでもつて、彼女の肉體を與へた。彼女は所謂彼女の神に、身を與へたのであつた。彼にとつて、ナターシヤは、內部の偉大な熱情的な欲望を覺醒させた最初の女だつた。彼は彼女の情熱的な應答を懇願した。彼は神樣ではない、只彼の內部の男性が、彼女の愛を要求したのである。（未完）



ドラマ

(伊) グラツィア・デレッダ作

下位文子譯

I

四旬齊（クワレシマ）の最終の週日で、誰も彼も復活祭のお說敎や、神聖な儀式の爲に村にゐたものの、折から懺悔の期でもあり、誰一人醉潰れようとする者はなかつたので、別嬪で通つたイラリアの店はがらんとしてゐた。

イラリア自身にしてみれば、當はづれな不安を抱かせられてゐたらう。それでもいつもの場所に、まるで後家のやうな黑つぽい、いかつい形（なり）で、大な爐（ゐろり）──その焰は眞赤に燃えて、その周圍に古びた居酒屋らしい色彩を與へてゐた──その爐の前に腰を下して、ぢつと客を待ち詫びて、彼女は、終日、その場所を離れなかつた。夜だけは隣の部屋に引とつた。誰もその隣の部屋を知つてゐるものはなかつたが、居酒屋に足繁く通ひつめた男といふ男は、みんな、爐の片隅を知つてゐた。節（ふし）くれだつた手をあぶつたり、燃さしを指先に抓んでパイプをつけたり、あはよくばイラリアに言ひ寄らうと、摺寄つ

てゆくその爐の片隅を。併したとへ、燃さしは取り放題だつたとしても、イラリアは燃さし程、寄り附易いものではなかつた。默りこくつて、男達に話しかけられても、ろくに返事さへもしなかつた。只銀の小鎖で、顎の下で留めてる四角な黒い布を捲きつけた、蒼ざめた顏のつぶらな碧い陰氣な眼で彼等をぢつと見つめるのだつた。悲しさうに、そして威すやうに彼等を見守つてゐた。それから爐の煙出しを彼等に見せるのだつた。爐の黒づんだ煙出しの上には小刀の先尖で、十二の數の印が彫り込まれてあつた。――彼女の夫が、妻の情夫だと自惚れ廻つてゐたある男を殺して、鬱憤を晴らして以來十二年――

彼女が爐の上に印を彫りつけたのは、丁度今頃、復活祭を迎へる頃だつた。心の痛手を忍んで聖週間の本を讀みながら、彼女は我が身の受難をクリストのそれと思ひ合せてゐた。さうだ。恐しい週間だつた。それから夫の判決を言ひ渡されて夫の服罪となるまでの死のやうな三日間。彼女も一睡のまどろみもなかつた。だが、彼女の墓石はもう二度と動かされなかつた。

彼女をめぐる男達の叫聲、歡喜、酩酊、憤怒の中に、生活は燃えたゞれていつた。彼女は死人の樣に默々として、居酒屋の奥の自分の席に身動もせずにゐた。いつも開け放たれた、その戸口からは只、草深い斜面で遮られた往還の白い線のみが見られた。その斜面の上では、荒凉たる大空を背景にして、牛や馬が鼻づらを地面に垂れて、のそ〳〵と、絶えず牧場をゆきゝしてゐた。時折、邊りの沈默と靜寂が、彼女の良人の遠き苦難の重苦しい世界、彼女の身近き苦惱の重苦しき世界、そのなにもかもすべてが夢であり、靜な墓場ではなからうかと思はれる印象を彼女に與へるのだつた。にも係らず、結局は表面の死の下で、彼女はたゞ待つことの外はなかつた。だが、ある日、四旬齋の終の頃、彼女が本を手にして轉寢をしてゐる間に、一人の男、脊の高い女のやうに華奢な若者が、まるで危險をのがれて避難所を求めてゐる者のやうに、疑ひ深く體をのり出しながら戸口からのぞき込んだ。

イラリヤは眼を見開いた。だが、彼女は夢をみてるのかしらと思つた。男は脊がひどく高いので、戸口をかゞんで這入つて來た。そして奥の方の紫色の樽の側のテーブルの傍に腰を下した。何を注文するでもなかつた。肘を卓について、白い兩手の間に、淺黒い顏をはさんで、イラリヤに微笑みかけながら、しかし指の間に、黒い鋭い眼で彼女を弄しながら、ぢつと見据えた。彼女も彼を見た。小鎖が心の動に、顎の下で震へた。とう〳〵彼女は立上つて、卓の前に出ていつた。

『何を差上げます。ドン、マッチアさん?』

『オリエーナの酒を貰はうか、あるならなあ。』

彼が飲んでゐる間に、彼女は席に歸つて、火をかき立てた。胸が早鐘をうつた。彼女は何故、男が來たかわかつてゐるやうな氣がし

た。そして、彼が言ひ出すのを待つてゐた。

とう〱酒の勢にかられて、先づ口をきつたのは彼であつた。

『ふむ、イラリヤ、何を考へ込んでるんだ？ 俺は知つてるよ。俺のところの女房と姑が、俺を寄越したんだと思つてるんだな。お前、あいつ等がお懺悔にいつて、懺悔坊主に言はれたと思つとるな。「な、女子衆、許しておやりなされ。あの不仕合な女子の願をきき届けてやりなされ。あの女子の亭主の特赦の歎願狀に署名してやりなされ」つてなことをよ。さうさ、イラリヤ、いつだつたか、坊主の野郎が俺達の所に見えたんだ。お前の言傳を持つて來たんだ。そして言ふことがいゝや、もし願狀が殺された相手の後家とか、娘に署名して貰へりや、イラリヤはきつと亭主を特赦して貰ふことが出來るとさ。さうよ、大分、さうなんだらう。まあ、恐らく出來やうと言ふものさ。だがさ、お前あのやつ等が承知すると思ふかい？』

イラリヤは、さつきから腰かけの上で、ふり返つてゐた、燃ゆるやうな輝で一杯になつた、憐を乞ふやうなつぶらな瞳をして。男は飲み干した強い葡萄酒で、紫色にそまつた齒をむき出して、殘忍な笑を浮べた。『さうだな。まあ一寸、あいつ等の側を通つてみな。お前なんぞ、ひねり潰されてしまふぞ。お前、俺んとこの姑がどんなことを抜かしてゐるか知つてるかい！ 殺された奴を、そゝのかしたのはお前の方だと言つてるぜ。別嬪さんなお前が、相手が、物持で金廻りのいゝ男ときてるもんで、よしんば年はとり過ぎてゐるにしろ、女房持であるにせよさ。居酒屋の女將に助平根性を出しやがつて……何も店のおとりの女給共の爲ぢやないつてことよ。』

彼がしやべつてゐる間、イラリヤの瞳はまるで、肉體的苦痛のためのやうに見張られた。彼女は一言も答へなかつた。彼女は爐の方にひき返して來た。そして、體をかゞめこんだものゝ、火をかき立てやうとはしなかつた。彼女の愚しい望は、その時、地に落ちてしまつた。彼女の敵は許してくれなかつた。彼女にとつては世界中に、これ以外のことは、何の値打もあるものではなかつた。それから、ます〱醉が廻つてゆく男のしやべるにまかせておいた。

彼女の敵の中傷、憎惡、威嚇も、ドン、マツチアが結婚後二年立つて、その間、彼の妻と姑のさしがねで、居酒屋には一歩も足踏みしたこともなかつたのに、何だつて急にやつて來て、彼女を苦めて喜んでゐるのか知りたいといふ好奇心も、もう彼女をゆり動しはしなかつた。

とりとめもない言葉で、零落した小貴族がどこといふあてもなく、仲間をつれては始終居酒屋にやつて來てゐた年月のことを口に出すと、彼は口をつぐんでしまつた。そして、たゞ瓶を高々とさしあげて杯に注ぎ込まれる酒のかすかな音のみ、折々靜寂を破つた。深い沈默は、遠く斜面の彼方で小供達の吹く口笛の音まで、聞える程だつた。そしてこの世界が、三月の明るい雲と入交つた芸香の茂

みの所で、終つてゐるかのやうに思はれた。

イラリヤはふり向くことも恐しいやうだつた。彼女は又、夢のやうな氣がした。本を讀んだけれど、本の言葉は少しもわからなかつた。そこへ、恰度、誰かお客がやつて來た。羊飼で、性こりのない飲んだくれで、つい今しがた聖餐をうけたのだつたが、イラリヤの顔を見なくては立去りかねるのだつた。

彼も、ドン、マッチアの來てゐるのを見て、喫驚したやうだつた。つま先立つて入つて來て、爐の前にかゞみ込んで、イラリヤの方へ顔を向けて、目くばせした。

『彼奴等が、これを知つたら、こん度は俺を殺すぞ！』

イラリヤは何も言はずに彼を見つめた。

『あいつ等は狂ひ死にするぜ。威張り廻つて、まるで熟した石榴みたいに、はじけてしまうぞ。』

イラリヤは默つてゐた。

『あの男が此處に來とるなあ、女子衆に恥かゝす爲だよ。喧嘩おつぱじめたゞよ。姑や神さんとな。誰でも皆、知つとるだよ。喧嘩おつぱじめたゞよ。女子衆があの男をまるで傭人みてえに閉ぢ込めやうとしたもんでな……知れたことよ。女子衆は金持ぢや。あの男は女子衆のお蔭で食うとるだからな。』

羊飼はヒソヒソと話した。イラリヤはドン、マッチアが聞いてゐはせぬかと振り向いてみた。ドン、マッチアは両手に顔をはさんで、眼を閉ぢて眠つてゐた。怨恨(うらみ)を排した男が、その後で、憩ついてゐる時のやうな悲劇的な平和が、彼の美しい顔の輪廓を延び／＼とさせてゐた。が、しかし面やつれした、蒼ざめた容貌に見せてゐた。その日暮しの身内の手に拾はれた孤兒(みなしご)の赤子の時の彼を知つてゐて、それからならず者(いゝ)の若者となつた彼を見、そして急に金に惠まれた奴隷になつた彼をみて來たイラリヤは、一瞬の間、同情の眼で彼を眺めた。

それから、爐の方へ引返して來た。彼女の顔は、又暗くかたくなつた。

II

ドン・マッチアの足繁く通ひ出したことが、間もなく、彼女の苦勞の種となつた。彼は始終入り浸りで、昔の友達や、もつと荒れくれた常連とまで、一緒になつて、姑の惡口をついた。復活祭がすんで、土曜日の夕方から日曜日にかけて、居酒屋は特に一杯の人だつた。

彼はいつでも其處にゐた。朝つぱらから座り込んでゐた。物好な女は居酒屋の中をのぞきこもうとわざと通りをゆきゝするのだつた。

ある日、僧侶がイラリヤに會ひにやつて來た。

『お前さん、あの男はならず者ぢやといふことは知つとらうな。町の噂では、ドン・マッチアを呼び寄せるのはお前さんぢや。あの女

子衆が願狀に署名してくれぬで、お前さんがあの男を呼び出しにやるのぢや。そして此處にひきとめて、あの男を醉どれにするのぢやと云ふとりますぞ。な、どう思はれるな。イラリヤさん？　お前さん、お懺悔にも見えなんだのう。』

　イラリヤは呪の言葉の代りに、齒を喰しばつた。鐶が痙攣してゐる顎の下でふるえた。

　僧侶はやさしく、彼女の膝を手でたゝきながら、

『イラリヤさん、わし等はそんなことは皆、嘘ぢやと分つとる。わしとお前さんと、あの男とはよく知つとるのぢや。そして、大方嘘ぢやとは知りつゝ、それを眞にうけてる外の衆の誰彼も知つてはおらう。な、お前さんよう知つとろ、ことの眞相は大したものぢやない。上べの騷ぎぢや。マッチアを追ひ出しなされ、わが家に歸るやうにな。さげすんで、顧みもせぬ家にな。あの男はお神さんを好いとるのぢやが、困らしに此處に來るのぢやよ。』

　イラリヤは尋ねた。

『あなたはあの女子衆に頼まれて、お出でになつたのですか。』

『その通り。』

　僧侶は白狀した。

『では、聞いて下さい。あの女子衆に妾の願狀に署名するやうに傳へて下さい、そうすれば、妾はこの店から、ドン・マッチアを追ひ出すやうに骨折りますから。』

交渉（かけあひ）が數日つゞいた。遂に僧侶が署名した紙をもつて來た。

　丁度、その晚、マッチアは居酒屋で飮んだり、騷いだりして、出しぶつてゐた。が、彼は不安氣でゐた。そして、外の連中が歸つてしまつても、最初やつて來た日のやうに、蒼ざめて、取亂して殘つてゐた。

　夜も更けてゐた。大きな月が斜面の茂みの中から立上（たちあが）つた。まるで、居酒屋の中を微笑みながら眺めてゐるやうであつた。イラリヤは立上つて、テーブルに手を支へて、寄りかゝつた。

『ドン・マッチアさん、妾、お前さんにお慈悲をお願ひしたいんです。どうぞ、歸つて下さい。そして、もうこないやうにして下さい。皆は、お前さんを此處へ呼びこむのは、妾だなんて噂してゐるんです。妾は良人がどうか早く歸つてくれるやうにとそればかり念じてゐるんです。歸つて下さい。妾を可愛さうに思つて下さい。』

『お前のことを惡く言ひふらすのは、俺のとこの姑のやつさ。俺は知つてるんだ。まあ、その方がいゝんだ。』

『どうして、いゝのです？　妾がお前さんに何の惡いことをしました！　ドン・マッチア、何故お前さんは私が惡く言はれるやうなことをしてくれるんです！』

『お前何も俺に惡いことなぞしてやしないさ。あの女（あま）さ、俺をひどい目にあはすのは。首くくりめ。だが俺はきつとあの女（あま）を、腹わたをむしるやうな思ひをして死なしてみせるぞ。見せるともさ！』

『ドン・マッチア！　お前さんこそひどい人ぢやないの！　お前さんは怠け者の惡黨だ！』

『ふうむ！』

彼は彼女の勢に呑まれて、口を出した。それから笑ひ出した。

『俺は彼奴等が俺を此處からおつ拂ふつもりで、お前の願狀に署名したことは、先刻、御承知なんだ、だが、俺の女房の署名は、俺の署名がなけりや、効力はないといふわけよ。どうだ、俺がお前の言ふほど惡黨ぢやないことをみせる爲に、俺の署名をしてやらうぢやないか、紙をよこせよ。』

イラリヤは彼に紙を渡した。彼女が紙を見つめてゐる間に彼は言つた。

『さうさ、お前の亭主は苦役の半分をすましたんだ。ふだん眞正直につとめ上げてきたから、大方、特赦は貰へるだらうぜ。醉つてたんだからな。罪を犯した時は、まだ／＼若くはあつたしな。お前も若かつたな。イラリヤ、お前幾つだつたんだ？』

『廿歳、ドン・マッチア。』

彼の前にインキ壺をおきながら、彼女はこう云つた。だが、初は驚いて、次には恐怖を抱いて、男が署名もせずに、願狀をポケットにしまひ込むのをみてゐた。

『ふむ、尤も千萬だ。イラリヤ。もしあの男が、歸つてくりや、俺を殺すことが出來らあ。俺のとこの姑の願も大方そんな見當さ。』

その時、イラリヤは黒いマントの下で、兩手で頭をかき抱いた。彼女にはもう耐えきれぬやうに思へた。ぐつたり膝を下して、ふるえる兩腕を延ばして叫んだ。

『妾に紙を返して下さい！　返して下さい！』

彼は戸をしめにいつた。彼女が卓にすがつて、起上る間に、席に戻つて來た。そして、悲しさうに言つた。

『な、イラリヤ。大きな聲を立てんでくれ。こつちを向いてくれ。何も恐がることはない。願狀はお前に返してやらう。それよか、俺が誓つてやらう。確な人にたのんでやらう。俺は神かけてお前に誓つてやる。こつちを向いてくれ。俺をみてくれ。俺は力づくでもしようと思へば出來るが、そんなことはしたくない。俺をみてくれ。俺はお前よりもつと可愛さうな奴と思つてくれないか？』

『けど、お前さん、妾をどうしようと云ふんです？』

ふり返つて、彼を見ながら彼女は言つた。

『こゝの傍に來てくれねえか、さうすりや話してきかせらあ。』

彼女は靜々と、まるで魅せられたものゝやうに卓子にそつて進み出た。そして、彼の上に倒れかゝつて、泣きながら接吻をせた。

III

だが、彼が誓を果さぬ裡に、一年が過ぎた。願狀は彼のポケットの中にあつた。イラリヤはそれを拔きとつて逃ることも、すれば出來るのだつた。が、それはしなかつた。最初のうちは良心の呵責の

ために。署名を手に入れる爲に約束が果せぬのみか、罪のきづなで男を我が身に結びつけたので、彼女にはその署名を使ふことがこのましいことではなかつたのだ。

僧侶が彼女を訪れた。彼女は頭を垂れて、語つた。

『妾はどうしたらいゝのでせう！』

一年後の復活祭間際は、彼女は爐の煙出しの上に、第十三番目の印を彫りつけた。それから彼女は豫期せぬお告げがあつたかのやうに飛びのいた。さうだ、いつも待つてゐることが近づいて來た。だが、今は時の立つのが恐かつた。

ある日、マッチアはイラリヤが彼にはじめて接吻をした時のやうに、蒼ざめて取亂して卓子に向つてかけてゐた。

『俺んところの姑の奴が死にかゝつてることを知つとるか。彼の婆を殺したのは、俺故に胸を痛めたのがもとさ。』

イラリヤは返事もしなかつた。そのことは分つてゐた。

『多分二三日うちに、大方、明日にでも彼奴が死にや、俺は家の大黒柱になれるんだ。で、俺はもう此處に御無沙汰しなきやならないんだ。俺も男だ。耶蘇信者だといふことを思出さなくちやならねえ。俺の女房も心配してゐる。この頃ぢや俺に盡してくれる。まるで別人のやうなんだ。イラリヤ、世間に出ちや、親切のし合ひつこをしなきやいけねえんだ。さうでなきや、善い報は來ねえからなあ。』

彼女は答へなかつた。そのことは知つてゐた。

『イラリヤ』――彼は卓上の葡萄酒の染を眼近く、見ようとして、體を屈めながら、靜に言つた――『俺は特赦の願狀を送つてやらう。さうすりや、警察からお上に取ついでくれるだらうさ。それでいゝかい？』

彼女はあの時のやうに、マントの下で頭を抱えて、蒼白になつて膝を折つた。

『あゝ、マッチア、ひどい！　今になつてそれをするの？　今になつて……』

だが、彼は無感覺だつた。酒の醉ひの爲に、彼女の所へやつて來た最初の日のやうに、眠つてゐるやうだつた。

『マッチア、妾はお前さんから離れることは出來ない。今となつて！　マッチア、あの人がもし、歸つて來たら、お前さんを殺すだらうよ！』

『かまうことありやしねえ。もし、俺を殺すなら、俺が罪を洗ひ落さにやならねえつてことさ。』

『マッチア、紙を返して！　妾が送る！』

彼女はあの夜と同じやうに、哀みを乞ふてふるえる腕を差しのべた。だが、彼はす早く眼をあげて、殘忍な歯をむき出して、圖々しく笑ひかけた。それから、頭を落して、

『俺はもう遠うに送つたんだぜ。おい、イラリヤ！』

（をはり）

法王の騾馬

(佛)　ドオデエ作
大久保さわ子譯

プロヴァンスの我が百姓達が、彼等の饒舌(おしゃべり)を飾る美しい俚諺や格言類の中で之にも増して秀逸、奇抜といふべきものを私は知らない。

私の風車の十五里界隈では、怨恨家復讐心の強い人間の話が出る時、きまつて誰でもが「用心しな！　彼奴はまるで七年間蹴る時が來るのを待つてゐた法王の騾馬みたいな奴だ」と言ふそれだ。

私は久しい間此の諺の起原、法王の騾馬と、七年間こらへてゐたその一蹴りとは一體何事をいふのであるかをしきりに研究したのだ。が此の土地の誰一人として、その點について自分に滿足を與へてくれるものは無かつた。例の笛吹きのフランセ・ママイ、プロヴァンスの傳説ならば何でも御座れ、くはしく知つてゐる筈のその先生までがさうだつた。フランセも私と同樣、之には何かアヴィニョンの古い歴史に關係があるに相違ないといふ意見なのだが、彼としても諺以外には聞いた事がないといふのだ。

『こりや蟬の圖書館でなけりや、見つかりはしませんよ。』

と笛吹きの老人は笑ひながら言つた。

なるほどよい考へだ。それに蟬の圖書館は風車小屋のつい近くなので、私は一週間そこに閉ぢこもつた。

それはすばらしい立派な圖書館で、夜晝詩人のために開かれて居り、小さな館員達が絶えずサンバルの噺子入りで立ち働いてゐるのだ。私はそこで何日もよい日を送つた後、さうだ、一週間の研究の後——あほむけに寢そべつてだ、——自分の望む物を發見する事が出來た。即ち例の騾

馬と七年間こらへてゐたといふかくれもない一蹴りの卷だ。その話は少々子供じみてはゐるがなかく面白い。それで私が翌日の朝、すがれたラヴァンドの香のする、そして大きな蜘蛛の巣を栞にした空色の手帳の中で讀んだ儘をお話しやう。

法王の時代にアヴィニョンを見なかつた者は何もを見ないと同じだ。快樂、活氣、祝典すべてから言つて、他に之ほどの都は一つも無かつた。朝から晩まで行列に巡禮者の群、道には花を撒きちらし、幕をめぐらして、かと思ふと旗を風になびかせながら、滿艦飾の船でローヌ河をのぼつて來る樞機官、法王の親兵は廣場で羅典語の頌歌をうたひ、托鉢僧のクレセルが鳴り響く。ところで蜜蜂が巣のまはりに、群つてゐるやうに、大きな法王宮をひしくと取り圍んでゐる民家の階下でも階上でも之はレース編みのチクタクの音に、袈裟の金糸を織る梭のゆきかひ、御彌撒の聖器に腕をふるふ細工師の小さな槌、樂器師の工場で組立てゝゐる樂器の胴、機織女のうたふ讚美歌、おまけに鐘の音と必らず遠く橋のたもとで太鼓の音が響いてゐるといふ寸法だ。

といふのは我々佛蘭西の國では、人民が太平を謳つてゐる時にはきつと踊が伴ふ。でその頃此の都の町中はファランドルを踊るにあまりに狹すぎたので、笛吹きも太皷打ちもローヌ河の河風に吹かれながら、アヴィニョンの橋の上に陣取つて晝といはず夜といはず人々はそこで踊つた。其處で踊り拔いたのだ……あゝ！　何といふ太平な御代！　何といふ幸福な都！　鉾は錆びるし、牢屋は葡萄酒の置場となつた。饑饉も無ければ戰爭も無かつた……法王達がどのやうにしてそんなにもたくみに人民達を治め、人民達はどうして彼等を後々までもそんなにも慕つたかといふと、實はかうしたわけがあつたからだ！

中にも一人ボニファアスと呼ばれた老人があつた……おゝ！　彼が死んだ時には、此のアヴィニョンでどれだけ人が泣いたらうそれはほんとに親切な柔和な人だつた。彼の騾馬の脊中から何とまあ愛想よく微笑んだらう！

若しも貴方らが彼の傍を通つたとする――たとひ夫が可憐な茜草引きの少年であつても、都の大法官であつても――それはくく懇に祝福を與へる！　全くのイヴトの法王、唄にあるイヴトの王様だ。が微笑の裡に何かしら機智のひらめき、そして其の僧帽にはマジョレーヌの花の少しばかりをつけた、が然しチヤヌトンの氣などは微塵も無いプロヴアンスのイヴトの法王だ……此のよき法王のたつた一人のチヤヌトンとして人々が知つてゐるのは彼の葡萄園――アヴィニョンから三里程離れたシヤットオ、ヌフのミ

ルトの木の間に彼自身の手で植ゑた小さな葡萄畑だ。毎日曜日午後の聖祭を終へてから彼女の許へ通ふ。そして其處に着くと、騾馬をそばにひきつけて置いて日向に坐り、樞機官の連中はといふと葡萄の木の根元に寝そべつて、地出來の葡萄酒の栓を抜かせる。——此の美しいルビー色の葡萄酒は爾來シャーオ・ヌフ・デ・パップ（新法王宮）と呼ばれた。——そして情に耐へない風で彼の葡萄畑を眺めながら、ちびり／＼と夫を味ふのだ。そして瓶が空になつて日暮れたところで一同を引き連れて愉快に町へ歸つて行く。で太鼓や舞踏の間を通つてアヴィニヨンの橋の上を渡る時、喇子に浮かれた騾馬は小躍りに躍り出し、彼は彼でバレットを手にして拍子を取る。樞機官達はひどく眉をひそめるのだつたが、人民達はこんなに言つた。

『あゝ！　よい方だ！　あゝよい法王様だ！』

シャトオ、ヌフの葡萄畑の次ぎに此の世で法王が愛したのは彼の騾馬だつた。好々爺、全く夢中になつてゐた。毎晩寝る前に、小屋がちやんと閉まつてゐるか、飼料が不足してゐやしないかと見屆けに行つた。そればかりではない。食事の度にわざ／＼とお砂糖と香料をたつぷり入れた佛蘭西風の葡萄酒を一杯用意させてからでなければ決して腰を上げなかつた。そして樞機官達の反對にも拘はらず、自分自身で行つてやつたものだ。

一方騾馬にしても、さうした心遣に値するだけの動物だつたといふ事も亦言はなければならない、赤斑の美しい黒で、脚の逞しい毛色のつや／＼しい、尻がつしりと肥くて、房やら紐やら、銀の鈴や結び玉に飾られた小さな引き緊つた頭を重々しく据えてゐた。それに又天使のやうに柔和で無邪氣な眼をして、長い耳をいつも振り立てゝゐるところは、如何にもかはいらしい子供じみてゐた。アヴィニヨンの住民達はいたくも彼を尊んだ。で一旦彼が往來に出たとなると、皆がきまつてちやほやした。といふ理由は、誰でもかうするのが法王廰の御覺えを目出度くする第一の道、無邪氣な法王の騾馬が一人ならずの人間を幸運に導いた事を知つてゐたからだ。チステ、ヴエデーヌとその奇妙な冒險とがいゝ證據だ。

此のチステ、ヴエデーヌ實は始末におへない惡たれで、親爺である金細工師のギイ、ヴェデーヌが家から逐はなければならなかつた程の代物だ。何かして働いて見やうといふ氣が無く、その上親爺の弟子を唆かすばかりだつたからだ。半年間アヴィニヨンの町といふ町をごろついてゐたが中でも法王宮の近くに姿を見せる事が多かつた。前から法王の騾馬に眼をつけてゐたのだが、實際それはいつぱしの惡企みからだつたのだ・・・

或る日の事法王は只一人騾馬に跨つて、城壁の下を散歩してゐた。と例のチステが寄つて來て、さも感心したといはぬばかりに兩手を合せながら胡麻をすりはじめた。

『あゝ! 法王様! 大した騾馬で御座いますね……一寸の間よく見せて下さいまし……あゝ! 法王様! 何といふ立派さで御座いませう……獨逸の皇帝でもこんな見事なの持つちや居りませんわ。』

そして優しく撫でさすりながら、まるで若い娘にでも話しかけるやうに靜かに語り出した。

『さあおいで、おいで、私の寶石、寶物、すばらしい眞珠……』

好人物の法王はほく／＼しながら心の中で考へてゐた。

『何といふよい子供だ……俺の騾馬をあんなに可愛がり居る!』

それでその翌日どういふ事に立ち到つたかお解りですか? チステ、ヴェデーヌは古ぼけた黄色の上着を美しいレースの着物、紫絹の外套、鋲具止めの靴に脱ぎ替へて、貴族の息子や樞機官の甥達でなければ許されない法王の唱歌隊にまんまと割り込んでしまつてゐた……之が彼の奸策だつたのだ……しかしチステは夫だけでは滿足しなかつた。法王廳の人間に成りおほせた彼は、そんなにも旨く成功した狂言をなほも續けて行く事を怠らなかつた。他の誰でもに對しては太々しくしてゐながら、騾馬だけには相變らずの注意と愛情とを持ち續けた。一握りの燕麥、一束の岩扇を持つた彼を絶えず法王宮の苑に見かけた。桃色の美しい光扇をあいらしく打ち振り打ち振り、こんなにも言つてゐるやうに法王のバルコンを仰ぎながら。

『ヘッ……誰に持つて行つてやるのだかお解りですかね?……』

たう／＼しまひに人の好い法王は、自分も年を取つたといふので、厩の世話と佛蘭西葡萄酒を騾馬に運んでやる面倒をすつかり彼にまかせる事にした。そしてその事は樞機官達を喜ばせなかつた。

騾馬にとつても喜ばしい事ではなかつた……今では葡萄酒の時間になると、唱歌隊の少年が五六人して厩に這入り込み、マントやレースの儘で彼の藁の中にもぐり込む。とやがて甘い香料のにほひが厩中にひろがつて、チステ、ヴエデーヌか用心深く葡萄酒を持つて來る。そこで可哀さうな動物の責苦が始まるのだ。

彼の體を溫め身を輕く走らせる大好物のよい香の葡萄酒を厩迄運んで來て、さて鼻の先に突きつける。かと思ふと之は如何な事! 薔薇色の溫い液體は一滴もあまさず、みんな此の惡少年達の喉の中に流れて行つてしまふ……おまけに葡萄酒を取り上げるばかりではない、醉つぱらつた彼等はまるで惡魔のやうだつた! 一人は耳を、もう一人は尻尾を引張る。キーケ少年は脊中に乗つかる、ペリンゲ少年は自分の帽子を取つてかぶせる、彼等の誰一人として、此の動物が腰を一つひねるとか蹄の一蹴りを呉れるとかしさ

へすれば、一人殘らず北極星、いやもつと遠くまでもへしとばされてしまふといふ事を知らなかつたのだ…がどうして〳〵！　法王の騾馬、祝福、寛容の騾馬になるのも容易な事ぢやない…子供達が何をしやうとも駄目だ、彼は決して腹を立てたりしなかつた。彼が恨んだのはチステ・ヴェデーヌ彼一人だつた…チステときたら、彼がうしろに居ると知つたゞけで蹄がむづ〳〵した。夫には又理由があつたのだ。此のチステの惡、どれほど彼を辛い眼に逢はせたか！　醉つぱらつたあげくにどのやうな慘い事を考へ出したか…

或る日などは高い高い法王宮のてつぺんへ彼を逐ひ上げやうと考へついたのだ…作り事ぢやない、プロヴアンスの二十萬の住民達がひとしく彼等の眼で見た事だ。一時間といふもの盲滅法に暗闇の螺旋階段を引きまはされ、途方もない數の段をよぢさせられて塔のいたゞきのまばゆい日光に照し出され、何千尺かの脚下にまるで嘘のやうなアヴィニョンの町全體、榛の實ほどしかない市場の建物、兵營の前に立つてゐるのが赤い蟻ほどにしか見えない法王の親兵、はるか彼方の銀色の糸筋の上に、例の人々が踊り狂つてゐる豆粒のやうな橋を眺めた時、此のあはれな騾馬がどれだけ恐れおのゝいたかを考へて御覽なさい…あゝ！　可哀さうに！　どんなに恐しかつたらう！　思はずあげた叫びに法王宮中の玻璃戸が鳴り響いた程だ。

『どうした？　何をしたのだ？』

法王はかう言つて叫びながらバルコンに轉んで出た。

チステ・ヴェデーヌはもう何時の間にか庭苑に出てゐて、泣きながら髮の毛をむしつてゐた。

『あゝ法王樣！　かういふ理由(わけ)なのです。貴方の騾馬が…あゝ神樣！　どうなる事でせう？　貴方の騾馬が鐘樓に登つてしまつたのです…』

『ひとりでか？』

『さうです、法王樣、自分ひとりで…ほら御覽なさい、彼處に…耳のさきが出て居りませう？　燕が二匹居るやうに…』

『おゝ！』法王は眼を上げざま歎聲を發した『氣が觸れたのか！　死んで了うだらう…降りて來ないか、馬鹿奴！』

あゝ！　騾馬はとても降りたくてならないのだ…が何處から！　階段とは思ひもよらない。登るのはまだいゝが、降りる段には百遍も脚を折らずには濟まないだらう…憫れな騾馬はがつかりした。眼が廻るのもかまはず歩きまはりながら、チステ、ヴェデーヌの事を考へてゐた。

『あゝ惡奴！　此處から降りたら…待つて居ろ、明日の朝どれだけ蹴とばしてやるか！』

彼を蹴とばしてやるといふ此の考へからいくらか、勇氣が出て來た。さもなかつたら立つてゐる事も出來なかつた

らう……人々はやうやくの事で彼を引き下す事が出來た。起重機やら綱やらを使つてやつと吊り下したのだ。それでかうした高いところにぶらさげられて、まるで糸のはしにつるされた黄金虫かなぞのやうに宙に脚をもがいたとは、法王の騾馬たるものにとつてどれほど恥しい事だつたか。おまけにアヴィニョン中の人間の眼の前でだ！

可哀さうな騾馬はそのために夜も眠られなかつた。町中の笑ひを耳に聞きながら、あのいま〱しい塔のてつぺんで堂々めぐりをしてゐるやうな氣がしてならなかつた。それとチステ・ヴェデーヌの事、その彼を明日の朝蹴とばしてやる事を考へてゐたのだ。あゝ諸君！ どのやうな一蹴り！ パンペリグストからでさへそのとばつちりが見えるほどの……さて彼がかうした素敵なレセプションを廐の中で考へてゐる最中、チステ・ヴェデーヌは何をしてゐたか、彼は、毎年此の都から外交術や儀禮を習はすためにナープルのヂヤヌ皇后の宮廷に送りつける貴族の子弟達の仲間に入れられて、法王廳の船の上で歌ひながらローヌ河を降りてゐたのだ。チステは貴族の生れではなかつたが、法王は彼が騾馬を大切にする事、わけても鐘樓から救助の日に現はした熱誠に酬はれやうとしたのだ。

翌日騾馬はすつかり失望したのだつた！

『あゝ惡奴！ 氣が付いたと見えるな！』鈴をやナに振りながらかう考へた『が同じ事だ。歸つて來るなり御見舞を受けるのだぞ……それまであづけておいてやる！』

實際彼はあづけて置いた。

チステが行つてしまつた後、法王の騾馬は平和な生涯、昔の生活を取り返した！ もはやキーケもベリユゲも廐の中に入り込まなかつた。葡萄酒の樂しい日が、愉快な氣持、永い晝寢、アヴィニョンの橋の踊の足どりと一緒に還つて來た。とは云ふものゝあの事件以來町の人達の彼に對するそぶりには何處か冷たいところがあつた。往來を歩いてゐても何處からかひそ〱話が聞えて來た。老人達は頭を振り立て、子供等は鐘樓を指差し合つた。法王自身すら前程の信用を待たなかつた。それで日曜日葡萄畑からの歸るさ、彼の背中で居睡りしい〱戻つて來る時、かうした懸念を持たないでは無かつた。『眼がさめて見て、あの鐘樓のてつぺんに居るのだつたら！』騾馬は夫を知つて、無言の裡にいたく惱んでゐた。只若しも誰かゞ彼の前でチステ・ヴェデーヌの名前を言つたとする、長い耳は震へて、凄い笑ひを洩らしながら、鐵のやうな蹄を敷石で研ぐのだつた。

かうして七年の月日がたつた。で七年目の末チステ・ヴェデーヌはナープルの宮廷から歸つて來た。年限が來たのではなかつたが、法王の大膳職の長がアヴィニョンで頓死をした事を聞いたので、後釜をねらつて大急ぎで馳けつけ

たのだ。
　此のヴェデーヌの凄腕が法王の廣間に這入つて來た時、法王にはそれと解らなかつた程大きくもなり、體も出來てゐた。一方法王もそれだけ年を取つた事、眼鏡無しではよく見えなかつた事を言はねばならない。
　チステは少しも臆さなかつた。
『之はしたり法王様！　私をお忘れになつたのですか？　私です、チステ・ヴェデーヌです！』
『ヴェデーヌ？……』
『さうです、よく御存知の筈です……法王様の騾馬にいつも葡萄酒を運んでゐた……』
『あゝさう〳〵……チステ・ヴェデーヌ、よい少年だつた……それで今度は何が望みだといふのだ？』
『おゝ！　何でもない事です、法王様！　實はかういふお願ひに……が、あの騾馬はまだ居りますか？　それで丈夫で御座いますか？……あゝ、それは結構です……私は死んだ大膳職の長官のかはりにしていたゞきたいと思つて來たのです。』
『お前が大膳職の長官？　がお前は若過ぎる。一體いくつだ？』
『満二十と二ケ月です、法王様、ちやうど貴方の騾馬より五つ上です……ほんとによい奴！　私は伊太利に居ながら、どれだけあれの事を思つて居りましたでせう……彼に逢はせていたゞけないですか？』
『いや〳〵、逢はせるとも』お人好しの法王はすつかり心を動かされて言つた『それにお前はあれをそんなに愛してゐるのだから、もはやあれと引き離して置きたくない。今日から大膳職長官に任命しやう……又樞機官の連中が反對するだらうが仕方がない！　俺は慣れつこになつてゐる……明日午後の聖祭の後で逢ひに來るがいゝ、皆の前で任命する……それから騾馬を見せよう、そして葡萄畑へ一緒に行く……ヘッ！　ヘッ！　どうだ、それでいゝだらう？』
　廣間から退出しながらチステ、ヴェデーヌがどれだけ満足だつたか、明日の儀式をどんなに待ちどほがつて居たかは言ふ必要がないだらう、にも拘はらず法王官に只ひとりだけ彼以上に幸福、彼以上に待ちあぐんでゐるものがあつたのだ。騾馬だ。ヴェデーヌが歸つた時から次ぎの日の午後の聖祭の時迄、恐しい騾馬は燕麥を詰め込む事と、後足の蹄で壁を蹴上げる事とよりしなかつた。彼も亦任命式の準備をしてゐたのだ……
　さて翌日午後の聖祭が濟んだところで、チステ・ヴェデーヌは法王官の廣苑にまかり出た。高官達は皆居た、樞機官の連中は緋の僧服、アヴォカ、デュ、ディアブルは黒天鵞絨の服、修道院の僧達は僧帽を手にし、サンタグリコの理事達、唱歌隊の紫外套、下つては制服に包まれた親衛兵苦

衆僧の三團體、恐しげな態をしたヴァンッー山の隱修士、さては鈴を持つてしんがりをつとめる彌撒仕への少年、帶の邊まで裸體の鞭撻苦業僧法官と同じ裝ひのきらびやかな聖堂守、聖水係から燭臺の點し手に消し手まで……只の一人として缺けるところはなかつた……あゝ大した任命式だつた！　鐘に花火にうらゝかな陽光に奏樂に、それを遥か彼方のアヴィニヨンの橋の上では、例の踊の拍子を取る太鼓が狂氣のやうに鳴つてゐた……

ヴェデーヌが大衆の眞中に姿を現はした時の威容と美貌を讃める私語がすべての口から洩れた。立派なプロヴァンス人、がブロンドの髮のさきが波を打つてゐる、そして父親である金細工師の鑿からこぼれた金類みたいな生毛の小さな髭を生やしたプロヴァンス人だ。ヂヤヌ皇后の手が度々此のブロンドの髭をおもちやにされたのだといふ聲も其處此處に聞かれた。が成程ヴェデーヌ閣下は、皇后達が好むところの高慢な樣子、上の空の眼付きをしてゐた……此の日彼は故國に敬意を表してナーブルの服を脱ぎプロヴァンス風の桃色で緣取つた刺繡の服を着、帽子にはカマルグのイビスの羽毛が大きく搖れてゐた。

這入つて來るなり大膳職の長官はいとも氣取つて敬禮をした後、彼の官職の象徵である黄楊の匙とサフラン色の服を授けるために法王が待つてゐられる高階の方へ歩みを運んだ。騾馬は葡萄畑へ行く支度をとゝのへて、階段の下に曳かれて來てゐた。その傍を通る時、チステ・ヴェデーヌはにつこりほゝえんで、法王が見てゐられるかどうかを横目でうかゞひながら一寸立ち留つて、二度三度優しくその背中を叩いた。位置がよかつた……騾馬は身構へた。

『ソラ！　やるぞ！　七年間あづけて置いたのだ！』

その蹴り方の恐しかつたのなんて、パンペリグストからでさへ人々はそのとばつちり、いや、その中にイビスの羽毛が舞つてゐたブロンドの煙の渦卷を見る事が出來た。不幸なチステ・ヴェデーヌがこの世に殘したのは只夫だけだつたのだ。

普通騾馬の蹴りといへばこんな烈しいものではない。が之は法王の騾馬だ、おまけに考へても御覧なさい、七年間我慢してゐた奴だ……僧侶の恨みの深さを語る之にました例は他にない。

（風車小屋の手紙より）

當代の頓馬

日向で晝寢をしてゐた馬子が眼をさましたらば、馬の首につるした秣桶の中から、ヒヨツクリ鷄が首をだした。わりやまあ、こんなに豆くつたのかと、怒鳴つても駄馬は長い顔をしてゐた。カツと怒つた馬子どの、鷄を追ひかけ廻したら、澤山な鷄仲間の群れに逃込んでしまつて、どれがどれだかわからなくなつた。血迷つた馬子さん丸太ン棒を拾つて在方の町中を振り廻したあげく牢屋につながれた。駄馬は七日間ボンヤリ待つてゐた。

乃凡（ネイファン）

（支）羅琛女士
筆千鳥譯

一

公園での邂逅からこのかた祖義は、毎日黃家へやつて來た。

黃家の主人の大任は、祖義がだんだんと妻の乃凡に、親しくなつて行くことも、無論、怪ましないのだ。

溫厚で、好紳士である大任は、公園で自分の子供たちが、池に落ちて溺れるところを助けて呉れた、恩人でもあり妻の乃凡の、故鄉の隣家李家の一人息子であると、いふことも彼れを充分信用させることが出來た。

容貌が美しいばなりで活氣の無い、陰氣なそして冷たい妻の乃凡のことを、黃大任は、

『空氣を吸つて活きて居るお人形さんだ』といつてゐた。

その妻の乃凡が、このごろ眼に見えて快活になつて、よくおしやべりもするやうになつた、まるで復活したもののように——蟄居してゐた昆虫が、春が來て覺醒したやうに——毎日、あれ、これ、と着物を取り替へたり、耳環や、首飾りの配合を考へたり、身のまわりのことに、研究をしはじめた。

そうして、よく語る、よく笑ふ、まるで人間が變つたやうになつた。

『どうも、このごろは忙しさうだね、お人形さんが呼吸をする時間もなささうだね』

と良人の大任はいつた。

大任は妻の乃凡と祖義と、一緒に出掛けることも、たび

たびあるが、ふだん自分が、男女同權とか、女子解放とかを主張して、新人を以て任じてゐるので、やかましいことも言へず、出掛るときは、いつも子供達も一緒だから、愛してゐるもののためにむしろ喜んでゐた。それに、もとより祖義と、乃凡の愛は、純潔なものだと、おもひきつてゐたから――

二

『ねえ乃凡さん、僕はこの樹を見ると思ひ出すんです。北京のあなたの家のあの槐の樹と、僕の家の樹と、枝がすれあつて囁きあふのが羨やましくつて、いつでも樹の下に椅子を持ち出して、本を讀んでゐる振りはしてゐたが、あなたのことばかり考へてゐたんです。この樹に僕が物を言つたら、きつと、あなたの家の樹に通じて、あなたの心に觸れるだらう、かなどと思つて見たりしてゐたんです。それから、思ひきつてあなたにあの手紙を上げたんです、あなたには、あの手紙讀んで下さいましたか、僕はあれから上海の學校へ行つて仕舞つたんですけれど、まだ、あなたも二十位にならなけりやあ、お嫁には行くまいと思つてゐたんです、學校から歸つて來た時、門番の馬爺やの娘から、あなたがお嫁に行つたと聞いて、僕はどんなに悲しんだでせう、僕はとうとう病氣になつてしまつたんです、醫者が南の方が暖いから病氣に良いといふので、また上海へ來たんですけれど、もう永久あなたには逢ふことは、出來ないと思つてゐたんです。』

『ほんとうに、お隣同士に住んでゐたつて、あんなに大きくなるまで、お眼にかかつたこともなかつたのね。あたし十五になつてから、はじめて町の學校へやつてもらふことが出來たんですもの、世間にはどんな男の人がゐるのか、男の人といつたらお父樣や召使たちしか見たことが無いでせう、なんだか、學校へ行き出してから、自分の知ら無い世界を見たようで嬉しかつたのよ、狂犬に嚙まれた時、あなたに救けて頂いて、それから毎日御一緒に、通學するやうになつてから、世の中にあなたのほか、男の人は無いように思つてゐましたの。それなのに、じつに、私は、お馬鹿さんなのね、お父樣に背くことが恐ろしくつて、結婚してしまふなんて、全く無教育な、無智な私だわね。主人は、ほんとうに私を愛してくれてゐるのに、私は、すこしも主人を思は無い、不貞の妻だと、いつも自分を叱りながらも、どうしても主人を愛することが出來ないのは、やつぱり、あなたのことを思ひつづけてゐたからなの。いつでも、ぼんやりして、何か考へてゐるのよ、可愛いい子供のことも、ときどき忘れて、この前のように、あなたがお出が無かつたら失くしてしまふところだつたの。』

乃凡の眼は、淚に濡れてゐた。

かうして、いつも祖義と乃凡とは、子供たちを連れては、

公園の樹下に語るのだつた、がこれまで、唇一つ觸れあは無い純潔な戀愛だつた。
舊家に育つた乃凡には、これ以上は考へても見無かつた。
學校を卒業してからの祖義は、上海のある貿易會社の社員になつてゐたが、夢の間も乃凡の面影を忘れることが出來ないので、憂欝な日を送ることが多かつた。朋友にさそはれて茶館へも通つた、酒も呑んだ、妓女にも馴染んだ、まるで舵の無い船のように放縱な生活を續けた。
荒んだ彼れが、夢の間も忘れ得ない戀人と偶然の邂逅から、こうして手を取つて唇も觸れあはんばかりにして、語つてゐることが出來るのだもの、それに、乃凡の美貌や、脂粉の香りが、どうしてこのまゝ、祖義の心を永久に、閉ぢて置くだらうか――
時は晩春、薔薇の香りを、風がほのかに持つて來る。
胸苦しいやうな濃厚な暖かさ、全世界のものが皆睡つて夢を見てゐるうちに、愛と、美の世界に變つて仕舞ひさうな空氣だ。
祖義の熱い手は、緊く緊く、乃凡の手を握つた。
『乃凡さん、永久に僕を愛しつづけてゐて下さい』
祖義の腕は彼の女の頸を卷いた、來るべき時は來たのだ、――
接吻をゆるしあつた彼れ等は――世の中の何ものをも忘れて――情愛以外のものは――遊び厭きたる子供たちが母の傍へ歸つて來た、
『媽媽(ママーママー)』
三つの女の兒と、二つの男の兒は愛らしい瞳に、不思議さうに母親の顏を凝視(みつめ)た。
乃凡は、ようやく夢から覺めた。

三

二人は、しばしば會つた、乃凡は自分の仕てゐることを考へては、暗哭(かなし)んだ、が祖義を慕ふこころは募るばかりだ。
良人の黄大任が役向きのため、他縣へ出張した。祖義を良い朋友だと信じてゐる彼れは、妻を誘惑してゐるとは知らず、留守を托して旅立つた。
そのゝち、乃凡と祖義の感情は、濃厚の極致だつた。
離隔、離捨、どうして召使たちの注意を惹かずにゐやう。まして、執事の梁大狐は、誰れよりもさきに氣附いてゐて、何とかして嗅ぎ出さうとつとめてゐた。
召使たちは、きつと今に風波が起るだらう、まあ、もうすこし知ら無い顏をしてゐやう、といひあつてゐた。
乃凡には、召使達の陰口など、すこしも氣附か無いのだ。一身に、幸福が集つたような氣もちで、祖義のことばかりおもひつづけた。

まるで、催眠術にかかつた病人のやうに、一日でも祖義を見なければ、死んで仕舞さう。獨りでゐる時は、いつでも獨り言をいつて瘋癲患者のやうだ。食事も喰べたり喰べなかつたりした。

これまで、主人が不在でもこんなことは無かつたのにと、召使たちは冷笑してゐた。

奸猾な、梁大狐は、他の者とは一緒にならずに、何事も知ら無いような顏をして、機會を狙つてゐた。

四

ある時、祖義は、戀愛小說を讀んでゐたが

『ねえ、乃凡さん、この小說は僕たちのことを書いてあるやうだよ、僕たちは、この小說の主人公だね』

この小說の主人公は、有夫の妻で情人と出奔するのだ。

『乃凡さん、君は僕が君から離れ無いことは知つてゐるだらう、僕は君が僕を愛してゐることは信じてゐるのだ、ほんとうに、僕を愛してゐるのだつたら、この家を捨てて僕たちの生れたところへ行つて、僕たちの後半生を良い生活にしようじや無いか。僕たちの二つの魂を一つの物にして、第三者を入れ無でい、永遠に愛しあつて死なうじやあ無いか』

乃凡は承知しなかつた。

『あたしは、家庭を捨てることは、どうしても出來ません。そんな話、あたしは嫌です。あたしの主人はほんとうに正しい人です。あたしの愛する子供たちの父親です。その人の頭上に、そんな痛苦を加へたり、恥を與へることは出來ません。あたしはあなたを愛してゐますけれど、あたしの子供たちへの愛はすこしも減つてゐませんもの』

乃凡の心のすべてが、絕體、自分のもので無いことが、祖義にはたまらなく呪はしいのだ。

『君は、僕を愛してゐないんだ。僕のこの献身の愛をみとめ無いんだ。良人や、子供のことがなんだ。戀愛は絕體だ。二つの魂を一つにとさへ僕は思つてゐるんだ。』

祖義は、乃凡を怨み罵つた。

乃凡は、祖義の烈しい愛のすべてを、受けいれることの出來ない自分の心弱さと不覺を、自分で痛罵したかつた。あの日公園で邂逅しなかつたなら、こんな苦しみは知らずに濟んだらう。吉日だと思つたあの日はほんとうに惡日であつたのだ——

その日、乃凡は、祖義からの手紙を受取つて驚いた。しかも、血書で沈痛な文句が、書いてあつたから。

梁大狐が、二人のことを言ひ出したことから、今日、彼れと烈しく爭つた。それに、大任もやがて歸つて來るであらう。もう今までのやうには、會ふことが出來無いから、

なんとか方法を考へて急に會つて呉れ、そして最後の決心をしてと、いふのだつた。

乃凡の痛苦は、世間知らずの女のことゝて祖義どころでは無い、手紙が來れば、きつと、梁大狐の手に入るだろう、あんな奴だから、どんなことをするだろう、主人に告げることは、もとより知れたことである。こちらから出させる手紙は、きつと開くにきまつてゐる。茶館で會ふことは、世間の人に知られる恐れがあるし、このまま離れなければならないようになつたら、どうしよう。

『どうしても、仕方の無いときは、死んで仕舞へば良いのだ、そして天國へ行つて――』

五

黄大任は、出張先から歸つて來た。乃凡の心も、いくぶん家庭の忙しさと、幾日も祖義を見ないために冷めかけてゐた。あの熱烈さは昔の夢のようにさへ思へた。

ある日祖義から、是非逢ひたいと言つて來た。そして、家の者に知られるのを恐れて、婦人の服裝をして女の朋友のつもりでやつて來た。

祖義を見て乃凡はびつくりした。暫く會はぬ間になんといふ變りやうだろう、顏色は、碧白く神氣沮喪して、響の無い、低い聲音で物を言つて、眼の光は鋭どく、何か物を探るような、そして、おづおづした調子でありながら、思ひつめたような鋭い言葉つきで、これまで會ふごとに言つてゐたことを言ひ出した。

『乃凡さん、どうしても僕と一緒に逃げて下さい、私たちのことは、決して他人に聽かせたく無い。僕の心はあなたの心、僕の魂はあなたの魂、僕の身はあなたに屬するもの、あなたは僕の主人、僕はあなたの奴隷です。あなたの一切の指揮をうけます。來て下さい、來て下さい――それでなければ、僕は死ぬばかりです――あなたを離れて、僕は生きてゐません――僕の愛はどんなに深いか――僕の苦痛はどんなに大きいか、あなたには、これほど言つても分りませんか。』

乃凡は、おそろしさに心が動いた

『あたし、あなたと御一緒に參ります。ですけれど、子供たちを連れて參ります。兩人の子供はあたしの骨肉です。あなたも愛してゐますが、あたしの心の半分はあの子供たちのものです。あたしの苦しみは心が碎けるようです。』

『子供を連れて行くなんて、まだ、そんなことを言つてゐるのですか、あの小説の中の主人公だつて、一切を戀する人のために犧牲にしてゐるではありませんか。あなたの頑迷なのにもほどがある。子供への愛なんて馬鹿馬鹿しい。死を誓つて、戀を至上と思つてゐるものが、そんな舊道徳の婦徳じみたこと、今更ら。繰りかへしたつ

て何になります。』

『頑迷とでも、馬鹿とでも、なんとでも仰言いませ。どんなに世の中が進んでも、親子の情は不變だと思ひますわ。』

『今更どんなことを言つても、あなたは僕のものだ。どうしてもあなたを連れて行きます。死を誓つても。』

祖義の顏色は物凄かつた、乃凡はおののいた。

その夜。乃凡は短かい手紙に出奔せねばならぬ無い理由を書いて、良人に殘して行つた。

わたくしは、この世の中での一番惡いものでございます。わたくしの精神は錯亂して居りま。すわたくしは無力の人間で御座います。わたくしは、あなたが、わたくしの罪をお諒し下さることを信じて居ります。が、世の中の人はさぞ、私を吐罵することで御座いませう。只わたくしの苦痛なのは、可憐な子供たちのことで御座います。

どうぞ、罪の無い子供達は可愛がつてやつて下さいまし、私はどんなにお憎しみをうけても、よろしうございます。(完)

阿片と益母膏

支那人を全體的に毒してしまつてゐる「阿片」の問題は、彼等がいかに治外法權を恢復して見たあとでも、あの廣野全體を開發してしまつたあとでも依然として殘るだらう。阿片がなぜ彼等に永久の魅惑を持つかと言へば、それが酒精類とちがつて、逆に性的興奮を促がすからにちがひないが、その密送方法なぞもすこぶる深酷さをきはめてゐる。彼等は甲街から乙街へ安全に輸送しようとする場合は人參桶の中に瓶に密栓した阿片を隱すのが恒だし、また少し遠隔の地に多量を送るには、死體を郷里へ運ぶのだと稱して、腐敗死體の腸の中に藥ををさめて、さも愁然たる親戚故舊をよそほつた商人がつき添つてゆく。いかに何でも死者を檢剖する事は容易な事ではないから、十が十、この方法なら安心だとせられてゐる。そして勿論、表面的には取締規則は嚴びしく出來てゐるから、官沒品も多額に上り、時を期して之を燒却するのだが、之が亦支那流でほんたらに燒くのは一部で、官吏は巧みに「益母膏」といふ外觀阿片に似た膏藥とすりかへ、ほんものは自分達の手に收めて再び藥屋へ拂ひ下げて了ふ。之は公然の秘密とせられてゐるやうに見える。南方政府の主腦が悉く阿片癮者なのは有名だ、と、いつて、阿片がさまで人體に害があるかどうか、名高い阿片食ひド・クエンシイの如き遂に一日一萬五千滴を要したと言はれるのに、あれだけの文豪として八十何歳の長壽を保つてゐる。凡慮を以つて律すべからず。



ドストイエフスキーより

—その妻への手紙—

鳥居幸子譯

露國文豪ドストイエフスキーの文通はあらゆる階級に屬して居るが、中でも彼の晩年十三年間の獻身的な情深い妻、アンナ・グリゴリエフナに宛てた手紙には、熱烈な激しい性質をもつたドストイエフスキーの全人物が現れて居る。その手紙によつて、彼の妻に對する深い愛が歳が經つに從つて大きくなり、激しい、抑へられた情緒となつて現れて居るのを見る事が出來る。

ドストイエフスキーは賭博の道樂から離れる事が出來なかつた。だが彼を賭博へ導いたものは、借金から抜けて、前借を埋めるために註文によつて書き物をせぬ樣にしたいためであつた。然し彼が心から渇望して居た理想は、彼の生涯の最も晩年に至つてゞなければ達しられなかつた。それより彼は自分の成功を知る樣になり、一八八〇年、六月八日のプシュキンに就いての彼の有名な演説により、知識階級の全ロシアは彼をロシア文學の天才の最高代表として認めるやうになつたのである。

同手紙集は、最近ソヴイエット政府により官府文書保存所に集められたものであるが、たま〳〵私はその佛譯を讀む機會を得たので、私はそれを出版するためにその全部を飜譯した。その數通を拔擢して掲げる事にしやう。

一八六七年、五月二十四日、ホンブルグにて

アンナよ、わたしの愛するものよ、赦しておくれ、わたしを卑劣と呼ばないでおくれ。わたしは罪を犯してしまつた、お前が送つてくれたお金を、最後のペニングまで、みんな失くしてしまつたのだよ。昨日お金を受け取つて、昨日すつかり失くしてしまつたのだ。アンネットよ、わたしの愛するものよ、わたしは今どうしてお前の顔を見る事が出來やう、お前はわたしに何と云ふだらう？ お前が何といふだらふか、お前はわたしを何う考へるだらう、唯それ丈が恐ろしい。唯お前の裁きが恐ろしい。お前には今わたしを尊敬する力があるだらうか、それに尊敬がなかつたら愛はどうなるのだらう？ あゝ？ わたしの友よ、わたしを取り消されないほど咎めな

いでおくれ。わたしは賭博を呪つて居る、今ばかりではなく、昨日も、一昨日も呪つた事だつた。昨日お金を受取つて、わたしはそれを兩替して、僅かでもいゝから自分等のお金を殖すためにいくらか儲けやうと思つてあすこへ行つたのだ。何か儲かるだらうとわたしは堅く信じて居たのだつた。始めは少し儲けたのだが、失くし始めた時に、それを取り返さうと思つて、なほさら餘計失くしてしまつたのだ。その時わたしは、自分の意に逆らつて、せめてわたしの歸りに必要な費用を取り返さうと思つて、賭をつゞけたのだ。アンネツトよ、わたしは自分を憫んでくれとはお前に願はない、お前はお前の裁きの獨立を守つた方がよいのだよ。だがわたしは、恐れない。反對に、今ではこんな戒めの後では、急に未來が全く安靜に思はれるのだ。

さあ之からは仕事、仕事なのだ。わたしはまだ之からどれだけ出來るかやつて見せるだらう！　どうやつて折合つてよいかわたしは分らないのだ、だがカツコフ（本屋の名）は前借を斷らないだらう、そしてそれから後はわたしの働きの能力次第なのだ。若し仕事の成績がよければお金がとれるだらう、あゝ！　若しこれがわたしだけに係つた事だつたら、わたしは唯笑つて出發したらうに。だがお前は、お前はわたしの行ひを裁く事が出來ない、それがわたしを痛め惱ますのだ。アンネツトよ、わたしは唯お前の愛を失ひたくないのだ。わたしたちの仕事の狀態が惡かつたゝめ、わたしはこのホンブルグの旅に濫費して、一〇〇〇フラン、卽ち三五〇ループル以上も失くしてしまつた。これは罪だ！

だがわたしはこのお金を輕はづみに費したのでも、慾で費したのでも、自分のために費したのでも、ないのだ、あゝ、いゝえさうでないのだ！

わたしには外の目的があつたのだ！　だが今は自分を辯解する時ではない。今わたしは少しゝ早くお前のそばに歸らなくてはならない！　これが最後だから、今直ぐにも、なるたけ早くお金を送つておくれ。わたしはもう一時も此處に居られないし、居たくもないのだ。お前のそばに、一時も早くお前のそばに、お前を接吻したい。お前はわたしを接吻してくれるだらう、云つておくれ？　あゝ！　若しお天氣がこんなに惡くなく、寒くなかつたら、昨日わたしはフランフオールに行かれた事だらう、そして何も起らなかつた事だらうに、賭博なんかしなかつたらうに。だがお天氣が餘り惡かつたもので、わたしの齒いたと咳では、わたしには旅をして二晩も夏の外套で過す事は出來なかつたのだ。そんな事は出來なかつた、全く出來なかつたのだ。そんな事をしたら、わたしは病氣に罹るかも知れなかつたのだ。だが今は、そんな事さへわたしを止めないだらうよ。この手紙を受け取つたら直ぐに一〇インペリアル（卽ち先のやうに兩替の手紙はロベルト、ラウルに）、一〇インペリアル、つまりわたしの借金を支拂つて、出發する爲の九〇グルダンなのだよ。今日は金曜日だ、日曜日にはお金を受取るだらう、その日にフランフオールに發つて、そこで急行に乘らう、そしたら月曜日にはわたしはお前のそばに着くだらうよ。わたしの天使よ、今度のお金も失くして了ふだらふとは思はないでおくれ。それ程迄にわたしを侮辱しないでおくれ。わたしに對してそれ程迄惡い感情を抱かないでおくれ。わたしはこれでも男だ、わたしには何か人間らしいものがあるのだ。

又わたしを疑ふあまり、お前自身でわたしを迎へに來るやうな事を考へないでおくれ。わたしが家に歸つて來ないだらうといふその

疑ひはわたしを殺すだらうよ。わたしはお前に、どんな事があつても雨や寒さにさへも拘らず直ぐに出發するといふわたしの武士の一言を與へる。

わたしはお前を接吻する。今お前はわたしをどう思つておいでかい？ あゝ！どんなにかお前がこの手紙を讀む間お前を見たい事だらう！

お前に、

エフ・デイ……

追白―わたしの天使よ、わたしのために心配しないでおくれ。も一度繰返へすが、もしわたしが一人だつたら唯笑つてすました事だらうよ。わたしを苦しめるのは唯お前の裁きなのだ。それが唯わたしを苦しめるのだ。

さよなら。あゝ！ 一時も早くお前のそばに！ 一時も早く！ 一緒に、わたしたちは何か見つける事が出來るだらう。

ホンブルグにて　一八七〇年、四月二十九日（十七日）

わたしの大變可愛いアンネットよ。わたしは今着いたばかりの所で、何も未だ食べても居ないし、顔も洗つて居ない。わたしの手は震へて居る。わたしは疲れて居る、とても苦しんだのだ、それに夜は眠る事が出來なかつた。此處は寒さがとても酷くて（太陽は出ては居るが）、わたしは唯驚いてぼんやりとしてしまつたのだよ。汽車の中の夜は（ライプチヒからわたしたちはまるで鰊の箱の中みたいな車の中に居た）凍えきつてしまつてどうしてよいかわからなかつた。お前考へてごらん、朝方には綠の牧場はみんな氷花で蔽はれて居たのだよ。野も、道も、森も、家も厚い雪の層で包まれて居た樣だつた。此處でわたしは先づ火をこしらへる樣に云ひつけた。それにわたしは風邪は引いてゐない樣だ。太陽は昨日よりは照つてゐるが、通りの温度は華氏の二度しかない。さつき先週はこゝで二〇度の暑さだつたと聞いた。わたしの落着いたホテルはパルク・ホテルといつて大變停車場に近い所にあるのだよ。どうもこのホテルは惡い樣な氣がする。ホテルのボーイがわたしをこゝへ連れて來たのだ。わたしの部屋は亂雑なひどい部屋なのだが、それでも一フロリン半請求して居る。わたしの部屋の番號は一〇番だよ。さて今の所わたしについては之だけなのだよ、わたしの友よ。頭が少しフラ〳〵してわたしは悲しい。之から顔を洗つて、食事をして、着物を着換へてヴオクスホールへ行くつもりだ。さつき通りがけに音樂が聞えて居たから、音樂がある樣な氣がするのだ。

さあ、お前はどうしてゐる、わたしの可愛い鳩よ。お前の事について何も隱さずに書いておくれ、何よりもお前が健康か、風邪でも引いてゐないかをわたしはお前の所も此處の樣に寒い事だらうと思つてゐるからね。何か變つた事はないかい？ ルバ（ドストイエフスキーの二女）について詳しく書いておくれ、わたしのためにあれを接吻してやつておくれ、そしてわたしの深い敬ひを傳へておくれルバを接吻する時には、わたしのためとお前のためと一度づゝ二度してやつておくれ。部屋の方はどういふ具合に片がおつきかい？ お前のお母さんはお前の部屋でねるやうになつたのかい！ こんな寒さでは部屋を暖めなくてはいけないよ。云ふのを忘れて居たが、いつもより遲く郵便局へわたしの手紙をとりに行つておくれ、わたしが手紙を夕方出すと遲く着くかも知れないからね。四時から五時の間に郵便局へお行きよ。

わたしの天使よ、こんなに簡單に書いて怨まないでおくれ。ほん

とにわたしは疲れてゐてやつとペンを持つて居るのだ。多分わたしはこのホテルを出るかも知れない。此處はあまり惡いからね。明日はわたしの結果について何が書けるだらう？　こんな亂れた神經で來るのではなかつた。だが、どんな事があつても構はない。わたしは平氣でゐる事に決心した。わたしは千度お前とルバに口づけをする。お前のお母さんとI.G.（イワン・グリゴリエウイッチ・スニトキン、ドストイエフスキー夫人の兄）に敬意を表した方がよいかわたしには分らない。お前がそれをよいと思つたら、そうしておくれ。だがわたしの手紙や封筒を出しつぱなしにして、手紙がどこから來たか氣附かす樣な事はしないでおくれ。こんなに疲れてゐなかつたらもつと澤山書くのだけれど。道中は唯寒さだけだつた。その外隨分變つた事もあつた。アイセナッハからの景色は隨分變つてゐた。何といふ綠だつたのだらう。アンネットよ、手紙はホテル宛に書かないで、郵便局に止め置きにしておいておくれ、その方がいゝからね。

わたしはお前を强く接吻する。わたしはお前を心から愛してゐる。

お前の　　　　エフ・ドストイエフスキー

夜中ルバをよく見てやつて、わたしのためにあれに口づけしてやつておくれ。

ペテルスブルグにて　　　一八七三年、七月十二日

わたしの可愛い小さいアンネットよ、夕方にはとてもいそがしくて一分の暇もないから今直ぐ返事を書く。わたしは今呪はしい記事を書いてゐる所なのだよ、明日の朝の八時までには書き上げてしまはなければならない、四百五十行書かなくてはならないのだ。が未だ百五十行が書けてゐないのだ、それにわたしはだん〳〵愚頓になつて來て、隨分書きにくゝなつて來た樣な氣がするし、わたしの頭はいつも新らしくないのだ。わたしの可愛い小さい鳩よ、これはわたし達の將來には大變重大な事なのだよ。わたしはもう一ヶ月も前からドレスドで書いた時の易しさと、こゝでなめる困難の違ひを認めて居るのだがね。これは雜誌の主筆の務めにひつきりなしに委細な心配が伴つて、そのために强ひられていら〳〵して仕事をするので、それがわたしに適さないのじやないかと思つてゐるのだ。主筆の仕事は餘りわたしを疲らすので、この呪はれた年がすんだらわたしは長い事靜養しなくてはならないと思つてゐるのだよ。だがそんな事はまだ出來るだらうか？

わたしはお前の手紙を見て嬉しく思つてゐる。お前の手紙はいつもわたしを喜ばしてくれるのだよ、なぜお前は何も書く事がないと云つて斷つておいでなのかい？　何でも構はず書いておくれ。それでいゝのだよ。さあ之から仕事の事を話さう。アンネットよ、わたしはほんとに悲しい、明後日も日曜でさへも歸る事が出來ないのだ、神樣だけがそれを御存じなのだ。わたしは後にも先にも五〇ルーブルしか持つて居ない、それにグラジユダニンは高くなつて來た。來週の月曜日には少くとも一三〇ルーブル拂はなくてはならない。そのお金をどこから取つたらよいのだらう？　それにそれを拂はない譯には行かないのだ。新しい共同編輯者等がゐるものだから、それを拂はずに雜誌の信用を失くする事は出來ないのだよ。明日まで、つまりわたしが記事を書き終つてしまふまでは、この事について考へないつもりだ、だが明日からイワン、グリゴリエウイッチの知つてゐるユダヤ人（彼にもお金を借してくれた）の所へ八〇ルーブル

でわたしの時計を質に入れて見やう、だがそれがうまく行くかどうかはわからない。イワン、グリゴリエウイッチにも、アンナ、ニコラエフナにも始終會つてゐる。昨日は田舎のイワン・グリゴリエウイッチの家に行きたかつたのだ、昨日は丁度オルガ・キリロフナ（イワン・グリゴリエウイッチの妻）の祝ひ日で、わたしを熱心に招待してくれたのだが雨模様だつたので行かなかつたのだよ。イワン・グリゴリエウイッチは七五ルーブル借してくれた、オブラッオフから何の知らせもないのでイワンはひどく落着かないで、心配さうだつた。この間事件を裁判に附すと威して四十行の電報を打つたさうなのだ。わたしは要領通りオブラッオフが近い内にやつて來るだらうと信じて居るので、出來るだけイワン・グリゴリエウイッチの元氣を回復さしてゐるのだよ。昨日は彼の家には御祝ひがあつた、そして今日アンナ・ニコラエフナがわたしの所に來たのだがね、衣類を全部質に入れてしまつたさうなのだよ（イワン・グリゴリエウイッチはみんな質に入れてしまつたのでとても古い服を着てゐる）、彼女の着物も、下着類も、オルガ・キリロフナのコルセットまでも質に入れてしまつて、みんなで一五ルーブル受け取つたさうなのだ。お前アンナ・ニコラエフナの家がどんなに具合が悪いかお解りだらう。わたしたちは今こんな狀態なのだ。そして一番わたしの身を苦しめる事は家へ歸れない事なのだ、次の土曜日には歸れるかどうかは神樣だけが御存じなのだ、この前の手紙にその譯を書いて上げたらう。だからお前たちに會ふ事は一刻も猶豫してゐられないのだ。こゝでは總ての事につけてげびてゐて不愉快に感じられて氣が遲ひそうだ。わたしはお前たちみんなを接吻する。お前はわたしを夢に見たと云つてゐるのが（若しお前が譃を云はないなら、）わたしは二度お前を夢に見たのだよ。フエーデイア（ドストイエフスキーの息子、一八七一年七月十六日ペテルスブルグに生れ、一九二二年モスコーに歿す。）とルバに接吻しておやり、そしてルバが土曜日にわたしが歸つて來ないと云つて泣いたら、わたしは引き止められてゐる、二日たつたら歸つて來ると云つてやつておくれ。二人をよく氣を附けておやり、わたしの愛するものよ、もつと注意しておくれ、もつとよく二人の世話をやいておくれよ。わたしはフエーデイアが見たくてたまらない、あれの誕生日を祝つてやつておくれよ、何とか子供たちのためにお祝をしておやり。お前に送つたお金の方は、お前が立派に使つてくれるだらうと信じて居るがね、兎に角わたしたちの仕事の狀態を察してもつと儉約におしよ。お前はアンナニコラエフナの家に何か質に入れるものがあると書いて來てゐる。だがアンナ・ニコラエフナの家には何もないのだ。わたしのために質に入れてくれてみんなで二五ルーブルになつたのだ、質入に九ルーブルの利子を拂つて、今日彼女から聞いたがまだ何でも二二ルーブル拂はなくてはならないのだ。さよなら、わたしはお前たちをみんな接吻する。わたしが今夜この呪はしい記事で死なゝい樣に祈つておくれ。お前たちを接吻する。ルバにもフエーデイアにもわたしから千のくちづけを送ると云つてやつておくれよ。

ドストイエフスキー

追白それはさうと、わたしの愛するものよ、今わたしはとてもお前が必要なのだ。おわかりかい？　お前がわたしを夢に見るといふのはほんとかい？　もしやわたしじゃないのではないかい？　わたしはお前の足と顔全部を接吻する。

お前の

ドストイエフスキー

追白わたしは拘引されない事になつて、罰金を拂はなくともよいのだ、神樣が何故か御存じなのだよ。奴等はきつと都合のよい時には來ないだらう。奴等は長びかしてわたしをいら〱した狀態に置いてゐるのだ。

ストラーヤ・ルーサにて　一八七四年、十二月二十日、

愛するアンネットよ、わたしはお前の十行ばかりの小さい手紙をうけとつて、お前が無事に着いた事を知つて隨分嬉しかつた。何よりも健康が第一だ。どういふ風に過しておいでだね？　わたしは好奇心をもつてお前を待ち兼ねてゐる、多分何か話しておくれだらうね。」

子供たちはお蔭で極く丈夫にしてゐる。あれたちは一寸も邪魔にはならない、わたしは朝になつておそく寢る。今日は餘り寒くなく、風もない、だがしめぼつたくて霜が置いてゐる、それでも子供たちは神父樣の所へ出してやつて、車代をやつてをいたよ。リリ（ルバの事）もフエーデイアも可愛い、だがフエデイアは乳母の云ふ事を聞かなくて、餘りバタ〱音をさせる。夜はフエーデイアもリリもよく眠つてゐる。二人ともお前の歸りを待つてゐて、昨日二人はお前を澤山愛してゐると云つたのだよ。昨日夕食の時ジオルゼフスキー神父樣が來られて一時間居て、それから一緒に郵便局へ行つたのだ。あゝ！　どの本屋も返事がないのだよ。勿論『死人の家』は失敗だらうよ。だが多分ゆつくりと段々と賣れるかも知れない、圖書館や好事家が買つてくれるだらうよ。アンネットよ、世間の人はわたしを餘り重んじて居ないのだ。お前もそちらで聞いたかも知れないがね、昨日わたしはグラジユダニンでレオン・トルストイが彼の小說（アンナカレニナ）四十部をルスキー・ヴイエートニックに賣つたと云ふ事を讀んだんだ、出版は來年の一月から始まつて、一部五〇〇ルーブル卽ちみんなで二〇〇〇〇ルーブルなのだよ。わたしには一部二五〇ルーブル與れるのを躊躇して居たのに、トルストイには喜んで五〇〇ルーブル拂つて居る。さうだ、わたしは稼いで生計を立てゝゐるものだから、世間の人はわたしをみくびつてゐるのだ。今度ネクラソフはもしわたしの小說の思想に何か氣に入らない所があつたら、わたしをまうけさせやうとしてゐる、彼は今ルスキー・ヴイエートニックが小說で溺れさうになつてゐるので、わたしの小說をとつてくれないのを知つてゐる。（卽ち來年のため）だがもしわたしたちが今年にも施しを乞はなくてはならない樣ならば、わたしは自分の思想を一行でも書くのを止めないつもりなのだ。ポリアコフはわたしたちの仕事を知らないのだらうか？　どうとかして何か得られるやうに、兎に角わたしたちは藁の上の魚みたいにして居られないからね。ネクラソフからは何の返事もない。

さよなら、アンネットよ。わたしはお前を接吻する。お前はこの手紙を二十二日以前には受け取らないだらうよ、そしてもしかするとお前はもうこの手紙を見ない樣になるかも知れない。あゝ之がわたしの最後の手紙だよ、明日書いてももうお前はそれを見る事が出來ないかも知れない。それを察して心配しないでおくれ。子供の事も心配しないでおくれ、わたしが氣をつけてやつて居るし、そんな事はわたしにとつて重荷じやないのだ。お願ひだからお前の降りたべテルスブルグにはわたしの手紙を捨てないでおくれよ、人手に落ちると困るからね。

この手紙をお前がまだ受取る事が出來たら、ミシエルとニコラス

とお前の兄さんによろしく。アンナ・ニコラエフナはどうしておいでかい？　イワン・グリゴリエウイッチと一緒に出發したのではないのかい？　彼女にもよろしく傳へておくれ。

さよなら、ペテルスブルグで健康に氣をおつけよ。どの新聞もみんなペテルスブルグにチブスがあると書いてゐる。氣をおつけよお願ひだから。」

わたしと、リリとフエーデイア。

お前に。　　エフ・ドストイエフスキー

さつき郵便局でお前からの手紙がなかつた。どうしてゐるかい？　わたしは今晩中心配するだらうよ。

ペテルスブルグにて、　一八七五年、二月九日、

わたしの可愛いアンネツトよ、昨日お前の二通の手紙を受取つた、多分初めの手紙は一日餘計にストラーヤ・ルーサに止まつてゐたのだ、郵便局にそんな事をしない樣に云つておやり、わたしはやたらに心配しなくてはならないからね。天井が落ちたと云ふ知らせを聞いてわたしは大變心配してゐるのだよ、第一それは子供を殺すかも知れないし、第二わたしたちが出るといつて威しても驚かないとすると、彼女等は四月までは待つだらうがきつと五月までは待たないだらうよ、夏にはいつでも借家人を見つけるだらうからね。それにさうなるべきより外ないのだ、何故つて公園の近くで、新しく修繕したアパートなら夏は少くとも二〇〇ルーブル得られるだらうからね。每日手紙を書いておくれ、アンネツトよ、是非ともな、お前や子供たちの知らせがないとわたしはこゝの環境にはぢつとしてゐられないのだ。

昨日わたしが丁度お前の手紙を書き終つて封をした時に、戸が開いてネクラソフが入つて來た。ネクラソフは第一章の終りを讀んで自分の感激をわたしに告げに來たのだ。（ネクラソフは最後の校正だけでしか小說を讀まないので、以前には讀まなかつたのだ）。―私は夜中讀みましたそれほど私は熱中してしまつたのです、それに此の歲で―この健康で―私にはこんな事は出來ないのですがね…それに貴方の小說には何と生々さが漲つてゐるのでせう（ネクラソフは特にリーザの出て來る最後の場面が好きなのだよ）。私の歲では、これほどの生々さがありませんよ、どの作家にもありませんよ、トルストイのでも。最近の小說は以前に讀んだ事のある彼の小說の繰返しに過ぎないのです、けれども以前にはもつとよかつたが」（之はネクラソフが話してゐる言葉なのだよ。）ネクラソフは自殺と物語の場面を傑作とみてゐる。それに最後の二章も彼の氣に入つてゐるのだよ。「一番弱いのは第八章（彼がタテイアナ、パヴロフナの所へ隱れた所）です。そこには餘り外部の出來事が多い樣です」と云つて云た。それはそうと、わたしが校正を讀み直した時は、一番氣に入らなかつたのが最後の章なのだ、そしてわたしは澤山カツトしたのだ。ネクラソフは概して滿足してゐる。「わたしは今後の協力についてお話しに來たのです。御願ひですから急がないで下さい。捨賣なさつてはいけません、餘りよくなり始めたのです。」と云ふのだ。それでわたしは自分のプランを說明したのだ、つまり三月には何も出版しないで、第二部を四月と五月に出版し、六月を置いて七月八月に第三部を出すやうに云々と。彼はみんな喜んで承諾してくれて唯「捨賣なさつてはいけません」と云つてゐた。―「お金の方は皆で九〇〇ルーブルになります。貴方は先に二〇〇受取られたから、つまり後七〇〇ルー

ブル貴方に上げるのが殘つて居ます。若し之に五〇〇足すとすると充分でせうか？」と云ふのだ。それでわたしは「一〇〇〇足して下さい」と云つたらば、直ぐに承諾してくれたのだよ。「夏には貴方の外國出發前にもつとお要りだらうからから申すのです」と云つてゐたがね。つまりオテイエチエッヴエニア・ザピスキーではわたしをしかと捉まへてゐるのだ、そしてネクラソフは全然懇親な關係を欲してゐるのだ。彼は一時間半ばかりゐたので、わたしのシモノフの家へ行くのが遲くなつてしまつた。昨日は一日中病人の樣だつた位不眠のため神經が亂れて居た。お金の方は明日か明後日受け取る積りなのだ、それで、アンネットよ、計算して殘る分を送る事にする、つまり一〇〇〇ルーブル程なのだよ。それまで神父樣に借りておくれ、この間約束した七五ルーブルを送る暇がないばかりか、お金はどん／＼と出て行くから送る事が出來ないからね。昨日はコルニロフの所へ行つてスラヴイア委員會と宗教教育の友の委員會の二度目の拂込みと二五ルーブルのわからない費用とで四五ルーブル納めた。コルニロフは謙遜に親切に持成してくれたし、色々の事を聞いて、わたしと散歩し、方々で紹介してくれた。コルニロフの所には二十人程の人が居た。（マイコフは來てゐなかつた。）ストラホフはそこにゐて、月曜日の晩自分の宅へ來るやうに云ふてゐた。可愛いアンネットよ、お金が足りないものだから、わたしは自分の仕事のために誰の家にも行かれないのだよ、だが一番悪いのはシモノフの療養院なのだ、シモノフの所へはこんな時間（三時から五時）に行かなく／＼にならないので、わたしの時間はみんな浪費されてしまうのだ。きつともつと早く（九時）起きて早く寢なければならないのだ、だが一昨晩などは人々がわたしを惱ましたもので、一日に四時間も眠られなかつたのだよ。夜中しつきりなしに目が醒めたので十時過ぎに起きたのだけれど七時間は眠れなかつたのだ。明日の月曜からは仕事に掛らなければならない。わたしはお前が教へてくれた事の一部分をすつかり忘れてしまつたのだよ、例へばポリアコフにお金をやるのだつたか、やらないのだつたか、そしてもしやるのだつたら幾らやるか？　何にしてもみんなうまくやるだらうと思つてゐる、心配しないでおくれ。わたしの心配してゐるのはお前たちのことなのだよ。

　さよなら、わたしの天使よ。わたしはお前を愛してゐる、そして益々お前の必要を感じてゐる。わたしは子供たちを接吻して祝福する。わたしは十五日にはこゝを發つつもりだ、多分それより前かも知れない。

　わたしはお前を接吻する、わたしの愛するものよ、健康でおいで、そして一部始終を知らしておくれ。

　皆によろしく。

　お前を接吻する夫の、

エフ・ドストイエフスキー

エムスにて　一八七六年、七月二十四日（八月五日）

　わたしの可愛い小さい妻よ、アンネットよ、わたしはお前の十八日附けの天使のやうな手紙のために夢中になつてお前を接吻する。わたしのアンネットよ、わたしの樂しみよ、お前は自分がやくざと云ふ事を何處から知つたのかい？　お前は稀な女なのだ、そればかりではなく、どの女よりも以上に優れてゐるのだよ。お前は自分で自分の長所に氣が附かないのだ。お前は唯家中を治め、わたしの仕事を指導してくれるばかりでなく、わたしからアレクシス（ドストイ

エフスキーの末子。一八七五年、八月十二日、ストラーヤ、ルーサに生れ、一八七八年、五月十六日、ペテルスブルグに死す）に至るまで、我儘なやりきれないわたしたちみんなを指導して、わたしたちをお前の後に導いてくれるのだ。だが、わたしの仕事ではお前は餘りに細かい事までも氣に掛けてくれるし、わたしの本の販賣のためと『新聞』の編輯の事務所を管理するために夜も眠らない。それでも、その間、わたしたちはコペークを貯めても、いつになつてもお金は出來ないのだらうか？　だがお前以外にはそん事はみんな詰らない事なのだ。お前を女王にして王國全體を支配するやうに與へたつて、お前は確かに誰よりもよくやるだらうと思ふのだよ、それ程お前に才氣と、思慮と、心と秩序とがあるのだ。お前はわたしに、どうしてわたしがお前のやうな歳とつた不器量な女を愛する事が出來るかとお聞きなのかい？　それでお前はもう虚言をついてゐるのだ。お前はわたしのためには魅力であり、お前と同じなものはないのだ、そして心と趣味とをもつた男は誰でも、お前をよく觀たならばみんなそういふだらうよ。だからわたしは時としては嫉妬に心を苦しめる事もあるのだよ。お前はお前の眼が、お前の微笑みが、そして時としてはお前の會話中の活氣がどんなに見事か自分で知らないのだ。不幸な事はお前が少しゝか外に出ない事だ、さもなければお前は自分の成功に驚いた事だらうよ。わたしのためには、それでよい。だが、アンネットよ、わたしの女王よ、もしお前が外へ出て樂しみたいなら、わたしは自分の嫉妬の發作をも、すべてを犧牲に供するだらうよ。お前が樂しんでゐる事を想像出來たたら、わたしはどんなに嬉しいだらう。そしてもしわたしが嫉妬に心を苦しめるやうな事があるなら、わたしはお前を愛する事よりそれに復讐するだらうよ。わたしはほんとの事を云はう、アンネットよお前が外へ出るためにお化粧した時は、お前は急にお前の思つてゐない程ずつと若く、驚くほど美しくおなりなのだよ。時としてはわたしはそれに驚いた事さへあるのだ。一番いゝ事はお前がいつも家にゐて、働くことだ。いゝえ、アンネットよ、わたしはくり返して云ふが、今年の冬はお前は澤山おつくりをして、わたしと一緒にか一緒でなく外へ出なくてはいけないよ、わたしと一緒であつてもなくてもわたしは一向かまはない。お前はわたしを喜ばせるために樂しまなくてはいけないのだ。お前はそんなに働いてはいけないのだ、『新聞』の方はどんな目に合はうとも別に折合をつけなくてはならない。わたしたちは少しづゝなるたけ早くそうしやう。さあ、どうしてお前はわたしが夫として、そして男としてお前を愛するのを不思議に御思ひなのかい？　だが誰が身も心もわたしと一緒に融け合つたお前のやうに、わたしを甘やかしてくれるだらう！　だがその點についてのわたしたちの秘密はみんな珍らしくはないのだ。それで居てわたしはお前のそれ〴〵の原子を熱愛して、わたしがするやうに接吻してはならないのかい？　お前はお前自身がどんなに天使のやうな女であるかさへ分らないのだ。だがわたしは家へ歸つてそれをみんな示すだらうよ。わたしは何て情熱の男なのだらう、だがお前は、いくら情熱の男でもわたしが何度もお前に示したやうにまで女を愛する事が出來るとお思ひかい？　尤も昔の證據は何でもないのだ、そして今度わたしが歸つたら、わたしはお前を食べてしまふだらうかも知れないよ。(誰もこの手紙を讀みはしないだらうし、お前はこれを誰にも見せてはならないよ。)

さあ、これから仕事の事を話さう。お前のお母さんが怒つてしま

つたからお前は一人なのだらう、それに一言も乳母の事を書いて來ない所によると、お前はまだ乳母をやとはないのだね。それではどうしてお前は氣を安める事が出來やう？ わたしは乳母の事を何か知るまでは心配しつゞけてゐるだらうよ。わたしはお前がお風呂に入つてゐるといふ事を嬉しく思つてゐる。可愛いアレクシス、わたしはあれの顔を見るのがどんなに嬉しい事だらう。フエーデイアとリリについても書いておくれ。あゝ！ アンネットよ、何か稼ぐにはどうしたらよいのだらう？ お前は「わたしたちは變な人間だ、十年經つたのにわたしたちは益々愛し合つてゐる。」といふお前の口ぐせの文句を書いてゐる。だがわたしたちがまだ二十年生きるとしても、その時もきつとお前は、「わたし等は變な人間だ。わたしたちは二十年一緒に暮して來たがわたしたちは益々愛し合つてゐる。』とわたしに書くだらうよ。わたしは、それにかう答へる。だがわたしはもう十年生きるだらうか、それはわたしには答へられない。何れにしてもわたしは健康はよい、だがわたしには養生のきゝめがあるだらうかゞ分らないのだ。神經の方ではわたしは比較にならない程丈夫になつた。散歩をする時は、疲れずに以前の二倍の道を歩く事が出來る。兎に角養生は非常に效めがあるだらうと思ふのだよ。こゝでわたしはペテルスブルグの砲兵の將官である ガウの 男爵に あつた、わたしたちはシモノフの家で會つたのだつた。彼はわたしに、ベルリンのフレラッハが彼は治らないだらうと云つたと話してくれたのだよ。然し昨年はムニチュのウイアンデルフラウ夫人（お前は多分彼女の話しを聞いたらう、彼女は秘密な方法ですべての病人を癒やすのだよ。彼女の所には澤山の人が來るのだが、ドイツのお醫者達は彼女が望みのない病人の場合でも癒やすので彼女に對して一言も云はふとしないのだ）の所へ行つて、非常に病氣が輕くなり、今では隨分氣分がよくなつてゐる。その上彼はクレンケの水を飮んでゐる。さあ、彼女はお金を少ししか取らないから、それだけ來年の夏はお前（貧血症）と一緒にムニチュに行くとよいだらうと思ふのだ。彼女の强ひる養生は十日しかかゝらないから、不成功の場合にはいつでもその後でクレンケンに行かれるのだ。わたしには旅行に費す五〇〇ルーブルは後で確かに五〇〇〇ルーブルになるだらうと思つてかういふのだよ。何れにしてもこゝでは、今の所、わたしの健康はこれ以上よくはならないと思ふのだ。だがこゝには一つ恐ろしい不幸がある、『新聞』、『新聞』！わたしは書き始めた所なのだ。だが非常に遲れてゐるのが分るのだ。わたしには書く時日が四日間殘つてゐる、だが何といふ時日なのだらう。わたしは六時に起きて、着物を着て、七時に水を飮みに行くのだ。九時には宿に歸る。朝食をすませて十時まで休む（これは始終歩いてゐたからなのだよ）十時過ぎに、わたしは半時間準備をしてから、お午まで書く。お午から一時まで又散歩し、これは命令されてゐる一時に午食する。午食の後は直ぐ仕事にかゝる事は出來ない、わたしはこの時間をわたしの文通のために當てゝゐる。（アンネットよ、かういふ具合だから、もし之からわたしが短い手紙を書くやうになつても、お前は怒らないだらうね。）四時には又水を飮み、六時には宿に歸つて、草稿を淸記しなくてはならないだが七時には、又、長い散歩をしなければならない。八時には茶で、次に十時には床に就く。此の樣な具合で實際は著作のための時間は一時間、淸記のためには凡そ一時間半しかないのだ。それは酷い事だ、酷い事だ！ わたしに何が出來るだらう？ 夜は、家にゐると同じやうに行かない。そし

て『新聞』はほんとにつまらなく平凡に思はれるのだ、それだのに特別に面白くなくてはならないし、それでなければお終ひなのだ。つまり、アンネットよ、わたしは苦しんでゐるのだよ。おまけに、わたしはお前たちの事を心配してゐる、お前たちに何かお起りではないかい？　わたしのこの心配は取り拂ふ事は出來ないのだ。アンネットよ、わたしはこゝを八月七日に發たうと思つてゐる。わたしはストラーヤ・ルーサには書いて仕事をするために七日間ゐる事に定めたのだよ。さう出來たらよいだらう。アンネットよ、わたしはお前の足下に跪いてゐる。わたしはお前を接吻し、お前を熱愛してゐる。わたしはお前の上に、お前のために祈つてゐる。わたしはお前全體を、全體を接吻する。子供たちを接吻する。あれたちにパパはもう直き歸つて來ると云つてやつておくれ。あゝ！　わたしの愛するものたちよ、神樣がお前たちをお護り下さるやうに！　あゝ！　アンネットよ、神樣がお前に健康をお授けになります樣に！　お前は本がないと書いてゐる、だがわたしの友よ、圖書館には本があるし、そこから取ることが出來るのだよ、そのためにお金を費すのをお惜しみでないよ。すべてはお前に。お前を熱愛し、お前に戀ひ焦れてゐる夫。

エフ・ドストイエフスキー

追白。私はお前の足の五本の指を接吻する。私は子供たちを接吻する。

モスコーにて、一八八〇年、六月八日、

わたしの愛するアンネットよ、今日わたしはお前に昨日の七日の手紙を送つた、だがわたしは精神的にも肉體的にもとても疲れてゐるに拘らず、この數行を書かなくてはゐられないのだよ、それでお前は多分前の手紙と一緒にこの手紙をお受けとりの事だらう。

今朝、私は『友』の集會(ロシア文學の友)で演說をしたのだ。廣間は滿場一杯だつた。いゝえ、アンネットよ、いゝえ、お前は決してその齎した結果を想像する事は出來ないだらうよ！　わたしのペテルスブルグの成功は何だつたらう？　今度の成巧に比べれば何でもない、ゼロなのだ。わたしが現れた時滿場は喝采裡に崩れさうだつた、そして長い事、とても長い事、みんながわたしを喋らしてくれなかつたのだよ。わたしは會釋をして、身振りをして、讀ましてくれるやうに願つたのだがどうにもならないのだ(感激も、熱狂も、みんな『カラマゾフ兄弟』のためなのだよ)。やつと、わたしは朗讀を始めたのだ。一頁每に、時としては一句切每にさへ百雷の落ちるやうな拍手の音だ。わたしは高い聲で熱中して讀んだのだ。タテイーアナについてわたしが書いた事はみんな熱狂して賛成されたのだよ。(これは二十五年間の歩みに對するわたしたちの思想の大勝利なのだよ)そしてお終ひに、わたしが人類の萬國融和を宣言した時は群集は熱狂して居た、わたしが終つた時に起つた熱狂の叫び聲はとうていお前に想像させる事が出來ないのだよおのれを忘れてしまつたものたちは泣いて、涙に咽んで、抱き合つて、お互にもつと善い人間になつて、これからは憎み合はずに愛し合はうと誓ひ合つたのだ。そのために集會日の秩序は目茶苦茶になつてしまつたのだよ。みんなわたしの方へ急いで押し寄せて來て、演壇へ亂入して來たのだつた、令夫人たちも學生たちも、國務大臣たちも。みんなわたしを抱擁し、手に接吻した事だつた。演壇の上にゐたわたしたちの會員はみんなわたしを抱擁して、熱狂して文字通り泣いてゐたのだよ。それから一時間半の間注意が續いた。みんなハンカチーフを動かしてゐた。急にわたしの知らない二人の老人がわたしを　ち留

まらせたのだ「私共は二十年來仇敵同士だつたのです、話した事もなかつたのです、それに、今・私共は抱き合つて仲直りしたのです。私共を仲直りさせたのは貴方です。貴方は私共の聖人です、私共の豫言者です。」と云ふのだよ、すると群集の中で皆「豫言者！豫言者！」と叫んだ事だつた。わたしが自分の演說中に推擧したツルゲネフは、眼に涙を濕はしてわたしの腕に身を投げた。アネコフは走つて來てわたしの手を握り、わたしを抱擁して「貴方は偉人だ！」と叫んだのだ。彼等は二人ともわたしに「貴方は偉人以上だ！」と云ふのだ。演臺に飛び上つて來たイワン・アクラソフは、公衆に向つてわたしの演說は單なる演說ではなく歷史上の大事件であると云つて、「雲は地平線の縁を包んでゐたが、こゝにドストイエフスキーの言は恰も旭の如く總てを分散し、總てを明るくするのである。この時より兄弟愛は現れ、もう之からは心得違ひはないであらう」と述べたのだよ。すると「さうだ！ さうだ！」と云つて、皆が叫んだのだつた。そして又新たに抱き合つて、新たに涙なのだ。集會は一時休止となつた。わたしは幕內に急いで引込んだのだが、公衆はそこまで侵入して來たのだよ、特に婦人たちが、みなわたしの手に接吻し、わたしを惱ますのだ。學生たちは駈けつけて來た。その中であるものは、涙ながらに神經の發作に襲はれて氣を失つてしまつたのだ。これは完全な勝利なのだ！ 最も完全な勝利なのだ！ 集會の座長席に就いてゐたルリエフは、『ロシア文學の友』の會は慈悲を以てわたしを名譽會員に推擧すると宣言したのだよ。すると又新たに喊きと叫び聲なのだ。會は一時休止の後又始まつた。みんな自分の演說を斷めてしまつた。アスカコフは現れて、「我等の偉人ドストイエフスキーの立派な言はすべての解決を與へたのである」と云つて、自分の演說を朗讀しないと宣言したのだよ。だが、皆で强ひて讀ましてしまつた。その間に小さい謀が企てられたのだよ。わたしは疲れを感じたので出かけやうと思つたのだ、だがみんなが强く引きとめるのだ。此のしばしの間にみんなが直徑二アルシン（一・四二米）の素的な、立派な月桂冠を買ひに行つたのだよ、そして會の終りに、多勢の婦人たち（百人以上）が演台に上つて來て、廣間全體の前で、わたしに授けてくれたのだ、「貴方があれ程よくいつて下さつたロシアの婦人を代表して！」と云つてね。そしたらみんな泣いて、又熱狂してしまつたのだよ。市會議長のトレテイアコフはモスコーの市を代表してわたしに感謝したのだよ。アンネットよ、わたしが止つて居たゞけあつたと白狀おし。これは將來の保證なのだよ、すべての保證なのだよ、もしわたしがこゝへ露れに來たとしても。

ホテルへかへつて、わたしは小さい紙片に書いたお前の手紙を受取つたのだよ、だがお前はわたしが餘り長い事こゝに止つてゐるので無情だ！ 二時間したらわたしは第二の文藝のお祭りに行くのだ。わたしは『豫言者』を朗讀する。明日は訪問。明後日、十日にわたしは出發する。重大事件がわたしを引止める樣な事がなければ、十一日には到着する。わたしは自分の演說を出版しなくてはならないのだ、だがどこで出版しやう？ 人々が拔き取るのだ。ほんとに恐ろしいのだよ。さよなら、わたしの愛するものよ、最愛のものよ、わたしはお前の小さい足を接吻する。私は子供たちを接吻して祝福する。わたしは紙片を接吻する。私はみんな祝福する。私の頭はよくないのだ、腕と脚は顫へてゐる。さよなら、今に又會はう。

永遠にお前に、

エフ・ドストイエフスキー



カウツキ夫人への手紙

——ローザ・ルクセンブルグより——

綾小路敏子譯

一九〇五年十二月二十八日、ローザはベルリンを出發し、第一次露西亞革命に投ず可く、東プロシヤ、イロヴオに赴いた。其處で數日間滯在の後、ワルソーに這入つた。然し彼女がワルソーに達した時、既に革命は失敗の終結をとげんとしてゐた。ローザは黨の機關新聞を發刊し果敢ない活動を續けた。

○

一九〇六年一月十一日。ワルソーにて。

親しき人へ。

貴女の二通の手紙（噫！ 餘りに短い）を深謝します。妾はそれを待ち倦んでゐたのです。妾は貴女に電報を打ちませんでした。と云ふのはマルチレウスキーが恰度ベルリンに出立しようとしてゐたからです。處が彼の旅行は例の調子で數日間遲延して仕舞ひました。彼は貴女に妾の挨拶を傳へてくれたでせう、而して書留めで「商業新聞」を御送り下さる樣に御願して置きましたが、其れを送る可く貴女に御たのみした事と思ひます。何んでも二重封筒にすれば容易に送達出來ます。我々は「前衞」紙（赤版二枚）の一日分を受取りましたが、以來——皆無。神とコサックが其の理由を知つてゐるでせう。妾が一番待ちこがれてゐるのはメーリングの論文です。其れはカル、が阻んだので我々が發表しなかつたものです。メーリングは夫れを執筆しなかつたでせうか？ 妾は之と同便で彼に出しました。ルイゼさん、何とぞ彼を激勵して下さい。メンシストウオの黨員が茲數日間此の地に滯在してゐる。妾は彼から時局に就ての各種の情報を無理やりに聞取りました、妾は其れを「前衞」紙の材料にする心算です。其の他の事は「新らしき時代」紙に定期的に書かうと云ふ殊勝な計畫を持つてゐます。併し此の時局の批判と云ふ方面に對して一層筆を伸さうとするには「前衞」紙は適當ではない。もう少し時間を持ち合はさなければ駄目！

モスカル（註一）から耳にした事ですが、パルヴス（註二）は委員會（註三） の議長も議席も兩方共拋棄した相です。彼は最近のヂエネラル・ストライキの最中に一つの問題を討議した時、味方が

少數であるのを發見したからです。其の論題は不成功に終つたストライキに如何にすれば新らしき生命を注入し得るやと云ふのでありました。パルヴスはモスコーの例に倣ひ、現狀を救濟する爲に武器を執つて反亂を起せと主張しました。全員は此の考へを承認した。然し大多數は現下に其れを實行するのは不可能であると信じてゐました。時局に對し自分の智識を過信してゐた、其れに氣が付いたとパルヴスは宣言しました。彼は何をさておいても現勢に通曉せんことを望み其の爲に辭職したのです。亦彼の新聞の經營に專心以て當らんとするのでした。其の新聞は素晴らしく成功してゐました。目下全露を通じて社會民主黨の新聞は一枚も發行されてゐません。あらゆる民主的新聞、無色彩、反動的な新聞さへも禁止されてゐる！（其れにもかゝはらず、我々のスタンダール紙は毎日世に送り出され、街頭で販賣されてゐます。それは貴女がマルチンスキーから聞知されたとほりです）

（註一）モスカル。モスコーより來た人間の意。

（註二）パルヴス。ヘルパット博士の雅名。ヘルパット博士は露西亞の社會主義者、目下ベルリンに有り。

（註三）委員會。第一露西亞革命間に開催されたるペトログラードの勞動者會議。

目下の時局は下の如くである。やがて來たらんとする鬪爭は、劒戟の遭遇戰であると一般に信じられてゐます。モスコーに就て妾は多くのことを知りました、其れは想像し得る限りに於ける最も勇壯な事件である！（信據す可き詳報を得次第御報知します）モスコーでは敗北であるよりも寧ろ勝利であると丈け云へば、目下の狀況を語るに充分。歩兵全部は活動を爲ない。亦コサックも同じ！　騎兵と砲兵が「戰爭出來る」丈けである。革命黨の損害は最小限度でありました。此の事件には全く關係の無い人民――ブルジョア――が恐ろしい犧牲の全部を支拂つたのです。其れは兵隊が唯盲目滅法に發砲し民家を破壞したからであります。其の結果、全ブルジョアが憤激し、革命に投じたのでした。其の爲に勞動者を武裝する軍資金はうんと集りました――革命黨の首領中、モスコーで殺害された者は一人もありません。「社會革命黨」は最初に秘密會議をやつたので仕事がうまく行きませんでした。總ての鬪爭は社會民主黨が指導したのであつた。然し其の一方彼等の計畫には國會を閉設し、選擧を行ふと云ふことがあります。御存じの通り言語同斷な選擧法、其れに加はる選擧が行はれる間、戒嚴命は廢棄されないのです。かゝる狀態の下に、選擧に關與するのは、ブルーギンのデウーマ（註）の時よりも一層自束自縛であると思ふ。處で貴女に申上ねばならぬ事があります。ペーテルスブルクの社會民主黨は選擧に關與す可しと云ふ決議をしました。而して其れは亦馬鹿な人工的な計畫なのです。國民は元來總ての階級が投票權を行はねばならぬものである。（御存じの如く縣では投票者は四つの階級に別れてゐる！）普通選擧（現存はしてゐないが）を基礎にす可きである。且亦上流階級の候補者が選出される、此れはデウーマを代表する爲に選ばれるのでなくして、地方政廳の權力を握らんが爲であります。勝手にするがいゝ、妾はこんな無意味なことを繰返すことは出來ない。其れは、「イスクラ」黨が『レーニン黨』に勝つたのである、其の事を彼等は非常に誇つてゐます。不幸にして妾はペーテルスブルクに行くことが出來ませんでした。其の爲に彼等の勝利を痛擊し得ませんでした。今我々他の「國民」は馬鹿馬鹿しい地位に置かれてゐるのであ

ります。事實此の不自然な計畫を實行すれば滅茶苦茶になつて仕舞ふでせう。何となれば玉石混合の選擧の候補者連中は、我れ先きにと選擧權者の會合所に馳け付けなければならないからです。そんな事をしてゐる內に選擧戰は直接行動による鬪爭になるでしよう。ペーテルスブルクと相提携するにした處で、是れ以外の解決方法を執る事は出來ますまい。我々はそんな無意味な政黨に組する事は不可能である。結局、我々は四層階級戒嚴令續行を前提とした選擧にはかたく關與することは出來ないと思ひます。

（註）ブリーギン。所謂赤き日曜（一九〇五年一月二十二日）の事件が起つた時の大臣。此日敎父ガポンは「水の淸め」を行ふ爲に冬宮前に勞働者の大集團を伴れて行つた。勞働者はガポンの起草した願書を提出せんとしたのである。併しコサックと兵士は此等無垢の行列を虐殺した。

ブリーギンはデウーマ（議會）を作る事を提議したが、其れは啻に顧問的なもので立法權はない。彼の計畫は實現しなかつた。一九〇五年の十月革命が勃發したので總理大臣ウッテは立法權を持つたデウーマを組織した

數週間後に、妾はペーテルスブルグに行くでせう。二月の初め、イスクラ黨とレニン黨は第一回の聯盟政黨會議を開催するでせう。勿論妾は其處に行きたい。此れに關連して獨逸の社會民主黨は此の會議に代表者を送つた方がいゝと妾は思ひます。其れは獨逸黨と革命との關係を一層堅固にする爲めであります。其れは此等の政黨に健全な影響を及ぼし、亦やゝもすれば軋轢を起さうとするのを阻止する効果があるでせう。斯る時局に臨んで獨逸からペーテルスブルクに誰も行かず、亦誰れ一人として露西亞を知らないとしたら、獨逸の執行委員は妾を同時に獨逸を代表さしたらどうでしよう。妾はどのみちペーテルスブルクに往かねばなりません。左樣すれば執行委員を煩はせる費用問題も起りますまい。カルチエン、貴方がこれは良いと思つたら、其れを先發諸君に話して下さい。妾は自分自身で其れを口にするのを好みません。

妾が個人的に其れを望んでゐると云ふ風に彼等に考へられたくないのです。然し貴方なら直ぐ此の問題を持ち出す事が出來ますから出發の日はまだ決定してゐません、其れを前もつて御報知するのは何んでも有りません。

妾は一般の狀勢及び問題に關するパンフレットを綴りました。其れは目下印刷中です。加ふるに獨逸語の週刊雜誌がロズで發行されるでせう。亦トウレード・ユニオンの週刊雜誌も。其故妾は「報知新聞」と其の他のトウレード・ユニオンの機關誌（オーストラリヤ發行）のを待ちあぐんでゐるのです。

妾は自分で希ひ願うてゐる樣に健康ではありません。妾は肉體的にはいさゝか弱つてゐます。併し其れも既に少しは快復しました。妾は一週一回兄弟姉妹に會つてゐます。彼等は其れを非常に不服に思つてゐる。併し仕方がない。貴方がた皆さんは如何おくらしですか？ カロルス、貴方は何を書いてゐますか？ ウルムチエンはどうしてゐます？「前衛」紙はどうですか？ ブロックは未だやつてゐますか？ グランニー其の他の男兄達はどうしてゐますか？ 茲で色々と面倒な事の中で、妾は始終貴方がた皆さんの事を想つてゐます。どうか直ぐ手紙を下さい。何卒皆さんによろしく。

汝のローザ，

日紡の廊下

生田花世

大日本紡績の廊下の午後一時半…。

『疑惑の眼をもつて御覽になられはしませんでせうナ』こんな風にいつた社の幹部らしい人のいやに高い身體が先頭をゆく、それにつゞく女性十二三人。その一人が私だつた。廊下のにには梁に、小さい黑い標示板があつて、『時々お國へお便りを出しませう』とか『努力は信と愛を培ふ』とかと格言づくめだ。日あたりのいい中庭にはよしの櫻の數株が枝をはり、溫かさうなガラス戶内に、休憩の組の女工さんが三四人まるくなつて何か話してゐるのが見える。松操女學校といふのが一部分にあつて、そこでは、縫物をしてゐる組、お講義をきいてゐる組、二三あつた。そんなところを見ると田舍の女學校然としてゐる。寄宿の室はへりなし疊で、八疊敷にこゝで現在ゐるだけの人員の小枕が日光消毒のために七八つ一列にならぶ。壁には雜誌の口繪らしいのが額になつてかかつてゐるし、花もさされてゐる。押入は十何人分、お風呂屋の着物棚式である。炊事場、食堂、何とすばらしく廣いことだらう、ここに千何百人といふ若い女性が一杯になるのだと考へるとヘンな氣がした。さて、いよいよ作業場、それは外壁が練瓦でつくられてゐる。重い鉛色の大扉の中、それまでも聞えてゐたベルトの音響はたとへやうない强烈さでおどりかかつた。私は自分の耳が裂けとんだやうな氣がした。絕間もないこの强烈音の連彈の中で、紺の作業服の工女達が、白い火のやうに狂轉するツム、數列二百本(?)位なのを次へ次へと點檢して整理してゆく。肩も首も胸も綿埃にまみれてゐるではないか。

私はほろほろと淚を頰にながした。私は自分のこの感動への氣弱さをかくすすべをしらなかつた『こたへた』といふのはかういふ時の心持だ。おどろきと悲しみとすまなさとに、私は數痕の落淚を頰にあとづけたままこの近代機械と若い女性との白い火の戰爭を觀た。三年もすれば多くが肺病となるといふ…。この犧牲をどうする!

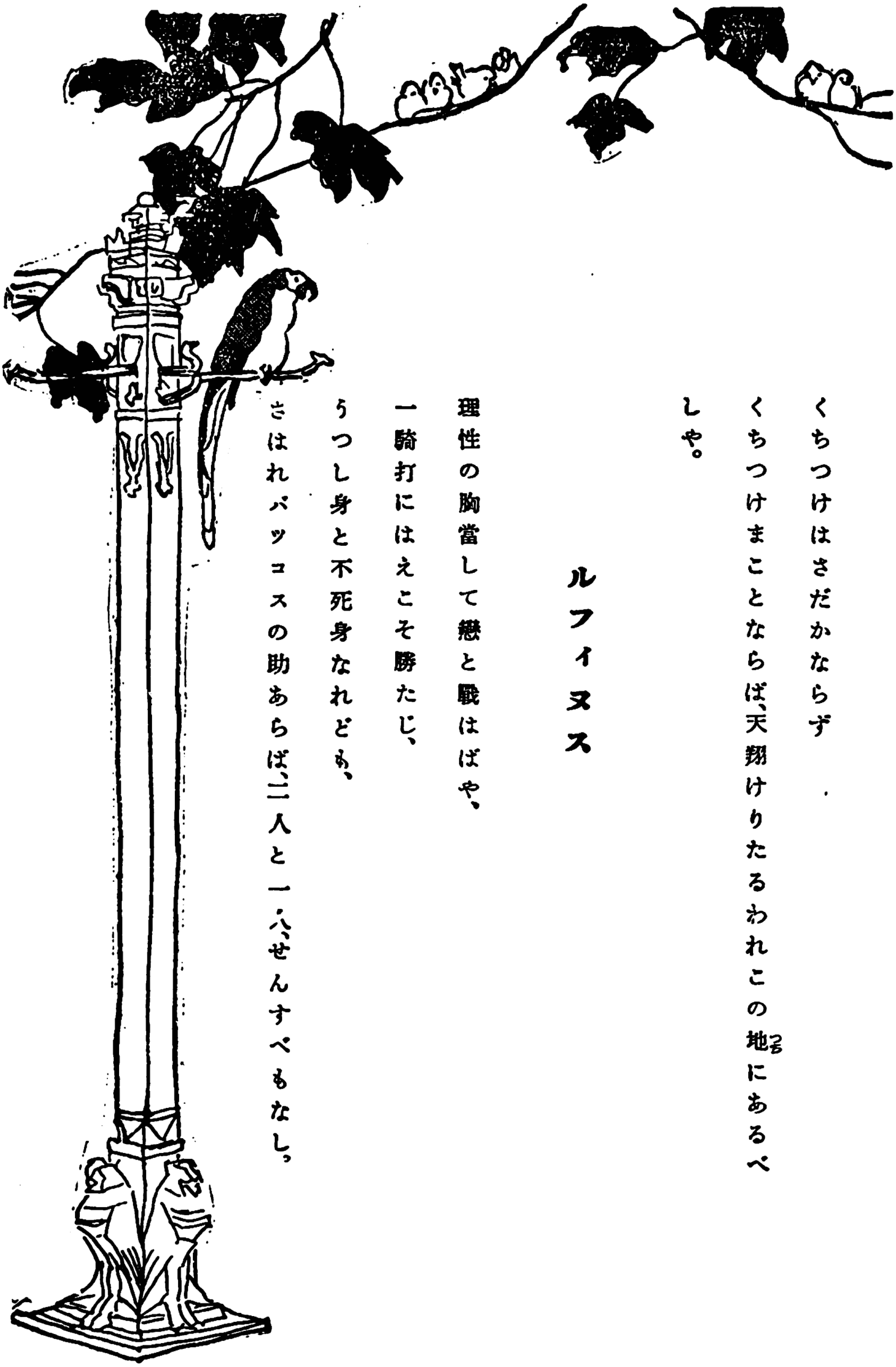


古きギリシアの戀の歌

新墾里子

ストラト

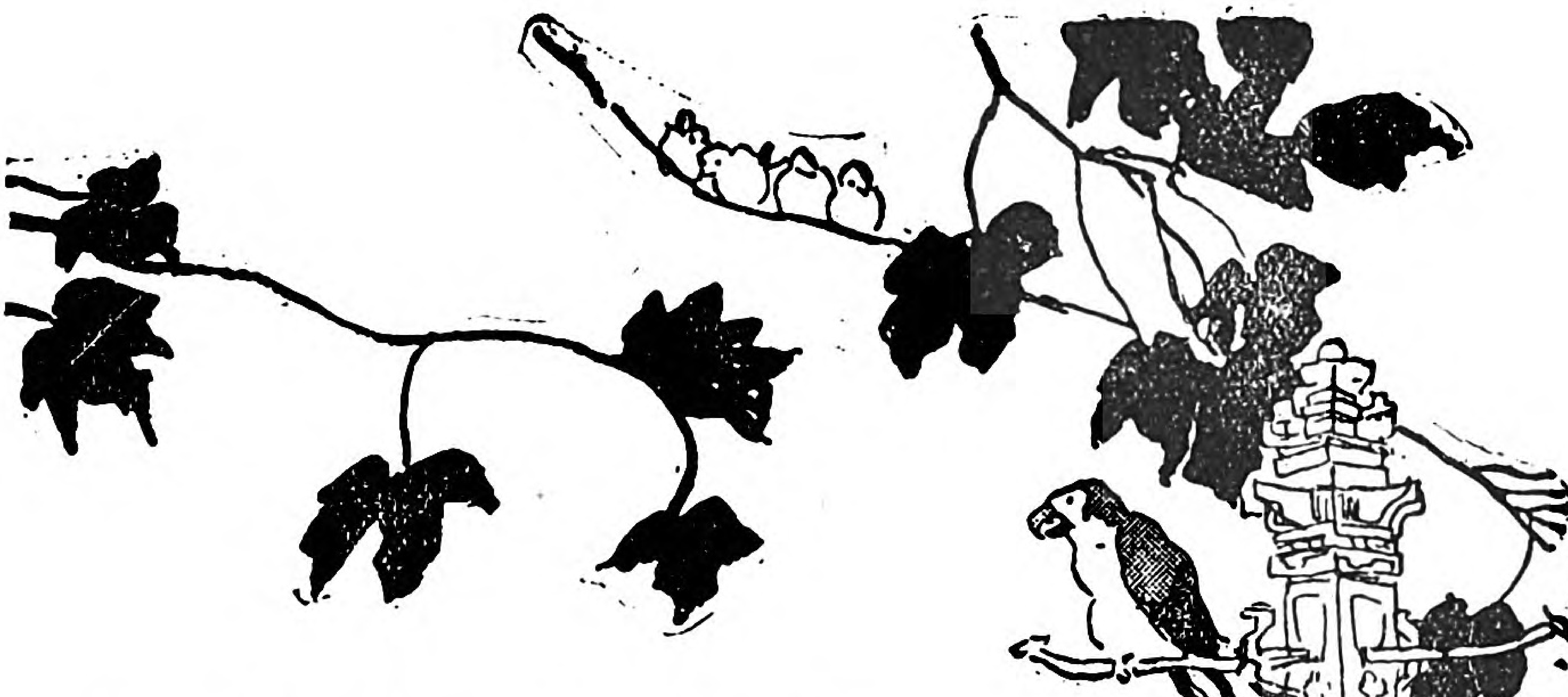
たそがれ、別かれんとしてモエリスくちつけたり
うつつか夢か、知らず
言の葉はこゝろにあり

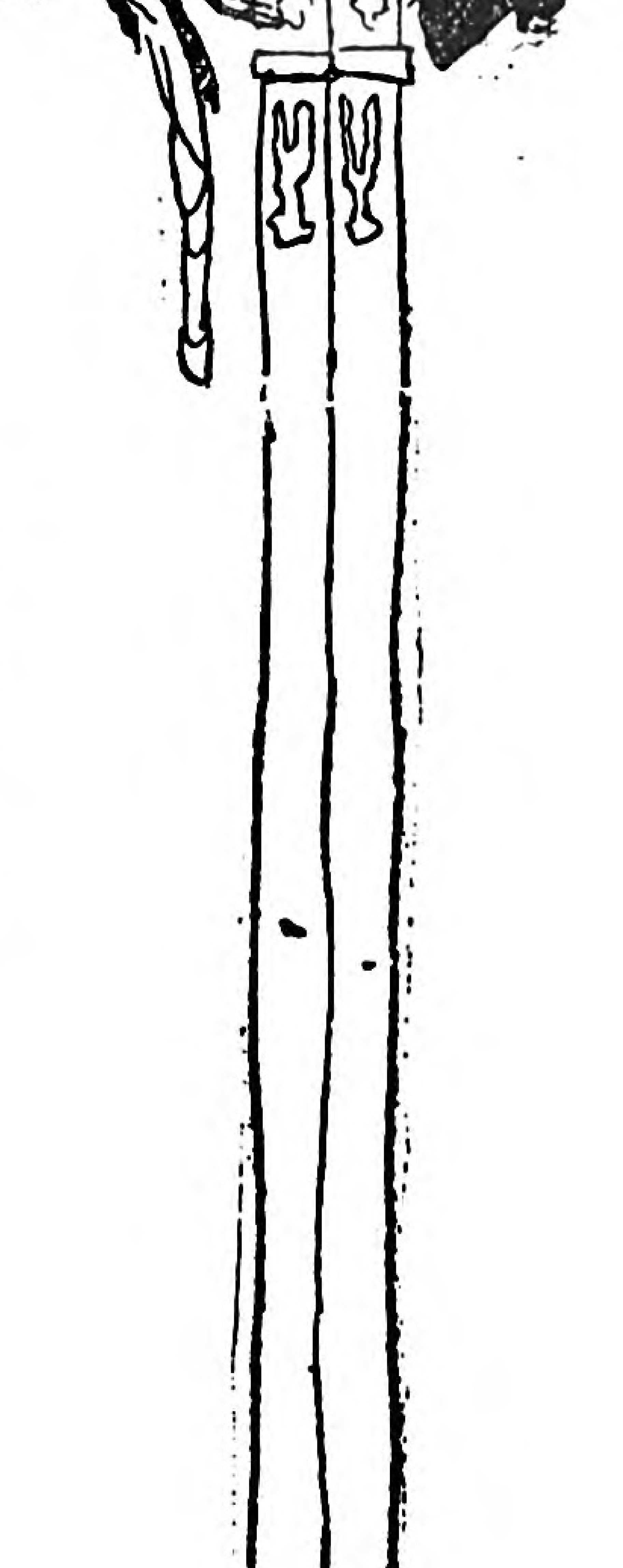


くちつけはさだかならず
くちつけまことならば、天翔けりたるわれこの地(つち)にあるべしや。

ルフィヌス

理性の胸當して戀と戰はばや、
一騎打にはえこそ勝たじ、
うつし身と不死身なれども、
さはれバッコスの助あらば、二人と一人、せんすべもなし。





メレアゲル

白き菫の花をあまん、
妙なる水仙の花をあまん、てんにんぐわの芽とともに
笑ふ百合の花をあまん、うつくしきさふらんの花をあまん、
なほも紅のひやしんすを、戀人の薔薇の花を、
捲毛美はしきヘリオドラの頰に、わが花冠、
その花びらを、めぐし渦なす髮にこぼせと。

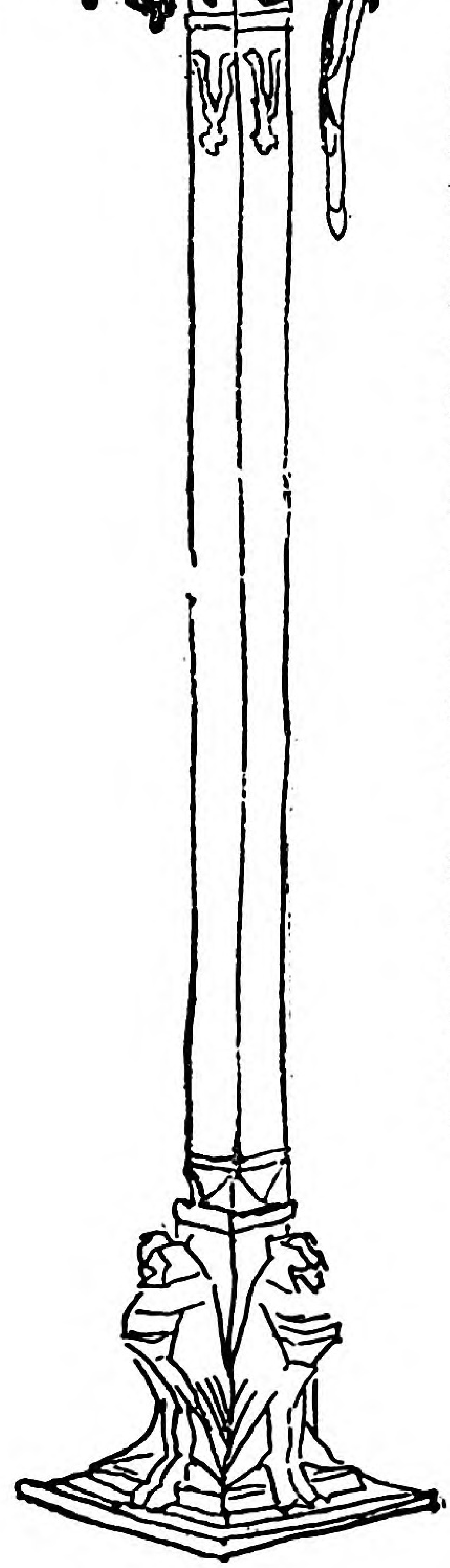


同じ人

花冠ヘトオドラが頭に凋む、
君こそ輝け、花冠の花冠。

同じ人

わが戀は球遊ぶ人、
ヘリオドラ、ときめく心臓(こゝろ)きみに投げん、
いざ交り、持て、熱き情緒(おもひ)、
さはれ君われを放たば、えこそ堪えじ痴愚(をこ)のあそび。





"A Cup of Tea"

（英）カザリン・マンスフヒールド
久保田靜子譯

ローズは嚴密な意味で、美人ではなかつた。可愛いゝとは云へるかも知れない。それも一つ顔(かほ)容(かたち)を穿鑿(せんさく)したならば…。だが人の顔を解剖して見るなんて、そんな殘酷なことは出來やしない。

兎に角、彼女は若々しくつて、潑溂としてゐた。いつも氣どつた服裝をし、至つての新しがりやで、新刊に通曉してゐることも驚くばかりだ。彼女の交際社會は、實際的な方面から、藝術的な方面にまで及んでゐた。この藝術的方面といふのが、奇怪な人々で、中には、手に負へないものも居たが、大體愉快な面白い連中であつた。

ローズは二年前に結婚した。そして丁度家鴨(あひる)のやうな男の兒があつた。それが又ありふれたピーターぢやなくてマイケルと云ふのだ。夫は彼女に絶對的な崇敬を捧げてゐた。彼等は金持だつた。何不自由ないなんて程度のものではなかつた。買物には、我々が、ボンド街に行くやうに、彼女は巴里まで出かけた。花を買ふ時も、ルウジャン街の一流の花屋の前に馬車を止めた。店へ入ると、きまつて眩しそうに、エキゾティクな眼つきをした。

「わたし、これとこれと、これとこれとが欲しいわ。これを四束。それから、あの壺の薔薇も。さうね。その中の、みんな頂戴。いゝえ、ライラックぢやないの。わたし、それは大嫌い、なぜつて、はつきりした形つてないんですもの。」

店員は、御尤つともで御座いますと云はぬ計りに頭をさげて、ライラックを見えないところ

やつた。
「それから、そこの太いチューリップを下さい。その赤いのと白いのを。」
　痩せたショップ・ガールは、長い着物を着た赤ん坊のやうなパラフィン紙を胸一杯に抱えて、足もとに氣をくばりながら、馬車までついて行つた。
　或る冬の日の夕方であつた。
　彼女はキュルゾン街の小さな骨董屋で買物をしてゐた。そこは彼女の氣に入りの店だつた。第一、この店は、いつ行つても大抵他に客がゐなかつたしその上、主人が馬鹿〳〵しい程、丁重に彼女をもてなした。彼女が店へ這入ると、主人はきまつて顔を晴れやかにした。そして揉手をしながら、口が利けない程恐縮して出て來た。勿論、お世辭もあつたが、それには、他の何かゞ……。
「はい、奥さま、彼は例の低い恭しい調子で云ふのだつた。
「手前共は、店の品物には、なかなかの愛着がございまして、いくらお金を頂戴しましたところで、充分な鑑賞眼を持つてゐらつしやらないお客さまには、手離したくございませんで。それにその、デリケートな感情つてのをお持ちの方は、まあ、極々稀でございまして。」
　彼はちよつと、深く呼吸をついてから、碧い天鵞絨の小函を蒼白い指先で、硝子のカウンターの上に据ゑた。
　それは　四角い小函で、この店の主人は、彼女のために取つておいたのだ。彼はまだ誰にもそれを見せてゐなかつた。精巧なエナメル細工の函で、クリームを塗つたやうな光澤があつた。蓋には、小さな人物が、花の咲きさかつた樹の下に立つてゐた。それより一段と小さい女が、その人物の頸に兩手を卷きつけてゐた。その女の帽子は枝にかゝつたゼラニウムの花瓣位しかない大きさで、緑のリボンがついてゐた。二人の頭の上には、護りの天使のやうにピンクの雲が浮いてゐた。
　ローズは長い手袋を脱いだ。かういふものを見るとき、それは、いつ　することであつた。彼女はそれがひどく氣に入つた。さも愛玩に耐えないやうに、しげしげと見入つてゐた。そして、蓋を閉ぢたり、開けたり、又は裏返してみたりした。彼女はその碧い天鵞絨の上に鮮やかに浮き出た自分の白い指の美しさに、うつとりと見とれた。心の、暗い洞窟のなかで、店の主人も同じことを思つたに違ひなかつた。彼は鉛筆を手にして、カウンターに凭りかゝると、蒼白く、血の氣のない五本の指を、おづ〳〵と薔薇色の閃めかしい指の方へ辷らした。それから聲を落してから呟やいた。
「こちらから申し上げますのも何んでございますが、この人物の上衣についた花が、まあ、値打と云ふものでございませう。」
　ローズは心からその花を褒めた。
「値段はおいくら？」
　主人は暫く聞えなかつた樣子をしてゐたが、やがて低い聲で、
「二十八ギニーに致しませう。奥さま。」
「二十八ギニー。」がローズは、格別、愕いた風は見せなかつた。小函を下に置くと、手袋の釦をとめた。二十八ギニー。……いくら金持だつて……。
　ローズは、一寸氣抜けしたやうに、主人の頭越しに、肥えた牝雞

の格好をした茶釜に眼をやつてゐた。それから夢のやうな聲で、

「では、これを、わたしにとつておいて頂戴。わたし‥‥。」と云ひかけると、主人は頭を幾度も下げた。もちろん、彼女のためなら、いつまでだつて、喜んでとつておく氣に違ひなかつた。

用心深く扉が、カチッと閉まつた。彼女は石段に立つて、黄昏の冬空を見上げた。霙が降つてゐた、霙と共に、夕闇が濃く迫つて來た。空氣は冷え〴〵と苦味を含んでゐた。今しがたついたばかりの瓦斯燈が、あつちこつちに悲しんでゐた。それは何にか悔恨してゐるやうだつた。行人は氣持の悪い洋傘にかくれて、足早に通り過ぎた。ローズは怪しく、胸の痛むのを感じて、マッフをぎゆつと胸に抑しあてた。彼女は、さい前の小函を抱きしめたい氣持だつた。勿論のこと、馬車は向ふに待つてゐた。只補道を横切りさへすればよかつた。それだのに彼女はまだそこに立つてゐた。

人の一生には危ない瞬間があるものだ。人は、それに負けてはいけない。こんなときは先づ家庭へ歸つて、上等のお茶を一杯、飲むに限るものだ。

さう考へた途端、彼女は肱とすれ〴〵に、溜息に似た、啜り泣きのやうな聲をきいた。

「奥さま、お願ひでございます。」

「え?」

ローズは驚いて聲のした方へ向いた。そこにはみすぼらしく痩せた、色の淺黑い、影のやうな女が——何處から來たのだらう——恐ろしい眼付きをした若い女が、ちよかんだ赤い手で、上衣の襟元を制へながら、水の中から出て來た人のやうに、ぶるぶる慄えてゐた。

「お、奥さま。」女は吃つた。

「お茶を一杯だけのお金を恵ぐんでやつて下さい。」その聲には素朴な眞實さが籠つてゐた。

「お茶を一杯ですつて、ぢやあお金がないの?。」

「えゝ。‥‥」

何て素晴らしいことなんだらう。ローズは暗がりを透してのぞきこんだ。少女も彼女の方を見返した。これは素晴らしさ以上だ! ローズはふと何かしらそれが冒險のやうに思へた。薄闇のなかのこうした邂逅。それはドストエフスキーの小説にでも、ありさうだ。この娘を家へ連れて行つたら? 小説で讀んだり、芝居で見たりしたことなんだけれど、ほんとだつたらどんなか知ら? きつと、ぞつとする程素晴らしいに違ひない。彼女は傍のみすぼらしい娘に云つた。

「ぢや宅へ行きませう? ね、行かない! 一緒にお茶を飲むから。」

少女は驚いて一足あとへ退がつた。少しの間、彼女は寒さの慄ひさへ止まつた。ローズは手を少女の腕の方にのばした。

「ね、さうしませうよ」彼女は笑い乍ら云つた。自分でも、その笑ひが單純で、優しさの籠つてゐるのを感じてゐた。

「どうして厭なの? ね。わたしの馬車でうちまで行きませう。」

「貴女は——貴女はきつとそうなさるおつもりぢやないんだわ。」少女の聲は不安がみちてゐた。

「いゝえ。ほんとよ。わたしさうして貰ひたいの。お願ひだから。

さあ、行きませう。」
少女は指を唇にあてゝ、貪(むさぼ)るやうにローズの顔を凝視(みつ)めた。
「貴女は――貴女は妾を交番へ連れて行かうつておつしやるのでせう。」
「交番ですつて。」
ローズは大聲に笑つた。
「まあ、どうしてそんな酷(ひど)いことがわたしに出來ると思つて？　わたしはね、たゞあなたを温かにしてあげたいの。それからあなたの身上話をきゝたいの。あなたが話して下さることなら何でも。」
飢えたるものは導かれ易いものだ。馭車は馬車の扉を開けた。一瞬間のうち、彼女等は薄闇の中を辷つてゐた。天鵞絨(ビロード)の吊り革に手をとほしながら、ローズは勝ち誇つた氣持だつた。自分の網にかゝつた小さな獲物をみながら、「さあわたしはお前さんを捕へたんだよ」と心のなかで呟やくのであつた。しかし、勿論、それは親切の心からではあつた。いや、恐らく親切以上のものだつた。彼女は少女に次のやうなことを知らせたかつたのだ。――人生にも奇蹟があること、お伽噺の優しい女神が實在すること、金持にもやさしい心のあること、女性同志はみんな姉妹だといふことを――。彼女は衝動的に向き直つてから云つた。
「怖がるんぢやありません。私と一緒に行くことを。だつて、わたし等は女同志なんですもの。ですからわたしの方があなたより幸福だつたらあなたは當然私から‥‥。」
かう云ひかけたものゝ、その句をどう結んだらよいかと迷つて居たとき家の前に馬車はとまつた。呼鈴が鳴つてドアが開いた。やさしく勞はるやうなものごしで、ローズは少女を廣間(ホール)へ導いた。あたゝかさ、ものやはらかさ、明るさ、快い香り、すべてそれは彼女は別に氣にもしなかつた。が實際それは恍惚とするほどの光景だつた。そしてその中に立つてゐる彼女は、開けたまゝの戸棚や、ひろげられた小函の一杯散らばつた子供部屋の金持の幼いお孃さんにそつくりだつた。
「さあ、お二階の方へ。」彼女は寛大な調子で云つた。『さあ、いらつしやいな、わたしのお部屋へ。」
彼女はみすぼらしい少女を召使ひ達に見せまいと、女中のジャンヌを呼ばないで、身のまわりのものを自分で片付けた。
二人は美しく飾つた廣い寢室へ入つた。
カーテンが垂れてゐた。ランプの光が、珍らしい漆塗りの調度や山吹色のクッションや櫻草色と紺碧の絨毯の上に眩しく躍つてゐた。少女は這入つたところに呆んやりと立つてゐた。ローズはそんなことはおかまいなく、大きい椅子を煖爐の側へ引いていつた。
「これへお掛けなさい。さあ、こちらへ來て温まりなさいな。あなた大變寒むさうに見えるわね。」
「妾、とても――奥樣。」少女はじり〳〵後退りした。
「ね、さあ、怖がつちや駄目よ。ほんとに怖はがつちや駄目。お掛けなさいつてば、わたし着物を更へてから、隣りの部屋で、ゆつくりお茶を頂きませう――ね。何んだつて、そう固くなつてるの？」
彼女は痩せすぎな少女の體をむりやりに安樂椅子の中へ坐らせた。少女は、何とも答へないで、押し込まれたまゝ、そこにぢつとしてゐた。二つの手をきちんと兩脇に置いて、口をちよつと開けて

ゐた。實のところ、彼女はいくらか間抜けて見えた。けれどローズはそれに頓着なく、少女の上に顔をかゞめて云つた。
「あんた、帽子をとらない？　奇麗な髪がすつかり濡れてるわ。帽子をとつた方が氣持よくない？」
　少女はかすかに何か呟いた。それは「ええ、奥樣」といふらしかつた。そして、ひしやげた帽子をとつた。
「ついでに上衣も脱がない？　手傳つて上げるから。」
　少女は立上つた。
しかし、彼女は片手で椅子につかまつたまゝ、ローズが上衣を引つぱるにまかせてゐた。實際それは力を要した。少女には、自分で脱がうといふ氣が少しもなかつた。袖を引ぱる度に子供みたいに左右によろめいた。どんなに爲てあげやうつたつて、向ふがその氣にならなくちやだめだわ、ローズは腹の中でそう思つた。
　さて、ローズはこのづぶ濡れの上衣をどうすればよかつたのか。結局彼女は床の上にひしやげた帽子と一緒にそれを推ねた。それから、手を伸ばして、煖爐の棚の煙草をとらうとした。そのとき少女は早口に云つた。
「妾、氣が遠くなりさうだわ、何か頂かなくつちやあ。」それは弱々しい、しかも異樣な響を持つてゐた。「おや、おや、ほんとに、うつかりしてたわね。」
　ローズは呼鈴（ベル）を押した。
「お茶よ、お茶を早く、それにブランデーを少し、大急ぎでね。」
　女中が行つてしまふと少女は叫ぶやうな聲で
「いゝえ、奥樣、ブランデーなんか欲しくありません。あたしお茶を早くほしいのです。」
　さういつて少女は泣き出した。
「泣かないでね。まあ可哀さうに。泣くのはおよしなさいよ、ね。」
　ローズは少女にレースの手巾をやつた。不意に彼女は云ひ現はしやうのない、いぢらしさを感じて、痩せた小鳥のやうな肩をそつと抱きすくめた。
　この時、ついに少女は羞恥を忘れた。二人が同じ女性だといふことより、何も考へられなかつた。彼女は喘ぐやうに吐き出した。
「あたし、困つてしまひますわ。どうか、このまゝで構はないで下さい。本當にこれ以上たまらないわ。」
「そんなこと云はなくたつて、私し貴女を見てあげるわ。もう泣かないでね。あなた、私と逢つてよかつたと思はないこと？　お茶をのみながら、どんなことでもお話しなさいね。良いやうにしてあげませう。そりや、きつとして上げるわ。さあ、もう泣くのはおよしなさい。後生だから。」
　お茶が運ばれて來て、ローズが立ち上つた時、少女はやつと泣き止んだ。二人の間に卓子が持ち出されてローズは、哀れな少女にあるだけの御馳走を強いた。サンドウイッチにバタとパン、それから少女のコップが空になるたびに、彼女はお茶とクリームと砂糖を入れてやつた。砂糖は大變滋養になるつて聞いてたけど、ローズはそれが嫌ひだつた。煙草を吹かしたり、如才なくして相手を恥かしがらせないやうに氣を配（くば）つた。
實際、御馳走の効目は覿面（てきめん）に現はれた。食卓が片づけられてしま

ふと、縺れた髪、黒澄だ唇、凹んだ眼をしたこの痩せた客は快い倦怠に浸つて、安樂椅子によつたまゝ、煖爐の火をみつめてゐた。
ローズはもう一本煙草に火をつけた。
「いつ食事をしたきりなの？」彼女はやさしく聞いた。
丁度その時、扉のハンドルがまわつた。
「ローズ、這入つてもいゝかい、」夫のフイリップだつた。
「えゝ、いゝですとも。」彼は這入つて來た。
「や、これはどうも。」彼は立どまつて眼をみはつた。
「何でもないことよ。」ローズは笑つた。「此の方、私の友達のミス・——」
「ス、スつて申します。奥様。」
薄汚ない娘は云つた。彼女は變に落ちついて、ものをじた様子はなかつた。
「ああ、スミスさんよ。今二人でお話しようとしてゐたところなの。」
「あゝ、そうかね」フイリップは床の上に推ねられた薄汚ない上衣と帽子を見た。それから火端へ行つてそれに脊を向けて立つた。
「いやなお天氣だな。」
彼は意味ありげにさういつて、ものうげな少女を見た。その手から靴、それから再びローズの方に眼を向けた。
「ほんとに、厭なお天氣ね。」
フィリップは例の魅力ある笑ひを洩らした。
「實は、ちよつと書齋へ行つて貰ひたいんだが。何う？　スミスさんに悪くないかね。」

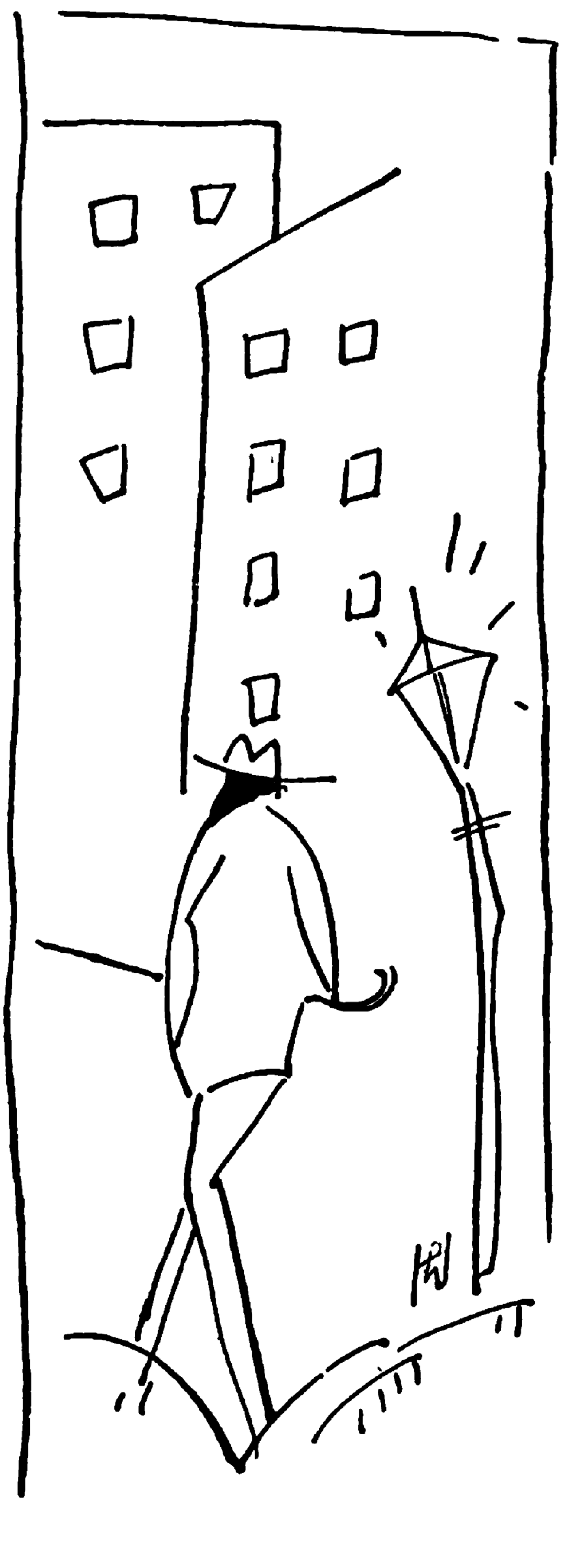
少女は大きい眼を彼に向けた。
彼女に代つて、ローズが答へた。
「そりや、無論、いゝわね。」二人は一緒に室を出て行つた。
二人きりになるのを待つてフイリップは口を切つた。
「お前、あれ、何うしたんだい？」「一體、どうしたつて云ふんだ？」
ローズは書齋のドアにより掛つたまゝ笑つた。
「わたし、あの娘をキュルブンの通りで拾つたの。ほんとに拾ひものよ。お茶一杯のお金を頂戴つていふので、それで、わたし連れて來たのよ。」
「だつてお前、あんな娘を何うするつもりなんだ。」
「優しくしてやりませうよ。ね、ほんとにやさしくしてやりませうよ。大事にしてやるんだわ。何う云ふ風につて分らないけれど、まだ二人は何んにも話してゐないの。」
「可愛いゝお孃さん！　お前すつかりどうかしてゐるね。そんなこと、ほんとに出來やしないよ。」
「わたし、あなたがさう仰有るだらうと思つてゐたの。何うして出來ないつて云ふの、わたしして見るわ。さうすることが道理ぢやなくつて？　それに、そうしたことは本でよく讀んでたんでせう。あたし、ちやんと決心したわ。」
「然し……」フィリップは徐ろに云ひ出した。彼は煙草の先をちぎつた。「あれは、素的な美人ぢやないか。」
「美人ですつて。」ローズは愕きのあまり顔を赧らめた。
「貴方、ほんとにそうお思ひになるの、わたし、——わたし、そうは思はなかつたわ、」

「ところがお前、」フィリップは燐寸（マッチ）を擦つた。
「あれは素張らしいもんだぜ。まあよく見てごらん。さつき、あの室へ入つたとき、俺は一目でふらふらつとしたね。何んにしてもあの女を連れて來たのはお前の失敗だつたよ、お前、何だよ、俺が若し悪い男だつたら、それまでぢやないか。それはそうとちよつとこゝで新聞を見て行くから、今夜はスミスさんと一緒に夕食を食べたいんだがね。」
「あら！　いやなこと、この人つたら。」ローズは書齋をとび出した。寢室には戻らずに、自分の書齋にはいつてテーブルの前に腰を下ろした。
美人？　素敵な美人だつて！　ふらつとしたつて！　彼女の心臓は重い鐘（ベル）のやうに打つた。美人だつて！　素敵な美人だつて！
彼女はいきなりそばにあつた小切手帖を手もとへ引寄せた。だがもとより小切手など用はなかつた。ひきだしを開けて一圓紙幣五枚を出した。暫くそれをみつめてゐたが、やがて二枚をもとへ戻して、殘りを片手に掴んだまゝ、寢室へ行つた。
三十分の後、夫のフイリップはまだ書齋にゐた。そこへローズがやつて來た。
「わたし、お話があつて來たの。」彼女は前の時のやうにドアに脊を凭せかけたまゝ、眩しげに、エキゾテイクな視線を夫に投げた。
「スミスさんね、今夜、あたし達と一緒に御飯召上りたくないんですつて。」
フイリップは新聞を下においた。
「そりや又たどうして？　何か先約でもあるのかね？」
ローズは側へ來て彼の膝に腰かけた。
「何うしても歸るつて云ひ張るの、それで可哀さうだから、お金をやつたわ、いやがるのを無理に止めるなんて出來ないでせう。」
ローズは髪を結びかへ、眉を引いて、耳飾りもつけかへてゐた。彼女は兩手でフイリップの頬を撫でながら、
「貴方、あたしお好き？」
その甘い、かすれた聲に、男はまごついた。
「そりや、勿論さ。」さう云つて彼は女を抱いてゐる腕を強めた。
「さあキスおし。」
それから暫く沈黙がつゞいた。
やがてローズは現（うつゝ）のやうに云つた。
「あたし、今日それは〳〵綺麗な函をみたのよ、二十八ギニ！ですつて買つてもいゝ？」
フイリップは膝の上で女を搖すつた。「あゝいゝとも。可愛い浪費屋（むだづかひや）さん」
しかし、ローズの本當に言ひたかつたことはそのことではなかつた。
「あなた」彼女は囁くやうに呼んだ。そして男の頭を胸に押當てたまゝ、
「妾し、美人ぢやなくつて？」

踊り女の二つの面

（佛）フィリップ・スウポオ

林壽枝子譯



かつて私はパリで一人の黒人女に逢つた。

彼女の事は悲しみなしでは思ひだせない。彼女は數年前に死んだ。酒を飲み過ぎたからに違ひない。彼女は、あの素晴らしい、けれど、その價値を殆ど認められなかつたシンコペテッド・オーケストラの一員だつた。ミリイ。黒人女の名である。彼女はトロンボンを受持つてゐた。

この奇妙な樂器に息を吹き込むまへに、彼女は微笑みたくなるのだつた。それは確かに自分に勇氣を與へるためだらう。ミリイが人に知られたのは彼女の技倆や、彼女がアルコールを飲むためばかりではない。多分彼女の陽氣さのために注意されたのだ。彼女は笑つた。人が息するやうに、――と形容してもいゝだらう。

私は度々彼女にテンポ・クラブで行き逢ふことがあつた。今は無いがテンポ・クラブは黒人侵入時代と言はれた時の黒人音樂家達の集り場所であつた。

或る晩、定刻――皆が集るのは眞夜中にきまつてゐた。――より前に私はクラブへ出かけて行つた。宵の間中歩き廻つて疲れてゐた私は、黒人の友人らがやつて來る前に休息できるだらうと思つたからである。クラブにはたつた一つのランプしかともされてなかつた。私は殆ど手探りで

一隅に座つてシガレツトに火をつけた。

すると中段(バリエ)から女の歌ふ聲が聞えて來た。誰れかゞ戸を開ける。ミリイが踊り込んで來たのである。

彼女は私に氣がつかなかつた。

彼女は足を爪だてて踊りの身がまへをしたかと思ふと、急に止めて躊躇してゐるやうだつた。がとう〳〵何か合圖をうけたやうに、くる〳〵まはつたり、脚を空中に投げ上げたり、腕を動かしたりし始めた。

彼女の踊りには少しも野蠻なところがなかつた。自然だつた。彼女は樂しみのために踊つた。彼女の喜びは熱狂的だつた。彼女は人が歌ひ口笛を吹くやうに踊つた。

彼女は踊り續けてゐた。私は彼女が踊つてゐる瞬間は全く彼女自身の表れなのだと思つた。彼女がそれを意識してゐたか、ゐなかつたかはわからない。たゞ彼女の體は彼女の魂の一部、告白だつた。彼女が語る懺悔だつた。

私はこの踊りを嘆美してゐるとは言はれない。何故なら、その踊りは大層行儀のわるいものだつたから。それは彼女自身から解放されてゐるやうだつた。

人が來なかつたら多分彼女は何時までも踊りつゞけてゐたゞらう。が、誰れかゞ戸を叩いたので彼女は踊りを止めた。そこで彼女が戸を開くと、訪問者たちが愉快げに挨拶した。

「ミリイ、ミリイ、お前はまた踊つてゐたんだね。息が苦し相ぢやないか。」

と一人が言つた。

私はその言葉で、ミリイが何時も自分自身の爲めに踊るのだといふことを知つた。私はおそくまで續くその夜會の間に一つの驚くべき事を始めて知つた。

私達はコニヤツクを飲んで、しまひには騒ぐ勇氣もなかつた。一人一人だまつてしまふ。すると突然、さつきミリイに踊を止めさせた一人が醉つ拂ひらしく亂暴に

「ミリイ、さあ踊つてくれ」と命じた。

ミリイも大分酒を飲んでゐたので、つんとして、すぐとはそれに應じなかつた。けれどこんな場所ではそんな我儘は許されない。

一人の樂手がピアノに向つたので、若い女は顔に白粉をはくと踊りはじめた。

私の驚いたことは、彼女が最早や前の彼女と同じでないことだつた。

ミリイを變らしてしまつたのは、酒でも夜でも、音樂でもない。勿論友人たちの注視のためでもない。人々は彼女の樣子を微笑んで幸福げに眺めてゐた。そして今にも拍手をあびせようとしてゐた。

ミリイは最早や前の彼女ではなかつた。人々を喜ばそうとしてゐたからである。彼女の才を輝やかさう、賞讃させようと望んでゐたからであらう。彼女は自分自身の事を少しも考へなかつた。他の人の事も考へなかつた。それでゐて彼女は自分自身に打ち込むことも出來なかつた。

けれど人々はほめた。彼女は滿足した。然し彼女のこの別の面を見て裏切られたように思つたのは私一人だつたらう。そして私はもう一人のちがふ女の事を思ひ出してゐた。鏡の前で踊つたり、賞讃をあてにして踊つたりしない、力一杯踊る、喜びの神祕の前にのみ踊るあの不思議な女を思ひ出してゐた。

さて私は長い間あの踊り女のこの二つの面に就て忘れてゐた。ところがミリイが死んだ。然し私は彼女の死の知らせを受取つても、彼女が踊つたあの二つの場面を思ひだすことが出來なかつた。がそれと同じような一つの出來事がミリイの面影を私の記憶にはつきりと蘇へらした。

私は數年前ほんの數時間をアレゾオで過したことがある。私は街を見物してゐた。イタリーの旅行者がそうであるように、私も博物館や寺院をあまり見物し過ぎたのですつかり疲れてゐた。

その時、私は薄闇の小路に、手風琴の生々とした異様な曲を聞いた。近づいてみると境界石の上に多分十二位だらう。一人の小さい音樂家が座つてゐた。彼はたつた二人の子供の前で力一杯奏でてゐた。そのだらしのない歩き方やものうげな態度で彼等が乞食だといふのがわかる。彼は練習してゐるやうだつた。數度ひいた後に、彼は心の奥に與へられた合圖に從ふように樂器から驚くべき純粹さを以つてある音をひきだした。少年は意識してかしないでか、オルガンを眞似しようとしてゐるようだつた。少くも私にはそう思はれた。けれどイタリヤ人の與へる印象には仲々信用が置けない。

彼は自分の奏でてゐる姿を見守つてゐる見張番に氣付くと急に止めてしまつた。そして仲間を誘ふと、憲兵奴が近づいたとでもいふように逃げだした。

ホテルへ歸るには廣場をよこぎらねばならなかつた。そこはアレゾオの散歩場である。人だかりがしてゐた。私はパリ人らしく物好きに飛び込んでいつた。例の小さな音樂家と仲間が人を集めようと努力してゐた。兵隊や若い娘たちが喜ぶ、古いきまり文句を連發してゐた。彼のすばらしい技術には感心せずにはゐられなかつたけれど、私は五分前に聞いた彼自身のために奏でてゐたものとのちがひに驚かざるを得なかつた。そして私は又彼の別の面を見た。彼はイタリーのすべての古い手法で奏でてゐた。

その時私はミリイのしぐさを急に思ひだした。人を引きつけようとしたり、喜ばそうとする時、これらの世に顧られぬ二人に起つた恐い變化！

音樂はダンスより墮落の危險性が少いやうである。音樂はすべての場合に神祕性を保つてゐるから。ところがダンスに於ては、假面や咀文やその他幻惑を常にすてなければならない。然し、だからと云つてダンスは他の藝術より不純であつていゝといふわけではない。そこにこそ、ダンスの弱さがあると同時に最も高い値うちがあるのである。

踊り女ミリイは、小さな音樂家より秀でてゐて、より卑俗な方法で見物人を滿足させた。

さて私が二人の二つの面に就て繰返して述べた事は無駄ではないと思ふ。數世紀來藝術は存在理由の大部分のみならず、その深い眞理を失つてしまつた。しかしながら藝術の一部門である舞踊は、今私のこの提言を立派に裏書してくれる。



ドイツ文學と乙女

（獨）C・F・チェロムスキー
板垣直子譯

„Halbwuchsige Mädchen im Spiegel deutscher Dichtung" von Charlotte von Zeromski.

ドイツの近代及それ以前の作家の眼に、成育半ばにある乙女達が如何に映じたか、と云ふ事を簡單に瞥見するのが、此短いスケッチの役目である。兒童心理學が學と成つた前世紀の終り頃に始めて、子供の靴を脱ぎ捨てた若い者達が、各ゝ個性を具へて、文學の上にも亦、より多く姿を現はす樣に成つた。そして彼等の描寫は、時代精神や流行の潮流の影響を受けた。

先づ我々は、比較的古い時分の作品に出て來るお轉婆娘から過ぎ樣。此頃のものとしては、先づアンネッテ・ドロステ・ヒュルホフの詩「十四の心」„Das Vierzehnjärige Herz" に出て來る、父親を禮讃する小さなバルベが居る。又シュトルムの小説「森の歡喜と水の歡喜との爲に」„Zur Wald=und Wasserfreude" の中の、内氣で粗い所のあるケッテイが居り、同じくシュトルムの美くしい詩「さればこそ、夜すがら鶯鳴きにけり」„Das macht, die Nachtigall die Ganze Nacht Geseugen" には、生々と芽生へる乙女が居る。「私は綠衣のハインリヒ」„Grüne Heinrich" の中の、優しいアンナを思出し、又マリー・フォン・エブナーエッシエンバッが我々に紹介した「貧しき娘」„arme Kleine" の事も思出す。此娘は己の善良な心のお蔭で、一般の惡習に陷る危險を克服する。幸福で元氣で健全な若い娘の例は、ヘレネ・ベーラウが「顧問官の娘の話」„Ratsmädelgeschichten の中に、過去から呼起して描いた二人の顧問官の娘達と、顧問官の一方の娘の孫娘である事を容易に認めさせる「イゼビス」„Isebis" とである。——

十八世紀には自然主義の波動が、娘達の世界にも氾濫し始めた。無邪氣な娘達は影を潛め、娘達の描寫には問題を負はされる樣に成つた。此間の消息は次の如くである。ウイルヘルム・フォン・ポーレンツは

ロマンスの「テクラ・リュデキント」„Thekla Lüdekind“の中で、當時の一般の子女教育の因襲を明らかにし、又春機發動期に於ける肉體變化の精神生活に與へる影響を解明して、多くの教育者を搖り起した。ゲルハルト・ハウプトマンの痛ましい悲劇「ハンネレの昇天」„Hanneles Himmelfahrt“は、暴力と生活の急迫との名に斃れる一人の保護されざる若き魂の殉教的最後に對して、感動と同情とを喚起する文學の中の最初の作品であつた。ハンネレの思ひ煩ふ小さい魂は、熱に浮かされた夢に於てのみ開かれ、そして初戀の興奮に影響された幸福な空想に、現實の恐怖を超へて、高く跳る。彼女の親切な教師は、彼女の戀人に變ゝ、救世主に淨化する。夢は「憐れなハインリヒ」„Arme Heinrich“の中の、オッテゲーベの魂も示して呉れる。喜んで死を求める彼女の敬虔な歸依は、實は不治の病に惱む伯爵に對して、彼女が始めて漸次に意識して行つた官能的な戀である。「キリストと自稱する馬鹿者」„Narr in Christo“のルートも亦、上に擧げた夢遊病的な若い人々の一團に屬してゐる。彼女は下の如く云はれてゐる「斯の如く彼女は、芽の出で、花の開くかの危險な青春時代を暮した。そしてすべて香りを放つもの、優しく花咲くものが、氷と焔、樂園の歡喜、荒れすさぶ嵐を驟霰に、交ゝ對立する様は信じ難い程である」。マックス・ドライヤーの「叔父ペーター」„Ohm Peter“の中のエレンも亦、同じ特徴を示してゐる。エレンは氣の若い叔父を信憑すべき人生の說明者であると考へた。ヴェデキントは醱酵し易い青春時代を、全く戀愛の探照燈の光に照らして描き、此點で多くの模倣者を出した。「春の目醒め」„Frühlingserwachen“に於けるヴェンドラは、盲目的に彼女の破滅を手探る。何となれば彼女の母親は、ヴェンドラが自身の心や環境に感んずる彼女を苦しめるあらゆる神秘に就いて、ヴェンドラに公明正大な解釋を與へる事が出來なかつたからである。又ヴェンドラの女友のマルタは、無邪氣に裝飾を喜ぶ心から、襦袢の衿に空色のリボンをつけるので、兩親から虐められる。かくてマルタも亦、罰せられるべき輕卒と、官能的墮落と云ふ、ヴェンドラと同様な特徴を示してゐる。「頭髮を金色にさせて、優しく、お人善しに僞つてゐる、此善良な、老お轉婆娘は、青春の過ぎた後は、非常に邊鄙な田舍町でのみ暮す事が出來る」と、シテファン・グロースマンがヴェデキント追悼文に書いた。私は「ウエッテルシタイン城」„Schloss Wetterstein“にも輕く觸れておかふ。それは此作品には、幻惑のない熟慮を持つて、母親に對抗する十五才の少女が、ドイツ文學史上に始めて示されたからである。シテファン・ツワイヒも「最初の體驗」„Erstes Erlebnis“に於て、同様に最初の性的興奮を取扱つた。自殺によつて戀愛物語を終る「女家庭教師」„Gouvernante“の中で、二人の姉妹卽ち二人の女弟子に就いて下の如く云はれてゐる「恰も深い淵に墜落する如く、彼女達は幼年時代の陽氣な快活から落下した。彼女等は周圍に起る恐ろしいものを、未だ了解する事が出來ない。彼女等の思考は、其恐ろしいものに息詰まり、そして彼女等をそれで窒息させるかと脅かす」。是と同様な震蕩を、ルー・アンドレアス・サローメは「姉妹」„Die Schwestern“に描いた。此物語は彼女の作品集の「青春時代」„Im Zwischenland“の中の一つであるが、此作品の乙女達卽ち幼年時代と壯年時代との中間の國土の女の住民達――の內生活の描寫は、過度の興奮と一緒に、彼女等の夢と憧れと驚きと怯えとに就いて多くの微細な觀察を示して呉れる。十三歲のリーザは自分を從兄の守護の天使と考へてゐるが、其

渇仰されてゐた夫は、既に蜜月に彼の若い妻を欺むくのを知つて吃驚する。此處に於て彼女に取りて、人生全體が「特別灰色で陳腐に」思はれる。彼女は已の女友の空想的な遊戯の世界から、思ひもかけず滑り出る。此作でも「父の子」„Vaters Kind"に於けると同樣に、一人の藝術家が思煩ふ心を鎭めて吳れる。彼は、あらゆるものを淨化せずにおかぬ彼女の遊戯の歡喜を、理解する。詩人はリーザに云ふ「あるべき筈の狀態通りに全くある時には、大人と雖も亦再び子供と成る。さう成り得ない者は、憐れな人間である」。同じくサローメ女史の「ルート」„Ruth"は、溢れる許りの生活力と、彼女に取つてどうでもよい、關係の薄い環境に於て彼女に夢想を作る空想、とを示してゐる。ルートは彼女の先生の人格に、彼女に適合した人を見出した。然し此美くしい關係は、男の熱情によつて消滅する。ルートの明晰な眼から見られて、男は其熱情の故に疎んじられ、そして引倒される。彼女は理想に描いた人間を崇拜したが、其理想の形象に於ける男を戀したのではなく、彼女の自由な發展を要求する氣高い人間を崇拜した。フリードリヒ・フーフの「ピットとフォックス」„Pitt und Fox"及「エンチオ」„Enzio"には、健全な生活環境によつて擁護された、未成熟な乙女達が描かれ、彼女等は優美な確乎たる自己を輝かして居る。同作家の小說「兄弟姉妹」„Geschwister"には、内氣な控へ目な膽汁質のコルネリーと、「輕妙な、神の如き生活の歡喜」が魅力を與へるフェリシタスとが居る。此處にフランス・テイスも亦擧げられねばならぬ。彼は「天國への別れ」„Abschied vom Paradies"に於て、小さなズザンナの交々錯綜した感情に、微細な理解を示し、「世界の戶」„Tor der Welt"に於ては、種々樣々な若い人の子等を、あらゆる方面から說明し樣と努めた。レネ・シッケルのローマンス「ライン河畔の相續地」„Ein Erbe am Rhein"では、十四歳の男の子が、其早熟さから見て南國の女としてのみ考へられうる更に年少の女の子と、戀愛の係蹄に耽溺する。近視眼的な大人には單純と見られる子供達には尙遠ざけておかねばならぬあらゆるものを、此作品の子供達は、性的衝動や重く不明瞭な欲求に全く支配され乍ら、鋭い眼を持つて彼等の環境の中に嗅ぎ出す。カルル・シテルンハイムの場合には、種々の未成熟期の娘達が居る。即ち「清算」„Tabularasa"の中の、問題にならないネッテルや、精神的に低級な周圍の社會から浮び出樣と努力するアンナ——表題が彼女と同名の物語の——や、「シトルクの兄弟姉妹」„Geschwister Stork"のマリーが居る。マリーは姉によつて、完全な歸依と消極的な結果とを持つて、「完全に精神的な狀態」に迄教化された。マリーは十五歳に達して、「あらゆる事物に神を識るあたり前の人間と成つた」。此處でも亦、樂しい刺戟を感んじさせる幻想が、日常の困窮と、新らしく堀る刺戟の前の不安とから救つてゐる。喜劇の「錢箱」„Die Kassette"のリデイアには、完全に無鐵砲な生活慾がこびり付いてゐる。「ウッナッハの學校」„Schule von Uznach"の女生徒達は、教養ある者として現はれる。其娘達の一人は特徵を示し、仲間達もさうである。「其雄々しい青年が我慢してゐた苦痛、即ち飲込んだ毒ガスの結果により痴鈍となつて打殺された時に、其若い娘は此偉大な死の後に、非常に大膽に生活の戰に起つた。そして人は五年間、彼女の破廉恥を、即ち彼女が歐洲の家庭と腐敗した社會との保壘と殘壞とを組織的に攻擊したのを見て驚いた。」

尙現代の作家等が、ドイツの若い人々に與へた歐洲大戰の影響を如何に評價し、反映させたか、と云ふ事に就いて若干の他の例を

擧げ様。トーマス・マンは現代のドイツの若い人々に、混合した感情を持つて對してゐる。彼が鋭利な眼を持つて寫し取つた現代の小さな描寫である「混亂と青年の惱」„Unordnung und Frühes Leid" は、以上の消息を示してゐる。現代の若い人々が、無思慮に自身の道と表現の形式とを求める爲に、如何に襲撃的に、古い時代から發進したかと云ふ事を、トーマス・マンは哀愁に充ちた皮肉な笑を持つて描いた。ヤコブ・ワッサーマンは「ラウデインと彼の一族」„Laudin und die Seinen" の中で、ラウデインの二人の娘と女友達との「輝く青春」を通して樂しんでゐる。「マルレーネは、彼女の從はねばならぬ教育制度は收獲がない、」と云ふ意見を持つてゐる。彼女は學校を信じないし、又教師達をも信じない。如何にも彼女は次の如く云つてゐる「其等の男教師や女教師達の中に、單に一個の人物が居なければならなかつた。さうしたならば、其處に信用が生じたらう」。「人生の謎を熱心に考へた」其娘達は、「焰の同盟」を作つた。此同盟に、就いてマルレーネは次の如く說明した。——「我々が呼びかけるのは學校でもなく、兩親及兄弟でもなく、政府官憲でもない。寧ろ我々は我々自身に對して語らうとしてゐる……彼女等は徒らに强制に反抗するのではない。强制も必要でありうる。實に然り、然し過剩な强制、及因襲と方便とから行はれた强制には反抗する」。グレテ・フオン・ウルバニッキーの最近現れたローマンス「荒れたる庭」„Der Wilde Garten" には、春情發動期の動搖と混亂の狀態にある、一人の近代式な乙女の習作的準備が描かれた。是等の諸々の相は、一人の年長の女教師の眼を通して語られてゐるが、其女教師は世間に疎い引込屋なので、慈愛深いに拘らず、現今の探求心の厚い若い者を、支持し又指導する事が出來ない。兩親及教師に對する最若い攻擊者と肉迫者との描寫を見るのに重要なのは、クラウス・マンの「新生活の前に」„Vor dem Kampf" の中の三つのスケッチである。此處には奇怪なる戀愛が行はれてゐる。然し鋭い彈劾の聲からも、眞の道案內者を慕ふ憧れの心が響いて來る。「父笑ふ」„Der Vater lacht" の中の娘は、父親への復讐心から、不自然な墮落に沈倫する。父親は自惚の强い、偏狹な、名譽にこだはる人で、所謂理解ある親切な父親の常として、娘の內に隱されてゐる憧憬心に全く氣付かぬ。此若き詩人のクラウス・ヤンが、「青年」„Jungen" に試みた。少年少女を包含する、自由な、學校と云ふ團體から試みた描寫は、ウイルヘルム・シパイエルの「第三級の戰」„Der Kampf der Tertia" のそれと、拙劣に對立してゐる。クラウス・マンの場合には、指導者の唄が、貧しい空想に於て考へられた「自責への教育」に向けられてゐるのではなく、「僧院と妓樓との混合」に向けられてゐる。それに反してシパイエルは、卓越した健康な魅力ある人物を描かうと企劃して、大膽な少女の運動家ダニエラを、彼女の友達仲間から浮き上らせた。

此處に私の叙述を結ぶに當つて、マリア・ヴーゼルのロマンス「我等昨日の愚者」„Wir Narren von Gestern" の中で、同女史の云つた希望に充ちた言葉を引用したい。己の生涯を概觀したシモンは、此作の中で、現代の若い娘達に就いて下の如く云つてゐる——「質素な弛い衣服、自由な濶步と、少年らしくきちんとして、粉飾の無い頭……現代の殺風景や絕望が、私を征服し樣としても、私は彼女達の質素な、雄々しい姿を思出し、彼女達から未來に就いての信仰を得る」。

(Die Literatur 1929 Juni Heft 9)



ある戀愛相

——戀愛觀の一節——

(英) エリナー・グリーン
五十鈴川淑子 譯

プラトニック・フレンドシップの一般觀念は全ての性的要素をもたない男性と女性との親交を意味するものであつてしかも殆んど戀愛と變らない甘美さをもつものである。

彼らはいつも共にゐることを思ひ、その會話を、その精神的趣味をお互ひに享樂する。然しお互ひにぞつとするやうな感激を與へ合はうとしなければ、第三人者と戀することも自由だ。

凡てが虚僞の道程である！　今、述べやうとするある特定の條件の場合以外には。若し若い者同志が出來る丈多くの時間を共に過したいと思ふならば戀愛的要素か肉體的魅力かが無意識的にであるとはいへ兩方でなければその一方を囚にしてゐる。若し若い女性か、若い男性かが共にダンスをしたり、お互ひの享樂に耽つたりする五六人の仲間……特定のある一人でなく——をもつてゐる場合、これが多分、今迄の最もプラトニック・フレンドシップに近いものであるといへる。けれども若し男女の一對がいつも一緒に暮してゐるならばそこに或る種の感激があることは確かだ。

多くの場合、二人のうち一方が第三人者と戀に落ちてゐる、一般に男性であるが、彼はある親切な　性に同情を求めて來る、——彼らの會話は全くお互ひの感情には觸れない——女は彼に耳を傾け、善良な優しい性格なので彼をいたわつてやる。これは外面プラトニツク・フレンドシップのやうに見える。けれどそうしてゐるうちに男は以前の愛人を忘れ、女は何時かしら心に秘む戀を見出すやうになる。

繰返して云ふ。女でも男でも何物にも變へ難く異性のある一人に深い興味を持ち始めた時、一方又は兩方が動搖し始めたのである。——先づ最初の戀愛的情緒が結果する。——そしてフランス人の amitéie amonsense と呼ぶ、譯して『戀愛的友情』なるものが進展する。これが情熱への序曲にして、以前の通りの關係が續くものではない。

プラトニック・フレンドシップは若い女と相當の年長者や老人の間には可能性があるかも知れない。何故ならこの場合、若い女は男

に全然性的感情を持たないし、男はもう肉體關係の範圍外にあるから、それで彼らの心は親交を求めるに自由になつてゐる。にもかゝわらず、事が非常に密接になると無意識的に肉體的魅力が加はつて來て男はそれを繼續して行く。

外面、全くプラトニックな感情、友情なるものが最も鮮やかな虚僞であることがわかる。大抵の女は生涯續くこの種の虚僞の一つは持つてゐる。男がより以上の何ものかを求めてゐることを彼女はよく知つてゐるけれども、それ以上に彼女は彼に何も感じてゐない。そこで彼の漁色本能が絶えず刺戟され、男は女から與へられるなりの親交に甘んずるやうになる。

女には全く肉的慾望とか性的本能とかいふものを男に起させない「たちのいゝ」女がある。それでも男の友達であるといふ場合には男は若し女が餘程面白い遊び仲間でない限り強いて共に時を費さうと思はない。男性に秘そむ本能のうち、性本能に次いで強いものは娯樂を求める慾望であるから。

例へば私がウォルターとクライリーがどこの會合へ行つてもいつも二人でダンスをしたり、散歩したり、乘馬をしたりしてゐるが、それが全くプラトニックな交際であることを知つてゐるとする。そして彼らも單なる友情に過ぎないんだと私にいつて聞かす。

『詰んないことを言ひなさんな！ お二人とも御自分達を欺き合つてゐらつしやる。生涯續くものがプラトニック・フレンドシップなんですよ、一年の間、特別の感激もなく單に友人關係に止まつてゐられるかどうか見屆けないうちは何とも云はれませんね』私はいふだらう。

勿論、それはお互ひにさめてしまつて無關心になつてしまうか、でなければ戀愛に變ずるものである。

兩性間の眞のプラトニック・フレンドシップに近いのは中年かむしろ老年にしてしかも聰明な婦人と青年――或ひは中年の男子の場合である――しかしそれが全く性的要素の可能性がなく、精神的のものである場合に限る。青年は婦人の優れた人生學や洗練された會話の力に心が奪かれる。婦人は彼の抽象的な想像に感銘する。これは彼の凡ての興味を凝結して自分自身にのみ集中しやうとする若い女性には出來ないことである。

このやうな二人のプラトニック・フレンドシップならばその可能性があり、幾年も續くかも知れない。若し婦人の方で心の興味以上の愛情を感ずるとしても、それは母性愛の要素が主であるからである。

フランス婦人の男性の心を捕へる無限の魅力とその力の素晴らしいパリに於いてはプラトニック・フレンドシップのやうに見える場合が始終見受けられる。けれどもそれをつきとめて見ると彼らはある時代には愛人同志であつたものがこのやうな快よい關係に治つたことがわかる。けれどもフランスの若い女は若い男との關係をプラトニック・アフェーアー――それはいつも熱烈な戀愛を秘めてゐる――だなどといふやうな馬鹿ではない。彼らは性的關係をよく了解してゐる。

アメリカは feirtation――眞摯な情熱と正反對なもの――に都合のいゝ國のやうである。

始終一寸した刺戟にも一二人は愚か、五六人をすら相手に戀情を弄ぶために、生殖本能が徒らに亂用――滿足――（この言葉がいゝならば）されてゐる。その爲に外國人が見ると、アメリカ人は、接

吻以上の關係をもたずにお互ひにあつさりと別れてしまうやうな戀愛ならばいつでも求められるやうに見える。こんなことは外の國にはさうないことである。ヨーロッパの feirtation は突然の決裂を來すか、でなければ成就するかの二ッである。それは女がこんなおとなしい、僅かの昂奮で切上げるやうにアメリカの男を訓練したためかも知れない。その爲に彼らはあんなに兄弟のやうに、父のやうになつたのかも知れない。自然は健康にして精力ある男女間にある一ッのことを意味してゐる。けれどもある種の文明がそれを外の物にカモフラージュをしてしまつた。

これが國民にとつて善いことであるかどうかは、時のみが告げることが出來る。しかし若しアメリカの女性の人々が今日のイギリスのやうに男性以上の數に增加した曉に、どんな變化が男性の心性に、又その神經力に加へられるであらうかといふことを考察することは極めて興味深いことである。さうすれば現在のやうに男性が數多く、與へられたものを受けるといふことではなく、數は少なくなり盛んに追ひ求められるやうになるであらう。

さて、プラトニック・フレンドシップに歸つて最後に一言しやう。男性には羊の皮を着てプラトニック・フレンドシップのやうに見せかけて女性を誘惑しやうとする多くの狼がゐる。たとへ兩方が欺き合つてゐたとしても結局は同じ結果に陷るものである。

この書を讀んで、無邪氣な、プラトニック・フレンドシップと信じてゐたものが生涯の悲劇であることを認識する女性があるかも知れない。そこで、クライリーよ、深入りしないうちに結婚の指輪をとりかわし、心の許しをとつて置いた方が賢明なやりかただ。――それから、彼をして彼の望む最初の結合を要求せしめよ。それでも尙若し是非、プラトニック・フレンドシップの甘美さを味はんと欲するならば知覺を鋭敏にして、出來る丈敏速に戀愛取引――これは物の責任の唯一の基礎である――を淸算して、心のみの友人關係に納まるか或ひは遊び事に熱中しなければならぬ。

貴女一人でウオルターと共に食事をし、共にダンスをする時、貴女のフレッシュな若々しいお顏に要りもしない白粉をはく時、何とも云へない喜ばしい興奮に顏がほてる時、その感情が單なるプラトニックなものに過ぎないなどといふ馬鹿らしいことを言つてはいけない。戀愛と靑春の自然の發露であるとフランクに白狀したがいい。貴女の最善の智慧をもつて、賢明に導くことを祈る。

全女性行進曲の樂譜を頒つ

諸方から多大の期待をかけられてゐた全女性進出行進曲が、いよ〱發表される、山田耕作氏の作曲は淸新銳氣よく新時代の女性の意氣を現はしてゐる。レコードにふき込んで全國に行き渡らせる計畫もあり新春劈頭全國の同性に聲高らかに歌つて貰ひ度い希望である。それで樂譜を刷つたはがきを希望者にお頒ちすることにした。聯盟の年賀狀用として氣の利いたものと思ひます。五枚一組實費をもつておわけします。至急お申込み下さい。



花子

自畫像の一斷面

(佛) ルイズ・ミツシエル
望月百合子譯

コムミユン中、私はたつた一晩しか、可哀さうな母の許に歸らなかつた。横になつて眠むるやうなことは一晩もなく、私は何處ででも、他に仕事のない時には腰かけたなり眠つた。他の人達も大抵さうであつた。解放を欲求した人達は皆かうして全我を投げ出したのであつた。若し反動が、男子と同數の敵を婦人の間に持つてゐたなら、ヴエルサイユ軍はもつと苦戰したであらう。何故なら吾々の男性の同志は、吾々よりも慈悲心に囚はれ易い。そして一般に、心弱いものとされてゐる女性は男性よりも『かうしなければならない！』と言ふことを知つてゐるからである。女性は臓腑までも引裂かれる思ひをしながらも、平然としてゐる。憎惡も、怒りも、慈悲も、女性自身のためにも、他の人々のためにも持たず、辛らくても辛らくなくても、只『かうしなければならない』のだ。

これがコムミユンの女達であつた……。

私は女の衣服の他に、歩兵服と國民軍の服を持つてゐた。そしてポケツトには私の身分證明書を持つてゐた。コムミユンの間に、私は二度負傷しただけだつた。一度は鐵砲の彈丸で手首に擦過傷を負ひ、帽子は穴だらけにされた。もう一度は挫傷を受けて三四日は少しも歩くことが出來なくて馬車を探さねばならなかつた。

丁度私が探した馬車は立派な無蓋の四輪車だつた。私達はそれに一頭の馬を繋いだのだけれど、可哀さうにその馬は鞭打たれるに甚馴れてゐた。だから親切に扱ふとどうしても走らうとしなかつた。それでもモンマルトルの墓地に行くだけには役に立つた。併しその他の所に行かなければならなくても、馬は立つたまゝ居眠つたのみでは滿足せずに少し走つたかと思ふとすぐ立止つてしまつた。彌次馬は私達の周りを圍んでは『おやおや、奴等あ四輪馬車なんぞ持つてやがるぞ！　金を飛ばしやがるな！』この馬車を持つにや大した金がかゝるだらうにな！』などと言つた。あんまり馬が動かないので私が降りようとすると一人の同志が『お待ちなさい。降りないでゐらつしやい！　いま私が走らせて見せますから』と言つた。そして彼は一片のパンをこの馬にやつて元氣づけるやうに鼻面を撫で

てやつた。馬はまるで私達を嘲けるかのやうに脣を空に向けてパンをかみ、ほんの少し動いたばかりだつた。そこで私は仕方がなくなつて、たう〳〵馬に鞭を當てた。すると馬は忽ち耳を振り立て乍らヌイイの城壁に向つて走り出した。それから私はモンマルトルに行つたけれども、母の處に寄らうとはしなかつた。何故なら私が挫傷を負つてゐることが母に分るのを恐れたからだ。

數日前私は全く思ひがけなく、クラマアル驛の近くの塹壕の中で母に出會つた。彼女は私が彼女を安心させるために書いた手紙が眞實だかどうだかを見に來たのだつた。その時も幸ひにして彼女はたう〳〵私の言ふことを信じて歸つてくれたがさて話がわき道に外れたが、吾々の戰ひの本筋に再びペンを進める。地方ではいつも政府の發表する話を信じた。政府は、刻々に數を增し、ゴールの樫のやうに頑强なこの下層民共の諸團體間の協調を破らせようとした。

そこで吾々の同志の最も熱心な人々は巴里から地方に出かけて行つた。女達の中にはボオル、マンクもゐた。そして出來るだけ地方に力を注ぐことにした。若し地方が吾々の戰ひを理解したなら、地方も吾々と共に戰ふであらうから。

私達は全フランスに當てた電報を一杯に詰めた輕氣球を上げてみた。そのいくつかは都合よく落ちた。

少くとも地方人の全部がヴェルサイユ軍の出鱈目に欺されてゐたのではなかつた。リヨンも、マルセイユも、ナルボンヌも吾々のやうに革命の血汐を浴び乍らコムミュンを行つた。

農民の苦痛は吾々の苦痛よりももつと暗澹としてゐる。間斷なく無情な地面に屈みつゞけて、而も地主のお餘りしか受けることが出來ない。彼等は吾々よりも慰安を持たない。

お前に、百姓よ、この怒りの唄を！　この唄がお前の敵々の中に芽生えるやうに。これは吾々の爭鬪時代の記念(スヴニール)である。

麻の唄

春は綠の枝の中で笑つてゐる。
森の奥で小鳥が囀つてゐる。
みんな羽をひろげて唄ひ乍ら生きてゐる。
どんな鳥もひなを孵へす。
それだのに民衆は一錢の金さへもない。
家もない、何にもない
飢と、寒さが彼等の內臓を嚙む。
お前の麻をお蒔き、百姓よ！　お前の麻をお蒔き、百姓よ！
若し貧しい小作人が戀し、
二人になることが出來るなら、いいであらう。
だが戀も光りも私達には遠い！
そんなものは不仕合せな者達のためにはないのだ！
後家達に不安を持たせまい。
息子達を暴君の手に殘すまい。
私達は共犯者でありたくはない。
麻をお蒔き、百姓達よ！　麻をお蒔き、百姓達よ！
鍛えよ、建てよ、鐵鎖を、要塞を、
凡てを與へよ、信徒達の如く、
汗も、血も、勞働も、苦難も。
工場よ、城と同じになれ。
小作人よ、夢のやうに、
夜、宮殿の玄關の下を

炬火の光りが赤くさまよひ燃えるを見ずや。
お前の麻をお蒔き、百姓よ！　お前の麻をお蒔き、百姓よ！
お友達よ、御覧の通り、私は愛しも憎めもすることの出來る人間です。ありのまゝの私を見て下さい。

人間といふ昆虫である私達は、同じ殘骸を喰らひ、同じ塵埃の中に轉ぶ。私達の羽ばたきをするのは革命の時だ。その時こそ蛹は成虫と化し、今私達が思ひも及ばない喜びの時代が到來するであらう

藝術の意味、自由の意味は、吾々の民族の間では初歩でしかない。これから發達し、生産しなければならない。そしてこゝにこそ不思議な芽生へが發育するであらう。

春の夜の生あたゝかい暗の中に、赤い焔はゆらめく。それは五月の巴里に放たれた火である。

この火事こそ、黎明である。私はこれを書き乍らも尚あの夜の光景を幻にみる。私達の呪はれた時代を越えて、自覺した、自由な人間が、人間をも獸をも少しも虐待しない日が到來するであらう。この希望こそ、恐ろしい人生にも尚負けさせないものだ。

私はいつも自分が自傳の一部を書いてゐることを忘れてしまふ。若しこのやうに、おしまひまで、生活を忘れることが出來たなら！さて私はまた現實の事實に歸つて私の捕縛されたことを書かう。

それは普佛戰爭の時であつた。私達はあらゆる障害を突破して、瀕死の狀態にあつたストラスブルグに行く有志の人々を募つてゐた。そしてそこで最後の一努力をするか、或はその街と共に討死をするかするつもりだつた。有志の人々は大勢集つて來た。私達は列を成して、『ストラスブルグへ！　ストラスブルグへ！』と叫び乍ら巴里を横ぎつて行つた。そして市廳の前まで行つた時、私達は捕へられた。アンドレ夫人と私と、もう一人の貧しい老婆とは石油を求めに行かうとして捕まつてしまつたのだ。私を一人の役人に向つて私達がストラスブルグに行く理由をよく說明した。だがその男は『ストラスブルグが陷落したつて、貴女に何の關係があるかね、何も貴女がストラスブルグに住んでゐるといふではなし』と言つた。だが間もなく假政府の一員が私達を放免した。

丁度その時、ストラスブルグは陷落したのであつた。

私が二度目に捕つたのもやはり普佛戰爭中であつた。先見の明があるといふよりも寧ろ勇敢な女達は、政府に向つて、自分達をも戰爭に出してくれるやうに申込まふとしてゐた。

彼女達は非常な熱心さで私達のモンマルトルの婦人クラブにもやつて來た。あまりの熱心さに私達も彼女達の申込みを拒絶することは出來なかつた。只併し私達は女として彼女達と危險を共にするためのみで、些も彼女達の如く市民としてではなかつた。

私達はもう政府を少しも認めてはゐなかつた。政府は巴里をさへも守ることは出來なかつたからである。

私達は市廳前に行つた。そして待つてゐると、私は不意に、示威運動を組織したといふ理由で捕へられた。

私は自分が認めてもゐない政府に對して話をするために示威運動を起すことなんか出來る筈がないと言つた。そしてまた私が私自身のことで市廳に來るときは、武裝した民衆と共にだと言つた。併しそんな事で私の嫌疑は晴れはしなかつた。私は投獄されてしまつた。

併しその翌日、四人の市民達が第十八區を代表して私の放免を願ひ出て來た。そして若し私を放免しないならばモンマルトルの住民

達が押し寄せてくると威嚇した。そこで私は放免された。

モウリス夫人も、戰爭の犧牲者のための婦人協會を代表して私を受取りに來た。併し彼女が來た時は既に私は警視廳を出た後だつた。女も卑怯な眞似はしないことを私はこゝではつきりと言つておく。何故なら私達は自分達の手足を汚したくないからだ。多分私達は多少猫族の血を引いてゐるのかも知れない。

三十萬人がコムミユンに投票した。一萬五千人位の人々が『流血週間』中軍隊と戰つた。三萬五千人ばかりの人々が銃殺された。併しその他にどれだけ人知れず殺された人々があるだらう？

女達は起ち上つて、ブラス、ブランシユの防禦を死守した。その中の一人、ブランシユ、ルフエブルが私に會ひに來た。その時まだ私達は勝利をかち得ると信じてゐた。

叛亂は成功した。併し革命はヴエルサイユ軍の大將フウトリックといふ老狐のために、咽笛を嚙みつかれてしまつたのだ。

ドムブロウスキイは私達の前を悄然と刑場に引かれて行き乍ら、『もう駄目だ！』と私に言つた。私は直ちに『いいえ、いいえ、』と答へた。すると彼は双手を私に差出した。

私はどうしてだか知れないが、いつも危險から逃れてゐた。そこで私を捕へようとしてゐた人達は、若し私が見付からない時は母を銃殺すると言つて捕へて行つた。私は直ぐ母を救ひ出すために自ら彼等の前に、現はれた。けれど可哀さうな母は、自分が助かつて私が囚はれの身になることをどうしても欲しなかつた。そこでまた私はあらゆる嘘を言つて母を歸らせねばならなかつた。母はいつも、しまひには私の言ふことを信ずるのであつた。

かうして私はやうやく母を歸らせた。

留置所はモンマルトルの鐵道線路に近い第三十七稜堡であつた。巴里の火事で燒けた紙片は、まるで黑い蝶々のやうにそこまでも舞つて來た。

私達の頭上には、火事の黎明がどす黑い赤さで漂つてゐた。ひつきりなしに大砲の音が聞え、それは二十八日まで續いた。そして私達はこの日までも、革命が遂には勝利を得るだらうと言つてゐた。

私達はいつまでも期待しつゞけた。何んとおめでたい無邪氣さであつただらう。

この保壘の、私達が幽閉されてゐた埃りだらけの大廣間の前は、芝生となつてゐたがその下は地下牢になつてゐた。そこに、ガリフエが到着するや否や、私達の見てゐる前で二人の不仕合せな男が銃殺された。二人とも死にたくないと喚き乍らひどくもがいた。

彼等は多分私達を罵るために戶外に出て、捕えられてしまつたのであらう。そしてすぐ放免されるものと思つてあんまり心配もしてはゐなかつたのに、と彼等は言つてゐた。

ガリフエの宣告、次いで發砲の命令が下つた。彼等は仰天して逃げ出さうとした。私達は力の限り、その男達が私達の知らない人々であること、私達の仲間ではないことを叫んだけれども、遂に二人共銃殺されてしまつた。モンマルトルの商人だと言つてゐたが發砲されない前にもう倒れてしまつてゐた。そして余りの恐ろしさの爲めに、自分の住所を思ひ出すことすらも出來ず、子供に遺言する事も出來なかつた。私達は再び自由の身になれるとは思はなかつた。

この二人の男達はよく似てゐたから、兄弟であつたに違ひない。この二人の男のやうにコムミユンの敵が幾人捕えられた事だらう。こんなおかしな事も起つた。私達がサトリイからヴエルサイユに護送

された時に、一人の女が怒り狂つて私達の前に立ち塞がつて、私達がその女の妹を殺したのだと喚いた。それは證人まである事實だと叫んだ。その時不意に二つの叫び聲が起つた。その女の妹といふのは、ヴェルサイユ軍のために捕へられて、私達の仲間にゐたのだつた。サトリイに行つた時は大雨の日で坂道は辷り勝ちだつた。

『元氣を出してお登りなさい、モンマルトルの戰ひの時のやうに！』と誰かが言つた。私達はかけ足で登つた。そして私達は筒口を向けてゐる銃彈に向つて突進した。夫を銃殺されたゝめに、反抗しようとして捕へられ、私達と一緒にゐた老婆はこの銃彈を見て悲鳴を上げようとした。これは囚人が來る度にして見せる形式だと言つてきかせると老婆は默つた。

ヴェルサイユに移つた時は、愚かな男達が、まるで野兎でもうつやうに私達に向つて發砲した。そのために一人の國民兵が顎を打ち碎かれた。彼はかうした情けない彌次馬達を一生懸命に追つ拂つてくれたのだ。

サトリイでは、囚人達は夜、呼び出された。彼等は雨に打たれ乍ら寢轉がつてゐた、泥の中から起ち上つて、前を行くランプの光りに從つて行つた。彼等は自分達の孔を掘るために、ベルと鶴嘴とを背負はされてゐた。彼等は銃殺されに行つたのだ。

人生の重負は夜の沈默の中でおろされた。

私は到着の翌日、銃殺されるのだと言ひ渡されてゐたが、更らにその夜に延び、また更らにその翌々日といふことになつた。どうして早く私を殺さないのか私には分らない。何故なら私は獰猛な勝利者達に對していつも反抗しつゞけてゐたのだから。

ヴェルサイユでは、私達は、眞四角な大廣間に、晝間は坐り、夜は思ひ思ひの場所に横たわつた。

十五日も經つた頃二人に一掴りづゝの藁が與へられた。

その上の室は審問室になつてゐて、私達の部屋からは一つの孔を通つてそこへ行くやうになつてゐた。もう一つの孔は階下に通じてゐてそこには囚はれた子供達が幽閉されてゐた。夜は二つのランプが襤褸を展ろげたこの部屋を照らしてゐた。

長い間、私はわざ〳〵モンマルトルから訪ねてくる母に會ふことを許されなかつた。

ある日も、母は私にカフエを壜に詰めて持つて來てくれた。それを私の方に差し出してゐる處を見付かつて、ひどく押しのけられた。そこで私はその壜を、母を押しのけたその憲兵の頭へ投げつけた。

そんなことのあつた後に、私はやうやく母に會ふ事が許された。

この牢獄でも、他の牢獄同樣、滑稽な話が澤山あつた。

一人の聾で啞の女が『コムミユン萬歳！』を叫んだといふ理由で數週間幽閉されてゐたことがあつた。兩脚不隨の老婆が堡塁に立て籠つたといふ理由で投獄された。

また他の一人の女は牢獄の周圍を三日間、腕に籠と洋傘を持つて、めぐり歩いたといふ理由で捕へられた。その籠の中には、彼女の主人が勝利者を讃美して作つた唄がはいつてゐた。それだのにそれをコムミユンを讃美する唄だと思ひ込んだのだつた。

こんな滑稽なことがあつても、笑ひは忽ち引込んでしまつた。狂亂した女達の悲鳴や、どうしてゐるかも分らない兩親や、友達や、たつた一人家を守つてゐる母親達への心配が人々の心を滿たしてしまふのだつた。けれども私達は敗北し乍らも誇らかだつた。下らない男達や女達が、まるで動物園見物に行くやうなつもりで、私

達を見に來ても、彼等は決して私達の眼に涙が宿つてゐるのを見ることは出來なかつた。涙の代りに、彼等の愚ろかしい態度を冷笑して見せるばかりであつた。

父親の代りに捕へられて來た子供達すらも年嵩の子はもう既に誇りを持つてゐた。床板の上には銀色がかつた糸が網の目のやうに蠟の塔のやうなものに向つて張り渡されてゐた、それはや﹅弓なりに曲つた背にうごめいてゐる巨大な虱の仕事だつた。その背中はどこか猪に似てゐて、そこからいつでも蟻の動めくやうなざわめきが聞えてくるやうな氣がした。

兵士達に監視されてゐるので、たとへ下着を持つてゐるものでも容易には着換へることが出來なかつた。私もやうやく着換への下着を手に入れることが出來た。それを中庭の格子戸越しに私に持つて來て渡してくれた可哀さうな母は、大變悲しさうであつた。こんな苦しみ位、一番初歩のものでしかないのに。夜になると、私は眠むれないまゝにこの牢舍の中をもの珍らしく、眺めては過した。

時とするとこの牢舍が夕陽か黎明かに刈り取られた畑のやうに見えることがある。穗を空にしてしまつた僅かばかりの藁束が、太陽を浴びた小麥のやうに黃金色に見えたり星をでも收穫したかのやうにキラ〳〵輝いて見えたりした。それは朝日が登りかけてラムプの光が蒼白ざめる時である。

マルスロオが來ると、私達の中の最惡とされてゐた四十人が、ヴエルサイユの懲治監獄に送られ私もその仲間であつた。

篠つくやうな雨を浴び乍ら私が中庭で待つてゐると、一人の士官が、『眞に殘念だが……』と言ふ挨拶をした。私はそれをきくと、どうしても默つてはゐられなくなつて、彼等のためにもそれが一番いいことだし、私としても一番いいことだと言つた。

懲治監獄に於ける四十人の最惡女囚達の生活は殊の他樂だつた。

併し私達が殘して來た前の牢舍の女囚達のその後の成行は實に意外だつた。野戰病院で働らいたといふだけの女達が死刑にされた。ユウラリ・パパヴォアンヌは名前が偶然革命家パパヴオアンヌと同じだといふ理由で無期追放に處せられた。親類でさへもないのにヴエルサイユ軍は只この名前を發音するだけのためにそんなことをしたのだ。やはり野戰病院で働らいたスウタンも追放されてカイヤンヌに行つた。

かうして何んでもない女達には嚴罰を加へ乍ら、最も大膽な女達には却々判決を下さなかつた。そして勇敢なエリザベス、ルチフに對してもマルシエに對しても何の處罰をも行ひ得なかつた。

共和制布告の一週年記念日の前日、即ち九月三日になつて始めてコムミユンのために囚はれた人々の判決が終つた。

同志フエレは絕對に辯護士を排斥して次の如く述べた。

『正直な、眞面目な新聞紙は發行を禁止され、最も優れた愛國者達は死刑に處せらた。王黨はフランスを分配しようとした。そして遂に三月十八日の夜、彼等は準備が整つたと信じて、國民軍の武器を奪はんとした。そして共和主義者達を一齊に捕縛した。併し彼等の試みは全巴里の反對によつて忽ち敗滅に歸してしまつた。そして殆んど放棄された兵士達は、逃げ惑つてヴエルサイユに難を避けた。

自身の手に歸された巴里では、熱心な、勇敢な市民達が、生命を賭して、秩序と平穩とを建て直さうと努力した。

數日後、民衆は投票に召集され、かくて巴里のコムミユンが成立したのであつた。

ヴェルサイユ政府の義務は、この投票の效力を認め、コムミユンと共に、平和をもたらす爲に媾和することであつた。それだのに全くそれとは反對に、まるで外國との戰爭がまだ十分に貧困と破壞とをもたらさなかつたかの如く、その上にまだ內亂を追加したのだ。民衆に對して憎惡と復讐をのみ感じて、政府は巴里を攻擊し更にまた新らたな包圍を受けさせたのだ。

巴里は二ケ月間抵抗した。そして敗北してしまつた。十日間、政府は審判なしで銃殺を命令した。これ等の悲しむべき日はかの聖バルテレミイの殺戮にも等しいものである。

巴里コムミユンの一員たる私は、勝利者達の手中にある。彼等は私の首を欲してゐる。自由に取るがいゝ！　自由に私は生きて來た。私は死ぬにも自由を感ずる。

私はもう一言で止めよう。『運命といふものは氣まぐれものだ。私は私の記憶と、私の復讐とを未來に托する。』

そしてフェレは死刑に處せられ、一八七一年十一月二十八日に、サトリイの原で殺された。

フェレと私は、牢舍にゐながらも幾通かの手紙を往復することが出來た。その爲に、私も彼の刑の執行には、立ち會ふ事が出來た。

ヴェルサイユの停車場で、私は兄の遺骸を引取りに來たフエレの妹マリイに出會つた。彼女は非常に蒼白めてゐたが、淚もこぼさず、氣弱さを見せなかつた。只死人のやうに冷たく蒼白めてゐた。

彼女は黑衣をまとつてゐた。栗色の大きな捲毛は大理石の上にかゝつてゐるやうに見えた。

地上は雪で眞白だつた。虐殺がおしまひになつてから半年も經つてゐる。十一月二十八日は殺人的寒氣が又始まらうとする日だつた

十一月三十一日に、窓や、扉口や、便所の窓から、ある人々を逃がしたために暗殺されたフロオランヌも、デェヴルも、ヴァルランも、スリジエもドレクリユズ老人も、その他數へ切れない人達が巴里の下で眠つてゐる。時々、地下室の隅や、町で骸骨を發見することがある。それは何處から來たものか分らない。それを世間では不思議な事件と言ふ。併しそれ等はみんなヴェルサイユの勝ち誇つた王黨の刄にかゝつたものではないだらうか？

若しサトリイの原を掘り返へして見たならば、どんなに多くの骸骨が出てくるであらう。生石灰をふり撒き、鋤で耕やし、石疊を敷いても、その下には必らずあの時の骸骨が永久に殘つてゐるであらう。私が當時書いた手紙が幾通か、いま私の手許にある。こゝにその一つを挿入れておく。

ヴェルサイユ監獄より、一八七一年十二月二日、

私は火曜日の朝の暗殺を信じ始めました。若し私を裁判におかけにならないならば、それは私について十分御存知だからだと思ひます。私はすつかり用意が出來て居ります。そしてサトリイの原は遠くはありません。

貴方がた皆さんが御承知の通り、若し私が生きて再びこゝを出るやうなことがあると、私はあの殺された人々の復讐を必らずするのですから！

コムミユン萬歲！　ルイズ、ミッシエル

併しどうしても私をサトリイの刑場につれて行かうとはしなかつた。そして私は倚ほ、自分の周圍の人々が薙ぎ倒されるやうに死んで行くのを見てゐた。この無限の空虛を體驗しない人々にはどれだけの勇氣が生きるために必要か分らないであらう。



婦人勞働者と勞働組合

(米)テレザ・ウォルフソン

山川菊榮
佐東まき子　共譯

原書は一九二八年發行に係り、米國の勞働組合運動における婦人の地位と情勢とを論述したるもの。婦人勞働者の組織難は各國共通の惱みであると同時に、その困難な事情も、本質に於て全く一致してゐるといつてよい。步一步この困難を切拔けつつある先進國の姉妹の努力と苦鬪のあとを語るこの著は、英國における、かのドレーク女史の『勞働組合における婦人』と共に、この種の文献の双璧といふべきであらう。こゝに記載したのは、同書の第四章である。(本文中技術工組合としたのは、通例日本では職別組合と譯されて來たクラフト・ユニオンのこと。これは職業を基礎とせず、一定の技術を基礎とした熟練工の組合で、字義からも、內容からも技術工組合の方が適切と思つたので、特に慣例に倣はぬことにした。他の又一層の適譯あれば改めるつもり。)飜譯については若き友人佐東氏の努力に待つた所が多いが、責任は私の負ふところである。

婦人勞働者は組織され得るか

吾々は工業社會の內部における婦人勞働者の經濟的地位の低劣なることに氣付いてゐる。組合といふものは、この低劣な經濟的地位を改善する上に、最も重要な勞働者の武器である。然るに一方、吾々は、多くの勞働組合が、不熟練工、殊に婦人勞働者に對しては敵對的な政策を執つてゐるのを見る。これらのハンディキャップにも係らず、婦人勞働者を組織することはできるだらうか。

過去において、勞働者の組織が成功したのは、少くも次の四つの顯著な事實によつてゐる。即ち、恒久的な賃銀勞働者の集團たること、熟練業たること、その産業の勞働者に對する戰術的地位を占め、かつその産業が全産業組織內における戰術的地位を占むるものたること、各産業別に從ひ、勞働者に對する組織特殊的な組織戰術を用ひること。

經濟的又は氣質的な多くの理由によつて、勞働供給者の中の一團

としての婦人勞働者は、組織を可能ならしめるこれらの諸要素を缺いてゐるものだと、今までは考へられて來た。

賃銀勞働者團の恒久性

恒久的な組合は、恒久的な賃銀勞働者の集團によつて成立する。朝生暮死的な勞働組合は、米國産業界の初期における特徴であつた。勞働者は、常にその勞銀に不滿だつたり、傭主に腹を立てたりしては工場から引き上げた。そこで組合が組織されるのであつたが、かゝる一夜造りの組合は、一旦その不滿が消滅するや否や、影も形もなくなるのであつた。

十九世紀の初期における米國産業界は、その幼年期に相當してゐた。固定的な勞働階級は未だ發達してゐなかつた。機會は至るところにあり、日傭大工、仕立屋等はいつでも親方となることができた。産業上の國境は、國の國境と同じく、冒險的な勞働者の前に開放されてゐた。一八〇〇年から一八五〇年までの一期間は、賃銀勞働者がぞろ〳〵と、商人、小事業家、農業家等へ商賣換へをした時代である。

米國産業の複雜な成長發達と、工業階級が、多かれ少かれ、固定的な社會層となつたことによつて、賃銀勞働者は固定的な一團となつて來た。「立身出世」とか、「丸太小屋から白堊館へ」とかいふ心理が、今日でもなほ、勞働者の心を支配してゐることは事實である。「成功者」の讃美が續く限り、この心理は存續するであらう。が、近代工業の需要に伴ふ恒久的賃銀勞働者の必要も亦、勞働階級の保護手段としての、勞働組合の確立を必然ならしめたのである。勿論「出世」の哲理にかぶれてゐる米國の勞働者は、今でも歐洲の勞働者とは自己評價の點で異つてゐる。然し「出世」の機會が限られて來、偶然の僥倖も減少して來るに從ひ、勞働組合は益々强固な、恒久的な機關になつて來るのである。

一集團の恒久性といふことは、勞働者の組織可能を決定する上に必須の要素である。産業界の婦人にはその恒久性がなかつた。彼等の一時的な性質が、勞働婦人の生活の中に緊密に織り込まれてゐる。結婚、出産、昇進の道なき賃仕事、低廉な賃銀、これら總ての事情がこの傾向を生み出したのである。

産業界における年々の勞働者の移動が測定せられたことはないが、一般に男工よりも女工の方が遙かに多いと考へられてゐる。これを以て直ちに賃銀勞働婦人が恒久性を缺くといふ證據とは見做されないが、確かにその傾向を示すものとは見られる。

四千余人の職工を使用する、ある大絹織物工場では、その中一五三五人が女工であつたが、毎年の移動の四九%は婦人であつた。「概算すれば一年に男工は四人に對する一人の割で去り、女工は五人に對し二人づゝ去つてゆく。」なほ婦人の産業界に止まる期間に關する今一つの調査が、婦人局の、マンチェスター、ニューハンプシャーに於ける勞働婦人の調査の中に報告されてゐる。これによると獨身男工は獨身女工より遙かに多くの割合で、十年以上同一職業に從事して居り(男工、二二・七%――女工、一八・三%)更に十五年以上勤續者は男工八・四%に對し、女工五・六%の割合であることが判明した。既婚女工に就てはかゝる消息を得ることが頗る困難であつた。

國際婦人服勞働組合の一大地方支部では、二萬五千から三萬を上下する組合員を擁し、その中七七%が婦人であつたが、組合員は毎五年毎に殆んど全部移動した。この事實は即ち、この地方に於ける

被服女工の最長勞働年限は五年であることを示してゐる。然し又組合の事務員は、結婚、轉業等のために組合を去つて行つても、大多數の婦人は、後に再び同職に復して來ると證言してゐる。

現今の婦人勞働者の地位は百年ばかり前の男子勞働者の地位と同じである。彼等を個々の産業勞働者として見る時、彼等はほんの一時的な勞働力に過ぎない。然し一國の勞働力供給者の一團として見る時、それは恒久的なものとなつて來てゐる。

婦人が子供を生む以上、その勞働生活は常に中斷されるであらう。一方、前に記したやうに最近十年間に産業界に入る婦人の數は非常に增加し、勞働婦人の年齢の範圍は漸次に廣くなつて來てゐる。

故に産業界における婦人勞働者の恒久性については、常に二つの要素が考へられねばならない。即ち、團體的に見た婦人勞働者は國家の恒久的勞働力供給の一部をなすこと、個別的に見た婦人勞働者は多少不規則な勞働生活をすることである。職業を一時的と心得る婦人勞働者の心理はその經濟的地位に對して決定的な影響を與へるこの心理とその經濟的地位とは、恒久的な勞働組合の組織を論ずる場合には、必らず考慮せらるべき要素である。男子勞働者の間に何らかの形の恒久的組合運動が發達し得たのは、一八八〇年代に彼等の大多數が自分を恒久的勞働階級と認識して後のことであつた。婦人勞働者もまた、有効な組織が作られる以前に、彼等の集團の恒久性を認識することを余儀なくされるであらう。

職業の性質

米國初期の勞働組合は第一に熟練職人を基礎としてゐる。熟練工は勞働組合の構造の核心となつた。組織せられてゐる諸産業を一瞥すれば、そのうち最も强固で、歴史の古いのは、建築業、鐵道業、印刷業等、高度の熟練を要する技術工の組合であることがわかる。レオ・ウォルマンは、その勞働組合の發達に關する研究の中に、一九一五年から一九二〇年に至る戰時中の變調は、紡織、罐詰、屠殺、金屬業、水夫、沖仲仕等の如き半熟練、又は不熟練工の間に廣く組合運動を普及せしめたと說いてゐる。然し一九二〇年から一九二三年に至る産業界の不振は、大戰が生んだ是等の半熟練及び不熟練工の組合を徹底的に衰頽又は分散せしめた。熟練職人の組合のみが、この不況の中にあつて、僅かにその地位を保つたのであつた。

婦人勞働者は謂ゆる半熟練業及び不熟練業に集中されてゐる。一九二〇年に於て、收益ある仕事に傭はれてゐた婦人の六〇%以上は商業、自由業、家庭的又は個人的使用人、及び宗教的な業務に從事してゐた。これらの職業は主として婦人を雇傭する。なぜならこれらの業務に從事する者は、男子人口の僅かに二五%にすぎないからである。これらの職業における組織化の範圍は、殆んど取るに足りない程度のものである。これらの産業に從事してゐる男子は、全然組織せられてゐないか、又はされてゐるとしても、極めて貧弱な程度のものにすぎない。一九二〇年における、組合員の減少は言外であつた。恒久性又は安定を最も多く缺くものほど、不況時代に最も激しい打擊を受けるのは當然のことである。

不熟練工を技術工の組合の中に組織しようとすることは、丁度圓い木釘を四角な穴に嵌め込まうとするやうなものである。婦人勞働者は大部分不熟練工である。技術工の組合が熟練した技術工の利益と、不熟練勞働者の利益とを同時に計るといふことは、不可能事のやうに思はれる。

A・F・L（米國勞働聯合）に加入してゐる勞働組合に發せられた質問によつて、婦人勞働者の加入を許してゐる組合中、廿六組合は熟練業に從事してゐる婦人勞働者のみに加入を許してゐることが判明した。又十一組合は熟練不熟練兩樣の婦人勞働者を入れてゐることを答へ、殘る組合はその所屬婦人組合員は不熟練工であり、彼等は婦人だけの對立支部にのみ加入を許してゐたことを答へた。他の多くの組合も又、婦人だけの支部を持つてゐる。

罐詰工業は大部分不熟練工を使用する工業の代表的なものである。一九二〇年の國勢調査によれば、同工業には、一萬二千二百二十七人の婦人勞働者が雇はれて居り、その三分の二は屠殺及び罐詰工業に働く半熟練工として記載された。不熟練工は製造工業、機械工業の方面にも見出された。一九二〇年、生肉裁斷工屠殺工合同組合は五千二百人の婦人組合員卽ちその工業全體に働く婦人の四二%を組合員として發表した。然るに一九二四年には組合は婦人を失ひ、僅か百名そこ〳〵しか殘らなかつた。組合幹部は失望して、婦人の組合組織が不可能なるのみならず、男子の不熟練工組織さへも不可能だといふことを公言した。この組合はその技術的基礎を除き去り、技術も訓練も問はず、進んで肉罐詰工業內のあらゆる勞働者を組織しようとしてゐたのであつた。

一產業內の全勞働者を組織しようとするこの政策は、技術を基礎とする構造と共に、多年の苦い經驗の後に發達したものである。一八七九年から一九〇二年にかけて、生肉截斷工、屠殺工合同組合は、熟練工を中心に組織された。一九〇二年には組合の門戶が半熟練工に向つて開かれ、一九一〇年には、大部分移民からなる婦人勞働者がこの工業に參加するようになつた。十二の全國的勞働組合が結合された有名な一九一七年の組合組織運動の後に、この產業は民族別、性別、人種別等を基礎として、それ〴〵獨立の支部に組織された。婦人勞働者は、すべての熟練工と同じく、極く廉い入會金で組合に加入することを許された。然るに不況に加へて、友誼的な組合幹部間の不和が全組織を滅茶々々にしてしまつた。

他のいづれの產業より最も多く婦人が組織されてゐる針仕事勞働組合では、產業別組合のタイプが最も多く行はれてゐる。技術は依然として各部門の組合の基礎とはなつてゐるが、一都市におけるあらゆる部門の組合は、全組合から選出された委員から成る聯合委員會の政策によつて統制される。一產業一組合を目がけて、技術工組合の合同を企てようとする傾向は、漸次高まつてゆくらしい。故に婦人組合員の地位は、その熟練に關係なく、組合によつて保障されてゐるのである。

紡織產業では女工總數四十七萬一千四百六十六人のうち、四十三萬八千三百六十三人までは半熟練工の部類に屬するが、一九二〇年には、そのうち凡そ一一・五%が產業別勞働組合の形で合同紡織工組合と、熟練工の組合たる紡織勞働者聯合組合とに組織された。其後の四年間に、合同紡織工組合は、打續く困難な罷業のために遂に分散してしまつた。どの產業にせよ、婦人が多かれ少なかれ、組織に成功してゐる場合には、熟練工を基礎とする組合の組織が固守されてゐないといふことは、注目に價する。

組織の要素としての婦人の職業の性質を論ずる場合に、注意せねばならぬ傾向は多い。第一には、技術工の組合に不熟練工を組織することの困難と事實上の不可能とである。第二には、婦人が壓倒的

多數を占めるか、又は恐るべき競爭者の地位にある產業に於ては、彼等を組織するために、組合はその構造と主義とを幾分加減せねばならぬといふ事實である。しかし婦人がまだ新參者である產業に於ては、なほ從來のまゝの組合が保持され、彼等を無視してゆくことが許される。

戰術的な經濟上の地位

經濟組織の內部において一產業の占める戰術的な地位と、一產業の內部において勞働者の占める戰術的な地位とは、組織の難易に影響を與へる。多くの基礎產業や公益事業の場合に、勞働組合の組織が微力だといふ事實は、一般に知れ渡つた事柄である。然し最も强力な組合が、經濟組織の內部において樞要な部分を占めてゐる產業の中に組織されるといふこともまた、事實である。鑛夫組合、鐵道從業員組合、建築工組合等は、その罷業及び罷業の連繫が、一國の活動力を麻痺させがちな產業に屬してゐることがわかる。

婦人勞働者は公益事業にこそ從事してゐるものゝ、一般にそれらの基礎產業には雇傭されてゐない。故に彼等には技術工組合の組織に對する今一つの資格——樞要な產業に從事すること——を持つ便宜もないのである。

米國の勞働運動は、各々の所屬產業の內部で、多かれ少なかれ戰術的な地位を占めてゐる熟練工を基礎にして、ピラミッド型に組織せられて來た。一產業內の基本的な仕事が組織されゝば、その組合はその產業全體を包含することができるといふことは、組織に際して常に經驗される處である。國際婦人服工組合の罷業の成功は、その裁斷工支部の力と態度とにかゝつてゐた。被服工業に於て、裁斷工が仕事を續ける時は、仕立工、仕上工の罷業は脅かされるであらう。なぜならば一旦布が裁たれさへすれば、後は町から外へ出しても容易に仕立させることが出來るからである。同樣に印刷工業の場合に、植字工とリノタイプ手工とが仕事を續けるならば、製本工の罷業の成功は覺束ないであらう。彼等の代りをする勞働者は難なく得られるからである。故に技術工の經濟的地位は、一產業內において、基本的地位を占める技術工の組合組織如何にかゝつてゐる。

然るに一般に婦人勞働者はかゝる基本的地位を占めてはゐない。これらの地位は最も高給を支拂はれ、通例最も熟練を要し、時としては長い徒弟年期をさへ要するものである。專ら婦人を雇傭する所の謂ゆる女性職業に於てさへも、その基本的な仕事は男工によつて占められてゐる。最も多數の婦人が雇傭されてゐる家庭的或は宗敎的職業に於ては、働く場所と勞働者との特異な孤立狀態が彼等を組合に組織することを全然不可能にしてゐる。かくして吾々は、組合組織の上缺くべからざる二つの要素、卽ち全產業組織內において一產業が占める戰術的な地位と、其の產業內に於ける戰術的な地位とが、婦人勞働者の資格には缺けてゐることを見出した。

そこで婦人が勞働組合に組織されるためには、產業はその習慣を變じ、仕事に關する因習を放棄し、性別を無視して、勞働者の間に仕事を分配しなければならぬと主張するのは出すぎたことだと考へられるかもしれない。それよりも、一層融通の利く道具であり、本來全勞働者の利益を圖ることを目的とする機關たる組合が、その形態を變へねばならぬと指摘する方が容易だと思はれるであらう。組合が若し、男工にせよ女工にせよ、不熟練工を組織しようとするならば、技術及び熟練の如何を問はず、一產業內の全勞働

者を加入せしめるやうな組織を採用せねばならない。少くともその組織を、採用せらるべき産業に適順せしめなくてはならない。個々の産業の構造は、過去廿五年間に生産技術の變化と分業の増加のために著しい變化を來したので、技術工の完全に消滅した産業も多い。組合はこの變化を認識することを余儀なくされるであらう。そして機關手組合にとつては、なほ熟練した機關手がゐるために、技術工組合の組織を固執することが戰術的であるかもしれぬが、紡織工、製靴工又は屠殺勞働者達が、この變化しつゝある産業に直面しつゝこの種の組織形體を固執し得るやは、議論の余地ある問題である。

組織上の戰術

組織に關する第四の要素は、勞働者を組合に獲得する方法である。産業に入つて來た勞働者は二種の經濟問題に直面する。その一は利潤製造の理想によつて動かされてゐる經濟組織に固有のものである。今一種は勞働者がそこに仕事を得た或る特定の産業に基づくものである。

經濟組織から起る問題といふのは、競爭から生ずるもので、それは單に仕事を目指す勞働者同士の間のみならず、男女間、異民族間、異なる宗教の間にも起る競爭に根ざしてゐる。或日の朝、「助力を求む」の廣告に應じて見るがよい。何百人の勞働者が、何時間もの間、列をなすであらう。そして將來の使用人に向けられる問は、雇主の方針によつて色々である。その中に必らず次のものが含まれてゐる。『ユダヤ人か異教徒か』、『新教徒か、舊教徒か』、『靑年か老人か、』『有色人種か白人か。』そして男性か女性かによる選擇。これだけのことは、どんな仕事か給料はいくらかといふ話が出るより先に、まづ以て持出されるにきまつてゐる。

これらは、仕事に對して何等の適當な訓練も施さず、個人の創造的本能を滿足させるでもない經濟組織の中から生れて來る問題である。或鑛夫は、何故彼が鑛山の機構に反對するかと問はれた時に、『それあとてもやり切れねえ石炭工場だからだけさ、石炭工場さ、それだけの話よ』と答へた。今一人がこつそり言ひ足した。『けふ日鑛山で働く奴あ、脊中は頑丈で、腹ン中は弱虫にきまつてらあ。』それは我々の産業發達史上、未だ曾て最低生活費の水準に達したことのなかつた賃銀の問題である。また長い勞働時間、劣惡な勞働條件の問題である。更に又、富の不公平な分配の問題、不況、周期的、季節的な、失業期の問題である。

第二種の問題は、その勞働者の働いてゐる特定の産業に固有のものである。あらゆる産業はその仕事を遂行するために、或る程度の特別な訓練を要求する。産業の異なるに從ひ、昇進の機會も異なる。事實上、すべての産業には、勞働者と仕事との不調和、勞働者同士の間の不適合の問題が起つてくる。賃銀は各産業によつて、必要又は能力によらず、むしろ慣例、因習、目に見えぬ『市場』等によつて支拂はれる。ヅーレー氏はこれを次のように簡明にいつてのけてゐる。『人生で最も不思議なことの一つは、金の一番必要な貧乏人こそ、一番金に緣遠いといふことだ。』

勞働組合の組織者は普通この第二種の問題だけを考へる。經濟組織に關する『觀念』又は哲學を抱くこともありはするだらう。が、まづ第一に、彼は一定の産業における勞働者に影響を與へる問題を變化し、又は統制する力を持つ組合に勞働者を組織することを考へてゐる。實際的な組織の技術は、問題の異つてゐる限り、それ〴〵

の產業によつて異つてゐるべきであり、又實際に異つてゐることが多い。然し一方、あらゆる組織の計畫は、多くの共通な要素をも持つてゐるものである。卽ち傭主の或る程度の反對、一般の景氣、輿論の傾向、勞働者の心理狀態等を考へなければならぬ。

　これらの要素を考慮に加へて、さて、婦人勞働者に對する組合の組織方針はどんなものであつたらうか。婦人勞働者の特殊な問題に關する意識が存在したであらうか。組織運動の中に、これらの問題に適應しようとする試みがなされたであらうか。組織の方針は、產業の異るなに應じて異らねばならぬのみならず、婦人勞働者の經濟的地位及び心理的狀態に對する理解を表示せねばならい。果してさうしてゐるだらうか。

　一八三四年、ローエル工場の女子綿工が廢線帽を振つて、仲間の女工に對して罷業に出る合圖をした時、二千人の女工が市中に練出した。演說が行はれ、宣言が發表され、委員が任命されて、今日の組合組織運動の精華が創り出された。同じくドーヴアーの四百人の女工達が罷業を始め、町の公有地で烽火を揚げて『米國革命の娘達の自由』を叫んだ時、工場は『上品な娘達』を募集する廣告をした。當日のフィラデルフィアの一新聞は、『最近の婦人職工等の罷業と大示威行列とは、ヤンキー女性の新しい、意外な姿を曝露した。やがて政府は婦人政治を防止するために國民軍を募集しなくてはならぬかもしれない。』と公言した。

　工場主達は故意にこの女工達は『惡い』女だといふ觀念を培かつた。彼等の廣告は『上品な若い婦人達』に對して特に訴へた。實際この思想は非常に優勢になつて來たので、遂に女工側はこれに對する聲明書を發表する程となつた。曰く『私達は、私達の自由を金錢によつて評價するものではありません。故に問題の原因は、單に賃銀低下にのみあるのではなく、かの傲岸不遜なる性癖、ます／＼露骨になつて行く、かの資產を鼻にかけた傍若無人の振舞にあるのであります。私達は彼等に對して、私達の人格を誹謗し、私達を亂暴者として汚辱せぬよう願ふものであります。』これらの出來事は婦人の組合組織に對して攻擊を加へる時、今日一般に狙はれる急所であるが、これはそれがアメリカで始めて行はれた例である。これより百年の後、理髮職人組合に加入しようとした婦人理髮師は、組合員自身の口から不道德な裏切者の名を與へられた。一九二四年に、シカゴで罷業を起した婦人服女工等は逮捕され、『全女性を耻しめる下等な女』と呼ばれて投獄された。

　百年以前も今日も變りない、この反抗する婦人勞働者への偏見は、あらゆる組織の方針はこれらの因習的な性に關する要素を必ず考慮しなければならぬことを敎へる。これは確かに、傭主、新聞、一般公衆からのみならず、又組織された男工等からさへ利用されてゐるのである。更に又、婦人には一般に階級意識がなく、また彼等を組合を組織したり、或はそれに加入したりしても、何等直接的な經濟的利益を得ることができないのであるから、婦人勞働者を組織する際には、經濟的誘因と同樣に社會的誘因をも含めて訴へなければならない。

　婦人勞働者を使用する產業における組合を仔細に點檢して見ると、これらの必要な條件を包含した何らかの特殊な組織計劃を立てた組合は殆んど絕無であるといふことがわかる。A・F・Lは、今までの歷史全體を通じて、男子組織者の莫大な數に對して、婦人組織者は三十八人しか雇つたことがない。一九二四年には、八つの全

國的な組合が婦人の組織者を傭つた。三十の組合は、特別な必要の起つた場合の外は男子組織者を使ふと公言した。そこで臨時雇ひの婦人組織者を雇つた譯である。

普通の組織運動は、或る罷業とか、勞働條件に關する一般的な不滿とかを中心とするものである。工業都市で婦人勞働者が自から進んで組織しようと企てた場合、彼等は常に勞働團體の機關又はその土地に婦人勞働組合同盟がある場合にはそれに請うて助力を仰ぐ。時折A・F・Lは、組織運動を應援するために婦人組織者をその都市に送つたこともある。然し大體に於て、婦人が男子の地位を脅かすやうな地位にある產業を除いては、婦人の組織に對して、自から責任を負うてゐるやうな勞働組合の團體は存在しなかつた。全國婦人勞働組合同盟はこれまで勇敢に獨力で戰つて來た。然し資金の缺乏と、勞働運動の誠意ある協力とを缺いた爲に過去十年乃至十五年の歴史を通じて、實際的な組織の仕事はいくらもすることができなかつた。

こゝで、種々異る組合の組織政策を研究することは興味がある。組織運動の間に用ひられるあらゆる方法、戰術を全部採錄するといふことは不可能であるが、其等の多くは次の章で論じよう。それには個人的に訴へるのと、大衆的に訴へるのとがある。この二つの方法から組織運動と、教育運動とが發展する。一方、婦人は、或る產業內で組織された男工が締切工場の契約（組合員外の雇傭を禁ずること——譯者註）を獲得したといふような場合に、自動的に組織されることもよくある。さういふ場合には、婦人の間における實際的な組織運動に費された眞實の努力は、取るに足りない程度のものである。（以下次號）

印度を勞働者共和國に

印度ナグプールに開かれた第十回印度勞働組合年次大會は、印度同性問題について一つの決議案を可決し、現在、印度の勞働狀態を調査中のホイツトリー委員會をボイコツトすべきことを主張すると同時に、先ごろ印度總督アーウイン卿が「印度における憲政進歩の最後の目的とするところは、印度に自治領としての地位を許すことにあると」宣言したことを非難し、その上、自治領印度憲法の草案を提議したネール報告案をも攻撃し、別の決議案を以て印度が自治制度でなく完全な獨立を獲得し、且勞働者共和國を建設すべきことを決議した。かく印度勞働組合會議は頗る急進的政策を採用したが、勞農勞働組合を中心とする汎太平洋勞働組合會議に對する參加案はその審議を明年度年次大會に延期することとなつた。

經濟發達史と女性

未開民族の中には「穀物の神」を「穀母」又は「穀娘」といつて女神として崇めてゐる者が多數にあり、ある地方では葡萄の如き「果物の神」も女性であり「農業神」も「地の神」も多くは女性をもつて表されてゐる。支那の「王道經濟」では穀物の種子を王后が保管しておくといふ噂もあつた。今日の文明國でも女性が種まきをする土俗の遺つてゐるのはこうした因緣を物語るものであつて、工業も商業も女性が開創したといふ主張が、經濟發達史上から說かれてある。とある經濟學博士がいふ。



東洋婦人の覺醒

（露）クラ、・ツエトキン

神近市子 譯

××十月の勝利とプロレタリヤ執權の確立と、ソビエット聯合に於ける社會主義の建設の開始とは、××××××、インタアナショナルに、東洋婦人の平等權の達成と解放とのための仕事の尨大な範圍、活動の可能性のある廣汎な分野を與へた。プロレタリヤ××が、女性の桎梏となつてゐた、屈辱的な鐵鎖を斷ち切つたといふ事實は、近東及び極東の婦人を圍んでゐた闇を煌やく火の柱の如くに照らしてゐる。彼等は今や數へ切れない長い間の薄明から醒めかけてゐる。彼女たちは自分たちも人間である。といふ意識を持ち始め、自分たちの中に、人間としての權利に對する欲求を感じはじめてゐる。

資本主義は、東洋にまでも入り込んで、婦人の××化のための道ならしを行つてゐる。しかもそれは西洋との密接にして不斷な關係をつくることによるのみではない。資本家的通商は、古い生產家庭經濟を、したがつて經濟的單位としての家族を破壞する。東洋の資本家的產業化は、それと共に婦人勞働者の、最も烈しい搾取を招來する。

尨大な婦人大衆は、家庭に於いての經濟的從屬からはなれ、又家庭そのものからも遠ざかつてゐる。しかし資本家屋主は――自國人であつても外國人であつても同じやうに――この從屬に自分の支配權を置きかへて、家長制的家族と男子の特權とによる婦人の社會的及び法律的な隷屬を廢止することを、助けやうとはしない。却つて反對に、資本家はより以上の利潤を搾り出すために、近代的生產の最新方法と社會の古代的狀態とによつて自分にのこされた隷屬化の權力とを結び合せて、この婦人の立場を利用してゐる。

私共は、ブルジョア的性質の婦人の權利運動が、ペルシャ、印度、日本、支那、特にはトルコに於いて、局部的成功を克ち得てゐることを知つてゐる。しかし乍らこれは、婦人の一般的な隷屬を支へてゐる主要な柱を倒したことにはならない。何よりも先づそれは、實際の權力と祖先傳來の經濟的且つ社會的の條件及び宗教的支

辱と欺瞞との傳説が、堪へがたきまでに搾取され且つ屈從せしめられてゐる婦人大衆の不幸を増してゐるところの、それら社會のドン底をいかんともすることができなかつた。

××××××、インタアナショナルは、帝國主義に對する民族鬪爭及びプロレタリヤの世界××のための東洋婦人の×××の非常な重要性を充分に認めてゐるのであつて、近東及び極東諸國の婦人の平等權と完全な解放をその目的の中に含むところの極めて困難な仕事を回避するものではない。これらの國家に於いてはその國のナショナル、セクションが、この目標に向つて進むために勇敢に且つ獻身的に指導につとめてゐる。それは勞農婦人に、婦人が男の慾望の奴隷でもなく、彼れの荷物を負う動物でもなく、或はまた金持や權力者のために利潤をつくる機械でもないといふ意識を與へつゝある。それは、自由な人間的權利の獲得への道を彼女たちに示しつゝある。それは受身で辛棒強い而もひそやかな慾求を、鬪爭の勇氣と鬪爭の力に變へつゝある。



ピオニールの卯遊

支那の青年×××によつて行はれた仕事は、その點ではよい手本である。それは女性解放の思想を、勞働婦人——工場勞働者、農民、プロレタリヤ及び小ブルの家庭婦人、智識階級などの尨大な大衆の中の實際的鬪爭精神にまで覺醒せしめて來た。而もそれと同時に、それはブルジョア婦人運動が實現に失敗した分野と希望とを、婦人の權利の爲めの鬪爭に傳へることに成功してゐる。こゝにこれを實證する澤山の事實の中から、その二三を述べて見やう。

一九二七年に、湖北に於いて開かれた婦人會議は、國際婦人大會として三月八日に開かれた。あらゆる階級の組織された婦人によつて送られた代議員達はその會議に參加したが、その中には二十二名の勞働婦人の代表者が含まれてゐた。會議は、モスコウに於ける×××××××、インタアナショナルの婦人部に、挨拶を送るといふことでその會を開いた。會議によつて作成された活動綱領の第一の文章は、『××は婦人解放のための唯一の道である』といふのであつた。だから婦人は更に××的鬪爭に於いて、男子と共に活動することを要求されたのであつた。

この會議のすばらしさは、しかし次のやうな有りの儘の數字の前では色を失うのである。それは、一九二七年四月には、南支那五省の勞働組合に、三二五、〇〇〇の勞働婦人が組織され、福建及び廣東地方には一四〇、〇〇〇の農村婦人が農民組合に入り、そして湖南に於いてはまた婦人聯盟は略々種々の社會層の二〇〇、〇〇〇の會員を持つてゐた。これらの數字は、單なる紙の上の統計ではない。××的闘爭の歷史が、それを證明してゐる。一九二六年三月八日の上海に於ける輝けるストライキ及び××に當つては、勞働婦人は戰線に於いて勇敢に戰ひそして倒れた。彼女たちは、一九二七年に於いてはそれらの事件の一周年記念を行なう大示威運動に活動することができた。

東洋の凡ての國に於けるがやうに支那に於いても××××××インタアナショナルは、女性の完全な解放の爲めの闘爭に一つの强力な味方を發見する。これは南東洋及びソビエット聯合の共和國及び自治制地方、及び中央アジヤに於けるプロレタリア××によつて達成された婦人解放の大事業である。プロレタリヤ××は、賣買のできる財產のやうなものであつた婦人を、充分な權利をもつ一個の人間の立場にまで高めた。そして固く戸をとざし閉め切られてゐた部屋から、公の生活に婦人を解放した。この事實は、東洋の婦人たちには夢想もされなかつたもので、それは婦人大衆の中に希望に滿ちた闘士と×をものともしない戰士の一隊を送り込みつゝある。

同じ目的の爲めに戰ひつゝある凡ての國、凡ての民族の兄弟姉妹との國際的協同、合盟の思想は、信念を同じくする人々の上に宗教的な信念の力をもつて働いてゐる。數百數千の婦人達は、新東洋會議に向つて突進しつゝある。その會議は人類に於ける彼等の立場に彼等を導くであらう。これらの婦人たちは、これ迄出口を見出し得なかつたところのかくされた、計り知れぬ實力と精力の蓄藏を持つてゐる。それ故に一度び解放されんか、この精力は永く氷に張りつめられてゐた河流が、遂にその氷の束縛を破つてその進路に隄防をも押し流す如くに、拒み難い力に展開するであらう。×××××、インタアナショナルの仕事は、この力を古きものを破碎して新しきものを創造するところの世界××の河床に導かうとすることにある。この仕事は尨大なものであると共に、その成功の爲めには責任を有するのである。

奇怪なポーの死因

エドガー・アラン・ポーの死因は今もつて疑問とされてゐるが大體において亂醉後の心臟痲痺か腦溢血で死んだとされてゐた。ところが最近ポーの死は飲酒の結果ではなく追はぎに襲はれてその際受けた負傷が原因となり死んだものとの說が有力となつてゐる、これはポーの臨終に立會つた醫師の手記が最近ポーの八十年忌記念出版で發表されたためである。

斷片三ツ　　村田千代

隣家の子僧の泣き聲が、毎日よく聞えるので、どうしてかと隣家の主人に尋ねたら、
「なに、あいつ、のぶくて、どやさにやあ動かねえ。」
今度は子僧にきくと、
「うん、何時も嘘泣きだい、泣かなきやあ何時までもどやされるんだい。」

生徒達に書取りをさせて居た教師が、貧乏と言ふ字を書けと言ひながら、
「お前達は貧乏人の子だから、書けない筈はない」と言つた。
そこで、其の中に居た、最も粗末な身なりで、最も頭の貧しい子が金持の子と言ふことになつた。

笹屋のばあさんと、竹屋のばあさんとで話して居た。
「いやだね、こんなになつても死ねぬで」
「本當にどうやつたら死ねるらね、」
その中に笹屋のばあさんが言つた。
「それでもね、此の間はあんまり大きな音がするので、急いで外に出て見たら、まあ丁度飛行機でね、それでこうして生きて居れば、種々のものが見られるでいゝわね」
すると竹屋のばあさんが言つた。
「わしはもうせんに東京へ行つて飛行機なんか見て來ちまつたわね。」
笹屋のばあさんは、一人の子供もなく、今は弟の家に身をよせて、家事の手つだひをして過して居る人である。
竹屋のばあさんは、子供は立派になり、孫も大きくなつて、する膳おき膳でゐる人である。



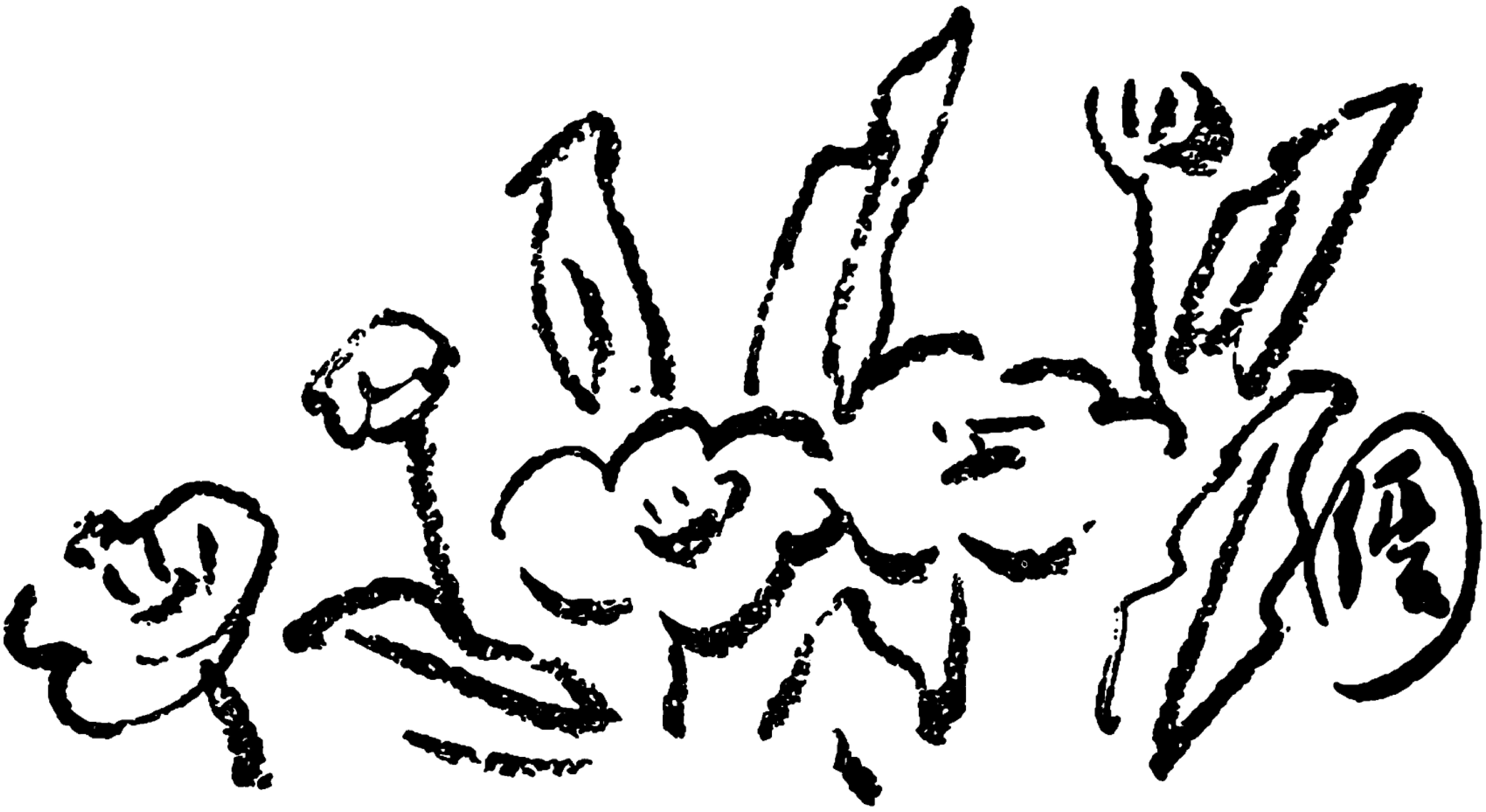
のぞみ

（愛）G・M・シング
中河幹子譯

日にたつた一しづくの涙が
あなたの頰の笑くぼに觸れるやうに、
そんな── 小さい望みで記されてゐる── 私でさへ
世界の五月の柱(メイポール)にからんでゐる薔薇の花を
獅子のわけまへほど多く
のぞむかも知れない。

この中に含まれてゐる多くの重い謎、
かなしみこそはキスの味である。

五月の日に



人目につかぬ所で、
そこは南の方だけひらけてゐた
あなたと僕は
口を近よせて
横たはつてゐた。

一羽の雪のやうな鷗と
すすけた鴉とが
飛んで來て
なんべんも啼きながら
私達を眺めた。

「そつくりだ」と私はいつた、
「あなたと僕のやうだ、」

あなたが僕にキスしてる時
おゝ青く黒く、かたがつく程！

公園の殺人

——隅の老人物語——

(英) オルツイ夫人作

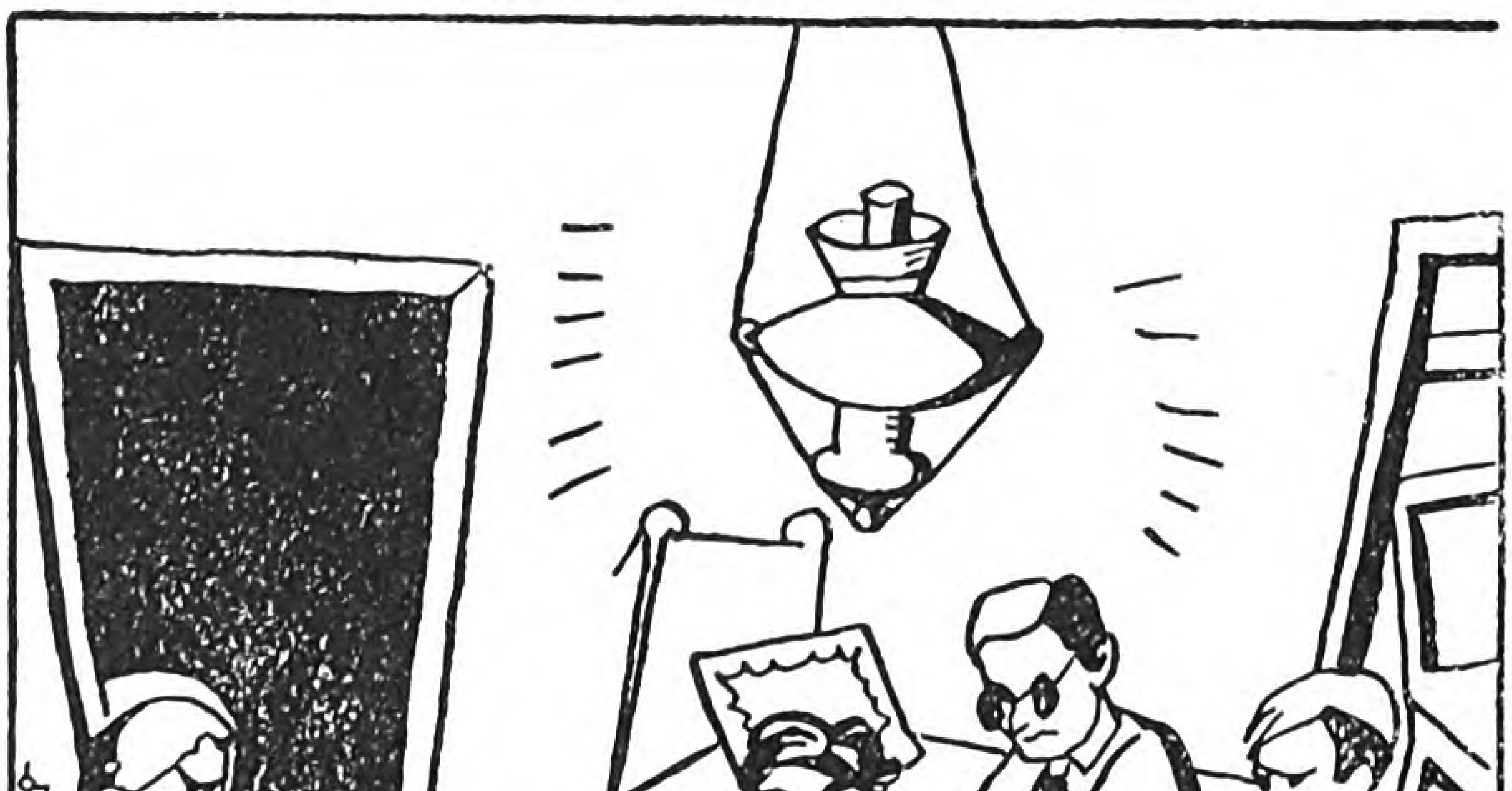
松本惠子譯

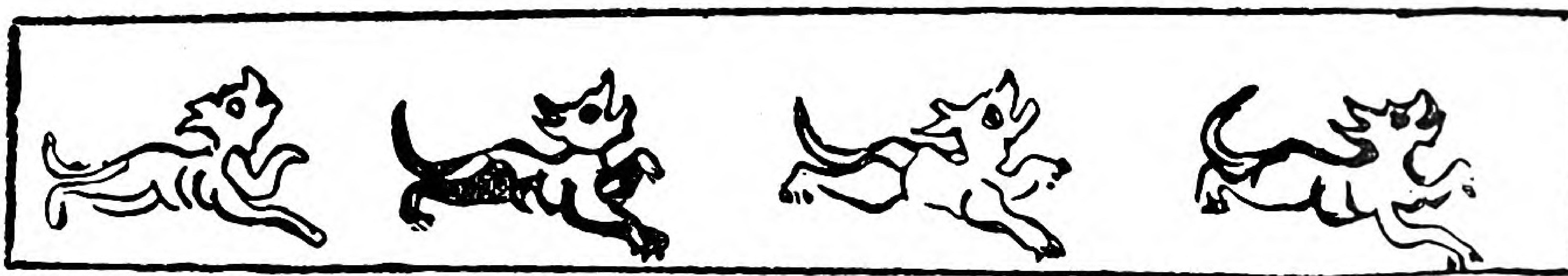
近頃、ポリイも、その不思議な隅の老人にすつかり馴れて了つた。彼女が晝食を攝る爲にA・B・C珈琲(カフェ)の店へ入つてゆくといつもきまつて、細(こまか)い碁盤縞の背廣を着た老人を隅の席に見出すのであつた。彼は滅多に挨拶らしい事をした事がない。只ポリイの顔を見ると、必ず落着かない樣子で、ポケットから一筋の糸切れを取り出して結んだり解いたり始める。

「貴女はリヂエント公園の殺人事件に興味をもつた事がおありですか？」その日も老人は突然に話しかけた。

ポリイはその奇怪な殺人に就いて殆んど忘れて了つてゐるが、倫敦社交界に非常な波瀾を起した事だけは朧氣ながら憶えてゐる旨を答へた。

「詮り貴女の仰有る社交界といふのは、競馬や、賭博に浮身を窶してゐる連中の事ですね。凡そ殺人事件の關係者といふものは、直接間接に、社會人とか、社交界の人物とか呼ばれてゐる人間に多いものですよ。ところでこの殺人事件の關係者といふのも、御多分に洩れず、倫敦でも有名なハーウード倶樂部員でした。尤もこの倶樂部が有名な賭博場であるといふ內情は、その時の殺人事件がなかつたなら、恐らく永久に警察には洩れなかつたかも知れません。貴女は、リヂエント公園とポートランド、プレースとの間に公園街といふ靜かな一帶があるのを御存知でせう。そしてその廣場と美しい共同庭園の傍をメリルボーンの通りが拔けてゐます。





時は千九百〇七年二月六日、稀な濃霧の晩でした。公園街三〇番に居住してゐるコヘン氏は、曉方の二時近く、ハーウード倶樂部の賭博室で奇利を博して得た金をポケットに押込んで自宅へ徒歩で歸つてゆきました。

それから一時間後に、公園街に住んでゐる人々は、二發の銃聲と、恐しい叫聲に、安らかな夢を破られました。

貴女も經驗がおありでせうが、濃霧の中で音響の方向を確めるのはなか〳〵困難なものです。けれども二分と經たない中にメリルボーン通りの角にゐた警官が馳付けました。そして同僚を呼集める爲に呼笛を鳴らしたので、忽ち界隈は大騷ぎになりました。附近の窓から首を出した人々が、口々に、

——警官、もつと柵によつた方ですよ——

——もつと上手の方です。——

——下の方です——

——こつち側の人道に近い方に違ひありませんよ。——

——いや、向ふ側だ——

そんな騷ぎを演じてゐる中に、北の方から廣場へ入つて來た警官二十二號が、共同公園の柵の際に頭を向けて倒れてゐる死骸に危く躓かうとした。そこへ附近の人達が集つてきました。

警官の一人は强烈な懷中電燈を顔に向けて、

——絞殺されたらしいですな——と同僚にいひました。そして腫れ上つた舌、飛出た眼球、紫色になつた顔の色等を指摘しました。人々は被害者の顔を覗き込みました。すると其中の一人が驚愕の聲をあげました。

——これは三〇番地のコヘン氏だ——

居合せた人々は皆その名を知つてゐました。

——確に私の隣家に住んでゐるコヘン氏に違ひありません——エリソンといふ若い辯護士が前に進み出ていひました。

——一體、こんな時刻に、この霧の中で何をしてゐたのだらう？——と誰かゞいひました。

——この人はいつも夜遲く家へ歸つてくるのです。何處かの賭博倶樂部か何かの會員らしいのです。屹度、こんなに遲くなつて乘物が見つからなかつたので徒歩で歸つて來たのでせう。いや、こんな事をいつたからつて、私は決してこの人と親しい間柄だつた譯ではありません。唯、會へば頷首合ふ位の程度なのです。——

——隨分念の入つた殺し方をしたものだな。犯人は屹度この男を確實に殺して了ふ決心だつたらしい。あゝ、こゝに拳銃が落ちてゐる。三發うつてある。貴殿方は拳銃の音をきゝましたか？——警官は人々の顔を見渡しました。

——だが射殺されたのではない。確に絞殺だ——

——被害者がその拳銃で相手に應戰したのですね——若い辯護士がいつた。

——相手に彈丸が命中してゐたら、犯人を捕へるに便利でせうにね——

——然しこの霧では……——

一同がこんな會話を交してゐるところへ檢屍官の一行が到着しました。そして三〇番の家の扉が叩かれました。コヘン氏の

雇人は死骸を一見して、主人コヘン氏に相違ないと申しました斯くして不幸なコヘン氏の死體は寢室へ運び込まれて、そこで審問が行はれました。然しその取調に於ては、これといつて手掛りとなるやうな材料はあがりませんでした。近所に住む人々もコヘン氏の雇人達も、コヘン氏の生活に就いて餘り精しくは知つてをりませんでした。唯スログモートン街の事務所へ毎日出掛けてゆく事、大抵は家で夕飯を認める事と折々友人を晩餐に招待した事、客のない日は夕食後倶樂部へ出掛けていつて、曙方でなくては歸宅しないのが常であつた事等が明かになりましたが、雇人達はコヘン氏の行く倶樂部の名さへ知らない有樣でした。

兇行のあつた晩、コヘン氏は九時頃に家を出掛けました。雇人等が主人を見たのはそれが最後でした。死骸の傍に發見された拳銃に就いて四人の雇人等は曾て見た事のないもので、若しコヘン氏が其晩購入したものでなければ、氏の所有品ではないと申立てました。

打ち見たところ、殆ど犯人の手掛りはありませんでしたが、翌朝になつて表通りに面した共同庭園の門の傍に鎖でつないだ二個の鍵が落ちてゐたのが發見されました。その一つはコヘン氏宅の玄關の鍵で、もう一つは共同庭園の合鍵でした。それ故に犯人はコヘン氏を殺した後、所持金を奪つて逃げて行く途中、鍵だけ投げ捨てゝ霧の中に姿を消して了つたのであらうといふ事になりました。

夫れから一週間目に、この事件を擔當した腕利のフヰシヤー刑事は、社交界でも有名な二人の若紳士を逮捕して世人を驚かせました。フキツシヤー刑事が調べたところによりますと、二月六日の夜、ハバナー街のハーウード倶樂部に於てコヘン氏は二三十人の仲間を向うに廻して「銀行」といふ賭博をやりましたところ、當親の大當りで、莫大な儲けをしました。その晩一番酷い負けをしたのは、地主の息子のジヨン、アツシレーといふ青年でした。ジヨンが借金で首が廻らなくなつてゐた事は仲間中に知られてゐました。それに彼はそれまでに度々借財をこしらへた爲に父親から濠州へやつて了ふと嚇されてゐました。そんな譯でジヨンは自分の負債を返却する爲に賭博で一儲けしやうと躍起となつてをりました。當夜ジヨンはコヘン氏の前に最後の金を全部積んで、一か八かやつた譯です。其時彼の友人達は、その無謀を思ひ止らせようとしましたが、强い酒を叩つてゐた彼は友人の言葉など耳に入れませんでした。そして遂に翌朝の午前一時には文字通りに一文なしになつた上、コヘン氏に對して一萬五千圓の借財をこしらへて了ひました。賭博の借金は何をおいても支拂はなければならないといふのは斯道の人々の間の不文律です。

コヘン氏は運のつかないジヨンに幾度か勝負を中止したらどうかと忠告しましたが、勝つてゐる方からそんな事を云ひ出すのは工合が惡いので、强いて云ひ張る譯にはゆきませんでした。それにジヨンの方では自棄になつてゐて、二度もコヘン氏に喰つてかゝるやうな態度をとりました。その結果は前にいつた通りコヘン氏の大勝となつたのです。

友人達はジョンを宥めて無理に歸宅させました。殊に彼の親友ウォルターは。これもジョンに負けを取らない向ふ不見な青年ですが、流石にこの時はジョンの莫大な負債に驚いて、常に似ず、無理にジョンを引立てるやうにして一緒に倶樂部を出てゆきました。それは二時二十分前でした。

「さアこゝからが、いよ〳〵面白くなるところですよ。」隅の老人は鳥渡間をおいて語り續けた。

「ジョンを送つていつたウォルターは十分計りして又倶樂部へ歸つてきました。詮り二時十分前に歸つてきたのです。それに就いてウォルターの說明は、――ボンド街の角までゆきましたけれども、ジョン君はピカデリー街を少し步いて歸るといひましたから、却つてひとりにする方が、氣が鎭まつていゝと思つて別れてきたのです――といふのです。

偖、コヘン氏の方は上機嫌で、勝負が終つて後、ゆつくりと煙草を吸つたりして、丁度二時になつてから、ポケットを膨らませて徒步で歸途につきました。それから三十分して、ウォルターも倶樂部を出ました。

そして、「人殺し！」といふ叫聲と二發の銃聲とが濃霧を破つて響渡り、コヘン氏の絞殺死體が共同庭園の柵の近くに發見されたのは三時でした。」

二

偖、このリヂエント公園の殺人は最初の一眼で、警察でも世間でも、ごくありきたりの初心者が單なる物取りの目的でやつた犯行であると認めました。それ故犯人を擧げるのは實に雜作ない事だと考へてゐました。

「犯行によつて利益を得るものを探し求めよ」といふ佛蘭西の犯罪學者の言葉に從へば、この場合ジョン程明確な犯罪動機をもつてゐる者はありません。

チェームス巡査は當夜ポートランド通りから新月街に向つて巡回中、絹帽（シルクハット）の二紳士が共同庭園の柵に凭りかゝつて立話をしてゐるのを見掛けたさうです。その頃はまだ霧が左程まで深くなく二人の姿は見えましたが、薄暗いので顏は見えなかつたといひます。丁度巡査が傍を通つた時、その一人が「ねえ、コヘンさん、時日の問題だけですよ。親父は必ず金を拂つてくれます。ですから貴殿に御損はかけません。」と云つてゐるのを聞きました。その鳥渡前にメリルボーンの敎會の時計が二時半を報じたさうです。巡査はそれに對する相手の答は聞かなかつたさうですが、そのまゝ行過ぎて、再びその場所へ戻つた時には、二人の紳士はもう何處かへいつて了つてゐました。翌朝、例のコヘン氏の鍵が發見されたのは、丁度紳士が立話をしてゐた邊でした。

「次に興味のあるのは、死骸の傍に發見された拳銃です。ジョンの從僕はその拳銃を若且那樣のものだと證言しました」隅の老人は意味あり氣な微笑を口邊に泛へながら言葉を續けた。

「これらの事實はジョンの身邊に遁れ難い證據の網を張りました。それで警察では事件發生後一週間目に、ジョン・アッシレーを逮捕しました。



然し、私の　驗では、犯罪の遺口が餘り不手際で、すぐ犯人が見透かされるやうな場合には、却つて犯人を取逼して了ふものです。それ故犯人に對して餘り明確な證據があがつた場合はよほど、愼重な態度をとらなければなりません。

檢事は證人を次から次へと出して、ジョンの有罪を主張しました。夫等の證人は主にハーウード倶樂部の連中でした。彼等は口を揃へて、當夜被告が賭博に負けてコヘン氏に負債をこしらへた顚末を述べました。ジョンの親友ウォルターさへ、もその事實を肯定し、尙二時二十分前にジョンを送つていつて、ボンド街の角で別れたきり、當夜彼に金はなかつたと證言しました。

次にジョンの從僕アーサーは當夜若主人ジョンが二時十分前に歸宅し、五分計りして再び外出して、翌朝は何時に歸つてきたか知らないと申立てました。家へ鳥渡歸つたといふ事は拳銃を取りに行く爲であつたらうと誰しも思ひました。夫故ジョンの友人等はこの證言を聞いて、最早ジョンを救ふ途がないと絕望しました。

從僕の證言と、ジョンがコヘン氏に借金の辯疏(いひわけ)をしてゐるのを聞いたといふ巡査の證言とは、ジョンに取つて致命的なものでした。

私が法廷に於て最も興味をもつて眺めてゐたのはジョン、アツレーの顏でした。ご覽なさい、この寫眞の通り、小造りで眉の濃い、少し氣障な服裝をしてゐますが、なかなか利口さうな青年紳士です。彼は落着拂つて、折々辯護人と言葉を交すきり、冷やかに人々の證言に耳を傾けてゐました。そして恰も夫等の證言を輕蔑するやうに肩を窄めたりしてゐました。

檢事はジョンが恐しい程多額な負債にかつとして家まで馳け歸り、拳銃を持つてきてコヘン氏の歸途を待伏せ、返濟期の猶豫を乞ひ、それが容れられなかつたので、後をつけていつて、隙を見て襲ひかゝつたのであらうと斷定しました。そして被告はコヘン氏を絞殺した上、蘇生を惧れて拳銃を二發もうつたが昂奮してゐた爲に手先が狂つて的を外れたのであらう。尙犯人はコヘン氏の所持品を奪ひ、鍵を得たので人に出會ふ心配のない共同庭園を拔けてポートマンド街方面へ逃去つたものだと述べました。そして彼が拳銃を現場へ落していつた事は實に攝理の然らしむところであると附加へました。

然しながら被告席にゐたジョンは檢事の嚴しい言葉に、聊も怯む樣子はありませんでした。

ジョンは、峻烈な質問をもつて數多の證言を覆すやうな、そんな素晴しい辯護人は雇ひませんでした。ごく溫順しい二流どころの辯護士がつゝましやかに立ちました。そしてポートランド街のアントン倶樂部から三人の證人を呼び出しました。

その三人は二月七日の曉方三時に、被告ジョンは同倶樂部にゐた事を證言しました。この他に證人を出さうと思へば十數人あるといふ事でした。「人殺し！」といふ叫聲が公園街に住む人々を驚かせた時刻には、ジョンはアントン倶樂部で夫人等の三人の友人と骨牌をしてゐたのです。尙、同倶樂部の玄關番は其夜ジョン、アッシレーは三時少し前に來て、四時頃まで倶樂部にゐたと證言してゐます。

いふ迄もなく、この現場不在證明(アリバイ)は人々にとつて青天の霹靂でした。如何なる巧妙な犯罪者と雖、同時に二つの場所へ姿を現はす事は不可能です。

ジヨンが最初から終りまで飽迄も沈着な態度を保ち續け、訊問に對しても、淀みなく答へてゐたのも道理です。彼はそれだけの現場不在證明を得れば何にも惧れる事はないといふ自信を抱いてゐたのです。例の拳銃に就いても彼は、

――私はコヘン氏の諒解を得る考で倶樂部を出たのです。何故かといふと、私は他の友人達の大勢ゐる前で借金の辯疏をするのが厭だつたのです。私は一旦家へ歸りましたが、それは拳銃を取りにゆく爲ではありませんでした。私は其夜家を出る時に拳銃を持つてゐました。これは霧の深い晩は不用心だから、外出する折にはいつも護身用に携帶してをるのです。私が倶樂部を出てから家へ歸つたのは大切な手紙が來てゐるかどうかを見る爲だつたのです。夫れから私は再び家を出てハーウード倶樂部の近くでコヘン氏に會ひました。そして一緒に歩きながら話をしました。丁度共同庭園の鐵柵のところで立話をしてゐるところを通りかゝつた巡査に見られたのです。コヘン氏は快く私の申出を容れて呉れました。そして共同庭園を拔けて家へ歸らうとしましたから私はそんな暗い路をひとりで通るのは危險だから本通りをゆくように勸めました。然しコヘン氏は庭園を拔ける方が近道だからといつてきゝませんので、大金を懷中してゐて萬一の事があつてはならないから、私の拳銃を持つてゆくようにいつて貸してあげたのです。私は何も盗まれるものは持つてをりませんでしたし、それに通り馴れた道を歸るのですから拳銃の必要はなかつたのです。こんな譯でコヘン氏は私の拳銃をもつていつたのです。私がコヘン氏に別れた時、教會堂の時計が三時十五分前を報じました。夫れからオックスフオード街を經て、三時五分前にアントン倶樂部へ着きました。――

誰が考へても絞殺した上、徒らに世間の注意をひくやうな拳銃の音など立てる筈はありません。それ故コヘン氏が賊に背後から襲はれて、夢中になつて空中に向けて拳銃をうつたのであらうといふ事が想像されました。從つてジヨンのこの陳述には聊かの無理も見えませんでした。斯くしてジヨンアツシレーが、夫れから三十分後には青天白日の身となつて法廷を出た事に就いては、貴女も何の異議はないでせう。」

三

「えゝ、でもあの恐ろしい事件は夫だけでは濟みませんでしたわ……」ポリイは熱心にいつた。

「貴女の仰有るのは、人々の疑惑がジヨンの親友ウオルターに移つた事でせう。世間の人々ばかりでなく警官でもウオルターが親友を救ふ爲にやつたのではないかと疑ひました。けれども警察ではウオルターを擧げるべき證據を何一つ得る事が出來ませんでした。第一ジヨンとコヘン氏とが立話をしてゐるのを警官が見かけた時刻には、ウオルターはまだ倶樂部にゐました。それ故、彼が若しコヘン氏を殺す心算(つもり)であつたら、もつと早く倶樂部を出る筈だといふのです。詮りこゝでも現場不在證明が



立つた譯です。」

「けれども……」といひかけたが、ポリイにはどうしてもこの事件の謎が解けないので、眉を顰めて考へ込んで了つた。隅の老人は心地よげに笑ひながら、

「お解りになりませんかね、貴女がジヨンの立場になつたとして考へてご覧なさい。コヘン氏を殺して大金を奪ひ、現場不在證明を立てゝ、警察を煙に卷いて了ふんです。」

「私にはそんな便利な事は出來ませんわ。半哩も離れた二つの場所に、同時に姿を現はすなんて……」

「無論出來ませんとも、友達がなくてはね……」

「友達？」

「私はこの芝居の筋書をこしらへたジヨンの頭腦のいゝのには敬服しますよ。けれども彼と雖も、傍役がなかつたら、これ程巧名にこの恐ろしい芝居を演じおほせなかつたのでせう。」

「それにしても……」

「第一にジヨンとウオターとは最初一緒に倶樂部を出ました。そして二人で筋書を打合せました。ウオルターは倶樂部へ歸りジヨンは拳銃をとりに家へ歸りました。この拳銃は重要な役を勤めたのです。偖、これからです。貴女はコヘン氏の後を跟けてゆくジヨンになつて想像してご覧なさい。貴女はジヨンがコヘン氏に話しかけたと思ひますか？　金の辯疏なんかをしたと思ひますか？　いゝえ、そんな事はしません。彼はそつと背後から忍び寄つて、突如咽喉を締めました。コヘン氏は少々中氣でしたし、ジヨンは若くて腕力がありました。その上彼はどうしても相手を殺して了はうと決心してゐました。

「でも二人は共同庭園の柵のとこで立話しをしてゐましたわ。」

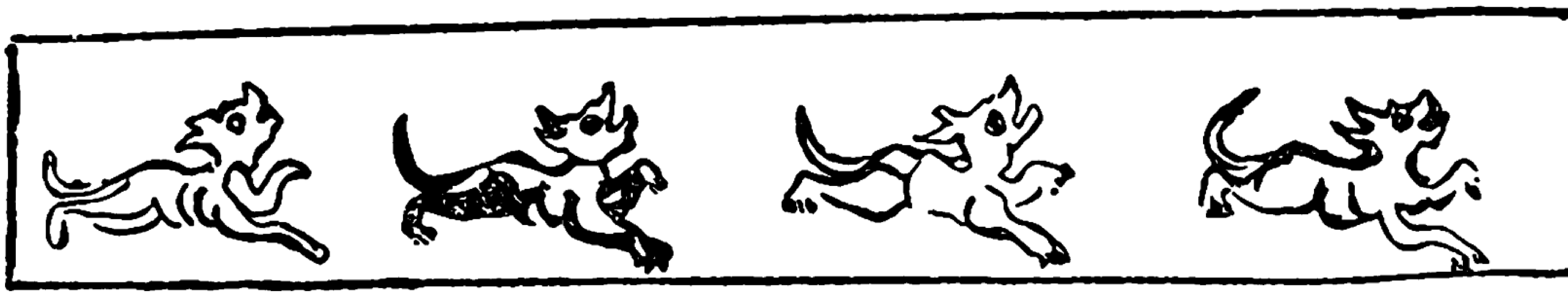
「ご免なさい！　二人は話してゐませんでしたよ。巡査の證言では柵のとこに二人の紳士が凭れかゝつてゐて、その一人が話をしてゐたのです。」

「では貴老は……」

「巡査が教會堂の時計が二時半を報じるのを聞いた時には、コヘン氏は既に死んでゐました。ジヨンは死骸に話しかけてゐたのです。そして巡査が通り過ぎて了ふと、コヘン氏の死骸を擔いで共同庭園を拔けて、公園街へ出ました。途中で人に會ふ惧れもなければ、その時刻の、而もあの霧の中では人足の吐絶えてゐるのは知れきつてゐます。

偖、倶樂部を出たウルターは全速力で走つてきて、豫て打合せしてあつた通り、ジヨンが開放しておいた共同庭園を拔けてジヨンに追ひつきました。そして彼と協力して死骸を鐵柵の際に横たへました。それと同時にジヨンは再び庭園を拔けて、先刻巡査に立話をしてゐると見せかけた場所に鍵を捨て、アントン倶樂部へ急ぎました。死骸の傍に立番をしてゐたウオルターは、ジヨンがアントン倶樂部に到着した時間を見計らつて、「人殺し！」の叫びをあげ、犯罪の行はれた時刻を界限の人々に誤り知らせる爲に拳銃を二發放つたのです。そして彼は霧に紛れて姿を消して了つたのです。」

一氣に述べ終つた老人は、ポリイが尚も質問しようとしてゐる間に、さつさと席を立つて店を出ていつて了つた。（完）



モレラ

（米）エドガア・アラン・ポオ
尾崎翠譯

裸身（ひとり）、ただ裸身（ひとり）こそ、涯しなく、淸（すが）しきものなれ——プラトオ「論集」

底知れぬ愛着と世の常ならぬ感動で私は友人たちのモレラに心を惹かれた。そのかみ、ふとしたことから彼女の交際仲間に投げこまれた私の心は、最初逢つただけで、つひぞ知らぬ火に燒かれた。けれどこの情焰はエロスの領土（もの）ではなかつた。

このもやもやとしたとらはれた心をはつきりさせ、掴みどころのない焦慮を抑へることはとても私には出來なかつた。それを次第に氣づいてゆくことは、苦い、堪らない苦しみだつた。けれど、ともかく私たちはめぐり逢ひ、運命は私たちを結婚させた。私は情熱を口にせず、愛についても考へないようにしてゐたが、けれどモレラは世間を避けてただ私は愛着した。それは奇蹟かと愉しく、夢かと樂しいことだつた。

モレラの學識は深かつた。私が自身に望んでゐたことだが、彼女の才分はありふれたものではなかつた。記憶力は偉大だつた。私はそれを感じ、そしてあれこれの理由から彼女の弟子になつた。

彼女は私の前にたくさんの神秘書類を並べた。私はその時ふと、彼女のプレスブルグ敎育も好いかげんなものだと思つたのだが、この神秘書はたいてい初期獨逸文學のほんの屑としか思はれてゐないものなのだ。彼女が何のためにそんなことをするのか私には解らなかつたが、これ等の文獻は彼女の好きな、熱心な硏究の對象だつたのである。しかも時が經つにしたがつてそれ等は次第に私自身のものになつてきた。そして、これは、モレラの大きい同化力の罪なのだ。

私の思ひちがひでないならば、私の理性はいつたいに怪しいものだつた。制御のない私の信仰：無闇に理想に影響され、私

が啓發されようとして讀んだ神秘主義の片影さへも留めてゐたかつた。私が自身の行爲やら考へやらにひどく思ひちがひをしてゐるのでないならば。

私はつひに氣ちがひのやうに妻の指導に一身を委ね、撓まぬ心臟を彼女の學問の迷宮の中に打ち込んだ。そしてそれからそれから、禁斷のベエチを凝視してゐる時、心臟の奥底に私は禁斷のスピリットを感じたのだ。モレラは冷たい手を私の手の上に置き、哲學の死灰の中から、低い、不可思議な言葉を吐いた。その妙な意味は私の記憶に燒きついた。それから彼女の身邊をくづつき、彼女の聲の美しさに聽き入りたい願望は刻刻に募つてきた。つひにそのしらべが恐怖で塗りつぶされる時が來るまで、そして私の心中には一つの影法師が降りかかつた。私は蒼くなつた。そしてこのあまりにも妖しい音調で身內がぞつとした。――かうして歡喜は戰慄に突變し、いちばん美しいものはいちばん忌まはしいものと化した。ヒンノムの谷が常闇の國と化したやうに。

さきに私が擧げた書物から得た研究の詳しい性質については述べる必要はないが、それは長いあひだモレラと私の世にも珍らしい會話となつた。私たちの研究は世の識者からは神學的道德律とでも呼ばれ、無學の徒には所詮生かぢりしか出來ないやうなものだつた。フイヒテの汎神論、ピタゴラス派の輪廻說を修正したもの、殊にシエエリングによつて促進された同一說等は、その論議のポイントが、想像の豐かなモレラにとつては美の極致だつたやうだ。可動的であると言はれてゐるこの同一性を、ロックは、理性的存在の同一から成立すると定義してゐるやうだ。そして爾來吾吾は人格に依つて叡智の本質を正當に理解する。また爾來そこには常に思惟を伴ふ意識がある。この意識こそ、吾吾を吾人が「アワセルブス」と呼ぶものに合致させるものなのだ。かうしてこの考へは吾吾を他の存在から區別し、人間の人格的同一性を吾人に與へてゐるのだ。

しかしながら、私にとつていつも強い興味の對象となつたのは、この同一性が「死に當つて永久に喪はれるか否か」といふ概念――個體化の原理だつたので、モレラがそれについて書いた印象づよい煽動的な手法でもなく、その結果の複雜な刺戟的な性質でもなかつた。

けれど、つひに時が來た、妻のマンナアの神秘が邊術のやうに私を虐げる時が。私はもはや彼女の蒼白い指の觸感に堪えることが出來なかつた。音樂的な言葉の低いひびきも。暗いまなざしも、――彼女はそれをみんな知つてゐた。しかし責めなかつた。彼女は私の脆さや莫迦さかげんをよく知つてゐたのだ。そして微笑みながら宿命だと言つた。彼女は私の凝視が次第に氣ちがひめいてくる原因をも知つてゐるやうだ。(私には解らない)。併しその性質について暗示も證明もしてくれなかつた。

とはいへ、モレラもやはり女だつた。彼女は日に日に瘦れて行つた。やがて頰は深紅にのぼせ、秀でてきた蒼白い額には碧い靜脈が浮いてきた。そして私の魂はある瞬間には忽ちに哀憐の情にかられ、次の瞬間には彼女の意のこもつた瞳の氣高さに出逢つた。かうして私のたましいは病み、何か陰慘な、底知れぬ

穴に落ちこむやうな眩暈でよろけた。

私はそれからモレラの死ぬ間際まで、切ない、焼きつくすやうな情慾で憬れたと言へるだらうか、さうだつた。幾日も、幾時間も、そして長つたらしい幾月ものあひだ、脆いたましひは肉體の棲家に執着した。締めつけられるやうな神經が「心をのり超えて勝利を獲るまで。」そして私はぐづぐづを通り越して狂暴になつた。私は惡魔の心でこの實につたらしい日を、時間を、苦い瞬間を咀つた。彼女の穩かな生活なんか薄暮の幽靈のやうにひしやげてしまへば好いのだ。

秋の一夜、大空にはまだそこはかとない匂ひの漂つてゐる頃モレラは私を側に呼んだ。じめじめした霧雨が世界いちめんをこめ、靄は川面に白白と光つてゐた、そして森の繁つた秋の樹々の中には蒼空から虹が鮮かに落ちてゐた。

「あの日よ」私が近づくと彼女は言つた。「たうとう、生きるにも死ぬにも好い日が來たのよ。地上の子等と生活には美しい日、ああ、天上の娘たちと死とにはよけい美しい日よ」

私はモレラの額に接吻した。モレラは續けた。

「私は死にかかつてゐるのよ。まだすこしは生きてるでせうけれど」



「モレラ」

「あなたが私を愛して下すつた日は一日だつてありはしなかつたわね。生世のうち、あなたは憎みこそなすつたけれど。でも死んだら氣ちがひのやうに憬れるでせうよ」

「モレラ」

「もいちど言ふわ。私死にかかつてゐるのよ。でもね、私、お胎に赤ん坊がゐるの、あなたが私に、モレラに感じたほんのささやかな愛のしるしが。ね、私の死ぬとき赤ん坊が生れるのよ。あなたとモレラの子供が。でも、あなたの月日は悲しい月日よたぶん。あなたのその悲しみは、數數のおもひでの中でいちばん涯しのないおもひでだわ。樹のうちでいちばん命の糸杉のやうに。けれど、あなたの長い幸福がすぎ去つても、あなたの生世のうちに歡びは二度と來やしないのよ。ペスタムの薔薇が年に二度咲くやうには。そしてあなたはマアトルとぶどうの樹には緣のない莫迦になつて、生きながら經帷子を着ると好いわ、メッカの回教徒のやうに」

「モレラ。モレラ、どうしてお前はそんなことを知つたんだ」



けれど彼女は枕の上の顔をそむけた。かすかな戰慄が彼女の腕をかすめた。かうしてモレラは死んだ。そして私は再と彼女の聲を聞かなかつた。

さてもモレラが豫告したとほり子供が生まれた。モレラは死んで行きながら生んだ。子供は母が呼吸をしなくなつた時初めて呼吸をした。娘だつた。

子供は身丈と智力とが不思議に發育した。そして亡き人にそつくりだつた。私は地上の誰にもまして子供がいとしかつた。けれど、程なくこの聖い愛情の天國は暗くなつて來た。闇と恐怖と憂愁が、純愛の天國をあとかたもなく追ひやつてしまつたのだ。

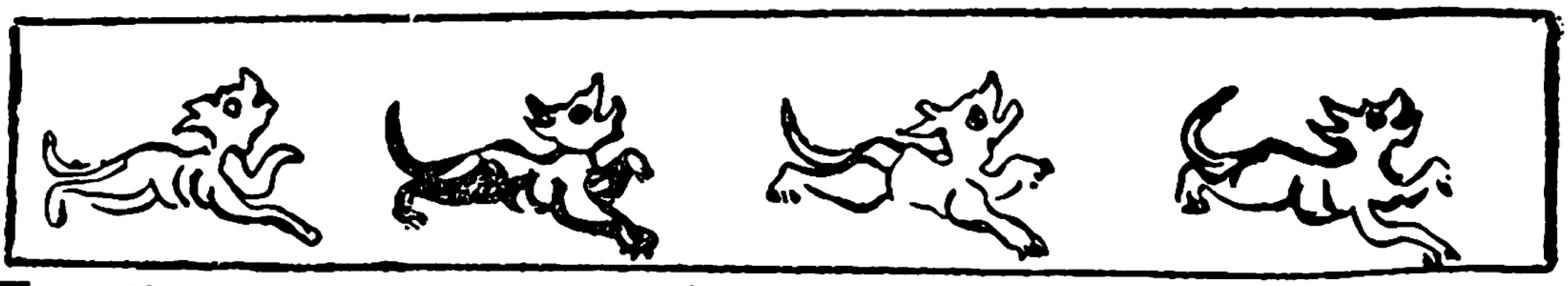
前に言つたやうに子供の身長と智力とは異常に發育した。まつたく身のたけは驚くばかりぐんぐんと伸びた。けれど、ああ何と怖しいことか。あれの心的生活の發育を眺めてゐるあひだに、私の心中には轉倒した思ひがこみ上げて來たのだ。けれど私は、思ひ亂れない譯に行つたであらうか、日日子供の想像力の中に女として成熟した力と才能を發見した時。幼いものの唇から大人びた言葉が洩れた時。また大人らしい智恵やパッションがあれの情の溢れた、思索的な眼からひらめくのを刻刻に發見した時に。

こんな風に、膽の冷えるやうな私の本性が明らかになり、そして私がもうそれを自分に秘しきれなくなつた時、私はこの聞いただけでぞつとする數數の惡癖から遁れることはできなかつた。何と惘れはてた邪靈であらう。怖しくも際立たしい一つの靈が、私のたましひにこつそり忍び込んだのだ。或は私の考へは、埋めてしまつたモレラの氣ちがひめいた話と、身の毛のよだつやうな學説に後戻りしたのだ。

私は運命が私に熱愛を強いた者を、世のあらなみから精いつぱい庇つた。そして私の家、嚴格なかくれがで、いとしい者に係はりのある一切のものに對して、切ない思ひで監視した。

こんな風にして月日が過ぎた。來る日來る日を、私は、娘の聖く、よわよわしい、思ひの潜まつた所を眺め、その伸びてゆく姿を眺めて過した。また來る日來る日に、私は、娘の中に新しい類似點を發見しなければならなかつた。ふさぎやの、亡くなつてしまつた母親への類似點を。時間ごとにあれのおもかげは暗くなり勝つた。より完全、より明確、より複雜、よりいとはしい、より怖しいこのおもかげ。

あれの微笑はモレラに似てゐた故に堪えることができた。けれど、けれど、あまりにもそつくりなことが私を身ぶるひさせる。あれの瞳はモレラのに似てゐた故に私は耐えることができた。ああ、しかし、あれの二つの瞳はあまりにたびたび私のたましひの深味をのぞき込む。モレラ自身の強さで。そしてモレラ自身の心を掻きみだす意味あひで。そして秀でた額のかたちに、やわらかい、ちぢれ毛に、組みあはされた蒼白い指に、話すときの燻んだ美しい聲に、そして何ものにも、おお、何ものにも増して、可愛いものの唇に浮ぶ亡き人の言葉つきと音色に私は糧を見つけた。消えかかつた脅かしさと恐怖のための糧を。そして殺しても殺しても死なない蛆虫のための糧を。



このやうにして娘の生涯の二つの盛事が行なはれた。娘にはまだ地上の呼び名がなかつたので、「好い子」「可愛い人」父親はいとしまぎれに大抵さう呼んでゐた。そしてあれの毎日毎日の嚴格なかくれがは、他との往來をいつさい絕たれてゐた。

　モレラの名は彼女の死と同時に消えてしまつた。私は決して母親のことを娘に話さなかつた。それは打ちあけられないことだつたから。まことに娘の短い生涯は、他の世界からのおもひでひとつなくて終つた。狹つくるしいかくれがのおもひでを除いては。

　さはれこの思ひ亂れた、ぐらぐらな境涯に在つて、私はつひに洗禮式を思ひ立つた。この思ひたちは運命的な恐怖からちよつとのあひだ私を救つてくれた。

　——洗禮盤の側で、私は名前を口ごもつてゐた。たくさんの名前を。聰さうなのや美しいの。古めかしいのや當世風の。自國風なのや外國風の。たくさんの名前が唇に犇めいた。たくさんのたくさんの妖やしい、しづかな、幸福な、善良な名前が。

　何があの時私を煽つたのか、もう心の奧深く埋もれてゐた死の記憶を掻きたてようと。どんな惡鬼が私を急きたてたのか、あの音を吐きださせようと。この音、思ひだしただけで紫色の血が顳顬から心臟へ逆流したものだ。そしてどんな惡魔が私のたましひのどん底から語るのか、（その時私はうすぐらい會堂の側廊にゐて、夜の靜かさに包まれてゐた　私が坊さんの耳に囁いたこの綴り——モレラは。

　けれど、その時、惡魔以上の得體の知れない奴が、いとしい者の顏を痙攣させ、死の叫喚であれの顏をひつ摑んだ。刹那、漸く聞きとれる聲を發しながら彼女はどんよりした眼を地から空へ向け、累代の墓地の黑い墓標に身を屈めた。そして應へた

「此處にゐるのよ」

　冷かに澄み徹つた、底氣味惡いほどはつきりした言葉すくない音聲が耳の內側に聞えた。それから私の腦味噌にどろどろに鎔けた鉛のやうなものが冷たい音をたてて流れ込んだ。

　月日は過ぎ去らうとも、その時の記憶だけは決して！そして私は數數の花と葡萄の樹に緣のない莫迦ではなかつた。夜も晝も私を暗欝にしたヘムロックとサブレスを除いては。

　そして私はもはや時間をも空間をも問題にしなかつた。私の運命の星は天上から忘れられてしまひ、だから地上は暗くなつた。そして心の中を數知れぬ影が行きすぎた。ふわふわと浮游してゐる亡靈のやうに。私はそれ等の中にただモレラだけを見た。

　大氣は私の耳にただひとつのひびきをのみ吹き送つた——モレラ。海のさざめきは恒久に呟いた——モレラ。

　しかしあれは死んだのだ。私はこの手であれを墓窖へ抱え込んだ。そして、第一のモレラがあとかたもなくなつてゐるのを知つた刹那、私は尾を曳いた苦い笑ひを笑つた。第二のモレラを臥かした納骨堂の中で。

奇妙な商賣倶樂部

(英)G・K・チエスタアトン

高橋鈴子譯

人間は概して人生の一小事件を非常な危險の狀態のものに化して怖れるものである。

事實の重大事件より一小事件の戰爭に對して…怖れを持つ。――古世代の巨象さへ長い間には完全に腐蝕し、大船さへ大暴風雨には粉碎され、火山は我々の町をも地獄に化す。――だが人々は之等の重大事件の前で、最もデリケートな一小事件に脅威され、交戰を續けてゐる。

私が、今非難した上述と(同等の戰爭?)戰爭を續けてゐた。――とはワイシャツの飾釦を嵌めようと焦躁つてゐた時だ。ドアがノックされた。

「ベシル・グラントだな」

私が直感した理由は彼が私の食事仲間で、今日會食の約束をして外出の支度中だつたからだ。

今日は彼と同行の約束はしてゐなかつた。が彼が一緒に行く氣になつたかなと思つた。

食堂はベシルと古馴染の世間離れた如才のない婦人經營のものだつたから、信じていゝ感じのいゝ家だといふ事だつた。

今日愛猿家として有名なフラザー船長と、私等とは彼女に紹介される筈になつてゐた。

彼女とベシルとは昔馴染だが、私等は初對面だ。

世間一般の常識としても我々が交際する爲に、ベシルは我々を彼女を引合してくれるに違ひない――から考へてゐた。

推理! 推理! が我々の理論に外れて事實はベシルの訪問ではなかつた。

私は、訪問カードをとつて見た。

『レバレンド・イリス・ショウター』

『火急の要件で四五分間面談したい』

大急ぎの鉛筆の走り書きだつたが、紳士らしく叮重な美しさを持つた字體が仄見えてゐた。

釦は篏めてしまつてゐた。

私は瞬間に祈りの戰慄を感じた。

そして上衣とチョッキを引つ掛けながら應接間へ急いだ。

叮重な客には不馴れだ。

私が入るや客は謹嚴に立上つた。

彼の整然とした態度の腕に格子縞の肩掛が掛けられてゐた。

眞黒な感傷的な手袋をつけてゐる。

立上るや輕い目ばたきをした。そして顫へてゐた。

彼は禿げ頭の少しの白髪と、頰髭を顫はせてゐる老牧師だつた。

「すみません、すみません、ほんたうにすみません、が私は重大事を語らなければならなくてやつて來ました。御免下さい」

「まあい〻」

私は彼の話し出すことを待つてゐた。

「恐ろしい事だ、恐ろしい事だ、私は生れて始めてだ、どう言はふか！」

彼はオドオドしながらかう言つた。

私は正餐の時間に焦躁を感じてゐた。

そしてこの話から逃避したかつた。が正直さうな悲愁を帶びた老人から私自身より大きな悲劇が私の正面に展開されさうな氣がして來た。そこで優しく、お話なさいと言つた。

老紳士は私の焦躁に注目しながらも、老人特有の優柔不斷と憂鬱と躊躇で女々しい狀態を持續してゐるのだ。

「すみません。私は來るべきではなかつた。があなたの友達のメエジョア・ブラウンの紹介でやつて來ました」

「ブラウン？」

私は興味に馳られて問ひ返した。

「さうです。私の災難を救ふのはあなただと言つて居る。一大事！ 生れて始めてだ」

「隨分長くか〻りますか！ 私は正餐に行かなくちあならないんです」

私は困却をもつてブッキラ棒に立上つた。

老紳士も立つた。が中氣の様に全身の痙攣を持つて……老人の堅苦しい禮儀で全身を支へてゐたにすぎなかつた。

「止める權利はありません。無論御自由です。正餐にお出になるのは——無論御自由です。然し、あなたが歸つて來た時、一人の人間が死んでしまつてゐるでせう！」

老紳士はジェリイのやうにぐた／＼と崩れ落ちた。

この二分間——刹那に私の心から正餐も、如才のない婦人に逢ふ事も、船長との面會の希望もが消滅して行つた。

火急の危險に關係のある、顫へてゐる牧師がどんな事件をどんなに話すかゞ聞きたかつただけだ。

「煙草は如何ですか？」

「結構です」彼は煙草を喫はない事が社交上の禮儀を失するかの様に言語に絶する困却の調子で辭退した。

「お酒は？」

「結構、いやもう結構、今は！」

一滴も飲めない男が一晩中ラム酒を飲み明かさなければならない破目に落ちた様に、マア結構、結構といふヒステリカルな口調を繰返した。

「今は結構、有難うございます」

「ぢや、別に何か差上げませうか？　お茶を一杯」

私は老ひぼれた驢馬の様な老人に哀愁を感じるとかう言つた。彼の躊躇の目を察したのだ。

老人はお茶が來ると、飲酒狂患者の様な恰好でブランデーをガツガツ呑み干す様に一氣に飲んだ。

「こんな目に出喰はした事はない、こんな昂奮に慣らされても居ない、こんな事件は知りません。」

エセックス州の老牧師は地位も虚榮もかなぐり捨てた疲れた様子だつた。

「こんな事件は知らない！」

「どんな事件が起つたんです？」

と老牧師に突然緊張した態度を示した。

「私はエセックス州の牧師ですが――今日迄にこんな老婦人の犯罪の氣持に關係したり、又犯罪の掩ひ立てを爲る事は始めてだ。一度もなかつた。それは私の經驗が淺薄な所爲であるかも知れない、不十分な爲かも知れない、が一度もこんなことが起つた事はない。」

「老婦人の犯罪！　私も聞いた事はありませんね。牧師間で――が私に教會の事はあまり知りません。だから感違ひをしてゐるならお赦し下さい。掩ひ立てする！　それはどんな事なんです？」

「老婦人！　老婦人？」

牧師は厳肅に言つた。

「どんな事が起つたんです？」

私は老婦人に關係ある事件が喜劇より、大きな悲劇に變化して行かないことを祈りながら恭々しく問ひ返した。

「事の起りから、話を極力正直に話しませう」

「朝の十一時十七分、命令を受けて講演する爲に或村へ訪問しました。第一にジヨウビス氏を訪問しました。彼はクリスト教信者の委員です。其處ではローンテニスコートのローラー掛りのパークに用件があつた爲です。

次にアーネツト夫人を訪れました。夫人も熱心な信者で病床にあつて詩集を著はしたり、また宗教的著書の編纂をしてゐました。――記憶が外れて茫然とはしてゐますが、――『エグランナイン』の著者の様にも思はれます」

牧師は明細に記憶を喚起するための努力を續け、探偵小説中の探偵のやうな頭になり切つて顚末を語り續けた、

「次に行きました！」

と一生懸命な話振りで語調を強めた。

「オルガン彈きの助手をやつてゐるカル氏のところへ。其處では唱歌組の少年がオルガンを壞した事の相談を受けた。私には悪い事かいゝ事か分らないんですが――貧民救助會のブレツト

さんを訪問しました。貧民救助會は牧師館で集合する規定で、また私の妻の支配下にもあつたのです。が妻の病氣の爲ブレットさんは私宅を會場にあてたのです。ブレットさんは私等の村の新らしい會員でしたが教會の仕事を活動的にする親切な婦人でした。前に言つた通り私はブレットさんを除いた部員の人々は知らないんです。が約束してゐた爲にやつて來ました。

私が行つた時、ブレットさんと他の四人の女等が多忙の中で仕事をやつてゐました。

この多忙と煩雜さは、何かの必要に迫られて完全に表明しなくてはならなくても、話の眞の要點を繰返さなくてはならなくても現在やつてゐる仕事の彼女等自身さへ何をやつてゐるか無意識にさせる程熱中した彼女等の多忙狀態の光景です。靴下の繕ひをやつてゐた老女——これが記憶に殘つてゐる位です。が一人の未婚の老婦人を想ひ出します。以前ゼームスさんから紹介された樣な氣がする、氣紛れ者だといふ老婦人は寒さうに毛絲の肩掛をしてゐました。

ブレットさんは私にお茶をすゝめてくれた。私は何を言つたか思ひ出せないがお茶を飲んだ。

ブレットさんは白髮の無格好な女です。五人の中ではマウブレイさんだけが上品な貴族的の容貌で異彩を放つてゐました。銀髮と色彩を含んだ美しい聲とを持つてゐましたよ。事實目立つて居ました。

平常とは異なつて前掛姿の甲斐甲斐しい扮裝ではあつたが、我々男の目から見ても何處とはなく不秩序な部員の中で異彩をはなつてゐる——大立物だ——といふ事實を否認出來なかつたのです。

十分後歸らうとしてゐると、私は何か——何だか分らなかつたが——叫ぶ聲を聞いた。說明出來ないが確かに聞いたのです。」

私は性急に聞いた。

「何を聞いた？」

牧師は嚴肅に答へた。

「聞いたのです。マウブレイがゼームスに言つた尋常でない言葉を——それで私が自由に解放された時、この記憶を紙片に書き留めた。此處に持つてゐる筈だ。」

彼は痙攣の手で、音樂會のプログラムや、廻狀等の中の紙片をポケットから捜し出した。

「マウブレイがジエムスに言つた言葉は—『ビルの番だぜ』」

これは「動かざる事實だ」といふ牧師の強い意識を表明する尖銳な瞳は私を凝視した。其處で話を續けながら彼の禿げ頭を火の方へ傾けた。

「恐怖すべき事件！　が私には意味が分らなかつた。以前に言つた樣に私の淺薄な經驗かも知れないがビルと宛名された獨特の口穢い罵言は我々男の仲間にさへ、まして老淑女の間に於てあまりに野性的だ、粗暴だ。私の知つてゐる範圍では。私は奇妙だつた。理解も出來ない醜惡な罵言を續けてゐる。

『ビルの番だぜ』

私が尊敬すべく想像した情操化したマウブレイの口から排斥

すべきこんな言葉が吐き出されてゐる。

上流社會の文句ぢやない。

事實上流社會で話されたら不自然だ。

不思議だ。不思議だ。

が更に大きな不思議が——私を包圍した。

私が帽子と洋傘を取つた時、私が出掛けようとした時、毛絲の肩掛をした貧弱な一婦人がドアに凭れかゝつてゐた——彼女は私が部屋を出掛ける事に氣がつかぬ風をして老婦人仲間に風變りな姿勢を保持してゐた。

『歸らなくちやなりません。すみませんが一寸御免下さい』

私の言葉に對して彼女はブッキラ棒に簡單な答へをした。言葉は注意をひいた。それは當然の事だ。私はこの答へも記入したか意味はやはり不可解だつたのです。たゞ發音だけする事が出來る。

牧師は紙片を覗き込んだ。

彼女は言つた。

"Chuck it, fat' ead' It's a kop- a kopt"

私の不可解の中に突然最後の句をポキッと折り棄てたのです。この場合、私の救主、ブレットさんはマントルピースの傍でから叫んだ。

『袋の中に老ひ呆れの頭を突つ込め……………』

私の頭は廻轉する。事實だらうか？

瞬間に私は想像した。未婚で終つた老婦人だけの世界に於て亂暴な恐怖すべき底抜け騷ぎの不可思議な生活を——

過去——私の學生時代、ボナ。デイアの神祕、安息日の妖女ローマ神話の美少女の詩の一句の夢想等に耽つてゐる時、マウブレイの手が私の後方から廻つた。その手は婦人の手ではなかつた。

ブレット、ブレット、ブレットは私の眞正面に立つてゐた。

慘忍な嘲笑の顔！

ブレットは大きなピストルを私に向けてゐた！

ジエムスは戸に凭れかゝつたまゝ、誰の目にもショックを與へないでは置かない姿勢の儘だ。

踵で調子をとり、ポケットに兩手を突つ込んで、帽子を斜めに引つ被つた——女性の姿態ではなかつた。

彼女は男だ！

をーんーなーぢあない。彼だ。全く男だ！」

牧師は失心狀態の中に漸く立つてゐた。

牧師は彼等の服裝と性との說明に苦しんだ最上の昂奮で話し續けた。

「マウブレイ、彼女の、いや彼の手は鐵の鎖のような手だ。彼の腕、いや彼女の腕、首、首に、私の首へ彼の手が——私は離がでなかつた。ブレットさん、ブレット氏、ブレットの銃口は私が的になつてゐた。他の二人の婦人——紳士——は黒幕の看視で睨みつけてゐる。

明確に——私を捕縛する爲の女裝した犯罪者だ。

牧師捕縛！ 何の爲めに？ 異教徒か？

戸に凭れた獸は又叫んだ。

『急いで! 底をばらして老ひぼれを踊してやれ』

これは獣が不用意に言つた文句だ。

『なぜばらすか』

ブレットの眼は呪咀を持つてゐた。

『お前の若氣に私の忠言を聞くならば』

彼等がビルと呼んだ男はこんなに答へた。

『老ひぼれに寫眞を…………』

『寫眞を持つて來い』

男の生地の下卑た口調だ。

ピストルを持つた男は、袋を引つ搔き廻してゐた二人の男から何かを出させた。

私の前にそれを突きつけた。

その瞬間私はこの日の恐怖の全部に匹敵する恐怖に打たれた。

寫眞は私だつたのです。

私は悪漢どもに寫眞を撮られてゐる事がどんなに恐怖すべき事件か——恐ろしい事だ、がこんな恐ろしい事があらうか。

加工されては居たが非常に私に似て撮られてゐた。

それは森林をバックにした私の祈禱の場面です。早撮りのものではない。——慥かに——が私のものに違ひない。が私はそんな寫眞を撮つた記憶はないんです。

撮つた覺えはありません。

私は凝視した。目、鼻、口、耳全ては鮮明だ。

枠に嵌められた汚れた硝子の底に沈んでゐたが。

顔、眼、鼻、口、頭、手、僧形の私の姿態に同一だ。がこれまでに撮つた事はありません。

『意外だらう?』

ピストルを持つた男はばつ悪う氣に苦笑してゐる。

『墓場の用意を爲ろ、死仕度をね』

硝子を外した。

寫眞は牧師用のカラーと頰髭を特に支那繪具の白色で彩色されてゐた。私の寫眞の下の寫眞は私と同一の森を背景にした黒衣の老婦人の祈禱の場面だつた。

同一のピンの樣に私に相似の女です。

髭とカラーがなければね——

『オツなものだらう?』

硝子を嵌めて「アリイ」と呼ばれた男は言つた。

『類似人、女のグラチフアイン、男のグラツチフアイン、どつちでもいゝ、お前はこの村のハウカーを知つてゐるか?』

私は點頭いた。

『よし。お母さんだ。死んでしまつてゐるかもう』

私に似た老婦人の寫眞を持つてゐた男は叫んだ。

『どうしろと老ひぼれに言つてやれ』

ビルが戸口から叫んだ

『ショウター! 手を貸すんだ。我々はお前に金でもやる——お望みなら—— 欲しさうだつた女の着物もやる。

筋書はこんなものだ。

今夜我々はハウカーに逢ふ約束になつてゐる。多分歡迎してくれる。が歡迎しないかな。我々が行つた時死んでゐるかな。

いや死んでゐないかも知れない。何れにせよ我々は逢はねばならない。ハウカーはドアを閉して面會謝絶をやつてゐる。がお前だけには逢ふかも知れない——また母親には必らず逢ふ。

筋書は奇抜だ、非常手段だ。お前はハウカーの母親に扮して出掛ける事だ』

『第一印象で ——一目で—— ショウター老グラチフファインと見た！』

ビルは頭を振りながら言つた。

私は喘いだのです。

『どんな意味だ。私に何をさせようとするのだ』

『何でもない事だ。たゞ變裝するだけだ』

男は優しく言つて、部屋の隅のボンネットと女の着物を指した。私は言ふ通りになつたのです。彈丸ごめしたピストルの正面で何が言へよう。五人の男と鬪へるか？ 五分間經過後私は老婦人になり切つた。誰かの母親に變裝した私は犯罪者の一人になつて、劇を進行させてゐたのです。

日暮れが迫つてゐた。冬の日脚が急いでゐる。暗い黄昏の道に風さへ吹いてゐたのです。ハウカーの家は奇妙な一筋道の淋しい果てに建てられてゐる。踏み迷ひさうな暗い道です。誰の目から見ても我々五人、犯罪者と一人の牧師、黑衣のボンネットを被つた老婦人——は奇怪に違ひあるまい。

私は話を短縮します。

私の頭は風車のように廻轉し、逃げる努力を續けてゐました。人家から離れた此處で、喚くには效果がなさすぎる。

ナイフ！ 猿轡！ 投げ込まれる深い溝！

喚く事は自殺も同然だ！

事實馬鹿げた話だが郵便配達でも來てくれないかと思つた。仲間は自分を殘して逃げるかも知れない。こんな機會を切望しました。

醉つぱらひ、氣の狂つた醉つぱらひ！

最後のこの靈感、神秘な計畫が——非常に危險な計畫だが閃光のように頭の中を過ぎた時、やつて來たんです。

氣違ひにならなくちあならないんだ！

我々は急ぎ足ではあつたが、貴婦人らしい足どりで淋しい道を遁れぬように歩いてゐた。街燈の下に巡査が立つてゐた。

私は決心した。平靜に、澄しこんで平行に歩いてゐた列から突然道路へ飛び出した。其處で大聲で叫び始めた、カナキリ聲だ。

『フーレイ、フーレイ、フーレイ、髪を切れフレイ』

私は牧師としての人としての地位も品格もかなぐり捨てた。巡査は提燈を掲げて、人工的の醉つぱらひの私に呶鳴つた。

『默れ！』

仲間は私の耳近くで囁いた。

『一緒に來い、お前の心臟は喰ひ潰されるぞッ』

ピストルを隱した仲間は恐怖をもつて囁いたのだ。

『拘引するｉ』

私は喚き續けた。下卑た靑年が喜劇の時、おきまり文句をかなきり聲であげるように。

『若しお前等が彼女を鎭まらさなければ、引致する。彼女は非常に亂暴で醉つてゐる』

巡査は又呶鳴つた。

私は精力を數倍にした。種々雜多の考へでこの狀態を不意にとどめる事が出來なかつた。實際に失神狀態の自分を見た。私自身の口から喚く臺詞は私自身でも聞いた事のないものだ。

ビルは小聲で言つた。

『呶鳴れば足元から燃えて來るぞッ、喚くな、默れ！』

夢魔に襲はれた人のように私は尙も狂喜の唄を唄ひ續けた。五人の仲間はボンネットの下から恐怖も衰弱もしない惡魔のような顏を巡査に向けてゐる。

私は地獄の苦惱の中で何も考へられなかつた。

仲間の服裝は體面を持つてゐた爲に巡査を完全に欺けたのだ。仲間は喧噪の代りに悲愁な態度を巡査に示してゐる――反つて何かを記入する事が出來るだけに恐怖をもつて巡査が頓へてゐるのだ。

私は笑然彼の胸の中へ頭をぶちこんで。

アー、アー　と叫んだ。

其刹那エセックス州の牧師である自身をはつきり思ひ出した。私は刹那の計畧で救はれたのでした。

巡査は私の頸筋をぶらさげたようにつかんだ。

『私と一緒に來い』

ビルは婦人らしい僞聲で口を入れた。

『私達の可哀想な友達を恐れさせてはなりません。私共はこの婦人を靜かな家へ連れてゆきます。この婦人は一寸醉つてゐます。それで一寸風變りなのです』

『彼女を家へ連れ歸らせて下さい。この女は歸り度がつてゐる』

エムジスは繰返した。

『歸りたがる？が私はこの女を監督しなければならない』

『いけません。仲間のものです。特別の介抱をしなくてはなりません』

ビルは熱病患者のように訴求した。

『斷然さうだ。良法にない。私たちの無比の介抱を除いては』

マウブレイも昂奮をもつて同意してゐる。

『醉つた！醉つた！實際醉つた！』

破廉恥の牧師は喚き續けた。

『默れ！風變りなお前等を憎む。辭色も聞きたくない、私は推察した、取調べる事がある。見せ物は見たくない。變裝してゐても犯罪者だ。何者だ？』

巡査は疾風のように呶鳴つた。

『何！抗議しなくてはならない。私達淑女に無禮をする成上り役人！保護すべき私達を引き離さうとする。若しあなたが不幸な衰弱した病人を曳つ張つて行くならば僅かに官權を亂用するものです。暴力團體として扱ふのは誤解です。』

マウブレイは威嚴をもつて宣言した。

巡査は彼等の廣言と態度に壓迫を感じて躊躇した。その瞬間機に乘じて五人の犯罪者は淒慘な瞳で睨みつけた儘消え去つた。私は實際巡査が我々に提灯を揭げた時、逃げなければなら

なかつた筈だつたのだ。
私は鋭い反響の爲に地下へ曳摺りこまれて行く――惡漢等から離れたからには「泥醉」の役割の必要もない。
が事實を最初から陳述すれば巡査は泥醉から醒めた犯罪者として五人の身代りに拘引するだらう。自分は行くのは嫌だ。
そこで世渡りは杓子定規には行きません。
私は英國教會の牧師の地位から狂醉の老婦人の道化芝居を演じたのです。大嘘です。
が今までの話を聞いた人として御想像下さい。虛僞の演技は默認されるべきでせう。
さあも一度泥醉者を御想像下さい。
私は幾度も蹌踉めきかゝつて、巡査の手を借りた。
百碼ほど靜かに、落着いて同行しました。巡査は私が逃亡力も氣力をも失つたものとして警戒の眼を油斷した。一曲り、二曲り、三曲り、四曲りの小道まで來ると、だらしのない狂人は突然飛鳥の如く駈け下りたのです。
巡査には豫想外だつた。其上地上は眞暗だつた。
私は五分間程走り續けました。卅分後には私は靜かな燦然と輝いた星の夜空を仰いで野原の中央に立つてゐました。其處で清淨な土の中に衣服と肩掛けと、ボンネットを裂きとつて埋葬したのです。」
牧師は語り終るとグッタリと椅子に倒れた。事件と話振りが非常に私の興味を唆つた。彼のとつた手段は老人の香具師の行爲だ。僞瞞者だ。が危險の困難から捨て身の勇氣と遊戯によつて逃れ得た紳士らしい頭のいゝ市民だと言つていゝ。
そして叮重な言葉遣ひで、すぐれた技巧と寫實を持つてゐた。
「それから――」
「それから――」
牧師は腰低い雇人根性の眉笑をチラッと見せて話し續けた。
「バウカーはどうなつたでせう」
『惡漢共の計畫が如何な意味を持つてゐたか、どこまでが眞實か危險は僅かにありました。が、私には分りません。私は警官に拘引されなかつた。私には分りません。それは御承知の通りの理由です。』
私は時計を出して見た。十二時半を過ぎてゐた。
「我々の相談相手はペシルだ。私はペシルと今夜も食事をする筈だ。が直ぐ今馬車で行かうか？」
「それには及びません」
牧師は叮嚀に答へて立上つた。そして肩掛を卷きつけた。
二輪馬車の響音がペシル・グラントの住む勞働宿泊所の下に着いた。
屋根裏までは長い汚い階段だ。
雜然ととり散らかされた部屋の中で、毛皮の外套と、釘に掛けた汚れた襯衣が素晴らしい對照をもつて鈍く光つてゐた。
彼は午睡の酒を飲んでゐた。豫想通り中食から歸つたばかりだ。彼は牧師の簡單な率直の話を世間並みの尊敬と態度を持つて聞いてゐた。そして話の完結と同時に彼は簡單に叫んだ。

「あなたはフラザー船長を御存知ですか？」
私は會食する筈の愛猿家の船長に轉換した見當外れの話題に驚かされると、ベシルの方を鋭く睨んだ。
「知りません」
私は非常な恐怖に顫へてゐる牧師の聲だけを聞いた。
ベシルは牧師の答への發音と、風采から、全ての不可解を解き始めたのです。ベシルの青い眼は牧師を觀察し、頭から足へ――見据ゑられる。
「知らない――ほんたうに？」
牧師の態度と調子が私と對話中の牧師の風貌から墮落してオドオドした調子に變つた奇異な感じを投げつけた。
「分ることだ。私はあなたを訊問すまい。たゞフラザー船長に逢ふ爲に同行を願ひたい」
ベシルは平然と言つた。
「いつ行くのです？」
牧師は吃りながら問ふた。
「今から」
外套に片手を突つこみながら冷淡に答へる。
「私は行く必要はないと思ひます」
顫へながら牧師は言ふ。
ベシルは外套から手を出して再び椅子に腰を下すとポケットの中に無造作に手を突つ込んだ。
「おゝ、行く必要はない？　私はあなたの頰髭のない顔が見たい」
明瞭に意志を持つて言ひ放つた。言ひ捨てると同時に私は立上つた。
私の人生に非常な悲劇が起つたと思はれたからだ。と同時にベシルの今日までの人生に於てあらゆる接觸、刺戟から得た博識の光輝と昂奮を意識した。
ベシルは平凡人の常規を外した狼狽の刹那にも、あらゆる事件の觀察を視過る事はなかつた――が友達の死によつて――刹那のための――それでベシルは發狂するのぢあないか。
死は何處からでも訪れて來る――野原の中を馬車で疾走してゐる時、黄昏時にもし、喫煙中にも――死は訪問する。
ベシルもこの友達の重大事の危難を救助するために發狂したか。
「あなたの髭、あなたの髯、それからあなたの禿げ頭を私に與れ」
ベシルは燒けつく瞳で睨んでゐた。
老牧師は二足三足後退りをした。
「お坐り。ベシル。お前は少し昂奮してゐる。一杯飮め！」
私は無中に叫びました。
「髭！　髭！」
驚愕の老牧師は叫び續けながらドアの方へ逃げかゝつた。私はこの靜かな部屋が、亂鬪の所作事の爲に一大變化を起す事を豫期したのだ――と椅子は飛んだ。机は雷鳴のような音を立てゝ、投げられた。陶器は粉碎されて細ゝの破片を散亂した。
ベシルは尙牧師を叱鳴りつけてゐる。

其處で――其處で牧師の私への虚僞の何かを認識した。言ひくるめられた私の淺才よ！

私は僧職と年齡、態度と技巧の第一印象を牧師の擧動から信ぜさせられた――その擧動の差違を明瞭に見せつけられた。エセックス州の牧師ではない。

ショウターではない。

彼の飛鳥の如き擧動、驚嘆すべきジャンプ、それは十七才の少年の精力を持つてゐる。

中氣の老牧師は今道化芝居を演じる！

且彼は私の杞憂を顚覆した。彼の眼には狼狽も恐怖も見えなかつたことだ。彼は希望の色さへ目の中に湛へてゐる。ベシルは？

ベシルも笑つてゐるぢあないか？

事實にこれに不可解な謎でなくて何だらうか？

彼等は笑ひ始めた。遂に牧師は敗北したのだ。

「さあ、さあ、ベシルグラント、もう私に何もしないで下さい。誰も少しの惡戲もしたのぢあないんです。處世術上の小說ですね、我々の商賣取引が効果を示したのです。」

牧師は喘ぎながらも悠然と言つた。

「後悔なんか爲て居ませんよ、がたゞあなたの髭が欲しかつたんです。それから禿頭と、が髭や禿頭もフラザー船長持ちですかい？」ベシルは至極平然と無遠慮だ。

「いゝえ、我々持ちですよ、フラザー船長持ちぢあありません」

牧師は笑つてゐる。

「一體フラザー船長からどんな謎を持つて來た、お前等は惡夢に魘されてゐるのか、フラザー船長と禿頭が何に屬すのだ。何うしたのだ、事件と船長とはどんな謎を持つてゐる、ベシルお前は船長と食事をしたのか」

憎惡に駈られて私は唸つた。

「僞ない」

「食事を僞ない。なぜ行かなかつた？」

「來客に邪魔されたのだ、そして實際彼は私と寢室にゐた。」

「お前と寢室に？」

部屋の椅子を想像しながら私は繰返した。

ベシルはドアを叩きつけるように響かせて有形の不思議な物體を叮重に部屋の中へ運搬した。

老人の禿頭と頰髭をひつつかんでゐる。

「お坐り、まあお坐り、其處で一杯飲まう、毒なんか入つてゐませんよ、が船長が一寸仄めかしてくれたら、莫大な金額を支出させなかつたのに、ハ、、、」

ベシルは拍手して大仰に高笑した。

心の底から愉快げに笑ひ續けながら、テーブルの上の髭と假髮をひつぱつた。

「お前もさう思はないかい？」

彼は堪らなさそうに笑ひ轉げた。

「役者が一人増えた！　奇妙な商賣クラブの……之は又本職そこ退けだ……」

「どんな理由か？」

「至極簡單な事で」
エセックス州の老牧師は非常に愼々しげな口吻で今までの聲色から全く違つた地聲で饒舌り始めた。活潑な若い市民の調子を持つてゐた。
「重大な事件ぢあありません。惡意のあつての事でもない。フラザー船長から委託されて——あなた等が二三時間船長から避けて戴きたかつただけの事です。私の小說であなた方を——私は雇はれました。」
彼は躊　を示して微笑した。
ベシルも微笑しこの事件を調停した。
「愛すべき船長！
我々は遠慮してやるべきだよ。彼は今夜東アフリカの遠洋航海に出帆しようとしてゐるのだ。人生のローマンスとして一人の婦人と彼を二時間程自由の天地に住ませてやるべきだ。私は二人を祝福させる爲の手段をとつて來た。そして今此處へ急いで歸つて來たばかりだ。
がこんな交渉には不慣れでしたよ」
ベシルは笑つてゐた。
「勿論ね」
牧師に私等へ辯解的に同意した。
「おゝ、傑作だ！」
私は思はず叫んだ。
「皆樣方、今後よろしく御引立を願ひます。」
ショウターは尊敬を持つては居たが、赤い縮れ毛の上へ人工的の禿げ頭を被りながら酒の加減の爲に危い呂律を滑らせた。
「我々の商賣を驚かれたでせう。我々の事務所は朝から夜半まで多忙です。あなた方の御出掛け時には時時ノックします、御覽の通り。あなた方に興味を持たせて、猛烈に誘引してゐる時、それは我々の事務所から派遣された者の活躍時間です。あなた方が遊蕩をお試みになる時にも、我々の事務所から夜鷹が派遣されるのです」
「が一つの疑問がある。なぜ牧師になつて來たのか」
エセックス州の牧師は一寸肩を聳めた。
「失敗だつたのかも知れません。が成功でしたよ。フラザー船長は鷹揚です。あなた方から避難するために、牧師職に對して最大の料金でお雇ひになりました。牧師役は我々クラブの尊敬すべき至難の最上級のものです。一人を訪問する事が五拾二圓五拾錢です。我々の會社は我々の働きで非常に滿足します。私は永久に牧師專門を續けます。以前二年間は陸軍大佐に扮しました。
陸軍大佐は二等級です。四十二圓頂戴します」

原作者略傳

「乃凡」の原作者は現在北平工務局長、華通齋先生の夫人で、原籍は波蘭、長く北平に住居、各國の語に長じ、政治、家政の外慈善事業に盡力、美術、文藝に趣味を有し、社會小說を著す。「乃凡」は新著「戀愛與義務」の一節です。寫眞は夫人が只今佛國へ行つてゐられますので頂けません。(筐)

「公園の殺人」の原作者は現代英國閨秀作家 B.roness Orczy でございます「夫人は今から二十年程前にフランス革命を背景にした探偵的歷史的興味ある作品 'the Scarlet Pinperuel'(紅ハコベ)を發表して一躍文壇の寵兒となり、引續き紅ハコベ叢書といふ名の許に二十數篇の作品を公にし、氣作家として認められ夫人の作品は、大部分リオツト事件」と「隅代ものゝ本格探偵小說のです。今度の「公園の老人」の物語中の一Baroness Orczy とい

夫人は男爵ではあり祖母にあたる方がフラなので、その名をペンといふ事です。本名は

現代英國讀書界の人てゐます。オルツイ時代ものですが一エの老人」の二篇は現の部類に屬すべきもの殺人」はその「隅篇でございます。尙ふのはペンネームでません。確か夫人のンスの古い貴族の出ネームに用ひたのだ忘れました。(松本)



Edgar Allan Poe

グラツイア・デレツダは一八七五年十一月二十一日、伊太利のサルヂニヤ島の一寒村ヌオーロに生れた伊太利の代表的女流作家である。女史の學歷としては、僅に尋常小學の課程を修めたに過ぎない。にも拘らず、女史が一九二七年度のノーベル文學賞の受賞者に選ばれたその藝術的天分は決して學問經歷から生れたものではなく、彼女の遺傳的な藝術素質が、たま〱文明の利器に浸潤されなかつた素朴な、簡素なサルヂニヤ

原作者略傳

の大自然によつて育くまれたものである。彼女が作家としての第一歩は、實に數へ年十四歳の春であつた。そして、『王樣の愛』、『サルヂニヤ物語』等が相次で世に出てから間もなく、『汚れなき魂』が、一代の評論家として、その辛辣さを以て謳はれたルッジエーロ・ボンギに認められて、一躍伊文壇に押しも押されもせぬ作家としての地位を得たのである。その描く所の世界は決して王侯貴族の社會ではなく、常に鋤と鍬とによつて生活の糧を得てゐる農民の社會である。そして其處に登場する人物によつてかもし出されるあらゆる人生の表裏を、女性的鋭敏な觀察と温情的な感情を以て、直截に而も美しき筆致を以て大膽に描寫してゆく。四十册に餘る作品の内、特に傑作として認められるものは前述の『汚れなき魂』の外、『灰』、『明暗』、『風に吹かれる蘆』、『隱し子』、『マリアンナ・シルカ』、『エジプトへの逃亡』等々である。（下位）

ミセス・エリナー・グリーンの經歴について色々と檢べて見たのでございますが何しろ、この頃の新しい人のことゝて未だエリナーのライフは紹介されてゐませんので甚だ殘念でございますけどわかり兼ねます。唯、エリナー・グリーンは英國に於ける非常なセンセーショナルな女流作家にして現在はアメリカのハリウッドに於いてシナリオライターとして一週に五〇〇弗のサラリーを得てゐる。戀愛には特別に細密な觀察を有し、小說「三週間」は近代の性問題を取扱つた最初のものと云つてもよい。（五十鈴川）

カザリン・マンスフヒールドは近代英國に於ける秀れたる女流短篇作家なり。夙にチエホフの影響を受け、主として英國の中產階級を描く。彼女また詩的天分あり。"Journals of Katharine Mansfield" の日誌には多く詩篇を納めたり、その作品漂渺たる詩韻あり、高雅の氣品愛誦すべし。病身のため、冬を多くフランスに過し、愛人 John Murry との間にとり交はされた手紙は、最近 "The letters of K. Mansfield" となつて出版された。一九二三年、三十四歳を以て逝く。

クラヽ・ツエトキンの七十歳の誕辰を祝う文章を何かの社會主義の雜誌で見たのは一昨年のことだつたと思ふ。本名はクラヽ、ツンデル夫人。サクセンのニイダアアウに生れ、ライプチッヒのスチルベルト女學校を卒業して小學格の女教師となつた。その後ビスコルクの社會黨鎭壓令の下に勇敢に戰をつゞけてゐる社會主義運動に心を動かし、職を奪はれてパリに行きソルボンヌ大學に籍を置いた。この大學でロシアの青年革命家オシップ・ツエトキンと相知り相愛の仲となつて二人の子供を擧げた。オシップの

原作者略傳

死後、ドイツにかへり、社會主義の婦人雑誌『デイ・グライハイト』を編輯し富有な畫家オスカア・ツンデルと結婚した。又ローザ・ルクセンブルグと深い友情を結び、二人は長くこの雑誌で婦人問題とマルクス及びマルクスの著作に關する論文を發表した。大戰爭中スパルタカス國が組織されるやこれに參加し、革命後リープクネヒト並びにルクセンブルグによつて組織された共產黨に加盟した。革命後の議員選擧に彼女は代議士として當選し、今日尙ほ、ドイツ共產黨中の重要な地位を占めてゐる。彼女が革命後ロシヤに入り、勞農政府に國賓として待遇され、レーニン夫妻と暖かい友情をもつて結ばれたことは知られてゐることである。彼女は今日も尙ほ、モスコオとベルリンの間を何回か往來して暮してゐるやうである。(神近)

ジョーン・ミリングトン・シング(18 1——1909)アイルランドの戲曲家。彼はダブリンの近くのラスファーンハムで生れた。その戲曲は「西の人氣男」、「谷間の影」等わづか數篇に過ぎないがその驚くべき想像力の豐富なリアリズムは、彼をして大セクスピヤにつぐものとうたはしめた。戲曲の他に詩集が一册ある。シングの寫眞はエンサイクロピデアにあります。(中河)

エー・イー・コパアド(A. E. Coppard) 現英國文壇に聲名高い新進作家。短篇集數册の著がある。千九百二十九年度の作品集としては「銀色の曲藝團」と「卿」の二つが特色あるものとして英米二國の文壇に賞揚の聲が高い。「コパアド氏の如き天才の手にかゝると、英語といふものから、新しい生命が躍り出して來る。氏の筆に接する時、我々は、短篇小說の前途に無限の進展性のある事を感ぜずにゐられない」アウトルック誌評。靈界と物質界との接觸、人間の有つ二重性と相反するその二重性の不思議な一致點、といふやうな主題はコパアドが好んで撰ぶものである。「混沌」は短篇集「クロリンダは天を步く」の中の一篇である。(村岡)

『法王の騾馬』は十九世紀の佛蘭西文豪アルフォンス・ドオデエの短篇集『風車小屋の手紙』中の一篇です。ドオデエは一八四〇年南フランスの古都ニイムの產(一八九七年巴里で歿す)、一八四〇年の革命にたたられて絹織業者であつた父親が破產の厄にあひ、終に一家が離散するに及んで、わづか十七歲の時に兄を賴つて巴里に出て來た事が、やがて彼をしてモオパッサン、ゾラ、ゴンクール等と比肩せしむる自然主義運動一方の雄とならしむる機運をなしたのでした。『風車小屋の手紙』は彼の出世作といふべきもので、刻苦十年、文壇的にようやく名を認められるやうになつてなほ故鄕忘れ難く、當時二十六歲であつたドオデエが、なつかしの山河をおとづ

原作者略傳

れの旅に出て、生れ故郷のニイムに近い立ちぐされの風車小屋に足を停めた時と、次ぎの年の再遊に際しての、その折々の印象記、隨筆、スケッチとでもいふべきもので、ゆたかな郷土的色彩とあふるゝばかりの人間的情味にみち〳〵た眞實美しい作品ばかりがあつめられて居ります。ドオデエの作品はかなりの數に上りますが、中でもすぐれてゐるといはれるのは同じく短編集に『月曜物語』、戲曲に『アルルの女』のあるほか、長篇では日本でもよく知られてゐる『サフオー』、『ヂヤック』、『タラスコンのタルタラン』等澤山あります。（大久保）

ギルバート・ケエイス・チエスタアトン一八七四年英吉利ロンドン市に生まれ現代に及ぶ。セントポールスクール、スラアドスクールに學び、初期に主として評論を書いた。歷史的のロマンチックなもの、近代生活の尖端を題材として書いてゐましたが、近年明快な奇怪な、凄慘な手法で探偵小說風のものを書いてゐます。作風は元氣な樂觀主義、詩的民主主義を帶びてゐます。小說家であり、詩人であり、また劇作家であり、評論家として現代英國に於ての豐富な頭腦をもつた作家です。チエスタアトンの地位が稍々官僚的性質を帶びてゐる爲、十分に羽翼を伸すことの出來ないのが缺點でせう。（高橋）

シモンプランタの望の作者。

ロベエル・ディユドンネー、千八百七十九年巴里に生る。當年五十一歲の法學博士。

新聞記者としてキビ〳〵した文筆を揮ふ事二十七年。文才豐かな彼は又小說家としても世間に認められかなりの作品を發表して居る　コントは彼の最も得意とする所である。（正宗）

アメリカの人。詩人にして小說家。一八〇九年ボストンに貧しき旅役者の子として生れ、――四九年バルテイモアに歿す。幼にして兩親を失ひ、リッチモンドのアラン家に養はる。ヴアアジニア大學の學生生活を賭博にて失敗、後軍籍に投じ士官學校に入學せしも、これ亦性情に適せざるの故を以て放擲す。後雜誌記者となりて諸種の作品を發表し、漸次文壇的地位を得。我意强くして意志弱く飲酒、病氣、不如意の生涯なり。

作家として彼を簡單にいへば、「時代的傾向」に對しては純遊離者。「人生の再現」に對しては圖案化者。――自然主義の世界に於ては坐るべき半分の椅子なく、佛蘭西象徵派中に於ては王座と家族的肱掛椅子を恭呈せられし人。（尾崎）

生田花世評論集

（女流作家肖像寫眞四十八葉）

定價
四六判特製箱入
壹圓參拾錢
普及版九拾錢
送料十錢

最新刊

近代日本婦人文藝 女流作家群像

本書は現代日本に於ける女人文藝界發展の跡を檢討し、ひいては明日の傾向を暗示强調するところのユニイクなる目的をもつ。本書は廣く文藝女人の其名と其の作品を網羅すること百餘、中堅作家より世に隱れたる人々にも言及す。明治年代に於いては『女學雜誌』『女子文壇』『青鞜』を語り、現代に於いては、『女人藝術』『窓』『火の鳥』其他を語り、婦人文藝潮流展望の處をあやまらず、小說集『燃ゆる頭』の姉妹篇として、十數年間の執筆淸算となす。こゝに一般の繙讀を得て本書の眞面目の傳はらんことを期待する次第である。（著者言）

生田春月著

メリケとヘルデルリン

（詩と傳記集）

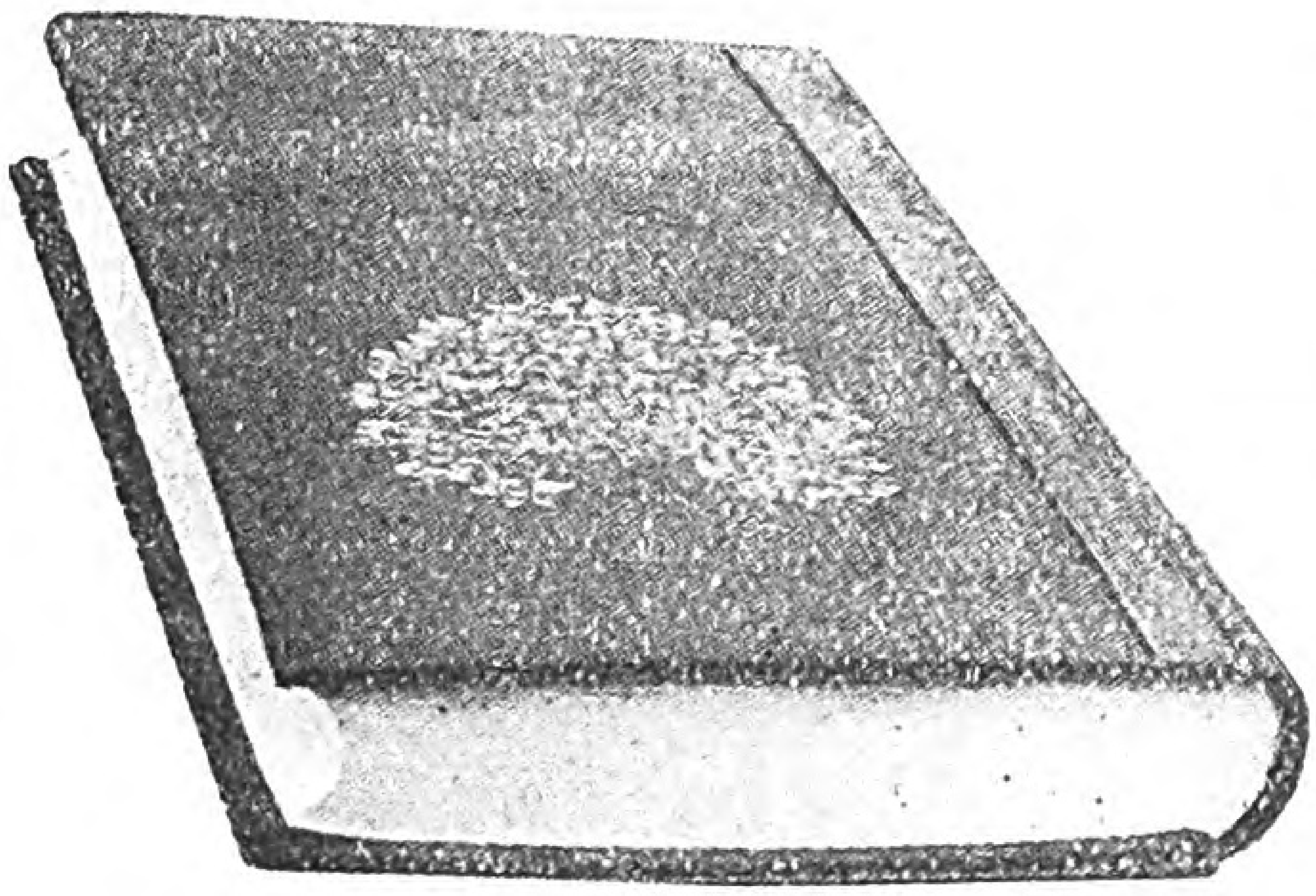
五十錢
送六錢

東京市外戸塚町字諏訪九十番地

行人社發行

振替口座東京二三二四五

時雨脚本集 第一輯



―ある時期を一轉機として、彼女らしい甦生が努められた。そこに夢の床から離れようとするもの苦しさと惱ましさとがあり、それを生き拔かうとするものの煩ひと惑ひとが來た。僕は彼女のこの憂鬱を見て來た。そして彼女はかなり十分に內省と認識とに月日を費やしたのだつた。その效果はこの數年間に徐々に現はれ、若し、性格的な癇癖に、內なるものを傷けられることがなくば、今後自然な發展を示すことが出來るであらうと信じてゐる。此の集に盛られたものは、多くこの再生期―展開期の作だ。一個の女性が、いかに生活の望みと空しさとのすがたを見たか、光りと無知との交錯を見たか、ここに讀者の興味を繋けることは慥かに出來る―

三上於菟吉氏序

內容

ミイの生れた朝　暗夜
月に往む人　氷の雨
つくしの空　犬
篝火の洗禮　手兒奈
北國藥研谷　西の空

定價金貳圓
送料金六錢
本社處女出版の美本です

東京市牛込區左內町三十一
女人藝術社發行
振替東京七五八三
電話牛込一七八九



-1930-
文壇人一月の運勢

○菊池　寛　　吉
争論苦情があるが、満身の勇を振つてやるべし、吉方乾巽。

○ささき・ふさ　　吉
幸福な生活が待まれるが、他人の中傷や妨害あり、男難の相あり。

○永井　荷風　　末吉
猥りに色情を發動さすべからず。

○青野　季吉　　半凶
心は矢竹に早やれども肉體に故障生じて意の如くならず、下旬思はぬ失發あり。

○三宅　やす子　　吉
一生に一度の戀のある月昔取つた杵づか、ひるまず實行するがよし且しあまり油がのりすぎると三代の戀に至る發ひあり。

○前田河廣一郎　　凶
同志相爭ふ時である、餘り頑固にしては却つて不利何事にも下手をもつてせよ。

○武者小路實篤　　半凶
全く見掛倒しの時であるから浮々と乗出すべからず。

○中村　武羅夫　　半吉
人情のため苦しむ月である、一時姿をくらますべし、但し会談は人手を借りて内密運動せば奏效。

○村山　知義　　凶
汽車に乗つて行きすぎたかたち、危機一パツと云ふ女難あり。

○平林　たい子　　半凶
八方塞り、意地で押すべし。

○室生　犀星　　半凶
月は無情と云ふけれどコリヤ月より貴女はなほ無情！

○近藤　經一　　吉
目上の相談にあづかる利あり。

○岡田　三郎　　吉
やつと咲笑出來る月です。無理な空想は大禁なり。

○徳田　秋聲　　凶
水性の女近づけるべからず、此月はダルマの修業をされた方が安全なり、勝負事勝目なし。

○三上　於菟吉　　吉
山のやうな大運の波が寄せて來る此時こそ共同してとれよ、一生に一度の大運をとりそこなふべからず。凶方西乾

○直木　三十五　　半吉
醉ふて美人の膝、起きて天下の權を握ると云ふ時なり、されど、北坤の方の女の關係にてメチャメチャに運を逃がすおそれあり。

○神近　市子　　吉
喜ぶ月みこもり月とも云ふ、金談よし。

○久米　正雄　　凶
柳の下にどぢやうは居らぬと云ふ月ひかへ目に精進すべし、夫婦爭ひある月なり。

○今井　邦子　　半吉
日の暮れぬ内、用意すべし。

○中條　百合子　　凶
家庭に不幸のある月。

○佐々木　茂索　　吉
投機的の事はおそれずやれ情愛につき煩悶がおこる。

○宇野　千代　　凶
大吉の次は凶、雑魚愛に苦るしめられ、異郷で死ぬ程の思ひあり金談利あらず。

○里見　弴　　凶
何となく淋しい月、女との爭論事あれど眞心を持つてせばカイケツす。

○長谷川　時雨　　吉
幾度か望んだが得られなかつたそれが手に得られる、得られた以上大切に守るべし、他人より凶事を持込む。斷るべし。

○佐藤 春夫　半吉

船に乘る事あり、筆は運ばぬが、平和な月。

○林 房雄　凶

死か生か、事業的煩悶あり、家中の口舌を注意せよ。

○新 居 格　凶

腹はりすぎて、二進も三進もゆかぬ月故、家庭體操を實行すべし。

○岡本 かの子　吉

春風萬里、但し胃病に氣をつけるべし。

○吉田 絃二郎　半吉

枯木に花咲く月、引込みは駄目、少しダンスをやつて、人生をソウカイにすべし。

○吉屋 信子　凶

思ひ事意の如くならず、火難に注意。

○片岡 鐵兵　半吉

護身用のステッキはくさつて役にたゝず、抵抗しなければ命があぶないと云ふ場合、有金を出して楽に助かるが上分別。末よし。

○廣津 和郎　大吉

呑む打つ買ふ、上々の首尾なり。

○生田 春月　吉

困難の峠を越えた、安心して物事に取りかゝるべし、但し色情については爭論分離或は訴訟事あり注意。下旬よし。

○宮地 嘉六　凶

砂の中の蟻のつぶやき。

○米澤 順子　吉

常識的になりすぎた吉です。

○眞野 つぎ　半吉

いゝ作品が出來ませう。

○吉井 勇　凶

雪國の女といきさつあり、その旅行早く思ひ切つた方得策、そちらには男がついてます。

○近松 秋江　凶

テツトウテツビ、尻尾の出る月ではない。

○山川 菊榮　半吉

貴女はおしあはせでも家人に病人出來る、最も注意。

○十一谷義三郎　凶

蛟龍もしばし地に潜む。

○岡田 八千代　吉

こゝ二三ケ月は御意のまゝと云ふすばらしい所が出ました。だがうぬ惚れは何より御そん。

○窪川 いね子　半吉

雪が降る懐は冷いクヨクヨしては病がおこる、少しの辛棒、下旬より霞の正體が見える。

○西條 八十　凶

小唄ナリキンになれど思はぬ出費で痛む。

○柳原 白蓮　半吉

意の如くならずも、人を助ける事あり、勿論籠の鳥。

○菅 忠雄　半吉

忠臣なればこそ、とほめられる月です。當分女に緣がありません、御安心あれ。

○中村 吉藏　半凶

仲間うちで色々のゴタゴタあれど年の效で押して行く。

○平塚 雷鳥　吉

旅行はいつもお二人で。

○瀧井 孝作　吉

家をたてるによき月です。

○久保田萬太郎　吉

二食主義の方が、體の安全はカクジツです。オサツもふけて來たと云ふ至極朗々たる月。

○與謝野 晶子　吉

芋ヅル式に家庭ハンジョウ、平和な睦月です。

○中河 與一　吉

今日は如何なる吉日ぞ、長い間籠の鳥であつたが、ひよつとした評子にひよつと出られる。

○高群 逸枝　半吉

自分でおワイ屋をやつてみて、ナルホド始めて判つたと云ふ月。

○小寺 菊子　凶

焦る程、雨で干し物かはかず。

○林 芙美子　半吉

今ひといき、生活に放浪性あれど此一ケ月をふんばれば末吉。

○野上 彌生子　吉

晩年の大運を取り入れるに絕好の時です。

○黑島 傳治　吉

よい種のまける月です。

○志賀 直哉　吉

安心しすぎたかたち。

○里村 欣三　吉

今年から、ボツボツ又運がひらけて來る。

○生田 花世　半吉

豆撒きしても鬼が中へ這入つて來る、一家がもめるが、沈默つてゐるに限る。

○眞杉 靜枝 吉
晴天を見る月です、たゞし相手方にあまりよりかゝると、變りやすいは秋の空、飛んだ浮目にあひます。事業の方思はしくないが、平和な月です。

○田山 花袋 吉
人間の情愛の美しさが、いつも貴方を包んでゐます。

○中田 信子 大吉
自分の仕事が、レールの上を行くやうに運ばれます。御自分の體に注意。

○原阿 佐緒 凶
そこに居るかとも云はれない月。

○山田 淸三郎 吉
仕かけた仕事は意の如くならずも仲間は貴君を大變ほめてゐます。

○中本 たか子 凶
花開けば散り、月滿つれば缺ける槿花一朝の夢と云ふ事あり、儚なき月故何事も用心すべし。

○泉 鏡花 半吉
洋服がきてみたくなるやうな月です。斷髮娘が眼につく。

○今 東光 凶
お名前の半分ほど運が下火になりました。

○川崎 長太郎 凶
人にブラ下るとおつこちる月なり

○金子 洋文 吉
海外でも行こうかと考へをまとめるにいゝ月です。

○尾崎 史郎 吉
心浮雲の如し、されど思ひがけぬ友情で更生すると云ふ月なり。

○加能 作次郎 凶
どうした事か芽が出ません、畑をも少し荒してみるもいゝでせう。

○藤澤 淸造 吉
街へ引越せる位には軍資金が出來ませう。

○岸田 國士 吉
何もかも後のまつりと云ふ風な事がないでもありませんが、まあ無事です。

○木村 毅 大吉
惡運强し。

○戸田 豐子 半吉
フグは食ひたし命はおしいと云ふ月なり。

○谷崎 潤一郎 吉
油斷しきつてゐますが……。

○藏原 惟人 吉
曲折變化ある月、行當主義でおやり下さい。

○島崎 藤村 吉
今までの吉のとばつちりですが、相變らず、體さへ注意すればいゝでせう。

○宮島 資夫 凶
一生の内で一番困難。

○深尾 須磨子 凶
氣骨の折れる月である、まづ朗らかに七面鳥の詩でもおつくりになつては。

○葉山 嘉樹 吉
爭論多き月なれど、勝身なり、大言をつゝしむべし。

○加藤 武雄 吉
プレミアム附の吉です。家族を大切になさるから、不川の品を澤山買ひためてそんする事あり。

○山本 有三 吉
自分の責任上の爭論あり末頃よりよくなりませう。

○望月 百合子 吉
多年の宿望達して喜ぶ月、だが之を横領せんとする曲者あり、注意。

○佐々木 俊郎 半吉
五塵の火宅とか云はん、內外憂ひ多し、末吉。

○淺原 六朗 凶
少女達も見返へらなくなりましたが、老いたのではありません。要鬼門、此月は何事も注意を要す。

○長田 幹彥 半吉
何もかも出しきつた形なれど、まだ最後の一線が殘つてゐる、病に注意。

○上田 文子 吉
一身上の煩悶あり、此月は戀に身を燒く事あり。

○若杉 鳥子 凶
意の如くならず、しやうと思ふはじから、パチンとこわれます。狼と小鳥の區別をおつけなさい。

○川端 康成 吉
少し舊式な女ですが、一寸おぞうにと一緒に、面白そうな月です。遠くへ行く事あり。

○楢崎 勤 大吉
氣變りの多い月ですが、お江戸から長崎までと云ふ愛慾爭鬪あり。

○小林 多喜二 半吉
大作が出來るか、大金が來て困るか、肥大になるかです。

○岩藤 雪夫 吉
鐵の腕を多く製造し、廣くヘンプして感謝をうけるやうな月。

コケットな製造

深町瑠美子

―洋行ですつて、貴方が、千磅の金額とロンドン行……」。

私の鼓膜は近頃にない耳寄りな會話を聞きつけた。ロイド眼鏡が蜻蛉の複眼みたいにおどけてしまつて、それに底の拔けた幅の廣いパスがすゝけた天井の梁の間の鼠を脅かしてしまふ。

「今度ね、一寸と刑務所まで洋行するんです」

この少し許りのお洒落な言葉が、殺風景な生活の上に、敏感なゆとりと、哄笑をあたへた。Bは蠻家であつた。そして怒つぽい病人をも短時間のうちに治療してしまふ。危つかしくて陽氣なナンセンスは、乾いた生活へ脂肪分を補給する。だがそれは短時間な生命ではあるけれども。

何者かに向つて吠えてゐる樣な顏で、スマートなスポーツマンと云ふ發音に對しては濟ないような氣がする〇は、新しい認識をもつて、社會を批判し藝術を論じ宗敎をもやつゝけた。

「時に吾々の組合の事について話したい事があるが、兎に角吾々の生活權の爲に……」四・一六事件でやられた人達は最新式の刑で裁かれるのだからたまりません。恐ろしい凝固だ。××に××××××無制限な無條件でよろしいとは石灰質で凝つた概念が錯覺を起すだらう。

現實に虐げられた女性の心はスイッチの捻りやう一つで恐ろしい力と智慧を發見する。貨幣中心主義の上層へ、浮游していくかもしれない。廣告燈の下をゆく空想は、知らぬ間に家を捨てる痲痺から痲痺へ、人間らしい生活線を憧れる明るい衝動に飛びつく。マッチの感情が導火線になつて飛ぶ。享樂、戀、詐僞、犯罪、あらゆる無智なエゴイズムが大膽に横行する。私は高層建築の天邊から、空中の感情と物理を求める。私の無役な空想が信用手形と男と食慾に變つて、疲れた空想に水をかけては、冷靜なる定理へ向つて、走つていく。

歴史の一頁

戸田豊子

一九二六年、十一月×日。アンゴラ市國會議事堂の角からこの歴史的な追跡がはじまつた。

一方の自動車がシルクハツトの怪紳士ケマル・パシヤを追跡すれば、一方の自動車は白頭の外相テウフイツク・ルシヂー・バイを追跡した。アンゴラ新商店街を通り、オツトマン銀行の角を曲り…リラでしこたまチツプを切つたのに、少々ドヂなギリシヤ人の運轉手は希土戰爭以來の筆法で英國人を敗北させた。まんまとジヨン・ブルのスパイを撒いて得意のケマル・パシヤが勞農大使館へ乘りつけると其處にはまたアメリカの通信員が張りこんでゐるのだ。

ホテル・アンゴラ。其處ではペルシヤ、アフガニスタン、支那――の客人たちが、スープの飲みぶりから、寢室の注文に至るまで嗅がれてゐた。ガソリンの消費量から、股の吋まで計算されて、電話のベルに警告された。

「二十二番！　二十二番の英國大使館！」

翌日の午後、アンゴラ聯合通信に、月給五十リラで雇はれてゐる女タイピストは次のやうな電文を打つた。

「トルコ、ペルシヤ、支那、アフガニスタン等の東方被壓迫民族の代表者は常アンゴラ市に來集し、ひそかにアジア民族聯盟建設の密議をすゝめつゝあり。一說によれば各代表間に已に聯盟規約が成立調印を見たといふ。トルコ當局は頻りにこれを打ち消してゐるが同聯盟の計劃が主として『帝國主義國の團結』たるヂエネヴの國際聯盟に對抗せんとするものであること。その首謀者がソヴエート・ロシヤであること。は明瞭なり。」

「英國の大狼狽――」と女タイピストは結論を下した。「對露戰爭の、重要な要塞にする心算でゐた、アフガニスタンが！　ペルシヤが！　もう英國をのさばらしとく時代も過ぎたわ。…チヤルダをかなぐり棄てた我等の婦人代表はクルプスカヤを取卷いていき〱眼を輝かせてゐる――」彼女はそんなことまで考へた。

十一月十三日、トルコ外相テウフイツク・ルシヂー・ベーは晴々しく「黒海超えてオデツサ」へ渡り、隨分と頭の禿げた露國外相チチエリンと莊重な握手を交した。

調査見學的？

中本たか子

今回の私の轉換、私の轉居、さうしたことに關して、諸所方々からいろんな注告なり、批評なりを受ける。或る人は「その方へ行く必要はない」といふ。或る人は「藤森成吉氏の眞似だ」といふ。或る人は「單なる調査見學だ」といふ――それ等に對して私は一言お答したい。

イデオロギイの轉換が、生活を轉換せしめるのは、當然であり、必要である。イデオロギイのみの轉換にとゞまるならば、それこそが世に云ふ觀念の遊戯ではないか。遊戯といふことがお嫌ひなら、觀念のスポーツだ。何よりも實踐的であらねばならぬプロレタリアイデオロギイに於て、それの把握は必然的に生活の轉換を要求する。併し、私は、單に生活をかへたのみで能事終はれりとは、決して考へてゐない。單なる調査見學的なる態度――おゝ、それこそは最も憎むべきプチ・ブルの態度でありその根性ではないか。血みどろになつて戰つてゐるプロレタリアートの生活圏内にあつて、一人てん然としてノートとペンとを構へてゐられようか。口に左翼的な言辭を弄し、相も變らず生活はプロレタリアートとは何の關連もない、或はあるかの如く粧ふ態度こそは、最も唾棄すべきではないか。生活轉換の要締は、組織の中にあること、集團の一分子となつて、絶えない實踐に努力することだ。

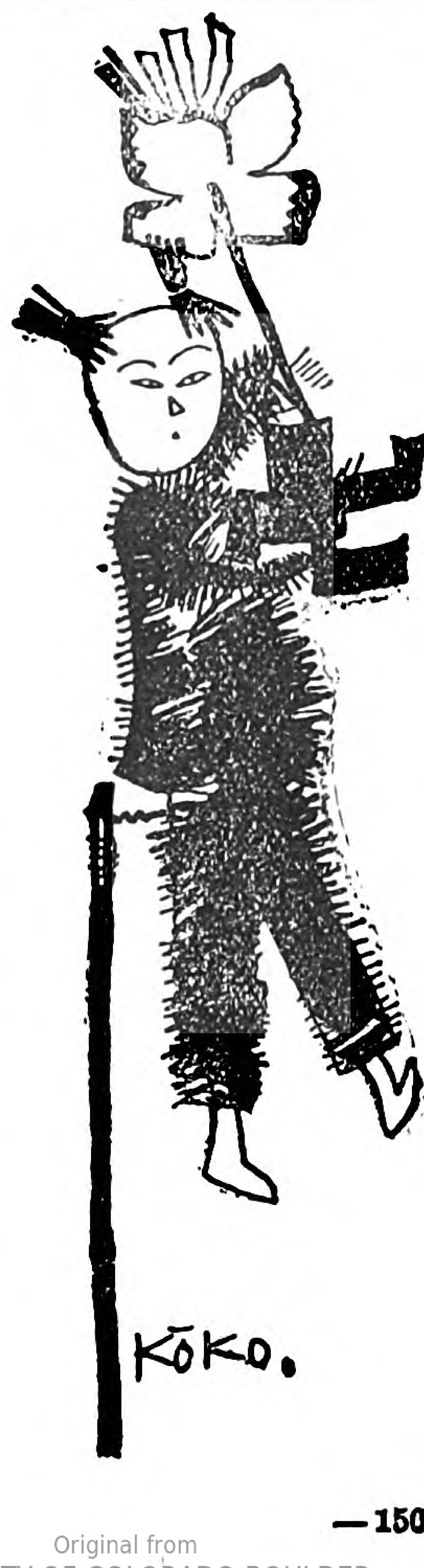
昨日まで、小ブルの生活領域にゐたといふ悲しむべき惰性が、まだ多くの妨害を私の實踐途上に投げつける。併し、私を決定するのは、今日のこの態度では、あまりに尙早ではなからうか。私が何をしつゝあるかは、やがて誰かゞ報じて與れるであらう。協議會の年末カンパニヤ――「年末鬪爭週間」は私に何を與へるか。私をいかに教育するか。私は唯觀念的な「十月革命」を標傍するのではない。

眞夜中の歌舞伎座

十二月二日の夜歌舞伎座へオペラ「墜ちたる天女」の舞臺稽古を見に行く。はじめ芝居道の事を何も知らないあたし達は、何時頃からあるのかしらまだ大丈夫かしらつてひるまつから騷いで「大丈夫どこの騷ぎぢやない早くも八時か九時だらう」と社長さんに叱られてしまつた。でも心配なのでそうつと電話をかけてきいてみると、はつきりは解らないが大抵九時か十時頃からだらうとの事にあれまあやつぱりと感心する。

神戸から歐洲へ行く岡本かの子さん一行を送る花束と、山田耕作氏に作曲されたところの全女性進出行進曲の譜本をかゝへて（今夜歌舞伎で山田氏をつかまへて直接作曲者から歌つてもらふための）七時半に出る汽車をめがけて東京驛に行く。

プラットフォームは人、人、人で元氣な亂暴な若者たちがうちわをたゝきながらおけさ節を歌つてゐる。「モダンボーイ太郎しつかりやつて來い。たのむぞ、太郎バンザイ。」一平氏のもかの子女史のも見送る人達が紳士淑女なので汽車の傍へ近よれないで遠くの方から、たゞ見送りに來たと云ふ義理だけをすましてゐる。少しおそかつた女人藝術社の連中はとてもかの子夫人の所までは行かれない。そこで暴力團長、花束を高くかざして「此花をかの子さんにあげさして下さい」大きな聲で吹鳴りながら男の人達をおしのけて、ふま



勝川花菊の一生

——日本橋——9

時雨

勝川のおばさんといふ名がアンポンタンに記憶された。顔の印象は、淺黑く、長かつた。それが木魚の顔のおぢいさんのたつた一人の妹だときいても、別段心もひかれなかつた。ただ平べつたいチンチクリンのおぢいさんに、長茄子のやうな妹があるのかなと思つた位だつた。

しかし彼女は小意氣だつた。その時分の扮裝が黑つぽかつたので、背のたかい細面の女を感じから黑茄子にしてしまつたが、五十を越しても水極だつてゐた。

幾年かすぎて、ふと其女がはじめて來た日の言葉を思ひだした。

「お瀧さんにも久しぶりで逢えて――」

自分の姪の家へきて、にもなんて變なことをいふ――子供の心は單純で、かげりをもつ

れもまれながらやつと汽車の窓口について花束を手渡す。何だかほつとして握手をしてゐたらしゆんと悲しくなつてきた。何時か亦人波にもまれて後の方へ、そして汽車は行つてしまつた。そこでそれからが問題の歌舞伎座である。私と熱田さんの元氣のいいのを先登に歩いちやへ歩いちやへで社長さん、生田さん、八木さん、素川さん、美智子さんの七人で京橋をめがけて一二三。先に歩いて來た、私と熱田さん京橋の所に來ても後の連中が中々來ない。何を思つたか熱田さん「この通りオーキの通りでせう」に私は目玉をくりくりさせる。「うそよ京橋の所よ」「あら、數寄屋橋と間違へちやつた。」やがておそい連中が來るそこで右に廻つて銀座通りの方へ行こうとすると社長さん、眞直眞直と云ふ、變だなとは思つてもこう行つて途中で曲つた方が近いんだなと思つてまつすぐに行く。交叉點で社長さんを又だいぢよぶだいぢよぶとひつぱる。行けども行けども歌舞伎座はない。ない筈であるここは數寄屋橋から築地の方に行く通りではないのだから、やがて社長さん「この邊でせう原阿佐緒さんがバーを出すのは」「バランて云ふんでせう歌舞伎座の横ですつてね」「おや、ここは歌舞伎のとこぢやないの」「ここは京橋のさきですわ」「いやだ櫻橋のとこだ、どうりで變だ〳〵と思つてゐたら、嫌だよ、素川さんが歩きませうすぐですなんていふんだもの、もう知らない、歩けやしない」と悲鳴をあげだす。往來のまん中に七人集つて小田原評定、私と優子さんは歩いちやへ歩



た言語の深いあやを知らない。およそ、木魚のおぢいさんの一族で、あんなに客として款待されたものはないのにと、無視された母のためにアンポンタンは輕い義憤をもつた。

だが、勝川のおばさんの生立をきくと無理はなかつた。彼女としては、女中同様に追廻して使つた姪に、さんの字をつけてよぶだけでさへ小癪にさはる――さうした氣風の彼女だつた。

深川佐賀町の廻米問屋石川屋佐兵衞の妻女――なれのはてではあつたが、とにかく代言人長谷川氏の家を訪れてきたのだ。彼女の手許の召使ひだつた姪は、彼女の添にゐたからこそ賣出しの新商賣の人の後妻にもなれたのだ、といふ誇りをもつて――

勝川のおばさんといふ名と一所に出るのは佐兵衞さんと、も一人お角力といふ人だつた。いま思へば三角關係だつたのでもあらうが、佐兵衞さんは旦那で、勝川お蝶は權妻、關取××は出入りの角力。そして佐兵衞さんはさしもの大資産を擂つてしまつてもお蝶さんと離れず、角力は御贔負さきがペシヤンコになつてしまつても捨てず、だん〳〵微祿はしたが至極平和にくらした。

海上暴風雨のためにいつもは房州へはひる筈の、仙臺米の積船が、鰯のとれるので名高い九十九里の銚子の濱へはひつた。江戸仙臺藩の藏屋敷からは中澤某といふ侍が銚子へ出張した。

いちやへ組で、社長さん生田さん紊川さん美智子さんの四人が電車組、何を思つたのか八木さんあたしも歩く、そこで競走とばかり三人は歩きだす。私達の早い歩き方に八木さん悲鳴をあげて、「若い人達は先に行らつしやい」に「小母さん元氣を出さなければいけません」と二人の間にいれてひつぱる。風邪をひいてのどをまいてゐる八木さん、ひいひいいつてゐる。「僕はもうだめだ、僕が死んだらこの長靴をあげるよミュツレル」「死にやあしないよ、さあ元氣を出して」「若し時計がみつかつたらおつかさんに送りかへして」「よしよし」三人の洋服をきた女がぺちやくちやしやべりながら笑つて、すたこら、すたこら歩いてゐるのを、人達は不思議そうな顔をしてみてゐる。電車組に勝とうとおくれる八木さんをひつぱりながらいそいでゐるのに天無情、途中で何といふ橋だか、嚴通行止といふのに出會した。そこで涙をのんでひきかへして途中からまがつてやつと歌舞伎座につく。は入つてみれば四人はすまして、義士快擧ろくをみてゐる。なあんだまけちやつた。汗をふきながら、物珍らしげにそこらあたりをみまわす。四十七士が居る、花道に腰かけて三四人しやべつてゐる。舞臺の横手に四五人。何だかほんとうにその時代の人の樣な氣がする。あなた方はどんな氣持ですかなんてきいてみたい。むこふも今日は見物を見物してゐる樣がある。どつちもどつちお互に珍らしいに違ひない。かつぎをかぶつた士をおつかけて三人の義士が出てくる。小林平八郎を切る泉水

その中澤といふ侍は、幕臣湯川金左衛門邦純とならない前の本魚の顔のおぢいさんの姓である。

濱方は船が一艘這入つても賑はう、まして仙臺米をうんと積んだ金船が何艘となくはひつてきたのだ。もと〳〵お藏屋敷の侍といへば、武士であつて半町人のやうな、金づかひのきれいな、物每に行きわたつた世馴れた人が選まれ、金座、銀座、お藏前などの大町人や諸役人と同樣その時分の社交人である。十人衆、五人衆、旦那衆と尊稱され、髮の結ひ

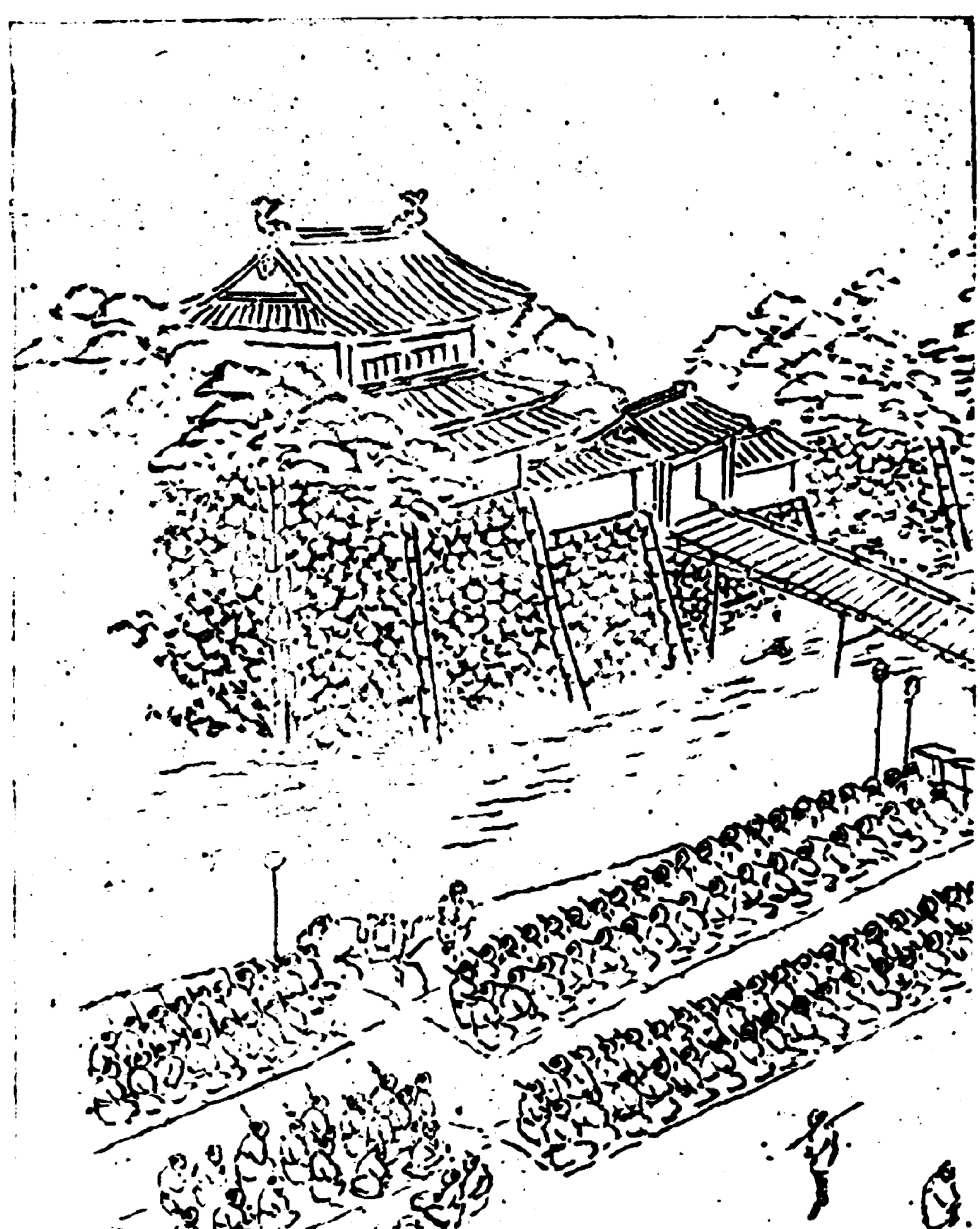


のある場面だ、何を、切られてたまるものか、石燈籠の笠をおとすのに氣合がかゝりすぎて燈籠全體ゆらゆらとする、大力無双の人ではある。笠のおちた石燈籠に、平八郎ひよいとびのつてぴよいと又橋の上にとぶなかなかうまい。途中で落ちないかと心配する。橋の上でとう〳〵殺される。倒れ方がとても生々しく寫實的だ。「あゝ堀部安兵衞金丸どのおけがはなかつたか」現代語の義士だ。何だか耳に入る氣持が違ふ。吉良公を物おきでうつのも外に出さないで中で首を切つてから、よびこをふく。その時の會話などもちよんまげあたまの口から出るとすこし不思議な氣がする。「之はたしかに吉良公の首。嬉しい嬉しいこんな嬉しい事はない」ひき上げの時俵星玄番に對する武林唯七の感謝もとても現代的である。「先生の御恩は決して忘れません之は私の形見でございます。では皆におくれますから失禮します」といふ意味の事を云つてなくが、ちよんまげ的でないのは確かだ。

優子さんと二人全女性進出行進曲の譜本を持つて山田氏をさがしてまわる。別館の樂屋、廊下、すべてを日響の人と搜したがわからなかつた。墮天女の稽古は最後で、十二時頃からになるだらうとの



木村錦花氏



元旦登城の供侍

七十一翁故父溪石筆

かたは本田髷細身の腰刀は澁づくりといつたふうで、遊蕩を外交と心得違ひをしてゐた牛官牛商であつた。それらの侍たちや藏前町人の豪奢を幾度か知つてゐる濱のものは鮑が上つたやうに悦んだ。

だが、ある夜の中澤氏の旅宿には濕つぽい場面が行燈のかげに示しだされた。それは木魚のおぢいさんが幼少のころ出奔した母親がたづねて來たのだつた。成長した子供の前へ

事に驚く。幻浦島の作者木村富子夫人にお逢ひする、社長さんと話をしてゐる所へその旦那様の木村錦花氏が來られる。義士快擧錄の作者だ。「墮天女は浦島の次だから歸りは隨分おそくなりますよ。」優子さんが木村氏を寫生したら、すまして「なるたけいい男に書いて下さい」と口だけ動かしてゐる。墮天女のコーラスに出る人達が澤山來てゐる。芝居小屋の稽古日としてはきつとめづらしい空氣だらう、斷髮、オールバック、華かな空氣である。

幻浦島のはじまる前に山田氏に逢ふため一行七人別館の大部室に行く。オペラに出る人達があちこちらで歌の稽古をしてゐる。青年になる照井榮三氏がしきりに顏面筋肉を斜につらせ手を空間に游がせながら歌を歌つてゐる。歌と表情と動作、ずゐ分大變だなと思つてみる。

山田氏におめにかゝつて行進曲をさし出し歌つてゐたゞく。半月以來ぬいだ事のないといふ半ズボンも氏の忙しさをはなしてゐる。でも多數讀者の希望通り忙しい山田氏によつて作曲された行進曲がどんな風に女性の幾多の口から空間に、地上に地中に送〃だされるかと力強い歌をきゝながらとても嬉しい思ひだ。強く強くフオルテ、フオルテ、メゾフオルテ、全部が強いんだ。社長さん、にこにこして「優しいんだと女人藝術社はちよつと困りますけれどこんな風に弱くうたふんでしたら大きな強い娘ばかりですから」「エヘン」優子さんと二人ちよつと威張つてみせる。緋作氏夫人が社長さんと挨拶をしてゐる。そこへ

恥もわすれて逢ひに來た母親は十二三の女の子を連れてゐた。

「それは不義の子である、拙者に緣はない。」

大體の侍ならさういふであらうを、おろ〳〵泣いてゐる母親と義妹とを見ると、捨てられた當時を思ひだして、自分も泣いた子供心にかへつて咎めなかつた。

江戸入りは三人になつたが、嚴しい藩邸の門は流石にくぐらせられない。出入りの町家に預けておくうちに母親は鳶頭のところへ娘を連れて再緣した。年頃のあんまり違はない娘があつたので、蓮子は妹とよばれ、おなじやうに稽古ごとも習はされるやうになつた。

この二人娘が姉は踊りで、妹は三味線で賣り出して、諸大名のひゐきも多くなつた。兩親は左團扇のホクホクだつたのである。その妹娘の勝川花菊が、アンポンタンが長茄子と見た勝川のおばさんの前身だつたのだ。

人氣渡世の、盛りの花菊を、無理にも手生けにと所望し、金にあかして大家の御内儀としたのが廻米問屋石川佐兵衞だつた。

中澤氏が湯川氏となつて、遠洲お前崎から働きものの二女を連れてくると、一躍して位置のかはつてしまつた金持の御内儀花菊さんは、働きものらしい女を手許で召使つてやらうと言出した。湯川老人もその店で仕事をもつやうになつたので、彼にいはせればなんとも致しかたがなかつたのだ。私の母は彼女づきの小間使ひに任命された。

大根おろしのやうに、身を粉にして働くことを、無益も利益もなく、めちや〳〵に好んだ壯健至極な彼女にでさへ、ばかばかしいと思ふほど酷使つた。行處のない身寄りだから逃げてゆかないといふ信狀で、嬌慢の頂上にゐた花菊は無理我慢の出來るたけをしいた。

無論他の者へも特別優しかつたわけではない。

四谷さんが來て「お久し振り」といふ。照井氏が額面をふつうにして山田氏にひかれて來て社長さんとおじぎのしつくらをしてゐる。關種子さん。何子さん何子さん。美しい天女が澤山ゐる。小さな女の子供達が（石井漠門下の人達）妖精の服裝であつちこつちぴよんぴよんとんでゐる。もう十時だといふのに眠がりもしないで、と眠がりやの私は感心する。

お化粧をはじめた四家さんたちに別れて、あしたからの興行の仕度にときれいにならべてゐるお菓子やでチヨコレートを買つて歸りが十二時すぎるだらうから社にとまると家に電話をかけてゐると山田氏が見えた。そこで優子さんが似顔をかきはじめたが人とはなしをしてゐるのでうまくかけない。こつちを向いたかと思ふとあつち、あつちかと思ふとそつち、でひかんしてゐたら、僕の似顔は僕が上手にかいてあげようと、スケツチブックにマンネンヒツでヒヨツヒヨツヒヨツと、はげたあたま、三角のちよぼひげ、とかきつけて、サインをして「どうです似てるでせう」に皆笑



山田耕作氏の自畫像

彼女が芝居見物の日は、前の晩から家中の奥のものは徹宵する。明方に髪を結つてお風呂にはひる。髪結は前夜から泊りきりで、二人の女中が後から燈をもつてゐる。他の女中は卷繪の重箱へ詰めるあれこれの料理にてんてこ舞をするのだつた。早くから船は來て、（淺草猿若町にあつた三座の芝居へは多く屋根船か、駕籠でいつたものである）炬燵を入れ、縮緬の大座布團を、御隱居さんの分、隱居さんの分、御新造さんの分と三枚運ぶ。御隱居さんと御の字のつくのが石川氏の母親のことで、御の字のつかない方のが娘のために引きとられて樂隱居をしてゐた、湯川老人を捨てたお母さんであつた。二人とも向ふ河岸の中洲よりの濱町に隱居してゐるのを誘つて乘せてゆくのだつた。この女達も花菊夫人におとらぬ氣隨な生活であつたであらうが、頭の方は坊主だつたから芝居行きに泣き喚きはないから無事だが、母屋の內儀の方はさうはゆかない。合せ鏡に氣に入らない個所でも後の方に見出すと、すぐ破して結ひ直しである。それも髮結ひさんが歸つたとなると、撫でつけがうまいので髮のことだけは氣にいつてゐるお手許使ひの姪のおたきがよばれるが、もと〳〵機嫌を損じてゐるのだから泣かされるまで幾度も結ひ直させられる。さうなると芝居なんぞは何時からでもよいとなる。お風呂ははひり直しである。昨夜から寝ないものもキヨトンとして其儘で手をつかねてゐる。沖では船頭が寒がつてゐる。二人のお比丘尼さんのところからはせつせと使ひがくる。

夏の日は大川の船の中で晝寢をするのがならはしだつた。髮を洗つてからちりめん浴衣で、棧橋につけさせてある屋根船へ乘る。横になりながら髮を煽がせるのだ。さうした大名にも出來ない氣儘が、家のうちに充滿して、彼女の笥には何百兩の鼈甲が寢せられ、香料の麝香には金幾兩が投じられるかわからなかつた。現今の金に算して幾兩の金數は安く見えはするが、百文あれば蕎麥が食へて洗湯にはひれて吉原へゆけたといつた時代の大で

ひ出す。社長さんから松居松翁氏が女人藝術の六號文の愛讀者である事をきいてよろこぶ、氏は朝日の講演會の時に一時間をくれて來ておいかへされたといふ、その格好を想像したら、何だかうれしくなつてしまつた。

チヨコレートのおかげでみんなのどがかわいて來たが水をのむ所もない。そこで木村氏が藥罐とコツプを持つて來て下さる。豪華な歌舞伎座の正面廊下で、そこの大理石のスチームの臺の上におかれたコツプとヤカン、たとひそのヤカンがアルミニウムで銀色に光つてゐたとは云へ、不調和な存在でありながら、それがちつとも變でない位舞臺稽古の日といふ、ざつぜんとしたなつかしみのある氣の張りぐあひである。何もしもしない自分達までが、何となくそこの空氣の中にひつぱりこまれて、一種の興奮と緊張をかんじてゐる。匯の方からこきざみにすつぱいかんじのものがかけまわつて頭の方にのぼつてくる、そんな氣持。

白粉をつけてぬきえもんをして、あたまだけ男の人達が方々にこしかけてゐる。龍宮の乙女の服裝をした男が、女に作らない聲を出して幕のあく前に花道でおどりを一度さらつてゐる。「こうでしたね お師匠さん、ここでトントンとふんで、一度まわつて、」子供達も踊をけいことしてゐる。それがそろふとやつと幕、幻浦島である。

猿之助の浦島が、自分が老人になつた事を知らずに若者のつもりで威張つて歸つてきて濱にゐる子供たちに浦島の事をきくが誰もし

ある。競べものでないほど今日より金の高かつた時代である。

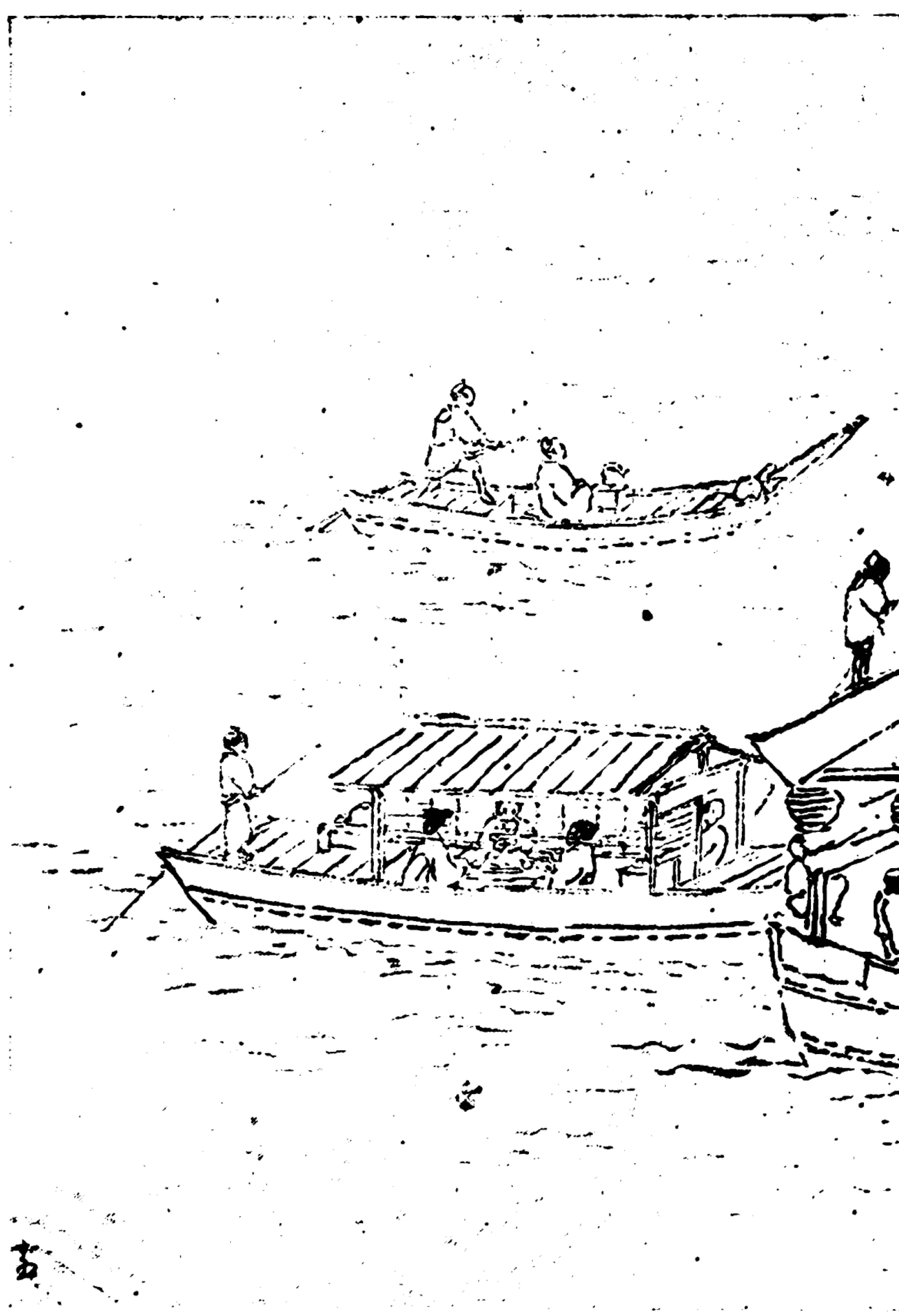
とうたう三菱が起り、三井が根をなし、舊時代の廻米問屋石川屋に瓦解の時が來た。殘りの有金で昔のゆめを追つてゐるうちに、時世はぐん／＼かはり、廻り燈籠のやうに世の中は走つた。人間自然淘汰で佐兵衛さんも物故した。そのあとの挨拶に來たのが、私に印象させた長茄子のおばさんだつたのだ。





らない、みな氣狂ひだとののしり、砂をなげ藻をなげてなぶる。そこにゐた漁師に浦島は三百年の前にここにゐた人だといわれてはじめて自分の頭をみ、おどろいてしまふ。そして踊りを踊つて倒れると舞臺は龍宮になる。龍宮で昔の自分になつて乙姫の踊浦島のをどり、たこやかめやかれいやたいのをどり、侍女、從僕たちのをどり、とすべて濱に倒れた浦島の夢にみた昔の自分のすがたである。そしてめざめて岩の上にのぼりはるかに龍宮をなつかしみみるといふ舞臺である

龍宮の場面で、乙女達や息子たちが澤山出ておどる場面がある、それは浦島の老人から若人に、若人から老人にとかはる時の場をそこに對する注視からはなすために特ににぎやかにされてゐるらしい。そこでみんなが長い布を持つてそれをふりながらおどりぬく。口の悪い××さん「あれはまるで廉賣大賣出しの様」まことに時節から想像し得るのはそこである。赤青黄のはたが嵐のごとき音をたててはたはたとひるがへるところ、銀座神樂坂新宿と通り通りをうづめてゐる赤青黄の聯合大賣出しのそれである。



ある時、急に社會が外面的に歐化心醉した。それは明治十八年頃の所謂鹿鳴館時代で、晩年にはあんなゴチゴチの國粹論者山縣元帥でさへ徹宵ダンスをしたり鎗踊りをしたといふ、酒池肉林、狂舞の時期があつた。吉原大籬の遊女もボンネットをかぶり十八世紀風のひだの多い洋服を着て、椅子に凭りかゝつて張店をしたのを、見物に連れてゆかれたのを、私はかすかに覺えてゐる。わが日本橋區の問屋町は、舊慣墨守、因循姑息の土地だけに二

あたしたちの珍らしくてたまらないここの空氣も社長さんにはなじみすぎ、知りすぎたものであるので、一人で經つてゆく時間をおしがつてゐる。幻浦島の稽古のすんだのが十二時半、墮ちたる天女の幕のあくのはどうしても一時半になるだらう、そこであまりをそくなるので、惜しいけれどそれは見ないで歸ることにする。ふんそうし終つた人達が、あちこちと妙な格好で劇場の廊下を歩いてゐる。日響の人達が一かたまりになつてバイオリン、セロ、コントラバスと調子をあはしてゐる。そそられるみたい氣持も、スチームのあたゝかい歌舞伎座の中に殘して、夜おそくなるとこんなにもおなかゞすくのかと、しやべつてゐる妖精の手の中にあるアンパンを羨み乍ら、社に歸つたのが一時半すぎ、それからお夜食をして、編輯室で美智子さんと二人でねたのが二時半、優子さんは素川さんの所へとまつた。生れてはじめて吸つた夜半の歌舞伎座の空氣、珍らしい人達の珍らしい格好、ちつともねむくなかつた不思議さ。みんなは面白いからいつも之から舞臺稽古の時にみに行きませうよつて社長さんをせびつて、困らしてゐる。(みどり)

舞臺稽古拾遺「樂屋なんか見なければよかつた！」とか何とか云ひ乍ら、私たちは、時々裏口やものゝ蔭ばかり見たがる、本物のちやんとした舞臺では、時々その悠長な美しさを慨歎する事もある癖に、「これからいつでも舞臺けいこを見にこようか知ら。」といつた人がある。「入口は開いてるんだからいつでもさ

三年後にジワジワと水の浸みるやうにはひつて來た。でも私はびつくらした事がある。ある日、家へ歸つてくると、知らない顔のお母さんが居る。それが毎日の通り、ちつともちがはないお母さんらしい事をしてくれるが顔がどうも違ふのだつた。なぜなら母の顔は眉毛がなくつて薄青く光つてゐた。歯は綺麗に眞黒だつた。それなのに、目の前に見る母はボヤ〳〵と生え揃はない眉毛があつて、歯が白くて氣味が惡かつた。彼女はまた何時になく機嫌よくニヤ〳〵するのでよけい氣味が惡かつた。

「おたき、眉毛が立つて狸のやうに見えてぢぢむさい、それだけは剃つたがよい。」

と、祖母が言つた。

母は嬉しくなささうな返事をしたが、私は矢ッ張りお母さんだつたのだと思つた。急に黑襟のない着物を着たのと髮の違つたのが猶更人柄を違へて見せたのだつた。

私達はその頃輸入されたばかりの毛糸で編んだ洋服を着せられ靴をはかせられた。二階に絨緞が敷かれ洋館になつた。お母さんが珍しく外出すると思つたら月琴を習ひにゆくのだつた。譜本をだして父に說明してゐた。父は月琴をとつて器用に彈いた。子供のをり富本をならつた母よりも、長唄をしこんでもらつてゐる私達の方がすぐに覺えて、九連環なぞといふ小曲は譜だけで彈けた。チンチリチンテン、チリチンチンテンと響くこの眞ん丸い樂器がひどく面白かつたが、練習にゆくところが勝川のおばさんであらうとは隨分長くしらなかつた。

私の家の外面的新時代風習はすぐ幕になつてしまつて、前よりも一層反動化したが、世間では淸樂の流行はたいした勢ひだつた、月明に月琴を鳴らして通る——後にはホウカイ屋といふのも出來たが——眞面目で、伊太利の月に流すヴヰオリンか、或は當分ハイカラな夫人がマンドリンを抱へてゐるやうな、異國情緒を味はうとしたのだつた。

つさと入つたつていゝんでせう社長さん？　誰か聞いたら威張つて社の名刺を出すわ」舞臺けいこの見度い方はこの手を使つてごらんなさい。たゞ餘程氣持の暢びりした時か、ひまで〳〵困つてゐる人かでなければ初めから終りまで舞臺稽古の見物は容易ではない。一番目の忠臣藏が終つて次の浦島が開く迄に一時間半、別館の二階の大部屋へ山田耕作氏を訪問してゆる〳〵衣裳をつけたり、小妖精になる可愛いゝお孃さんがチヨコレートの箱を大事相に抱え込んだりするのを見て、一幕終つただらうと思ひ乍ら戻つて來ても舞臺は以前のまゝ、極樂鳥のきらびやかな緞帳がゆらりと電氣に映えてゐる。後の方に陣取つた劇場關係者は退屈なやうな退屈でないやうな全く落付いたものだ。

このひまにと、奈落に案内して貰ふ。假花道の下に當るといふ長い〳〵地下道だ。普だんのこういふ日は殆んど眞暗だといふ話だが今夜はぽつ〳〵電氣がついてほの暗い位の程度だ。この前の時など廊下も便所も眞暗で、來馴れてもゐない場所をマッチと手探りで散々戸惑ひした事があつたつけ――。がらくた新道とでもいひ相に、あちらにもこちらにも、魚の骸骨のやうな感じのする大道具が一杯立てかけてある。小さい電燈の下に誰が食べたのか丼が重ねて置きつ放しにしてある。さつき別館へ行く道でも氣付いた事だが、物かげといふ物かげには食べ物の器が置いてある。舞臺裏の殺風景な景色に照應して、生活と感情の泥??さを思はせる。長い廊下の奥に

——私の家で、急激な母の變り方が、すぐまた前にもどつたのに面白い些細な譯があつた。それは私たちをとても可愛がつた酒屋が、利久そばやの前側にあつて、隣家の家一軒買つて通りぬけの廣い納屋にした空地があるので、いい私達の遊び場だつた。二月の末になると赤い布をかけた白酒の樽が並べてあるのをかき廻しても叱りもしなかつた。その酒屋の一人娘がワーワー泣いて阿父さんに叱られてゐたが、小さなアンポンタンの胸は、父娘のあらそひを聞いてドキンとした。

「そんな事をいつたつてお父さん、長谷川さんの御新造さんだつて、束髪に結つて、細つかい珠のついた網をかけてゐる。あんなやかましいおばあさんがゐたつてさせるのに、家でさせてくれないなんて――噓だといふならいつてごらん本當だから！　買つとくれつたら買つとくれ、月琴も一緒に！」

酒屋の娘だからでもないだらうが、お桝さんといふその獨り娘は島田をゴロ〳〵させて泣き喚いた。

阿父さんは十にならない私には新聞紙の一頁を二つに折つたほどの大きさの顔に見えた四角い人だつた。胸毛も生えて、眉毛がねぢれ上つてゐた。節瘤だつた兩手兩脚を出して角力の廻しのやうな、さしつこでこしらへた前掛をかけて白い眼だつた。私は日本武尊の熊襲を思ふときその酒屋の阿父を思出してゐたほどだつた。鹽鮭は骨だけ別に燒いてかぢつた、干物は頭からみんな嚙つてしまうし、いなごや蝸牛を食べることを教へたのも此人だつた。それが怒鳴つた。

「おれの家では買はせねえ、商業が違ふのをしらねえか、どうしても頭に網がかぶせたきやあ、そこにある餅網でもかぶれ。」

泣いてゐた娘と、青ぶくれな、お玉じやくしのやうな顔の母親とはキヨトンとして、天

建築工事の足場のやうなものが見える。これが奈落だ。開化文明の世の中だ。云ふまでもなくモーター仕掛けかと思つたら、これは又奈落はまさにいつでも奈落だ。中央の太い芯棒のまわりには危なつかしい足場が縱横に組立てられて、まわり舞臺の大きさに添つて太い丸太が一間おき位に下つてゐる。この丸太の一本々々に人間がすがつてやつこらうんとこと肩で押すと舞臺の上では噓死した人間や松の木や、金ピカの御殿やが舞臺裏の薄暗い方へ押しやられて、代りにお化粧仕直した景色が出て來る。看客は噓死にや噓泣きに息をつめて片づを呑めば、奈落の下では舞臺の重さに本當に肩をそばめ息をつく。豪華を誇る歌舞伎の奈落だけに一層痛切だ。「モーターばかなりのは帝劇だけでせう。」と社長さんの說明仄暗いローソクの光に照らされて、水滴がポタ〳〵額へかゝつた時代のおもかげはないにしても、下のコンクリートとには所々水たまりが出來てゐる。舞臺から落ちて來たらしい赤や青の細かく刻んだ紙切れが水たまりにへばりついてゐる。いたづらに足場の上へ登つて見ると眞中のせり出しの道具がつり下り、假花道にかゝる所のせり出しの下は、これはまた舞臺とは似てもつかない荒けづりの舞臺の一部だ。この粗雜な足端に着飾つた役者がよぢ登つて出を待つてゐる姿を想像するのは一寸味氣ない氣がする。太い綱がある。鐵のラセンのやうなものが轉つてゐる。カン〳〵と何か打ち込む音が響く。

「もう歸りませうよ」とみんな左程爽くもな

井から釣るさがつてゐる、かき餅のはひつた餅網をながめたが、娘は一層狂暴に泣出した。母親は困つて、小さな私に救ひを求める笑を送つた。

私は驅けてかへつて祖母さんに訴へた。祖母さんはだまつて白い臺紙に張りつけた、さんご珠まがいの細かい珠のついた網を求めさせてくれた。お桝さんは満足だつたが、母の方は止めさせられた。私も心の中で母には似合はないと思つてゐたから、よしたので安心した。

勝川のおばさんが日本橋區へ進出して來たのはそれから二三年たつてからだつた。新道つゞきの中一町をへだてた、私の通つた小學校のあつた町内の入口近かつた。一間半ばかりの出窓をもつた家で、流行ものを教へるには都合のよい見附きだつた。夏は窓に簾をかけ洋燈をつけ、若い男女が集まつて月琴や八雲琴をならつてゐた。窓には人だかりがしてゐた。近くなつたので勝川おばさんは涼みながら來ては、蛇三味線を入れるの、明笛も入れるのと話してゐた。彼女には、漸く昔の賑やかな生活の色彩に、調子はかはつてゐても歸つてゆくのが嬉しかつたのであらう。

だが、そのうちに日清國交破裂となつた。清樂なんぞやる奴は國賊だとなつた。勝川の窓は宵から締めないと石が降り込んだ。で、いつの間にか窓に戸が閉つて家の中の人も逐天してしまつた。

それから幾年、また勝川おばさんの所在不明。

大本教が盛りだした時以上に天理教流行の時があつた。一體下町でいつも景氣のよい宗旨は日蓮宗だが、時々新らしい迷信が捲起ることがある。ある時葛籠屋の店藏に荒莚を敷いた段をつくつて、段上に丸鏡と榊と燈明をおき神縄を張り、白い衣をきた男が無中にな

いのに襟を合せたり、手を引つ込めたりしながら、歩板をガタ〳〵〳〵。
舞臺はまだ極樂鳥の幕だ。手を叩くわけにもゆかない。舞臺の前に特別にしつらへたオーケストラボックスには青い電燈が入つてポツン〳〵いふ三味線の音締めと、胡琴の調子を合はせる音。「あのロイド目鏡をかけた人は藥劑師のやうね。」「ほらあの廣津和郞が少し瘠せて仕立屋さんになつたやうなのが死柳德太郞、向うが壽輔右側の指揮してゐる職人のやうなのが杵屋佐吉、あの風さいで洋行して來たんだからね」とは私の横に腰かけてゐる辛辣と定評のある劇通の御婦人。
「この頃だらりとした藝人風のなりをしてゐてはカフエーでもてないので皆會社員のやうな格好を仕初めたのね。頭でも着物でも」
とすればロイド眼鏡の藥劑師など傑作の部類か？　やうやく幕が開きかけて、花道では坊主頭の拔衿紋が　廣津和郞の仕立屋さんにトン〳〵、トンとおどりの手順を浚つて貰つてゐる。浦島の舞臺　開幕――　（素）



つて怒鳴つてゐた。それを取りまいた一群がトウカミエミカミ、トウカミエミカミといふふうに喚めいてるた、×××教といふので堀越三升でさへ――九代目團十郞――權少都の位になつて信心してるのだからたいしたものでさといふ勢ひだつた。そのあとで狐狗狸さんが來た。これはむやみと景氣がよくて大衆的大人氣で、いたるところ向ふ鉢卷三味線入りで車座になつてお飯櫃のふたをかぶせた三本足の竹の棒に神の向來を信じ、そら、足をあげた、ハイとおつしやたとはしやいた。そのあとが天理教だつた。
天理教も大本教とおなじく中山おみきさんといふ中國邊田舍のおばあさんが教主で、神田美土代町に立派に殿堂をしやにかまへてしまつた。これは信者の婦人が樂器入りで、白裝束、緋の袴、下げ髮で踊るのだつた。なににしろ物見高い土地だから人だかりはすぐする。
勝川おばさんが隱れてから十年もたつたある日、大丸の向側の家で天理教の踊りがあつた。私の下の方の妹たちが通りかゝりに覗いて見たら、廣い店中祭壇にして片側に樂人がならび明笛だの、和琴だの交つて、その中には湯川一族の、鑛山から逃出して歸つて來た連中たちの顏が見えた。もつとよく見てゐると、緋の袴で踊る少女が、あの戸板店のおせんべ屋夫婦の二女だつたので、母に聞えては惡いもののやうに、歸つてきてからそつと私にだけきかせた。
「そうつといつて御覽なさい、今ならまだやつてる。」
だが、あたしには見にゆけなかつた。言はなくても母たちは、勝川へ藤木の二女がずつといつてゐるといふ事はしつてゐたのだつた。
流石の花菊も、もうたいへんな、すたれ果た年となつてゐたであらうが、お角力は影の形體を離れぬやうに、いつもぴつたりと附いてゐた。御直參ならずもの達は口が惡いから

十一月十二日の夜新宿の白十字堂の三階で開かれたトルスタヤ女史歡迎會の席上で、食事もすんでテーブルスピーチがちよつと聞いてもよく聞いても解からないロシアの言葉で何回か繰返された後、女人藝術社の社長さんの番になつた。「先日新聞でトルスタヤといふ名前は偉大といふ事を現はしてゐるといふ事を知つて、同性の中に偉大といふ名前を持つた方のある事を大變に名譽に嬉しく思ひました。それから女人藝術社に大きな娘が一人ゐて、それがいつも皆なから大きい大きいと云はれ悲觀してゐましたが、此度トルスタヤ女史がいらつしやつてから、我社のトルスタヤと呼ばれて、大きいのを威張つてゐます。今晩も席末につらなつてをりますから悦んでゐるでせう」とすましてしやべる。思ひがけない社長さんのはなしにすまして聞いてゐた小池みどり、似合げなく下をむいてしよげる。その話を飜譯してトルスタヤ女史にはなした米川正夫氏、又トルスタヤ女史の言葉を邦譯して曰く「ロシヤのトルスタヤ女史が日本の女人藝術社のトルスタヤ孃に固い握手を差上げたい」そこで女人藝術のトルスタヤ小池みどり、もぢもぢしながら本もののトルスタヤ女史の所へ行く、その途中に社長さんの背中で「いぢはる、いやだなあ」と兩肩を掴んでゴリ〳〵、遂にトルスタヤ女史の手を握る。何とまあその手の大きかつたこと、女人藝人のトルスタヤは殘念ながらすこしまけてしまふ。そこで社長さん、「今にこの女人藝術のトルスタヤを二十貫にしなくちや」と力んでゐる。

宅へなどくると、

「お角力はやつぱり居るさ。」

といつて、

「あの角力も妙な男だよ。立派な風體をして、なんでまああゝしてゐるのかねえ。まるで權助同樣なあつかひで、あのおばさんのことだから、ポンポン言つてらあね。」

「商業でもしてるのかね。」

「どうしまして、臺所やせんたくが中々忙しいのに、あれで道具運びの荷ごしらへに手がかかりますさ、力があるからお誂へむきだが。」

「あの男だつて相當な番附位置にまではゆけたらうにな。」

「色の白い、體の奇麗な角力取りだつたが、何も石川屋が沒落したからつて、自分も角力を沒落しなくつたつてよささうなもんだつたのに。」

だが、勝川お蝶さんの一生には、なくてならない人はこのお角力だつたのだ。傍のものは道具はこびにお誂へむきだといつたが、お角力にはピッタリはまつた役目があつたのだ。彼は勇敢に、若き日の一生をかけて、その力を自分の愛するもののためにとつておいたのだともいへる。そしてその最後の日が來た。

天理教の踊りがピッタリ逼塞してしまうと、勝川おばさんの逼塞も本ものになつて、手も足も出なくなつてしまつた。むかし、大川の河風にふかれて船の上で晝寐をした夢をしのびながら陋居に、お角力の膝を枕にして、やさしく撫でられながら彼女の生涯は終つた。

あたしの母も、母の姉のお房さんもいつた。夜更けて歸つて來て、なにしろ家がせまいから昨朝また早くゆくといつてくつろひでゐた。その翌日いつたらもう死者は家にゐなかつた。落魄御直參連一黨がつらなつて歸つて來てつぶやいた。

新春恵方萬歳見立

太夫さん	才造
小池みどり	生田花世
松居松翁	木村富子
菊池寛	片岡鐵兵
千葉龜雄	林芙美子
中村武羅夫	今東光
青野秀吉	大井幸子
神近市子	近藤經一
吉井勇	翁久允
加藤武雄	中本たか子
直木三十五	平林たい子
岡本かの子	鈴木氏享
濱口雄幸	新居格
中條百合子	曾我の家五郎
三宅やす子	林房雄

まづ〳〵芽出たう候らひける。や、ポンポン

「今度こそ角力が入用な人間だつたつてことがわかつたよ、おばさんの役にたつた一番目で、それがおしまひだ。」

「だが秀逸だ、あの男の。」

父が出てゆくとみんな頭を揃へてさげて、

「ありがたうございました。取りかたづけはすみました、角力がひとりでしよつてしまひました。」

「さうか、あの男でも、それだけの準備はしてあつたと見えるね。」

「ところが、それがね、しよつてしまつたつて、一さいの事ではないのですよ。滑稽なことには、おばさんの棺桶をしよつてしまつたんでさあね。」

「人夫にしよはせるのは嫌だとでもいふんでしようね、お角力さんの心意氣だあね。」

と母が言つた。皆は笑つた。

「兎に角、今夜はおれひとりでお通夜をします、長く世話になつたからといふから、家はせまいし、尤だと思つてまかせたら、奴さんその間に、すたこら、自分で始末して、棺に入れてしよつて、火葬場へもつてつてしまつたんで——おばさん死ぬまで重寶な權助をつかまへといたもんだ。」

だが、私の目には笑へない、生涯のそりとした、そのくせ誠實な大男が、愛した女の亡骸を入れた桶をしよつて、尻はしよりで、暗い門口から露路裏を出てゆく後姿をかなしく思ひうかべられた。

挿入寫眞は當時の風俗湯川氏の二女たき

ビルディングと鼻

八木秋子

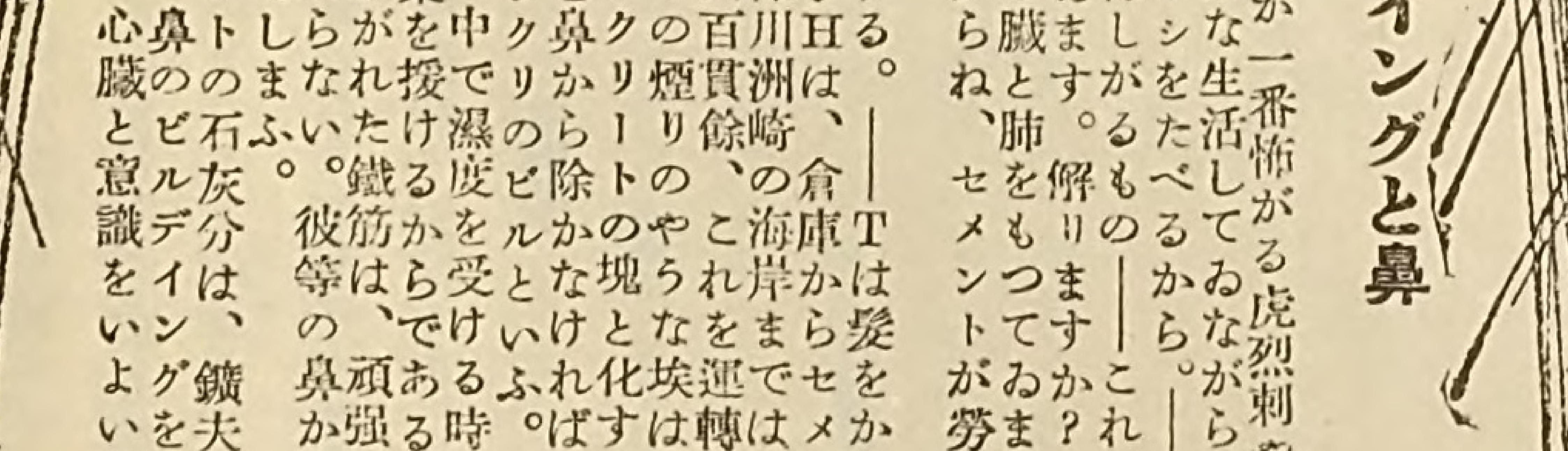
─朝鮮人は、日本の人が一番怖がる虎烈剌やペストには容易に罹りません。みんな犬や豚よりも慘めな生活してゐながらです。なぜつて？朝鮮人は生れながらにニンニクとトンガラシをたべるから。─病菌を殺してしまふんですね。だが、日本の支配階級が一ばん怖しがるもの─こればかりはニンニクやトンガラシではどうにも出來ない藥をもつてゐます。解りますか？とに角、朝鮮人はなかなか健康な心臟と肺をもつてゐますよ、ことに、僕等は何年となく、セメント搬びをやつてゐますからね、セメントが勞働者の肺を丈夫にする、妙なことでせう？─

セメントが勞働者の肺を丈夫にする。─Tは髮をかきあげて、快活に笑つた。

京橋トラツク・ガレーヂの運轉手Hは、倉庫からセメント袋を滿載して、三田の工事現場まで一日四十回往復し、二回深川洲崎、の海岸まではこぶのである。一回の車に積載するセメント袋は三十八袋で重量四百貫餘、これを運轉助手と人夫の手を籍りて投げおろし、積荷する。すると、セメントの煙りのやうな埃は手拭をとほして鼻孔に潜入し、そこで適當な濕氣を得て完全なコンクリートの塊と化する。そこで運轉手や人夫は屢々この呼吸を塞いでしまふ、固い塊りを鼻から除かなければならない。

─彼等はこの石の塊を、鐵筋コンクリのビルといふ。なぜなら、セメントの埃が鼻の中で濕度を受ける時、彼等があへて鐵筋と稱する鼻毛が交錯して、より堅牢な建築を援けるからである。この人間の生きた神經に繋がれた鐵筋は、頑強にセメントを凝固させて、取除く場合の痛さといつたらない。彼等の鼻からは血が滲み出し、厚ぼつたい顔面筋肉が狂つてしまふ。

だが、セメントの石灰分は、鑛夫のヨロケと反對に勞働者の肺を健康にし、鼻のビルディングを破壞する時の苦痛は、勞働者の心臟と意識をいよいよ强靱なものとするのである。





生活斷片

林芙美子

精神モウロウと疲れ果てると、私のノスタルジヤは、赤いケットを掛けた、射的場を思ひ出す。キンシユク、不景氣、ワンワンはじけかへつてゐる、狂人的街の散歩に、私には、活動もサーカスもあまりに、キリキリと痛みすぎる。

そこでの私の精神統一は、バットや、敷島や朝日の山をめがけて、コロップの玉を打つ、まことにヒゾクな遊びの射的である。當つても當らなくてもいゝ片目を閉ぢて、片目でいつぱいの神經を放射するのである。その一ときは、何を考へるひまもない、まるで雲に乘つた鷲のやうに雄々と羽根を擴げて、寥々たる空に飛ぶ、あのあこがれは、私の趣味と云へば趣味、まことに安價な樂しみである。

新宿の夜店で、二發とも敷島の山をくづして、お上さんに目を圓くされた事もある。

私は射的の名人ではない。只氣持が向くと何もかも押しのけて、それにまいつてしまふ。情熱的になつてしまふ。

偶然に當つたまでゝ、近目で、的のふたしかな私が、自信のあるはづはない、只一本氣で的を見る。

古びた鐵砲のバネのはじき工合、ポアンポアン、實にその音は混りつ氣がない、私のユウトピヤである。

私は少し金があると、そつと射的を打ちに行く、まるで戰爭へ行く女の兵士のやうなコオフンを持つて。何もかも自由にならない浮世なら、せめて玩具の鐵砲でもひねくつて自由にしてみやう、煙草・・・のヨウサイは面白い、下手な友情より、チヤチな夫婦關係より、朗らかでカイテキな自己トウスイであり、自己逃避である。



文藝時評

平林たい子

原作と芝居

「西部戰線異狀なし」が村山知義氏と高田保氏との脚色によつて、築地と新築地とで「競演」された。私は、あの記錄風の原作がどの程度まで成功的に演劇化され得たかを甚だ疑問に思ひながら築地小劇場の方を本鄕座で見た。演劇の技術的問題としてあの芝居を、今私はこゝで取扱はうとは思はない。私は芝居に對しては全くの素人であり、また、それは、この時評の分を越えた「演劇」の問題であるからである。

私がこゝで問題にしやうと思ふのは、マルクス主義文學者のあの種の文學作品に對する理解についてゞある。村山知義氏があの「西部戰線異狀なし」といふ一種の戰爭批判文學（それは決してプロレタリヤの立場からの××主義戰爭批判ではなかつた）をいかにマルクス主義者の觀點から解釋し、批判して演劇化したかである。

原作「西部戰線異狀なし」が單なる平和主義を幾何も出てゐない戰爭曝露であるにも拘らず、尙かつ我々にアッピールして來るものがあり、我々に「かやうな記錄を社會化することは階級鬪爭激成の上に若干の意義をもつ」と思惟させた所以は、

A、そこに描かれてある戰爭が、その戰爭のために軍需品を運搬させせられ、武器を動かさせられ陣地占領のために肉彈の提供を要求されてゐる多數の勞働者、農民、勤勞者の意志によつて行はれてゐるものではないといふ事實。それが、論理でなく、實感を伴つた形象の言葉で描かれてあるといふこと。それは戰爭の指揮者である將校と兵卒との間に起つたさまぐ〵な事件や兵卒同志の會話やで强く讀者に印象される。

B、そこに描かれてある戰爭の悲慘。

プロレタリヤは平和主義者ではないから、敢へて戰爭一般に反對するのではないが、××主義戰爭は、プロレタリヤ自身の意志でない、それによつて利益するところの他の階級の命令によつて行動を强制されてゐる戰爭であるが故に、それは、絕望的であり、無意味

であり、强制的な犧牲である。したがつてそれは、階級と階級との戰爭には見られない悲慘さを、同じ立場に立たされる可能性を充分に持つてゐる被壓迫大衆にヒシヒシ感ぜしめる。

C、戰爭によつて被らされる、一般無產大衆の迷惑。

適切な言葉がないので「迷惑」と私は書いたが、それは、こんな個人的な言葉が表現出來得る程度の被害ではない。同書は、この事については極めて簡潔に、しかし、急所だけは鋭く衝いて描いた。

以上擧げた三項はB項の「そこに描かれてある戰爭の悲慘」に統一されてもいゝ分類しかたであつたかも知れぬ。要するに「西部戰線異狀なし」は、戰爭の悲慘が如實に、形象の言葉で描いてあつたが故に我々を益したのである。エリッヒ・マリヤ・ルマルクといふ人は、俗にいふ「いかなる偏した物の考へ方にも捉へられてゐない」人物であるらしい。いふまでもなく、それは、我々にとつては、「偏すまいといふ一つの考へ方に偏してゐる」人物である。

さて、村山氏によつて脚本化された「西部戰線異狀なし」を今擧げた、プロレタリヤにとつて有用である所の諸點と比較して見ると、表現の上の技巧（テクニック）の上に於いて、この原作の特徵である所の「形象の言葉」が、他の抽象化された、主として、論理の言葉に、所々が變形されてゐる。それは文學と演劇との性質の相違から來てゐる點も充分にあるが、しかし、私の經驗によると、あの芝居での程度が、演劇としての最高の度合であつたとは思へぬ。

內容的に言ふと、原作では一番重要な要素であつた所の「戰爭の悲慘」が第二、第三義に置きかへられてゐる。むしろこの芝居では、戰爭は相當呑氣なものである。兵卒たちの言行は、銃殺や重營倉やの軍紀の網の目をくゞつて行動してゐる人間のそれとは受取れない。「生命の危機」といふ樣な感情を抱いてゐる人間は、めつたに見あたらない。そこでは皆がまるで、さういふことを超越してしまつたかの樣な會話をやつてゐる。村山氏と、エリッヒ・マリヤ・ルマルクといふ人との現實に對する態度には大きな相違點がある。ルマルクは、兎も角、現實を忠實に報告しやうとしてゐるが、村山氏は、現實より學ぶことを輕視して、用意してゐた一つの觀念のみを强いやうとする。その觀念が、あの芝居を通じて、自由自在に觀衆の頭腦に入り込み得たとしたら、それは成功である。が、「演劇」または「藝術」といふ濾過器は決して作者が濾過しやうとするすべてのものを無條件に通過させてはくれないのである。

村山氏は、あの原作の所々にある兵卒の小さい反抗の點に重要點を見出してあの原作を理解して居られるに違ない。私は、あの戰爭の悲慘が我々の知らなかつた事を敎へてくれ、それが全被壓迫大衆の心臟にふれるものである故にその點に重要性を見出す。むしろ、私にとつては、兵卒たちの區々の反抗は、その悲慘の反映の一部分として、受取れた。そしてそれでこそ効果的だと思ふ。

マルクス主義者にとつてはいつもその作品の社會に與へる効果こそが問題たり得る。從つて、それは單なる、作者の主觀の問題ではなくつて、「客觀性」を考慮するところの問題でなくつてはならぬ。「社會的に壓迫されてゐる人間がその壓迫に對して反抗する」といふ筋を盛つた文學はプロレタリヤ文學として、最も美しい文學である。だが、それは、その「壓迫」との不可分な關係に於いてのみプロレタリヤ的に美しいのであつて、單に「反抗」だけを取つて來てもそれは美しいとはいへぬ。この比喩は村山氏の場合へあてはめると多少誇張に過ぎてゐる。村山氏はその壓迫の原因にも溯つてゐる

こと勿論であつて、たゞ、その説明が、その原作と比較して見た時、大いに不足であつたといふのである。そしてその不足が、現實歪曲にまで延長しやうとし、結局、「目的意識」でないある種の小ブルジョア的な「偏狹主義(ショービニズム)」に墮しかけてゐるといふのである。

實踐と理論との分離

現在の諸雜誌に載つてゐる論文のうちで、およそ「女人藝術」の論文程難解な活字と學問的術語とを使つた論文はあるまい。かつては平假名さへ自由に使驅し得なかつた日本の女性が、これ程に豐な語彙を持ち、專門的術語に通じたといふことは、たしかにその地位の進歩を如實に物語るものとして、喜ぶべき現象であるに違ない。

が、これらの諸女史を我等被壓迫階級の前衛として認識する時に、私は諸女史に對して、ある一つの不滿を持たざるを得ない。マルクスが、資本論を、平易に〳〵と書きながら、尙かつ、それが經濟學の專門語の使用を必要とする故に知らず〳〵の難解になり、勞働者諸君が讀むのに少し難しくはないかとそれが心配だと語つたといふ物語は、この場所ではもはや傳説にしか過ぎぬ。諸女史は難しい術語と、內容に大して影響のない文獻との披露のために入亂れてたゝかつてゐる。

最近のアナーキズムとマルキシズムとの論爭はその最もよい例であらう。この論爭は今手許に雜誌がないがたしか、八木秋子氏の藤森成吉氏に對する公開狀に端を發した。私は八木氏の結論として稱されるアナーキズムには贊否を棄權しやうと思ふが、藤森氏に對する批判には、多くの部分的眞理があつた樣に記憶してゐる。それに對する藤森氏の回答「勉强なさい」は、マルクス主義者の面汚しである。マルクス主義者は、個人的には、最も自己批判力の强い人間であつた筈である。それから展開して行つた高群女史の原理論、中島女史の一般的抽象的な批判八木氏の反駁隅田女史の反覆また、それに對する 駁・・・

この論爭は一體、當事者以外の誰かを少しでも益したらうか。日本の無產階級運動の歷史では、既に十年近く前に、その組織方針の上の決裂から、アナーキズムとコンミニズムとの對立を生じ、論爭がたゝかはされた。その後、徐々にその論爭がプロレタリアートの視點から遠ざかつたのは、單に興味が失せたためでも忘却したゝめでもなく、既に實踐的に兩者の相違點が明になり、原理論の論爭などが全く必要なくなつたゝめである。もし、今日我々が、アナーキズムとたゝかふ場合があるとすれば、その理論と照應するところの實踐の相違點を比較し合はなくつては意味をなさぬ。

マルキストは組合運動ではかやうな方針を持つてゐる、にもかゝはらずアナーキストはかやうだ、そして結果はこれ〳〵だ、又は婦人運動ではかやうだマルキストは資本主義の將來に對してかく〳〵の見解を持つてゐる、したがつてプロレクリアーを反ブルジョア戰線の指導階級たらしむべくかく〳〵の方針を持つてゐる、そして今これ〳〵の方向に向ひつゝある――これは一例であるが、かやうな論題に於いてこそ兩者の論爭は現段階に於いて有意義である。

兩者の論爭に於いては、ことに、アナーキスト側にこの態度が缺けてゐる。政治運動の方針の內部での大山氏の方向轉換や、勞農ロシヤへの單なる惡口などは、マルキシズムに立脚する社會科學を毫も搖がすものではない。どうぞ、この方針に於いて、その論爭にたづさはつてゐる當事者間の勝負でなく、一般大衆への爭奪戰のつもりでこの論爭をもし進める要求があるならば進めていたゞきたい。



社會時評

永島暢子

政府の宣傳と日本××黨事件

モスコーに本部をおく××主義第三インターナショナルの日本支部として結成され、無産者運動の頭部的革命的黨である日本×××檢擧に關する記事は、十一月五日漸く解禁となつた。舊勞働農民黨成立以來、異常の速度を以て尖鋭化した勞働者農民の鬪爭は、必然的に潜行的であつた日本×××を前面に押し出し、昭和三年の總選擧には、最も勞働者農民の要求する鬪爭スローガンを掲げて、その巨軀を大衆の前に表はした。爾來、獨自の指導部を有するが如く、有せざるが如く、とかくその戰術上に誤謬を犯しがちであつた勞働農民黨は、ひたむきにその社會民主々義的傾向の清算に傾き、判然たるプロレタリヤの黨としての機能を果さんとしつゝあつたのである。然るに支配階級は、いち早く彈×の斧を振りあげ、所謂三・一五事件に於て多數の優秀なる戰鬪的分子を檢擧投獄し、四・一六事件に於て打ちひしがれたる底より起ち上り、黨の再建に努力し活動しつゝあつた勞働者農民を、また〳〵獄に送る暴×を爲したのである。その間勞働農民黨その他二團體の解散、檢擧を逃れたる鬪士の追及等、國家權力の十分なる發揮によつて、八百二十五名の大衆が、起訴され、日本×××事件として、我々の前に展開されたのである。筆を揃へて待ち構へた各新聞社は、全面を惜しまぬ程に紙面をさき、政府は鬪士の投獄と共に黨を後援し支持する大衆の切り離しに血眼となり、一切の報道機關をそれに利用した。見よ！ あらゆるブルヂョア新聞は、×××について何を報じたか？ それはただに×××は、國家覆滅の大陰謀團であり、不逞の徒の結社であり、それを追擊する官憲の苦心等を探偵小說の樣な興味で書きたて、黨員をめぐる戀愛と幹部達の遊蕩記事に讀者の興味をそゝつただけではないか。

一體私達は、あの新聞記事から、××主義乃至は日本×××について何を學んだか。日本×××は、如何なる思想に立脚し、如何なる要求を以て結成されたか、その片鱗をでも窺ふ事が出來たであらう

か。十一月六日東京朝日新聞は「×××事件とその對策」に論じていふ。「この×××事件にて起訴されたのは、大抵は二十代の青年であり、大部分は帝大以下の官私學その他の學校の卒業生である故に、輕々に看過する事は出來ない。從來の學生思想問題研究に關する壓迫が上策でない事は、治維法の重罰主義が、當局が期待したであらう程の効果を表はさなかつた事と同樣だ」と一寸政府のヤリ口を皮肉つてはゐるが、「××主義の惡魔の手引きの前には、彼等純眞なるべき青年を、魔道に追ひやる樣な社會的缺陷があるのである。從來の政治は、あまりに民衆の不平と不滿を顧る事をしなかつた。旣成政黨による議會政治は、何等の光明を民衆に約束しない。そこに乘じて××黨運動が火を點ぜんとする。民衆の不平と不滿をなからしめないまでも、合法的な漸進的な方法によつて之を少なからしめる未來の希望を、大衆に約束しなければならない。」と××主義運動を學生の人道的運動の如く曲解し、且、リンショクな主人に少しばかりの小遣を出させて、下男下女をなだめておく番頭の樣な忠義立てをし、さて最後には一治維法の改正即ち國體と私有財產とを分けた事は、一進步であるから、一層進んで治維法より、私有財產制度の否認云々をのぞき、國體觀念のみを明かにし、××主義の宣傳に乘ぜしむるな」と支配階級のよき忠言者となつてゐる。

この忠義立ては東京朝日新聞のみではない。一切のブルヂョア新聞は、これと大同小異の步調をとつて、政府の發表するがまゝのものを少し綾をつけて報導し、論斷してゐるにすぎない。だから一般民衆は、何が故に××主義をかくも罪惡視し、撲滅に努めるかをも知らないし、××は、どんなに事實を担×してゐるかも知らない。その一例を言ふならば、渡邉政之輔氏、三田村四郞氏等が待合遊びした事に就いてゞある。この事に關して一般はさも墮落の如く書き立てゝゐるが、この運動の性質を考へる時に、むげに憤慨し得ないものがあるではなからうか。或は氏等の待合遊びは、賢明の策でなかつたとしても、草を分けても搜さんとする××階級の組織的搜査の目をのがれんとするには、花柳界にのがれて、ブルヂョア共の眞似をして、その筋の目をくらました事も亦餘儀ない事だ。殊に後に日々の行動の自白を强要された時、同志に迷惑のかゝる事を恐れて、待合で遊んだと白白してゐるむきもあるといふ。それについて共產黨被告市川正一氏はかく述べてゐる。

「同志鍋山は何等の拷問にも答へなかつた。その時特高課の某が、『そんならお前が、××主義者として顏向けの出來ないやうにしてやる』といつて同志鍋山と格鬪した事實がある。殊に奇怪な事には、三月十四日に國外に脫出したと言はれる同志佐野が、四月九日より十月一日までの間に、一回待合に行つてる事である。これを見ても、幹部達の遊興問題は全部的に信用出來ないし、待合の女將や藝妓が、警視廳の命令で容易に出鱈目な調書に捺印する事だけは事實だ。」

市川正一氏の言は、多少なりとも、社會運動を經驗し、當局の態度を知る者にとつては無條件に信じられる事であり、またこの××事件の裏面には、拷×致×等によつて調書を作りあげた事實さへあるのだ。

殊に幹部達の遊興問題に憤慨して被告中にも續々脫黨者があるといふが、これも亦マユツバものである。何故なら最近やはり被告の小西茂國氏が××が盛んに解黨的行動に出る事を慫慂し策動してゐる事を報じてゐる。かくも當局の發表し、ブルヂョア新聞の報ずる

所と被告自身の云爲する所とに於ては、多大の相違がある。一體民衆は、そのどちらを信ずべきであらうか。

とにかく一般民衆は、單に、國法に觸れるから惡いんだといふ他××主義運動に就ては何事も知らないのだ。そしてその民衆の盲目は、××階級の欲する所であり、自分達の解放について何も考へない事は、支配階級の萬々歳を壽ぐ所以のものであるには違ひない。だからこそ、最近著しく激化した無產階級の生存權確立運動を押へつけ、治安維持法を制定して極刑主義をとり、威壓また強壓を以つて民衆に望んでゐる。

然らば何が故に、支配階級は、かくも××主義運動を怖れるか。「××主義はプロレタリヤ解放の敎則である」とエンゲルスは言つてゐる。それは資本主義の解剖と社會の發展を辨證法的に把握したるマルクス、エンゲルスの所產であり、この敎則の示す所と、その經濟的社會的狀勢の正しき把握によつて、暴虐極まりなかつたツアールの專制政府を倒し、勞働者農民の國樹立のために、××を決行した國は、ソヴエツトロシヤである。現在の所ソヴエツトロシヤは、いまだ眞實の××主義の國ではない。しかし賃銀奴隷の存在によつてのみその富力を誇る、資本主義國列強に伍して着々と、人による人の搾取なき集團的生活を未來に約し、現在でも、プロレタリヤ階級の幸福なる國はロシヤである。

それ故にこそ支配階級は、××主義を怖れるものであるし、日本に於ても、プロレタリヤ階級が、階級意識を鮮明し、自身の解放を期して立ち上り、その頭部的指導部として、日本×××を結成したが故に、資本家地主とその××は、その死滅に狂奔するのだ。

とまれ日本×××は、支配階級の絕大の大強壓によつて、一時力を弱めた事は事實であらう。けれど自己の階級意識を判然とする事の出來た勞働者農民の階級的鬪爭は、當面の政治的運動の中心スローガンを、言論集合出版結社の自由、治維法撤廢、勞働者農民の政府樹立に統一し主力を注ぐであらうし、××の強壓も亦ます〳〵威力を加へるであらう。

高が油揚をねらつてゐる

今議會の婦人參政權問題　思想善導の敎化總同員のといふ口の下から、續々所謂要路の大官が、賣勳疑獄、鐵道疑獄等々の疑獄事件に投獄される。勢あまつて迂かつにも、現內閣の大官にまで飛火したが、そこは消防の鍵を握つてゐる元締めだけあつて見事に揉み消してしまつた。が民衆は、昔ほどおとなしくなくなつた。かてゝ加へて昨今の深刻な不景氣はどうだ。金解禁さへすれば、物價は廉くなるぞ、生活は樂になるぞ、と一寸飴をしやぶらしてくれたはいゝとして、無產大衆の知らないうちに、戰爭だ、產業立國のためだと、いつの間にか資本家地主の作つた國債の穴埋めを贖くらうとして餘念がない。さうした魂膽でお太鼓叩いた緊縮政策も、自分の乾分を甘く見すぎて、官吏俸給一割減を持ち出して味噌をつけてしまつた。殊に緊縮の聲は、物價下落に先だち事業縮少中止から多くの失業者(二十六萬・九百)を街に投げ出すに至つた。勞働者階級、無產者階級の反抗なら、××裁判××等お手のもので、どんな目に合はせる事も平氣だが、自身のよき走狗であり、手先である高等官連の結束的反抗にあつては、さう〳〵無理を通す譯にはいかぬ。そこで一割減は引つこめはしたが、失業者は依然としてふえるばかり。なんとか政府は人氣の挽回策を講ぜねばならぬ。しかも政治季節は

もう目の前だ。民政黨は遺憾ながら絶對多數派ではない。故に自黨の政策を行ふためにどうしても解散か？　事實社會民衆黨の紳士諸君の樣に、政友會内閣乃至は中間内閣を恐れて、解散を忌避してくれるお目出た屋もあるが、大勢はまづ解散は免れぬ所だ。かうして考へた揚句にこれならと持ち出されたのは、例のとつておきの切札婦人參政權の問題である。

婦人に參政權があれば、政界も淨化されやうし、疑獄なんかもなくなるだらう、市町村の自治制もよく行はれるだらう、と參政權をさも惡魔拂ひのやうに考へてゐるブルヂョア婦人運動家達が、社會運動の、代議士招待會のと、盛んに個人的運動をする事をよい事にして、個人としては贊成だが、團體としては時期尚早のなんのと、なか／＼にその切札を出さうとはせぬ。そして今度のやうに人氣挽回策等には、チョイとのぞかせて、物欲し氣な人達をして、この議會勝負の應援を頼まふとするのだ。だから落目の政友會でも、民政黨に先を越されたので、それは去年も揭げた政策だから、今年は婦人參政權は揭げずに、「各種產業の統制と無駄廢除」の一項を政策に加へたさうだ。

政策は、有閑婦人のお召物の樣に、その年によつて目先を變へるものだらう。勿論民衆の幸福など物の數ならず、自分自身の利權のために政界に活躍してゐる代議士諸君にして見れば、人氣取りの爲に目先の變つたいろ／＼の政策を揭げる事は必要かもしれない。實行出來る出來ないは問題でないのだ。

前議會には、多少進步的と見られた民政黨は、あまり婦人參政權乃至は公民權の問題は問題とされなかつた。政友會では盛んに鰻香を振り廻し、せめて公民權だけでも通過させる形勢を見せて、婦人達をヤンヤと言はせたが、遂に香だけで終つた。公民權だけなら、「市町村制改正法律案」の時に一緒に出してもよかりさうなものだが、政界のカケ引きは「問題の紛糾した時に出して、若し通過しなかつたらどうします？」（秦豐助氏？）などゝこけおどしを言はせて、そのまゝにしてしまつた。

無產階級にとつては、飯食ふ事は實に命がけの仕事である。政治も亦無產者にとつてはその生活を決する重大の意義を含むものである。私達は犬におあづけをするブルヂョア主人の遊戲心を滿足させる樣な、代議士連の態度を斷じて反撥せねばならぬ。けれど婦人參政權の切實なる要求が、工場から農村から卷き起り、大衆的要求として鬪爭されない限り、その獲得はむづかしいだらうし、よし、政黨の人氣取りのために、何等かの形で實施されるとしても、それは單に通過に努力した政黨の人氣取りの口實となり、ブルヂョア婦人の代議士病、有名病を滿足せしむるにすぎないであらう。

家賃値下問題　家賃さへまとめて拂はなかつたならばとは、無產者の返らぬ繰り言である。實に家賃は下級サラリーマン、勞働者の收入の大部分をさらつて行く。市内には、空家六萬戶あるなどゝいつても、一軒に二三ヶ族が住居しても、尙家賃に頭を惱ましつゝある人が多いのだ。

然るに家主は、どんなに借家人から搾取してゐるか。彼等は、殆ど家を建てたり、買ひ取つたりした所の費用を、二年なり三年なりで回收し、後はたゞ儲けをきめ込んでゐる。しかも借家人から、三ケ月又は六ヶ月分の敷金をとり、その金を或は銀行に預金して利子を生ませ、或は事業に流用して利潤を得てゐる。家賃三割値下の要求は、舊勞働農民黨、關東婦人同盟等の卒先して取りあげた問題だ

つたが、底止の見えざる不景氣の襲來と、金解禁から、物價値下の折に相呼應して、その要求は、急激に市民大衆に浸透しつゝある。

無産黨は、勿論この問題を取りあげて氣勢をあげてゐるし、演説會が開かれゝば、町民有志のとび入りがあつて、一層市民大會らしい活氣を呈する。さきに行はれた市會選擧には某市議が、自ら持ち家の二割値下げを實行して市民に呼びかけ、昨今市會、區會議員等の、家賃値下げに奔走するもの多く、又賣名的、利權屋の徒がこの市民の要求を利用して個人的にかけずり廻り、ブローカーを爲す人達も輩出してゐるといふ。

家賃三割から五割の値下げは市民の要求であるし、現在の收入指數から推しても當然實行されねばならぬ事である。市民は、この家賃値下運動を闘ふと共に、無産者の移轉にはガンの如き敷金全廢をも合せ行はねばならぬ。地域的に或は家主別に、その地區に應じて結成し、統一ある機關を設けて統一的なる活動を開始し、且この運動を、瓦斯水道電燈料値下げにまで發展せしむる事を必要とする。それ等は實に家庭の必需品であるのに、市民は統一的なる要求運動を起さぬばかりに、資本家の懐のみを肥してゐるのだ。現に東京瓦斯會社は、九分の利益配當を行つてゐるといふではないか。この事業不振の折に、九分の利益に腹鼓を打つのは、實に大資本を擁し、獨專的事業に王座してゐるからであり、市民自身があまりに自分の利益に無智だからである。

最近自ら家賃値下げを申し出でゝジアナリストのいふ美談を生んでゐるのは、比較的良心的な家主が、民衆の聲に押されたからで、彼等の申し出でを待つて居ては、個人的にはどうであれ、民衆一般は相變らず、高い家賃や瓦斯や電燈料に苦しまねばならないのだ。瓦斯、水道は都會的な問題であるとしても、電燈は津々浦々にまで普及されて居り、しかも地方の電燈は、都會の半分程の光力しかないのに料金は高く、且一燈につきいくらといふ賃貸料さへとつてゐる。

だが市民大衆は、かゝる要求運動を起すに當つて、叩頭野合的運動を斷然廢し、飽まで自らの闘爭によつて要求の貫徹を期せねばならぬ。殊にかうした運動には、ともすれば、市議だとか區議だとかの力を借りたがり、また彼等も、これに力を入れて信頼をとり、次の選擧に備へたがるものだが、某市會議員が自らの持ち家の家賃値下げを實行し、勇ましくもその運動の陣頭に立つた理由は、自分の持ち家が、二重にも三重にも抵當に入つてゐる爲に、頭底家賃の入る見込みがない爲であつたからだといふ。彼等ブルヂョア共は、自分の利益を勘定しないでは、民衆のために働くものではない。うつかりすると、鳶が常に油揚をねらつてゐる事を、民衆は忘れてはならない。

勞働者教育　虎視眈々として、鳶が油揚けをねらつてゐるのに勞働者教育に對する政府の提案がある。その會議には、社民黨の鈴木文治氏、松岡駒吉氏等も加はつてゐるらしいが、この案を階級的勞働者は注意を怠つてはならない。抑も政府の勞働者教育に着眼した原因は、最近著しくプロレタリア階級が階級意識を把握し、闘爭が尖鋭化しつゝある事による。青年訓練所女子青年團等の反動教育に味を占めた政府は、勞働者の好學心を利用して支配階級の走狗としての教育を施さうとしてゐる。若し勞働者自身の爲の教育なら、戰闘的組合を彈壓し、勞働者の教科書マルクス主義的文獻等の發行を禁じ、その閲讀を拒むのか。勞働者の教育は、ブルヂョア坊ちやんの如く、學校で机の上で出來るものではない。闘爭ののちに勞働者

は自身の學ぶべきものを學び、新興階級としての文化を自ら築いて行く。先に農民自ら創立した千葉の農民學校に解散を命じたのは誰だつたか？ 勞働者は政府の甘煮に舌を燒いてはならぬ。一萬圓ばかりの教育費で、勞働者の歴史的使命の自覺を眠らされるのは、勞働者の恥である事を知らねばならぬ。

もう一つのお茶番

來春一月二十一日より、ロンドンに於て開かれる英米日佛伊五國海軍々縮會議の全權として、若槻禮次郎氏等一行が鹿島立ちした。不景氣だ、緊縮だといふ無産大衆の塗炭の苦しみを外に、灘の生一本を忘れるな、船中で牛鍋の舌鼓打たうと、國費百五十萬圓をかけての旅は、まことに太平樂の事である。

若槻氏は出發に際し、ステートメントを發してこの會議に向ふ使命を語り、且日本は傳統的に「世界の平和を確立し、國民の負擔を輕減し、軍備の縮少を期してゐる」といつてゐる。これを見るといかにも日本は平和論者の如くに見える。他がさうするので、仕方なく軍備をしてゐる如くに見える。それなら米國は何んといふか。「米國では他の列國さへ歩調を合はせさへすれば、如何なる低率たりとも軍備を縮少する決意がある。且海洋自由に對しても、食料船に對して病院船同樣に扱ふべきである」と見榮を切つてゐるし、英國はシンガポールの軍港建造の中止を聲名して、軍備の縮少の諒解に努めてゐる。この聲名を聞いただけでは、いづれも平和を要求し、戰爭の意志がない如くに見えるが、それなら何故に、日本は、水上補助艦の對米比七割を固執し、八吋備砲巡洋艦は七割を讓歩する事が出來ないと頑張るのか。そして内地に於ては、緊縮政策の手前、軍事費輕減などゝは言つてゐるが、その實は軍隊内の整理や改良に全力を注ぎ、ます／＼その充實に怠りないのだ。殊に演習に名を藉りては、假想敵國を定めて模疑戰爭をなし、或は海軍艦艇の建造に努め、航空機の進歩を奬勵し、一九二八年に於ては、日本は國家豫算の約三五％、五億八千二百萬圓をこの戰爭準備のために費してゐる。口には平和、手には武器は、あながち米國の一手販賣ではなくなり、日本も出藍の譽をなしてゐる形である。

まして米英國の先輩國に至つては、わざ／＼英國首相マクドナルドが米國に出かけて、腹の探り合ひをなし、美辭麗句の外交的辭禮を頻發せしめながら、いつ如何なる時にでも相手を倒さうとする意氣を忘れない。今度の軍縮會議が、特にセント・ジエムス宮殿で開かれるさうだが、國際平和會議が、パリーのヴエルサイユ宮殿で開かれても、一向平和を導く事なく、ます／＼各國のプロレタリアートが飢餓に追ひやられつゝあり、支配階級が、最後の亂舞を戰爭で切り拔けやうとしのぎを削りつゝあると同樣、何等の用もなさないであらう。

軍縮問題の中心は、英米の十十に對する日本の七の要求にあり、英米國は、もつと日本が低率にする事を望むであらうとの事だが、何故に日本は七割を固執するであらうか？ 英米國はそれを承知しないのであるか。伊藤正德氏は、かう言つてゐる。「七割を理解するには、二つの前提が要る。（イ）海軍には必ず想定敵國がなければならぬ事（ロ）その敵は米國である事。而して若し日本は日米戰爭に對して守勢の戰略をとるに於ては、どうやら七割で間に合ふかも知れないが、六割では頭底勝ち目がない。海軍戰爭に於て、力量相比敵する時は、艦數の多寡によつて勝敗が決せられる事を指示してゐる。

それなら何故日本は、英佛伊を假想敵國とせず、米國を目標とするであらうか。

「日本は帝國主義戰爭によつて、一層强化された。こゝに於て日本は新な販賣市場を征服し、帝國主義的諸計畫の實施に更に一歩を踏み出す能力を得た。日本はドイツから青島を及マリアン諸島、マーシャル諸島、山東を得、軍事的突×、恐×、貸付等により、支那政府をして、滿蒙及北支那、中支那に於ける特殊權、並に優越權を認めしめた。日本帝國主義のヤリ口のよき圖解は、最後通牒の形で支那に提出した有名なる「廿一ヶ條の要求」である。その帝國主義的政策に於て、日本は世界戰爭後一つの强大なる競爭者北アメリカ帝國主義に衝突した。自己の商品と資本に對する市場を必要とした北アメリカ帝國主義は、これ以上極東に於ける、日本の專横を宥しておく事は出來なかつた。即ちアメリカ政府は一九二二年に於けるワシントン會議に於て、支那を大ブリテン（英國）及日本の勢力範圍に分割した所の、日英同盟を破棄せしめ、支那に利益關係を有する諸强國の、門戸解放、機會均等の原則の上に立てる保證條約締結を成就せしめた」（インタナショナル第三卷第七號・インプレコールより譯載）

即ち支那を中心として、日英米佛その他の資本の競爭は烈しく行はれ、それが排外主義、支那統一の看板を以てプロレタリヤート搾取の具に供し、自家の安泰を築かうとする支那ブルヂョアジー、或は軍閥と結びつき、自國帝國主義の發展の爲に策動してゐるのである。かの張作霖の爆死事件などは、その破綻の小さき一例なのだが、そのうちでも米國資本は、最も日本資本を脅やかしつゝあるのである。さればこそ、日本は×國を想定敵國としてゐるのだが、×國から見れば、想定敵國は、日本のみでなく、英國の大强敵を控へ英國にしても、米佛があるなど、彼等は出來るならうんと軍備を擴張して、戰爭がしたくて仕樣がないのだ。

けれどセリ上りの軍備擴張は自國の經濟が許さない。二三ヶ國結束して一國に當られては、たまつたものではない。しかもさなきだに階級的鬪爭の激化しつゝある今日、戰爭の曉に起るプロレタリヤの行動に對する豫想はなか〳〵に自重心を强ひ、こゝに平和に名を藉りる軍縮會議が度々催されるといふものだ。本音は平和にあるのでないから、お互が虫のいゝ事を持ち出す。會議がまとまらないで、また時を經ては同じものを開く。各國内のプロレタリアートこそいゝ迷惑である。彼等の使ふその費用は、みな民衆の血と汗の塊りではないか。

平和の神の內臟は、かくも腐肉にも等しきものであるにも拘らず、その容貌の美くしさにあこがれて、秘に片戀をする會議がもう一つアメリカに開かれるといふ。即ちロンドンに開かれる海軍軍縮會議を期して、米國に各國の代表的婦人達が集り「戰爭の原因及防止の研究それに關する婦人の責任」について討論されるさうである。日本からは、婦風會のガントレット恒子女史が出席され「國語の國際統一に關する問題」等を提出されるさうだが、あゝ神よである。國際的婦人の集會に參加する事をすらも、日本婦人の地位の向上の如くに言はれるが、さうした會議に參加した事によつて一般婦人は如何に變化したか、汎太平洋婦人會議にワンサと日本婦人が押しかけて何を得て歸つたか。マイナスから、いくら引いたつてマイナスである。私達無產者から見れば、さてもお金のかゝるお茶番である事よとしか見えはしない。（二九・十二・三）



アナーキズムの顚落

中島幸子

『女人藝術』十二月號所載のマルクス主義排擊の論文は、可成りに興味あるものであつた。殊に、高群さんの高踏的な論述の、あの博引旁證の廣汎な御談議には驚異させられた。然しだからといつて、アナキズムが客觀眞理だとして容認するものではないのである。驚いたと云ふ意味は、氏が相變らず牧歌的な農民詩人の觀念から脫しきらないことを知つたからである。有閑階級的な數十枚の原稿こそ、實に非科學的な口頭禪以外のなにものでもないことを、益々强く意識させられて了つた。過去に於いて、現在に於いて詩人である高群さんと理論的な論爭をする大膽さを持ち合せてゐない。又論爭をしたからと云つて、それはスコラ哲學的な饒舌に轉化することは自明のことである。

吾々は、理論が眞理であるか否かを決定するに、主觀的な、かりそめの判斷では到底なし得ないのである。眞理の規準をば、理論の助けを借りてのみ發見しやうとする企ては、不可避的に眞理の否定、神の信仰に墮するであらう。それ故に、頭の頂上から足の爪先まで唯物論者であるマルキストは、實踐にのみ眞理の規準を見出さねばならぬ。ゆえに吾々は、くだらぬ非科學的な長たらしい駄辯や、歷史的事實の斷片をとらへて、非辯證法的に辭をからしてふりまはさうとする樣なおめでたさは少しもないのである。

勿論、アナーキストの理論？が實踐からくみとられたものでなく、詩であるならば傾聽したい。沒落しつゝある農民の序事詩！何んと云ふ底なきブルジョアジーへの俗惡な媚、愚鈍な術學なのだらう！

只、私は許された此の機會に於いて、マルクス主義になされた虚構な掏り換へを、正しき方向に評價し、且つアナーキズムの理論的缺陷を指摘しながら、マルクス主義の客觀眞理を隱蔽しやうとするアナーキストの憎惡すべき瞞着を排擊しなければならぬ。

先づ私は、冐頭に於いて、マルキストとアナーキストとの兩者の究極目的の批判から此の論文の叙述を始めやう。此の問題に關して、一般の俗流的な表象として流布されてゐるところのものを觀るに、マルキストは、國家の保持者であるが、アナーキストは國家の絕對的な反對者だと謂はれてゐる。然しながら、此處に設立された對蹠關係は、アナーキスト的な意義を多分に包藏してゐるばかりでなく、むしろ社會民主々義的な陳腐な解釋である。しかし、國家を保持するといふ觀念は、マルクス主義にあつては辯證法的にのみ

意義あるので、このことに對する誤解がアナーキストにマルクス主義排斥の口實を與へたのであつた。此の過失の愚昧さは、社會民主々義の國家理論に原因してゐることを究明せねばならないのである。眞のマルクス主義は、昏迷せる社會民主々義者の國家理論とは全く相違してゐる。マルクス主義は、國家の實際のタントウ者であると主張するが如き社會民主々義者には、所謂究極的に國家形態は止揚される、といふ、マルクス主義理論の眞隨に觸れるところは、決して無いのである。此處に社會民主々義者の實踐的な誤謬がひそんでゐると同時に、アナーキストにマルクス主義を反對させる根據を與へてしまつたのである。

社會民主々義者の說くところの國家理論なるものをみるに、彼等は、異口同音に國家形態の發達過程に就いて語つてゐる。即ち國家は民主的共同團體、征服國家、階級的國家、それから最近の近代的な國民國家が彼等の謂ふところの發達過程であつて、此の最後の形態に對して、社會民主々義者は絕對的信賴を賦與してゐるのである。だがこれはマルクス主義的國家理論の完全な歪曲である。勿論、資本主義社會では、此の民主的な近代國家は、最良の國家形態であるかもしれないが、然し民衆の運命が、賃銀奴隸であるといふことに於いては、過去の國家とは本質的に何等變るところは無いのである。

故に社會民主々義者が、議會萬能の改良主義に頽落したる理論的根源は、悉く國家に對する完全な無智がしからしめたのである。又社會民主々義の本質的な解剖なくして、我國の政治運動に悲觀論を吐かれる如きアナーキスト高群さんの主張は、妄斷も甚だしい限りである。

マルクス主義は、此の社會民主々義者の說く未來國家や、民族國家に就いての饒舌には反對である。社會民主々義者の說く究極的な國家とても、資本主義國家の所產であつて、プロレタリアートに對する搾取を、覆ひかくさんとする僞瞞的な形式をおびてゐるだけに過ぎないであらう。

是に反して、マルクス主義に據ると國家は他階級を壓迫するための一階級の組織的力である。然れども未來社會は、階級抑壓はないからして、國家權力は絕對になくなるのである。だがマルクス主義は、アナーキズムの一般に主張するが如き未來社會の突然な出現を信ずるものではないのである。將來の階級なき××社會が、機械仕掛の神の如くに舞臺の上に現はれもしないし、又ジュピターの頭からミネルバーが飛び出した如く生ずるものでは決してない。マルクス主義とアナーキズムは、究極目的において、恰も同一物であるかのやうに思惟されてゐるが決して同一ではないのである。マルクス主義は、次の段階を認めることに依つてアナーキズムとは絕對な對立をなし、前者が科學的な階級爭鬪理論であるに反して、後者は空想的である。即ちアナーキズムは、國家權力の絕對的な排止を主張するに反して、マルクス主義は、その辯證法的な止揚を意味してゐるものである。つまり資本主義社會と×××社會の中間には、前者から後者への革命的變化の時期が橫はる一つの政治的過渡期がそれに對應する。此の過渡期の國家は、プロレタリアートの××的獨裁以外のものであり得ない（旁點はマルクスのゴータ綱領批判による）此の政治的段階に關しては、辯證法に無智文盲なるアナーキストの理解し得ぬマルクス主義の精巧さを實踐的に證明してゐるのである。

然らば、マルクス主義とアナーキズムとの區別は何處にあるか？ 其處には閑却してはならない重要な區別のあることを見のがしてはならぬ。それは未來社會の經濟組織の原則が、兩者には非常なる相違のあるのを見出すことが出來る。今それを素描して見ると、マルクス主義による生產關係は、社會的生產や、社會勞働の生產性を、高度迄發達させつつ社會的必要勞働時間を、最少まで減少せし

め、大規模の集中的計畫的な組織生產である。それ故に、マルクス主義に於いては、未來社會の態樣は、資本主義經濟のその發展傾向の延長線上に於いて得られたところの歸結であつて、そこには未來社會に就いての勝手な揑造は必要でなく、單に××××社會は生成されつゝあるのだといふ、認識で充分であるのである。此の意味合ひで、今日の資本家的生產方法の明白なる事實を見ても、社會主義的社會の必然性を覺り得ないやうな人々は、未だ存在せざる社會狀態の讚辭にたいしても、全く聾であるといふカウツキーの言葉は正當である。此れに反しアナーキズムは他の生產關係を、上位に置かんとしてゐる。卽ち、アナーキストの理想とする經濟組織は、地方分散の小コンミユンである。果して之が吾々の批判に堪へられるであらうか？　近代の資本主義經濟組織を觀察するならば、資本主義は、それ自身の生產關係が、生產力の桎梏に轉化しつゝあるのである。しかし乍ら、資本主義が矛盾を內包しながら發展すればするほど、それとは對蹠關係にあるところの社會主義經濟組織への轉換を準備してゐる。マルクス主義の未來社會は、此の資本主義社會の苦悶しつゝある胎內から生れやうとしてゐるのだ。資本主義社會が、潰滅して××主義社會に轉化すれば吾々は當然に××資本主義社會の巨大な物的裝置を利用しなければならないのである。新××は、カラクリ仕掛けのやうに突發するものではない。新××のあらゆる要素は、資本主義社會の中に生長してゐるのだ。だのにアナーキズムの未來社會に夢見るところの生產方法は、封建制度の共同團體と類似してゐる。斯くの如き粗笨な體系を理論づけやうとするものは、重に歷史過程の必然には盲目であると云はざるを得ないではないか？

尙又玆に國家權力なるものを、絕對的に否定しさらうとするアナーキストに、國家の本質を生產の集中的裝置に求めやうとする誤謬をおかす者がある。然し此の表象は、全く誤つたものであつて、丁度經濟學に於ける資本といふ範疇が、事物でないと同樣に、國家形態も事物として觀察することは不可能である。

國家は、事物でなく階級關係である。卽ち生產組織が集中的であるとか無いとかは問題でなく、支配、服從の上下關係が存在する一つの社會形態が國家なのである。生產集中に於いて國家を觀るのは、生產手段を資本として見ると同樣に、缺點だらけである。生產手段が、他階級の剩餘價値を搾取するに使用された場合に、初めて資本に轉化される。然し生產手段を自然と人間との鬪爭の道具として役立たしめる未來社會にあつては、それは資本たり得ないのである。集中的な生產手段を搾取行程として使用しないところの未來社會では、それは人間に高度の生產性を保證するところの物的裝置なのである。

アナーキストが、生產集中の一般に反對する現象は、恰も資本主義勃興期に於ける勞働者の原始的な反抗が、資本主義といふ人間關係に向けられずに、機械それ自體を破壞しやうとしたやうな幼稚さと類似してゐるのである。

今簡單ではあるが、アナーキズムとマルクス主義の未來社會に對する生產關係の差異を述べた。前者が生產の水準を低下させる處の地方分散的な小生產を强硬に主張するに反して、マルクス主義は、あくまで生產力を最大限度まで發展せしめるところの集中的な大經營である。前者の事項は、アナーキズムを農民運動に見やうとする高群さんが代表的なものであらう。又他の人が、あのネストルマフノ農民運動に眩惑を感じて、盲信を抱かれるなどは歷史の必然性が如何なるものなるかを少しも認識されてゐないことを如實に證明してゐる。今私はそれを最も解りやすく說くために、彼女等を盲人と象の面白い一つのお伽話しにたとへて云つて見やう。

それは或るところに三人の盲人がゐた。あ

る時、その盲人達が象を手さぐりして、一人が象の足に觸れた、その結果が、象と云ふ動物は柱のやうだと主張し、他の一人は腹部に觸れて象と云ふ奴は壁のやうだと主張するに反し、他の最後の一人は尾に觸れたゝめに、象は繩の様だと主張した。だが三人の盲人共は誰れも正當な判斷は下してゐないのだ。つまり之等は一斑を以つて、全體をおしたのである。丁度グレイ・ボレを中心とせる農民運動の自由郷を見て、世界は斯くなるであらうとの昏迷にみちた速斷を下されるのは、此の御伽話に相等しい不條理である。マルクス主義者は、此等のアナーキストの抽象的な見方とは相違して、社會事象を觀察するにあたつて、一つの完全なる方法論的規準を有してゐるのである。アナーキストは、辯證法と云へば直ぐにインテリの饒舌だとか、甚だしきに至つては、辯證法を形而上學的方法と混合するものがある。しかし乍ら、辯證法は人間の思惟にのみ妥當するのでなく、自然も社會も亦辯證法的に動いてゐるのである。――勿論自然に於ける辯證法について、ルカッチなどは反對してゐるが――辯證法に無智なアナーキストの人々よ、局部的な、連鎖のない觀察を止めて、辯證法的に事物を觀察することを學ばれよ。つまり世界を、その全體性に於いてその全聯繫に於いて、その變化と發展の過程に於いて見ることが、即ち辯證法の本質なる命題である。

アナーキストは、地方分散的なコンミユンを過重評價するために、自作的農民運動に、アナーキズムの本道が展けると謂ふ、然かし社會が封建制度の時代なればいざ知らず、現段階の主要なる階級構成が、資本家階級とプロレタリアートであつて見るならば、歷史の推進力はプロレタリアートである。故に農民運動に未來社會の理想を提唱することは、逆行的な詩人のたわごと以外のなにものでもないのである。だがロシアにあつても、メンシエビキーならいざ知らず、マルクス主義の正統性を帶びたところのボルシエビキーは、決して農民問題を度外視しないであらう。吾々は獨乙に關するマルクスの公式の中で、彼がプロレタリア革命と農民戰爭とが合致した場合に勝利を得た勞働者××の見地から、二つの力の結合が望ましきものであると語つてゐるのを知つてゐる。殊に、マルクス主義の繼承者たるレーニンは、農民問題の優れた理論家であつた。それ故に、マルクス主義ほど農民の意義の重大性を認識した學說が他にあらうか。

農民問題が、マルクス主義者にとつて有する異常な意義は、ロシア××の勝利の經驗に依つても、更に又ハンガリ、ポーランド及びイタリーの諸××の敗北に依つても實證せられる。故に、一九二五年のコンミンテルン執行委員會の擴大總會は、農民問題に對して次の如く述べてゐる。『現在の歷史的時期は、ただにプロレタリアートの後進諸層のみならず、農民の廣汎なる諸層をも獲得するために、プロレタリアートとブルジョアジーとの間の死物狂ひの鬪爭の時期であると……』。此の事項は、反對に吾々に對して、農民の獨立なる解放運動が決して成功に終ることのないのを教へるのである。更に、イギリス及びフランス大××の教訓は、いかに農民が新興階級たる、ブルジョアジーと同盟を結んだことに依つて、絕對主義の倒壞と封建的殘滓を掃蕩し得たかを如實に示してゐるではないか？農民の眞實な解放は、只プロレタリアートが指導的役割を演じてこそ、完全に達成せられるであらう。

高群さんは、農民の自主的建設運動なるものに、餘りに盲信を與へられてゐるやうである。貴女の祖先が如何に威大なる土豪でおありだつたとても、歷史は異つて決定するものである。吾々は、階級鬪爭にあつて、目的意識的な政治行動を否定し、自然發生的な經濟行動を說くがごときは、如何に誤つてゐるかは殊更に逑說する必要はないであらう。

プロレタリアートが、自然成長的運動のみ

に自己を制限した時代は、所謂機械破壞などの時であつて、それは素朴的な原始的爭鬪であつた。然し歷史の進展過程が、常に階級鬪爭の最後までの遂行に依つて成就されるのであるなら、自然成長的運動にたいする盲目的な聖化と崇拜は、決して許されないのである。自然發生性に歸依するが如き誤謬だらけの理論は、國際的勞働運動の革命的性質と相容れぬものであつて、かへつてそれは勞働運動をして、資本主義の根據を突かんとする鬪爭から遠ざからんとするもので、要するに反動的以外のなにものでもないのである。資本主義といふ巨大なる機構を直視せよ。アナーキズム的空想詩人には、金融資本の覇制に對する國際プロレタリアート運動が、ハツキリ認識できないのではなからうか? 飽くまで、自己を經濟行動に局限して、大衆の集中的な廣汎な政治行動を否定するなら、それは資本主義の搾取を止揚せんとするプロレタリアートの歷史的任務を阻止するものである。農民の自主性への期待の如きは、實に最惡の反動にしかあり得ないものである。更に、マルクス主義とアナーキズムと區別する他の本質的な問題がある。それはプロレタリアート支配の問題である。

前述した通り、マルクス主義的未來社會は、アナーキズムが設立するが如く、封建的な遺制の斷片を巧妙な、裁縫師的な技術でつぎはぎするのではなく、高度資本主義社會が自己矛盾を曝露して、益々階級鬪爭を激成せしめる時——此の鬪爭のみが、新社會を育成する陣痛であるが——資本主義は必然に崩壞して未來社會へ導くであらう。此れはアナーキストが駁論する樣な、一つのいんさんな窮命觀ではない。社會の會則的に移行する過程を認識して行動するマルクス主義者にとつては、爪の先の垢ほども宿命はないのである。『女人藝術』紙上でアナーキスト達は、唯物史觀をもつて可愛らしい無邪氣から、それを自然成長的宿命觀だと謂はれる。然し宿命論とは、盲目的不可避的運命が凡てのものに課せられ、凡てのものがそれに從ふ處の宿命の信仰である。かうした宿命觀とは全く人間の意思といふものを沒却して了ふことである。勿論似而非マルクス主義者のクノウの如く、マルクス主義を、宿命觀念に墮落させて了ふものがあるが、しかし正統マルクス主義は、社會決定論であり得ても、人間の意思を排除することはないのである。マルクス主義程人間の意思を尊重した學說が他にあらうか? 吾々の把握してゐる社會科學は、自然科學とは著しく相違してゐる。社會科學の取扱ふ社會現象といふものは、人間の意思を通してでなくては、決して生起することはないのである。事物の必然性を認識して人間の意思を作用せしめるところに、マルクス主義の優越性、眞實の科學としての存在理由がある。幼稚な無理解の宿命觀よばはりは、須らく拋棄すべきであらう。マルクス主義が、如何に人間の意思を高揚したかは、エンゲルスの『ルドウイヒ、フオイエルバツハと獨逸古典哲學の終結』に於いて最も明快に敍述してゐる。

マルクス主義に於いては、資本主義から未來社會への移行の過渡的な段階に、プロレタリアート支配の一時期が存在してゐる。所謂、權力は萬惡の根源であるとして、歷史の必然なるものが、權力に如何なる運命を負はせやうとしてゐるかを理解しないところのアナーキストの默許し難い權力の問題である。

然し階級鬪爭の承認を、プロレタリア支配の承認にまで擴大する者のみが、眞正なマルクス主義であり、戰鬪的唯物論者である。私は國家形態をば、たわいなく排除しやうとするアナーキズムを、此の點で空想だとしたい。今少しくアナーキズムと徹底的に對抗するプロレタリアートの支配に就いて論及しやう。

此の問題が明確にされるならば、高群さんの云はれる政黨論が誤謬だらけなることが容易に理解できるであらう。同氏が我國の議會に於けるプロレタリアートの鬪爭團體を、階

級の黨と混合したり、社會民主々義者の階級的裏切りを見て、プロレタリアートの政治的行動を否定されるのは、ちと早計ではなからうか？　將來プロレタリアートが、政治行動に幻滅を感ずるだらうなどの豫想は實に最悪な日和見主義な考へである。幻滅を感ずるのは誰か？　それはプロレタリアートではなく、恣意的に事物を判斷する高群さんの主觀的な妄斷以外なにものでもあるまい。マルクス主義者とて社會民主々義者の階級的裏切りに就いては充分熟知してゐるのである。單に社會民主々義者への墮落を見て、政治行動の否定に導くことは許しがたい過失である。社會民主々義者には、それ自身の階級的地盤が存在してゐるのである。それを究明することなく社會民主々義者の增大の過程を觀て、政治行動の否定などゝはちとおこがましき次第であらう。吾々は、社會民主々義者の增大化をば、マルクス主義者の墮落だど解するやうな主觀的なきまぐれでは觀ないのである。資本主義の現段階にあつては、資本家階級は、ブルジョアの番頭である民主々義者をも動員して資本の攻勢に、産業の合理化に向けざるを得ない程、社會情勢の逼迫を意識してゐるのである。社會民主々義の基本的な役割は、現在の尖鋭化した階級闘爭における必要な戰鬪的な勞働者の統一の破毀にあるのである。

高群さんを、極端に絕望のどん底に沈湎せしめた社會民主々義者の議會主義は、眞正マルクス主義とは相違したところの漸進的進化論者であるのである。マルクス主義者は、此の辯證法的な現實をば、決して形式論理的な方法で觀察してはゐないであらう。議會運動のみを政治行動だと見られる近視眼者流のアナーキストにとつては、一切の階級闘爭が政治鬪爭であることを理解せられないであらう。勿論、マルクス主義者といへ共、議會を否定はしない、むしろ最大限度まで議會に參加して、その階級的反動性を大衆の前に曝露して、ブルジョアジーと抗爭するのである。しかし乍ら、議會に就いて何等の興味をも感じないアナーキストにとつては、議會はプロレタリアートを眠らせる子守唄として聽えるだらう。アナーキストは、直接に經濟的な革命のみを熾烈に欲求する。プレハーノフ的表現を用ふるならば、彼等アナーキズムの所謂革命なるものは、自炊鍋に爆發物を充たして、それを公衆に投げかけるのである。此れを以つて革命だと主張する。だが此れは實に狂愚なものである。

然しマルクス主義は、資本主義社會から、未來社會に移り變るに際し、一つの過渡的な段階を設置する、卽ち、プロレタリアート支配の國家形態である。

アナーキズムの理論家は、尠くともマルクス主義政治學が、國家を承認するからといつて、紛然として反駁しやうとする。

果して然らば國家とは何か？も此の問題に就いては前に少しく敍述したが、此處に再出したい。マルクス主義に依ると、國家はヘーゲルの主張するごとく、道義的觀念の具現として觀るのとは相違して、國家をば歷史的な發達段階に於ける社會の生產物として見る。卽ち社會が階級的に分化した時に生成した階級支配の機關である。その限りでは國家といふ社會形態は、絕對的な存在物ではない。かつて、國家及び國家權力に關して、全然經驗しない社會があつたと同樣に、亦未來に於いても國家形態は、不可避的に消滅するであらう。卽ちエンゲルスの言葉を用ふるならば、國家は何時の日にか糸車や靑銅の斧とならべて、古代の博物館へ移されるであらう。

近代の資本家的國家は、その賃銀奴隷たるプロレタリアートを支配する機關であつて、その可能なる限り資本主義の不可信性を、保證せんとする社會の外被である。かくの如く國家の本質は、階級支配にある。それ故に若しプロレタリアートが、ブルジョアジーを克服したならば、その關係はどう變化するであらうか？　この點が形式論理的に事物を解釋しようとするアナーキストには不可解な謎な

のである。マルクス主義の階級闘爭理論に繼續して生起すべき重要な未來社會への契機は、プロレタリアートの階級支配である、即ち國家權力の掌握は必然にブルジョア支配の國家をばその反對物たるプロレタリアート××へ轉化するであらう。しかし此の國家形態は、永久的なものでなくて、一時的な段階にのみ意義を有するのである。此のプロレタリアートの××は、階級支配の機關であることには何等異つた態樣を有しないが、近代の資本家的國家形態が區々たる小數者の利己的目的のために役立つに反し——例へばアメリカ共和國が、モルガン商會の代表機關であるやうに——プロレタリアート支配の國家形態は、人民の多數の利益において、政治的支配權を必要とするのである。換言すれば、プロレタリアートは、漸次に一切の私有制の資本をもぎとり、一切の生産手段を掌中に移して生産諸力を出來る限り擴大强化するのである。斯くの如く支配を獲得した階級內容は、プロレタリアートである。然るに該博な智識の所有者たるアナーキスト松本氏は、此の事を理解せずして政治的權力を獲得することが如何にブルジョアデモクラシー的觀念であるかと云つて、しきりに抗辯される。ブルジョアデモクラシーとはブルジョア支配に妥當するが、プロレタリアートが支配權を有するプロレタリア國家形態にあつては、プロレタリアデモクラシー以外なにものでもないのである。若しアナーキストが飽くまで此の原則を理解しないならば、彼等の理論は何んら××的な內容はない筈である。プロレタリアートの支配を否定する闘爭は、むしろ轉換期にあつて、プロレタリアートの力を分解し、客觀的にはブルジョアジーを援助し、ブルジョアの反動××的行動に役立つであらう。

マルクス主義に依るプロレタリアートの權力掌握は、何等强奪詐欺、瞞着等の意味の奪取ではない。又小グループの陰謀者の成功した詭計の意味に於ける奪取ではない、たゞそれは、收奪者の收奪なのである。

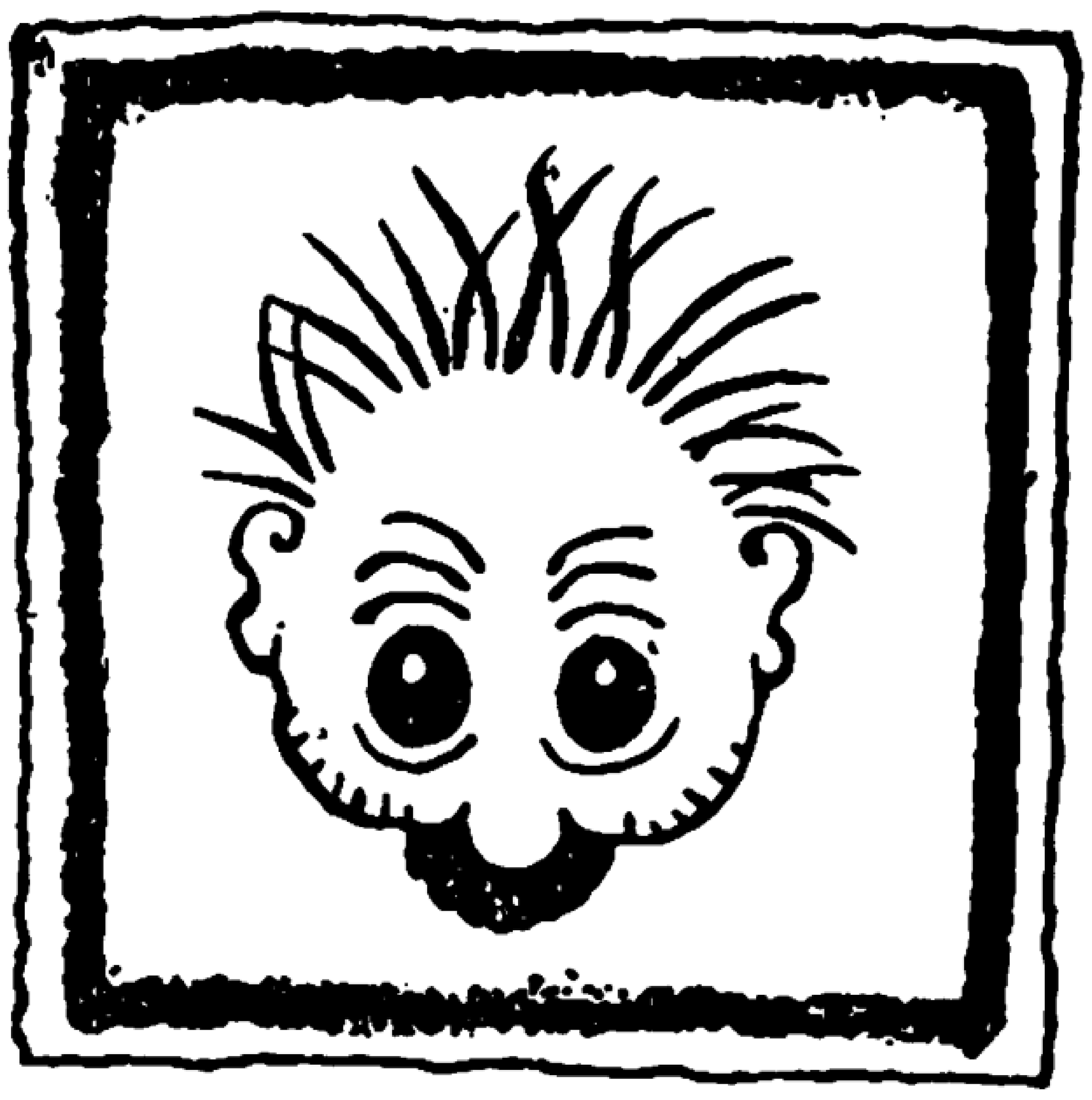
プロレタリアートは、何故權力を必要とするか？　一つにはブルジョアジーの反××的行動の抑壓にあることは云ふまでもないが、他面に於いては、××主義社會建設の一般的前提として必要な巨大なる生産關係の編成替へに役立つのである。再度云ふが新社會は突然に現はれるものでなく、沒落したるブルジョアジーの社會の舊體制から生長するのである。故に未來社會の建設は、特殊の方法、組織化された勞働の技能のみを以つて遂行されるのである。かくの如く、强力な集中的支配にあつてのみ一歩一歩素晴らしい單一的な組織社會が現はれることは必然である。此の過程を最高度迄遂行した場合、國家といふ階級支配の機關は、自己の機能を果すからして、任意に死滅するであらう。だがこの死滅は、ブルジョア國家の死滅でなくて、プロレタリアートの國家の死滅である。

吾々は、此處まで說き及んだとき、一切の權力を絕對惡と見るアナーキストが、飽くまで支配的地位を獲得したプロレタリアートの權力を、それが權力と云ふ範疇に屬するが故に否定するなら、彼等は只反動に顚落するにすぎない。あらゆる權力を否定することを、『ブルジョアジーの反抗を擊破』するに使用さるべきプロレタリアート支配の排除までも包括するならば、それは實に反××的態度でなくて何んであらう。『權力の用具と機關とを所有する壓制者にたいする强力なくしては、民衆は彼等の抑壓から解放され得ない』といふレーニンの言葉をもつて結語としよう。

實に『人は常に恣意的に物を解釋する、然るに事實はたゞ一つしかあり得ない。』と云つて置いた私の言葉の意味の前半は、即ちアナーキストをさして述べたもので、後半の意味はとりもなほさずマルクス主義の認識論であつて、唯物辨證法は、事實を事實として理解するであらう。（一九二九、一一、一三）

再びアナーキズムを駁す

隅田龍子



八木秋子氏の「曇り日の獨白」及び高群逸枝氏の「小ブル藤森成吉に與ふ」と題するマルキシズムに對する大膽にも驚くべき無理解が發表され、再び本誌十二月號に於て我々は賑しくも又輝やかしい此等の論文に接した。

　此等に對するお答としては、十一月號に於ける隅田の論文で充分であると信ずるものであるが、「アナのあなた方と今更ら論爭」するの大人氣なさを思ひつゝ再びお答へすることにした。

一　階級鬪爭の歷史

　問題をまづ、マルキシズムとアナーキズムとの根本的相異がどこにあるかを其の究明の目的として行かう。

　マルクスは××××の中でいふ。

「凡て從來の歷史――原始的共同團體解決以後の――は階級鬪爭の歷史である。自由民と奴隷、（ギリシヤ）貴族と平民（ローマ）領主と農奴、同業組合の親方と其の職人、一言にいへば抑壓者と被抑壓者とは古來不斷の對立にたち、或は隱然の或は公然の、絕え間なき鬪爭を繼續した。そしてその鬪爭はいつでも社會全體の××的改造に終るか、或は交戰せる兩階級の共倒れに終るのであつた。

一封建社會の沒落から發生した近代有產者社會も階級對立を除去してはゐない。

　ただ、新らしい階級、新らしい抑壓條件、新らしい鬪爭形態を、古きそれらの代りにおきかへたに過ぎなかつた。

　我々の時代、即ちブルヂョアの時代は、しかしながらこの階級對立を單純化したことによつて特色がある。全社會は漸次二大敵對陣營に――二つの大きな、直接に相對立する階級――即ちブルヂョア階級とプロレタリア階級とに分裂しつゝある。」

二　階級分裂の過程

「從來の封建的若しくば、同業組合の工業經營法は、最早や市場と共に增大する（商品の）需要に應ずる事が出來なくなつた。工場手工業がそれに代つた。ギルドの親方は工場的中產階級のために押しのけられた。種々なる組合の間の分業は、單一なる工場內の分業の面前に消滅した。然るに市場はいよ／＼擴大

し、需要はいよいよ増加した。——工場的手工業の代りに近代的大産業が起り、——即ち近代的ブルヂョアが起つた。」

「このブルヂョアジー發達の各段階は亦それに相應するところの政治的進歩を伴つてゐた。即ち初めは封建的領主の支配下に抑壓された一階級であり、又武裝した自治團體のコンミユンであり、ある所では王政治下の第三階級となり、次に工場手工業の時代にあつては、半封建的若しくば專制的王國內に於ける貴族との均衡物となり、又一般大王國の主要たる地盤となり、最後には大產業及び世界市場の發現以後、近世的代議制國家に於て全くその掌中に政權を把握した。近世國家の政府なるものは、ブルヂョア階級全體のために、その共同事務を處理する委員會に過ぎない。」

「ブルヂョアジーが政權を握つたところでは、總ての封建的、主從的、牧歌的なる諸關係が破壞された。人をその生れながらの目上と結びつけてゐた封建的の色彩は無慘に引きちぎられて、人と人とを結びつけるものは、たゞ赤裸々の利益冷酷な現金勘定より外には何ものもないことになつた。」

マルクスはつゞけて云ふ。

「プロレタリアは種々なる發達の段階を經過する。彼等のブルヂョアジーに對する戰ひはその存在と共に始まる。最初は個々の勞働者が、次には一工場內の勞働者が、次には一地方に於ける一勞働部門の勞働者が、直接に彼等を搾取する個々のブルヂョアに對して戰ふ。」

「勞働者は時折勝利する。だがそれはたゞ一時的に過ぎない。彼等の闘爭の眞の成果は、その直接的効果にあるのではなくて、愈々益々勞働者の團結が擴大しゆくところにある。」

「すべての階級闘爭は政治闘爭である。」

三　政治闘爭過程

「不可避の勢をもつて益々急激に發達する機械の改善が愈々勞働者の全生活を不安にする。個々の勞働者と個々の資本家との衝突が次第々々に兩階級の衝突たる性質を帶びて來る（闘爭は必然政治的性質となる）そこで勞働者は資本家に對して組合を作り始める。

そして到るところに同性質を有する無數の勞働者の地方的闘爭は、一箇の全國的闘爭、一箇の階級闘爭に集中される。階級闘爭は必ず政治闘爭である。

「××主義者は、全プロレタリア階級の利害から分離した何等の利害をもつものではない。×××者の直接の目的は——プロレタリアを一階級に結成すること、ブルヂョアの支配權を××すること、プロレタリアの手に政權を握ること。」

「プロレタリアは其の政治的支配權を利用して漸々にブルヂョアから一切の資本を奪ひ取るであらう。一切の生產機關を××の手に、即ち××階級として組織されたプロレタリアの手に集中するであらう。」

「だが、××的政策はそれぞれの國情に從つて、それぞれの差異を呈するであらう。」

かくて支配階級として組織されたプロレタリアは其の權力の行使によつて、ブルヂョア的生產關係をばプロレタリア社會主義生產關係に編成、組織、統一しつゝ、舊支配者の反抗を粉碎しつゝ、彼の偉大な歷史的任務の遂行につき始るのである。更にマルクスは云ふ

「かくて、發達の進行につれ、階級的差別が消滅し、すべての生產が、總個人の協力（全國民の大組織の手に集中されるならば、其時公的權力は其の政治的性質を失ふ。元來政治的權力なるものは一階級が他階級を抑壓するための組織的强力である。プロレタリアは、ブルジョアに對する闘爭の必要上自ら一階級を形成し、××によつて自ら支配階級とな

り、そして支配者として、強制的に古い生産關係を廢絕するのであるが、其の生産關係の廢絕と共に、階級對立の存在條件を廢絕し、階級全體を廢絕し、從つてまた、自ら階級的支配權をも廢絕するのである。

かくていよ〳〵古いブルヂョア社會（及び階級對立と）の代りに各人の自由な發達が來人の自由な發達の條件となるやうな協力社會が生ずるのである。」

四　××の主要擔當者

「今日、ブルヂョアと對立してゐる凡ての階級の中でたゞプロレタリアのみが眞實の××階級である。他の諸階級は大工業の衰頽と共に沒落する。プロレタリアは大工業の特有な產物である。

中產階級の下層たる、小製造家、小商人、職人、農民等もまた、皆ブルヂョアジーと戰ふ。けれどもそれは、中產階級として滅亡を免れんがために戰ふのである。故に彼等は××的ではなく、保守的である。否むしろ、彼等は反動的である。彼等は歷史の車輪を後ろに廻さうとする。若し彼等が××的であるとすれば、それは彼等がプロレタリアに落ちこみかけてゐることを悟つたからである。」

「舊社會の最下層にある、腐敗墮落した貧民もまた、場合によつてはプロレタリアの××運動に參加するであらう。けれども彼等の生活狀態は、むしろ喜んで彼等を反動的陰謀のために買收されるであらう。

「最後に、階級鬪爭が愈々決戰の時期に近づく時、支配階級の內部に於ける分解過程は――支配階級の一部分はその所屬を脫して自ら××階級に投ずる。殊にこの歷史的運命の全體を學理的に理解し得るに至つた所の智識階級の一部がプロレタリアに投ずる。

五　マルキシズムと無政府主義の對立

我々は以上を要約して見よう。

一　從來の歷史は階級鬪爭の歷史であり、其時代に於ける生產樣式は、必然に社會をば支配者と被支配者とに分裂せしめた。

一　支配者は何時の時代にも政治的權力をもつて被支配者を抑壓し搾取した。近代有產者社會の生產關係は、ブルヂョアとプロレタリアとの二大階級を形成し、プロレタリアは賃銀奴隸の鐵鎖から解放されるには、それ自身一つの階級に結成して鬪爭する。しかもこのプロレタリアの團結は、資本の國際性と相待つて、國際的にならざるを得ぬ。

一　支配階級は被抑壓者を搾取し支配するために強力な資本を持ち、政治的權力をもつてプロレタリアを壓迫してゐる。故にプロレタリアは、古き生產關係を破壞し、社會主義社會を建設するためには、ブルジョア權力を破壞せねばブルヂョアジーに勝利することが出來ぬ。それ故に階級鬪爭は政治鬪爭である。

一　國家とは、支配者が被支配者を統治するための權力の表現である。プロレタリアは、社會主義社會建設の偉大な事業を遂行するために支配階級として組織された自己の手に權力を握らねばならぬ。

かくてプロレタリアの事業の發達に隨つて、――――――――――、支配階級としての自らの支配權を廢絕し、こゝに初めてプロレタリア××も消滅するのである。

一　プロレタリア××の遂行者、ブルヂョアジーに取つて代る次の歷史の擔當者は大工業と共に發達したプロレタリアートである。プロレタリアートは、有產者的×××廢絕のために最後まで鬪爭する階級であるが、農民は小企業家であり、土地私有慾の封建的なイデオロギーを持つ階級であり、その限りに於ては反動的である。

[redacted]

我々は、進んで、無政府主義――バクーニン――についてきいて見よう。

バクーニンは、一八六九年、平和自由聯盟の大會に於て云つてゐる。

「余は共産主義を嫌悪する。それは自由の否定だからである。

「共産主義者は、社會のあらゆる力を集中して國家をして之を吸收せしめ、又それは必然國家の手に財産を集中せしめることをもつて終るからである。余はこれに反して、國家の××を要求する。」

「人を教化し、且つ文明に向はしめると云ふ口實の下に、今に至るまで之を壓迫し、搾取し、之を奴隷化せしめ、腐敗せしめたこの××の權威と守護との主義の一掃を欲求するものである。」

「私は社會の組織及び集合的又は社會的所有の組織が自由聯合の方法によつて下より上に行はれんことを欲して、或種の權威によつて上より下へ行はるゝことを欲しない。」

我々は、このバクーニンの主張と、マルクスの主張とを對比して見なければならぬ。

第一に、マルクスと同じく、バクーニンもまた國家（一階級が他階級を抑壓する政治的權力の表現）を支配階級の搾取機關であると觀る點に於て正しい、

第二に、マルクスとひとしく、バクーニンもまた未來社會を無階級社會――從つて無政府の社會、××の廢絶された社會と觀る點に於て正しい。

我々はこの二點に於て同一であるマルキシズムと、無政府主義とは、いづれの點に於て如何に異つてゐるかを觀なければならぬ。

無政府主義は强權を否定し、××は「今日より明日」に直ちに撤廢すべしと云ふ。强權を否定し、自由を欲求することによつて、プロレタリアの政治權力を否定し、プロレタリア獨裁を否定する。

これに反してマルクスは何と主張するか。

「自由と云ふことを云ひうるに至るや否や、××は××として存立しなくなるのである。」

「××の死亡と共に人類の前史は終り、人はその時始めて「必然の國から自由の國」へ躍出し、其時始めて、各人の自由な發展が全員の自由な發達の條件となる。」

「も早や抑壓すべき階級も、抑壓さるべき階級もなくなつた時、××は自ら眠り込む。」（エンゲルス）

無政府主義は、强權を否定することによつて、プロレタリアの政治鬪爭をも否定する。

マルキシズムは、××をば、支配者が被支配者を抑壓し、搾取する政治的權力の集中化されたものとして、これを破壞し、支配者として組織されたプロレタリアートの手に權力を奪取せんとする。

マルキシズムは、プロレタリアートの勝利――ブルヂョア獨裁を破壞しえても――が直ちに、××の廢絶となり、無階級の社會となるのではなくて、資本主義社會から××主義社會への過渡の間に、一定の段階、即ちプロレタリア獨裁の期間を歷史の必然とする。

即ちマルキシズムは、プロレタリアが、ブルヂョア國家を顚覆しえても、未だ階級鬪爭は終そくしたものとは思はない。

ブルヂョア獨裁の社會では、ブルヂョアジーは、彼等小數者の利益のために、大多數者のプロレタリアートを抑壓し搾取した。

權力を獲得せるプロレタリアートは、反對に、大多數者を賃銀奴隷の鐵鎖から解放し、舊生産關係を社會主義社會へ建設するために、舊支配者から、用捨なくその自由を取り上げるであらう。彼等の歷史の齒車を後に廻さんとするあらゆる××と企てに對しては無慈悲なる鬪爭をもつて報いるであらう。

[redacted]

無政府主義は、この歴史的必然過程を理解し得ない。

　無政府主義は、まづ、除かるべきものは、資本と勞働、ブルヂョア階級とプロレタリア階級の對立であると見る前に、××を廢除せよと云ふのである。

　驚くべき顚倒である！　だから無政府主義は、歴史の一定段階をばまつさつし「今日より明日」の間に、一擧にして××を撤廢し階級對立を消滅せしめ、無階級社會へ飛躍し得るかの如き救ひ難き幻想に墮落するのである

　更に、無政府主義は、權力を否定しつゝ、實質に於ては、何等權力に外ならざるものを認めざるを得ぬ矛盾を持つてゐることを擧げて見やう。

　バクーニンとニエチヤイエフとが、編輯した「フオルクス・ゲリスト」第二號の中で云ふ。

「――委員會に對する服從は絶對でなければならぬ。いかなる反對も許されぬ。」

　また、エンゲルスは、バクーニンを批判していふ。

「バクーニンは奇妙な學説をもつてゐる。それはブルドン主義と共和主義の混合物であつて、その第一の特色は、資本と賃勞働者との階級對立を除くのではなくて、人は第一に××を撤廢しなければならぬ。と云ふ。

　吾々は反對に、資本を、即ち全生産要具の小數者の手に占有せらるゝことを撤廢すれば××は自らしてに倒壞すると云ふのである。この差別は重要である。社會××なき××の撤廢は沒條理である。資本の撤廢は正に社會××であつて、全生産方法の變革を其の中に含むものである。然るにバクーニンにあつては××が根本惡なのであるから、共和國にもせよ、王國にもせよ、××を存續せしめることはしてはならぬのである。從つて、一切の政治からの隔離と云ふ結論が生ずる。政治行動――選擧に參加することは主義を賣るものである。」

　國際勞働者協會總務委員の×××はいふ。

「即ち吾々は、この堡壘委員なる無政府組織に於て、自治體議會、次に執行委員會をもつことになる。そして何事かなさんがためには之に何等かの權力を與へ、之を武力によつて支持しなければならぬ。吾々は更に進んで、この公權力の組織を主要任務とすべき聯合議會を有する。この議會は、自治體議會と同じく執行權を一個若しくはそれ以上の委員會に委ねることが出來る。委員會はこれによつて始めて一つの權力的性質を帶びる。即ち吾々は、權力××の一切要素が極めて美事に恢復せらるゝを見る。そして吾々は、かくの如き組織を、下より上に組織せられた××的コムミユンと呼んでも何の用もなさぬ。

　下より上への組織は、あらゆるブルヂョア共和國に存してゐるし、また絶對命令は中世期に於てさへ存在してゐたのだから。

　バクーニンは彼が、彼の組織を呼ぶに、「新らたなる××國家」と云つて、自らこのことを認めてゐる。」

　かくて、無政府主義は、解き得ざる矛盾に墮ちつゝも、プロレタリア權力を否定することによつて、究極に於ては、プロレタリア階級の歴史的任務を抹殺し、結果に於てはブルヂョアジーの反××に協力せざるを得ない立場に自己を揚めつゝあるのだ

六　マルキシズムの歴史

　マルクスの辯證法的唯物論は有産者的歴史觀に對して、更にまた、空想的社會主義（無政府主義を含めて）に對しても××的飛躍である。空想的社會主義は、現實の歴史關係とは無關係に、彼等は「望ましき社會」を空想

する。

これに反して、マルキシズムは、究極に於ては××社會の來るべき歷史的必然を解しつゝ、現在のモメントの、與へられたる階級關係階級間の諸勢力の歷史的な變化を具體性に於て把握しつゝ、究極目的たる××社會の勝利のために、現在の段階の鬪爭を、究極の目的の方向へと押しすゝめて行くのである。

マルクスが、この社會主義社會の建設者としてプロレタリアートの全世界史的役割を闡明して以來、歷史の辯證法は、科學的社會主義としてのマルキシズムの理論的勝利を、ゆるぎなき地位にきづき上げたのである。

このマルクス主義の理論的勝利は、敵をばマルキシストに塗り代へざるを得ないやうにした。

ヨーロッパに於ける、ブルヂョア××は終りを告げ、西歐は來るべき、變革の時代への「平和的」な準備期に入つた。

到る所にブルヂョア議會を利用し、自己の日刊新聞、自己の教育機關、自己の勞働組合自己の協同組合の創立を學ぶところの、自己の基礎の上に立つたプロレタリア的社會黨が結成された。

偉大なる、世界的な嵐が、アジアの地に於て展開した。ロシア革命についでトルコ革命が起り、ペルシヤ革命が起り、支那革命が起りつゝある。

武裝せるマルキシズムの××的理論は、この擴りゆく世界××の波の中にあつて、益々執拗に、プロレタリアートの力を結集せしめつゝ來るべき偉大な嵐にそなへてゐる。

大衆鬪爭の準備と、プロレタリアートの力を信ずることの出來ない人々は、ヨーロッパに於ける、資本主義の決定的な鬪爭の長き遷延のために、絕望と無政府とに墮落して行つた。我々は現在、近視者としての、無政府主義的絕望を見受ける。

レーニンは、マルクスエンゲルスの忠實な一貫せる學徒である。レーニンは完全にマルクス主義の基礎に立つてゐたのみではなく、更にこの基礎の上に立つて、マルクス・エンゲルスの學說を發展せしめ、西歐に於ける資本主義の緩漫な發達の時代、未だ資本の獨占的ならざる「平和的」發展の時代に於けるマルクス、エンゲルスの學說を、資本の獨占の時代、自由競爭より、殖民地分割のための武力的鬪爭を不可避とする帝國主義戰爭時代、資本主義最後の段階としてこの帝國主義をマルクス的に分析し、この上にマルクス主義を發展せしめた。

それ故にレーニニズムは、帝國主義の段階に於けるマルクス主義である。

七　マルクス主義的政黨

「階級鬪爭は――政治鬪爭である。」（マルクス）

「××主義者は、プロレタリア階級の利害から分離した何等の利害も持たない。」

「×××は、其の主義政見を隱蔽することを恥とする、」

彼は公然として宣言する。彼等の目的は、一切從來の社會組織を强力的に××することによつてのみ達せられる。」

マルクス・エンゲルスのかゝる見解をば、レーニンは、帝國主義の時代に於ける新らしい階級鬪爭の段階に於て次の如く發展せしめた。

「階級の對立に基礎をおいてゐる社會に於て、相敵對する階級間の鬪爭は必然に政治鬪爭に變化する。

政治鬪爭の最も完成した統一的な形態は、黨と黨との鬪爭である。」（レーニン）

更らに、レーニンは、かゝる××的黨の規律に關して云ふ。

「鐵の如き規律なくしては、搾取者を粉碎し、階級社會を××主義社會たらしめんとするプロレタリアートの××は遂行し得ない。」

「黨はプロレタリアートの階級的結合の最高形態である」(レーニン)

更らに我々はコミンテルンのテーゼの中にも、次の如き黨の役割についての規定をみる。

「××黨は、嚴密な中央集權主義の原則を基礎とし、内亂の時期には黨内に軍隊的規律を布かなければならぬ。」

「××黨は、××主義が鬪爭目的たることをやめ、全勞働者階級が××主義的になつた後に、始めて、完全に勞働階級の中に解消するであらう。」

權力を否定し、政治行動を否定し、單に經濟鬪爭のみを主張する無政府は、プロレタリアの前衞としての××黨の歷史的役割を理解することが出來ず(プロレタリアの歷史的役割を理解出來ぬと同じやうに)、從つて、階級鬪爭は、黨と黨との――ブルヂョア黨と、プロレタリアートの黨との――鬪爭であることを理解することが出來ない。

從つて無政府主義は、階級と、權力の問題、生產關係と階級關係、經濟と政治の關係、云ひかへれば社會の構成過程と、變革過程をば理解することは出來ない。

「政治は、經濟の集中」された表現に外ならない。然るに無政府主義は、この關係をバラバラに切りはなし、社會關係をば、一箇の死せる殘骸の如く取扱ふのである。

「卽時、非政黨運動――かくの如き當面の一方法としての政治的行動を時に採用することはあつても、それは――經濟運動を根據としてのそれである。」(高群氏本誌十二月)

「議會鬪爭についても、アナアキズムは――全然議會運動を否定してゐた譯ではない。(昔否定しない時はあつても、今否定してゐるのだから同じではないか 隅田)――その後もアナアキストは可成長い間議會運動の効用に對して懷疑的であつた。

「卽ち政治組織を改造(政治的「組織」の改造は、社會××なしに出來るものではない。政治的組織の改造は、階級關係の變革によつてのみ可能だ。(隅田)奪取することでなく破壞することでなければならぬ。」(松本氏本誌十二月號)

紙と筆の上の××の何と簡單なことよ!

時には政治運動もする(時には! だが時にはしない。具體性を失つた氣まぐれの行動これがアナアキズムの本質なのだ。「アナアキストは云ひたいことを云ひ」(高群氏)やりたいことをやるか? (隅田)だがある場合にはやらないと云ふ、これが此等の主張である。

今、一つの工場にストライキが起つたとする。其の工場の勞働者は、賃銀値下げと馘首に對して、資本家と戰ふ。彼等は集會を持ち爭議團を編成する。然るにこの鬪爭は、間もなく大きな困難にぶつかるのだ。

あらゆるストライキは官憲による爭議團幹部の總檢束と、暴力團の襲來におびやかされる。(氏等よ今のストライキはすべてさうなのだ。)

そこで勞働者は何と感じるか

勞働者は、今日工場主に對する鬪爭を、明日は政府に對する集會の自由、言論の自由(この點松本氏には後で答へる。隅田)卽ち鬪爭をブルヂョア政府に對して向けなければならないのだ。

從つて經濟と政治とは切り離された關係にあるものではない。經濟鬪爭は政治鬪爭に、政治鬪爭は經濟鬪爭に、そのいづれにも發展轉化するのであり、また勞働者は、かゝる廣汎な鬪爭を戰ふことなしには永久に解放されることが出來ないのだ。

「經濟鬪爭と云ひ、政治鬪爭と云ふ二つの相異れる階級鬪爭は存在しないのだ。在るものはたゞ一つの階級鬪爭のみである。
　ブルヂョア社會內に於て、資本家的搾取を制限することゝ、ブルヂョア社會もろ共搾取を××することゝを同時に目ざすところの階級鬪爭あるのみである。」（ローザ）

松本氏は、アナアキストは議會鬪爭の効用を疑つたから政治鬪爭は止したと云ふ。

氏等によれば、政治鬪爭は、すべて議會鬪爭であるかの如く見える。

だが我々は、議會をも（さうだ、プロレタリアートは、彼自身の勝利を獲得するために現在の瞬間のあらゆる手段、あらゆる場面、あらゆるものを利用せずにはおかない。隅田）政治鬪爭の舞臺として、あます所なく利用する。だがそれが唯一なものでないことは、すでに、我々の究明したところである。

松本氏は、政治組織の改造でなく、破壞だと云ふ。この點についても、すでに本文に於て述べたところであるが氏等は如何にして破壞するのか？　そして又國家なるものは、至極簡單に今日より明日に破壞し得、××社會が直ちに來るものと考へてゐるらしい。

かくて氏等は、政治と經濟の關係、卽ち社會の下層建築と上層建築の辯證法的交互關係をば理解せられない。

だから氏等には何等一定の斷案があるのではない。現實の社會關係の進行とは無關係に「最初から否定」した譯ではない。だが「効用が疑はしいので」揚棄淸算（おゝー）した。

かくて氏等によれば、あれか、これか、然らずば何もないかだ。

この氏等の、根本的な、現實の社會關係、歷史關係とは無關係に、紙の上、頭の中でつくられる空想的社會革命理論こそ、氏等をして政治鬪爭を否定せしめ、資本主義本國のプロレタリアートより、殖民地民族のプロレタリアート、婦人少年等に至るまで、慘虐な搾取の鐵鎖にしばる强力な金融資本の支配に對する、大衆の鬪爭を、せまい經濟鬪爭の埒內に止めやうとする。（だが、氏等の云ふことを信ずる勞働者は今頃ゐないだらう）而して氏等はプロレタリアートを永久に賃銀奴隷の鐵鎖から解放しまいとする。

八　××の特殊的段階

「だが、××的方策は、それ〴〵の國情に從つて、それぞれの差異を呈するであらう。」

「マルクスは、不斷の××の下に何を考へてゐたか？　マルクスはこの下に、一の見透しを、――これに從へば××の經過の間に勢力關係が絕えず變化して、××が常に「上向」的に發展するところの――かくの如き見透しを考へてゐたのである。卽ち地主は××せられる。その代りにブルヂョアジーの一フラクション例へば自由主義的ブルヂョアジーが現れる。これによつて××は終りを告げない。自由主義的ブルヂョアジーは××れる。その地位に急進小ブルヂョアジーが現れる。急進小ブルヂョアは××れ、その代りに都市貧民が――正しい言葉で云へば、都市貧民が農村貧民勞働階級と××して現はれる。最後にこの政府も除かれ、勞働階級の××にその地位を讓る。之は云ふまでもなく、一の模型にすぎない。しかし「正しい模型」なのだ。（レーニン）

「無政府主義者も、小ブルヂョア民主々義者、メンシエヴイキ及び社會××黨員も、ブルヂョア民主々義××の社會主義的、卽ちプロレタリア××に對する關係について信ずることの出來ない位多くのバカ〴〵しいことを喋つたし、また喋つてゐる。吾々はブルヂョア民主々義的××をその終局にまで導いた。

これは他の國に於て見られなかつたところだ。吾々は意識的に、確乎として、停滯する

ことなく、××主義××へと前進する。而して吾々は、××主義××は、ブルヂョア民主々義的××から萬里の長城によつて隔離されてゐるものでないことを知つてゐる。吾々は將來に於て結局如何なる程度まで前進しうるか（レニンは、ソビエット權力の四年後に云つてゐるのだ）信ずべからざる位大きい任務の如何なる範圍を吾々が滿たしうるか、吾々の勝利の如何なる範圍を吾々が維持しうるかは、たゞ鬪爭のみが決定しうることを我々は知つてゐる。」（レーニン）（松本氏のブルヂョア民主々義とプロレタリア民主々義の機械的分離論と比較せよ。隅田）

「――何人も、ブルヂョア民主々義的××と、プロレタリア的××主義××とのこの關係を理解し得なかつた。

前者、即ちブルヂョア民主々義的××は後者へと發展成長する。後者は經過の中に前者の問題を解決する。第二の××が第一の××を越えて、如何なる程度にまで成長しうるかは、鬪爭が、然り鬪爭のみが決定するのであらう。」

「ロシアの農民の多數は、土地國有を要求し實行しうるか？　疑もなく出來る。

然らばそれは社會主義××であるか？　否それはなほブルヂョア××である。けだし、土地國有は、資本主義と一致する方策であるから。しかし、それは、同時に最重要の生産手段の私有權に對する一攻擊である。」（レーニン）

だがそれは飽くまで「模型」に過ぎない。

マルクスの學說を完全に繼承したレーニンは、ロシア革命に於けるあらゆる段階の、與へられたる瞬間の階級關係辯證法的に分析し、この勢力關係の具體的總和が、常に現實を決定する政策となつて現れた。即ちレーニンは、ロシアに於ける特殊的、歷史的、現實的視點から問題をとり上げて、勞働者農民の××的同盟をうちたることによつて、ロシア革命を勝利に導いたのである。

然らばブルヂョア民主々義の獲得とは何であるか？

ブルヂョア民主々義は政治的自由なくしては獲得することが出來ない。政治的自由は國家機關の民主化なくしては不可能である。かかる帝國主義の段階に於ける國家機關の民主化は、反動化せるブルヂョアジーの政治的支柱の××を曖昧にする。從つてそれはプロレタリアートとブルヂョアジーとの決定的鬪爭なくしては不可能である。而してこの鬪爭は單なるブルヂョア民主々義の××たるに止まらずそれは急速にプロレタリア××へ急轉する。

次にブルヂョア民主々義は、農村××、土地國有を意味する。しかし、反動的なブルヂョア政府は、土地問題を解決しえない。從つてこの鬪爭は、土地の××的沒收を意味する。

かくして、勞働者と農民は、××的同盟を形成し、資本家地主の政府を倒し「勞働者農民の政府樹立」のスローガンの下に、廣汎な勞農大衆を結集せしめ、資本家地主に對する決定的な鬪爭を行はねばならぬ。

來るべき、日本に於ける××も、ブルヂョア民主々義の××である。

無政府主義は、階級關係を理解出來ず、從つて社會構成關係を理解出來ず、プロレタリア政權を否定する。

かくて無政府主義は、××の特殊性を理解出來ず、ブルヂョア民主々義××の歷史的必然をば歷史からまつさつする。

だから、從つてかく云ふ。

「マルクスのプランは常に民主々義者のプログラムであつた。」（松本氏　十二月號）

「政治的權力を獲得することによつて、全人

類を解放することが出來ると思ふのは、ブルヂョアイデオロギーである。」（同上）

マルキシズムは、よし資本主義社會が顚覆された曉に於ても、ある一定期間中は、打ちのめされたる舊社會勢力の反抗があり、ブルヂョア的習慣の中に生活づけられた小生産者官吏等があり、從つて階級鬪爭は「今日より明日」に直ちに終そくし百花爛漫たる無階級社會の樂土が來るものとは信じない。マルキシズムは資本主義社會より社會主義社會への過渡の間に、支配階級として組織せられたプロレタリア獨裁の期間を歷史的必然であると考へる。

無政府主義は、今日直ちに國家を撤廢して地方自治を組織すると云ふ。

無政府主義者の革命理論は至つて簡單である！

「かうした彼等（ブルヂョアにではなく、學校を出た娘や息子）に對抗するために、そしてそいつらを克服するために（どうぞ！）徹底的自主的（おゝ！）であらねばならぬ。卽ち自治意識これである。」（高群氏、十二月號）

「土地も！　麥も！　すべてを！　生産と消費の自由を！（地主が喜びます。土地も！　麥も！　生産の自由も！　この自由の下に日本の農民は如何に搾取されてゐるか！　隅田）――」（同上）

「要するに生産の自由と消費の自由である。（だが殘念ながら、プロレタリアには搾取されるの自由だけしかないのだ。隅田）――」（松本氏）

「それは明確な自由の意識と組織によつて鼓舞された（コブされなければ自由の意識や組織を捨てるのですか　隅田）あらゆる方面（解りません）からのイニシアテイヴ（何處から何によつて？　いかなるイニシアテイヴか？　隅田）を保つてはじめて完成される。」（同上）

「アナアキズムは地方分散經濟組織である。」（八木氏）

氏等よ氏等はいかにして、その地方自治體を建設するのか、氏等はこれに對しては、たゞ「自由と自治意識」を紙の上に書くだけである。

帝國主義の段階に於けるブルヂョアーと地主の政府は、日毎に增大しゆく勞働者農民の生活窮乏化に伴つて、たかまりゆく擴汎な大衆の不滿反抗を抑壓し、僞瞞し去るために、彼等はあらゆる社會政策的假面の下に、新らたなる抑壓政策を布き始めてゐる。

地方分權、地方自治、とは勞働者農民を投獄した直接下首人、田中反動內閣の云つたことではなかつたか！

「彼等は村會獲得に對しては强烈な熱意をもち、その選擧の結果は全國を通じて驚くべきものがある。」（高群氏）

資本家地主の政府の下に於ける村會獲得はそれこそ氏等の嫌な（我々も排擊する）議會主義に農民を引づり込み、結果に於ては農民をして、資本家地主の政府に（日本大衆ならばなほ更らのことだ。）農民を賣り渡すことではないか。

思ふても見よ。資本家地主の政府の存在する限り、眞の地方自治體が出來るか？　今もし此等が地方に行つて、コンミユンを建設したとする。コンミユンはブルヂョア權力破壞のためにプロレタリア組織である以上、資本家地主の政府は、此等の企てをば暴力的に碎粉するであらう。

かくてプロレタリア政權を否定する無政府主義の地方コンミユンの組織は、永久に空想となつてしまふのだ。

村會を獲得しても、縣會を獲得しても、それがブルヂョア國家の一機構に止つてゐる限り斷じてプロレタリア組織ではないのであ

る。

九　若干のお答へ

「ロシアで政權を奪取した時、その形態、その方法、その組織は――バクーニン派のとつた方法、形態に類似點があつた。」(松本氏)

然るにローザルクセンブルグは何と云つてゐるか。

「ゼネラルストライキは、バクーニンによれば、社會××を誘發するための槓杆である。或る天氣朗らかな晨、一國或は全世界の凡ゆる工場の勞働者が勞働の手を止める。それによつて永くも四週間内に、支配階級をして屈伏せしめるか、或は彼等をして勞働者に攻擊を加へざるを得ざらしめる。一度攻擊が加へられゝば、勞働者は自己を防衞し、この機會を利して舊き全社會を倒壞するの權利を得る。」

かゝる空想は少しも珍らしいことではない。我々はすでに、十八世紀のフランスに於ける空想的社會主義の中にもかゝる空想を見て來たのだから。

「マッセンストライキの範を垂れた最初のロシア革命は、アナアキズムに對する何等の辯護もなかつた許りか、反つてそれの歷史的淸算を意味した。」(ローザ)

「一體ロシア革命に於けるアナアキズムの獨自の役割とは何であつたか。それは强盜及び掠奪者の看板になつた。私人の數限りない竊盜や掠奪行爲の大部分は『無政府共産主義』の名の下に行はれた。それ等の行爲は、××の沈滯と一時的退却の時毎に濁流のごとく迸出して來るのであつた、アナーキズムはロシア革命に於ては、決して戰鬪的プロレタリアートの理論ではなくて、反革命的ルンペンプロレタリアートの觀念的看板となつた。かくてアナーキズムのその歷史的生涯は殆んど終焉を告げたのである。」(ローザ・ルクセンブルグ)

我々は、ロシア革命の中にアナアギズムが演じた何等の歷史的役割を發見することが出來ぬのである。

「第一には――實際主義の人であればある程非合法主義を斥けて、合法主義につくと云ふこと。

第二には、無産政黨に於ける右翼の進出。

第三には、それらの右翼化した政黨であればある程、墮落的であると云ふ事實、さしづめ、この三つを否定してほしい。」(高群氏)

資本の鐵鎖から解放されるための、勞働者農民の鬪爭に於ては、合法とか非合法とかは問題ではない。

勞働者、農民の解放の鬪爭は、プロレタリアートに取つては、いかなる手段も合法的な、當然な手段である。

從つて、合法、非合法は、プロレタリアートの問題ではなしに、ブルジョアジーの問題である。ブルヂョアジーは、彼等の地位を脅やかすプロレタリアートの鬪爭に對しては、彼等の支配を强力的に守護するブルヂョア獨裁權力――暴力的に、立法的に――をもつて「非合法」として彈壓する。

從つて、現在に於ける如く、治安維持法の如き死刑法をもつてのぞむブルヂョアジーに對しては、プロレタリアートの、階級的なるものゝすべてが、ブルヂョアジーから見れば非合法になるのである。

ブルヂョアジーが、プロレタリアートを搾取し、彈壓するための手段、方法は、いかなることでも、彼等にとつては合法でありうる。階級鬪爭が益々激化して來るにつれて、このブルヂョアジーの合法性は益々、擴大され、暴力的となり、狂暴になつて行くであらう。

たゞ、鐵の如き訓練をもつた、ブルヂョア的合法性の下に、地下に追ひやられてゐるプロレタリアートの黨のみが、このブルヂョアジーの强力な支配を顚覆出來る。

従つてかゝる時期に於て、「實際主義」を旗印とする者は、勞働階級の裏切り者より外にない。彼等はブルヂョアジーにとつては、敵とならざる人であり、それは勞働階級の側からブルヂョアジーの側へ移行する人々である。

我々は、濱口内閣が成立の當初に於て、「合法運動はむしろ誘導せよ。だが、非合法運動は徹底的に彈壓する」と聲明した事實を思ひ出す。

眞に階級意識あるプロレタリアートは、檢擧投獄されつゝある。だが濱口内閣の聲明に信をおき、屈服した人々は、ブルヂョアジーによつて存在を認められる所の政黨をつくつた。これらの政黨の中には、日増しに窮乏化しゆく大衆の一部、小生產者、未だ階級黨の存在を知らず、また、ブルヂョア的偏見に禍されてゐる大衆が結集する。ブルヂョアジーは、或る時期に於ては、大衆のつのりゆく反抗の前に讓歩する。而してブルヂョアジーはこの讓歩によつて、勞働階級の中へ日和見主義の幻想をまき散らしつゝ、反共產主義戰線を强固に張るのである。

資本主義の激化し行く矛盾は、勞働階級に對してブルヂョアジーの讓歩を餘儀なくさせる。而して反面に於ては、階級的勞働者に對する慘忍なるテラーが行はれる。こゝに右翼幹部の發生と繁榮の根據があるのだ。

合法非合法は力のみの問題である。

「ブハーリンの沒落に至つてはさたの限りである。」(八木氏)

「ロシア××黨創立者の裏切りについて、隅田さんは自派への不利益から沈默を守られたのは賢明である。」(八木氏)

高群氏も八木氏と同じく大山、河上氏の社會民主々義政黨への脱落を云々される。

社會の構成過程、從つてまた、その變革過程に對する完全な無智者である氏等は、階級と黨との關係、黨と個人の關係についても完全に無知である。

氏等よ、個人と、黨の概念とは嚴密に區別して考へられねばならないのだ。プロレタリア××の時代、帝國主義の段階に於ける世界プロレタリアートはブルヂョアジーとの決定的鬪爭を前に控へてゐる。黨内に於ける諸問題の自由な討論は——卽ち黨内に於ける意見の相違はたゞ黨をボルシェヴィキに仕上げるのだ。だが討論の結果は、少數派は多數派に服從しなければならぬ。反對派は黨内にいかなる反派をも形成することを許されない。またかゝる「鐵の如き」規律なくしては、資本主義顚覆のためのブルヂョアジーとの決定的な鬪爭は不可能であるからだ。これに對して反對する者は何人であつても、プロレタリアートによつて無慈悲に黨外に放逐されるであらう。たとへ過去に於て如何なる功績ある人であつても、プロレタリア解放の大事業の前には無慈悲に放逐しなければならぬ。これによつてのみ黨は益々、强力な鬪爭を展開することが出來る。從つて、カウツキイ、トロツキイ、ブハーリン、等が沒落したとて黨は、それ等に代る若い新らたなプロレタリア戰士によつて補充されつゝ益々强力となりゆくであらう。

氏等は、沒落した人々の名をあげては、さも××黨が沒落したかの如く幻想する。無知もまた甚だしい。

階級と黨の混同は高群氏の無產政黨認識によく出てゐる。ブルヂョアの許すだけの鬪爭しかやらないやうな政黨は、勞働者の政黨ではないのだ。

從つて、大學教授であつた大山氏や、河上氏が、曾つての華々しい街頭闘爭を忘れかねて、合法黨をつくつたとて、これまた歴史的に見れば、問題とするところではないのだ。

　プロレタリアートの闘爭は今後益々困難になり、慘忍な白色テラーが益々つのりゆくであらう。我々はこの闘爭の過程に於て、なほ多くの大山氏、河上氏を見なければならないであらう。昨日は我等の味方であり、同志である人々も、闘爭のけわしさと、困難さとが異狀に加るにつれて、プロレタリアートの闘爭に參加する熱意をもち、また參加してゐる人々の中から、闘爭の困難さに堪へず、白色テラーにおびへる人々は、常にプロレタリアートの側から離れ去ることをも知つてゐる。だが、かう云ふ人々が勞働階級から離れ去ることによつて、勞働階級闘爭は眞劒となり、强力となり廣汎に伸びてゆくのである。

　我々は、自派の利益によつて沈默を守つたなどゝそんなケチな考へは持つて居ない。黨內反對の問題は、また別箇の問題ではないのか？

　八木氏は、マルキシストになるのは(殊に學生)支配者の地位に上りたいからだと云ふ。

　氏よ、支配者になりたい人がプロレタリアの闘爭に參加出來ると思ふか。

　階級闘爭の道は、死刑法と牢獄と、絕え間ない檢擧投獄の、荒れ狂ふ白色テラーの只中である。日本に於ても、――階級戰士はその道を步みつゝ闘爭してゐるではないか！

「私達は、眞實のロシア調査團體を組織しよう(そんなものを組織するよりも、氏等の地方自治とかを組織することをおすゝめする。隅田)私達の調査團體をして自由に、ロシアの土地に赴いて、農民や、工場勞働者や、牢獄の犯人(舊帝政派の人々から？　もちろん勞働者農民の獨裁を顚覆しようとするする反××の人々は、氏等とよく意見が合ふことであらう。氏等も勞働者農民の××には反對なのだから。隅田)に逢はしめればいゝ。」(八木氏)

　生產の自由と、消費の自由！　美しい言葉である！

　だが我々は、ブルヂョア××の夜明け前から「個人の自由と平等」と云ふ言葉があるのを知つてゐる。

　プロレタリア權力を否定しつゝ「個人の自由」「生產の自由と消費の自由」をとなへたらブルヂョアは喜ぶことだらう！　何故なら、ブルヂョアジーにとつては、「個人の自由」、「生產の自由」「消費の自由」は、從つてまた「搾取の自由」を持つことになるからだ。正にこれこそ、(そして氏等もふくめて　隅田)立派なブルヂョアイデオロギイと呼ばるべきものである！

　まことに、「アナアキズムと自稱する人々の共通な特徵は(呆れ果てた)圖々しき無知」である。彼等は空想家であり、行動に於てはルンペンである。

　彼等は、「末梢神經をふりまいて」ゐる。だが私達にとつては「憫笑」にすら「價」しない。

　人は常に恣意的に事物をば解釋する。然し事實は、紙とペンとの革命家、他愛もなき空想家達の一團とは關係なしに、進行する。(本文の傍點は隅田)(一九二九、一二、三)

婦人彙報

◇勞働者敎育の協議會

勞働者敎育は近頃大工場で幾分づゝ施設をするものが增加し、いはゆる勞働學校は不景氣その他の事情からだんだん減少の傾向を辿つて、今存在するものは僅か東京市に十二校だけになつた。文部省では勞働者の向上のため本年度豫算から勞働者敎育費一萬圓を計上し、工場內と學校組織を問はず健實な敎育をするといふ事になつて、最近鈴木、安部兩代議士や社民黨幹部、各大學敎授から東京市社會局のお歷々が集まつて、勞働者敎育協議會を開き、敎育の目標や方法について意見を交換し參考とする事にした。同省では今後もこの會を續ける筈。

◇葬儀の會葬者を檢束

昨年十月臺灣の基隆で自殺した日本共產黨幹部渡邊政之輔氏（三三）の遺骨は最近本所區松倉町東京市會議員馬島僩氏方へ基隆市役所から到着したので、解放運動犧牲者救援會では渡邊氏の命日に當る十一月廿五日午後菩提寺である千葉縣市川町安國院で葬儀を執行した。その際當局では親類以外の會葬者は治安を紊すとの名目で警視廳や千葉縣警察部が協力し、京成電車や市川鴻の巣停車場で物々しく固め渡邊氏の母こうさん（六二）だけ參列させた外片つ端から檢束したが、故人の內緣の妻丹野せつ子氏は病中で參列せず、遺骨は死亡診斷書と埋葬許可證がないので安國院では埋葬をことはつた

◇東京の自動車數世界第二位

東京における自働車の增加と普及は近頃實に目覺しいものがある今度警視廳で調べた結果によると十一月中旬、管內における自働車數は合計二萬一千臺を數へ、最近の增加率は紐育について世界第二位とのことである。內譯すると乘用車一三、〇〇〇臺、貨物車七、〇〇〇臺、特種用車一、〇〇〇臺である。

◇村民が移住を協議す

未曾有の難工事として多くの犧牲者を出した熱海線の丹那隧道工事はどうにか進捗し、靜岡縣地區の地下六百尺の堀鑿工事に懸つてゐるが、地質が脆いために非常な苦心と危險が伴ひ、その上水が盛に押出し毎秒湧出量三十六石餘に達し、そのために地面が近ごろ處々陷沒、人家の倒壞するもの五六戶を出すといふ始末で三村民は極度の不安に襲はれてゐる。當局も難工事に行惱んで一頓挫の有樣だが、村では工事のために水源貯水池が非常に渴水を來し二百餘戶千二百餘人の飮料水が缺乏し、昨年の夏も百餘町步の灌漑用水に不足を來して村民は生活の脅威を感ずるので田畑を賣拂つて他に移住すべく全村をあげて連日相談し、鐵道に對して怨嗟の聲が高まり丹那の川口秋助氏ほか代表者數名は上京、損害八十萬圓の補償金を鐵道省に要求した。

◇ロシア政府の新處罰令

全露中央執行委員會は十一月二十二日次のやうな法令を公布した

一、在外勞農公使館または國營事業機關に勤務の勞農國民にして本國政府よりの召喚命令に應ぜざるものは國事犯として法律の保護を停止され、その全財產を沒收せられ、入國とともに廿四時間以內に死刑に處せらるべし。

一、本件は最高法庭において裁判せられ、その判決をもつて結審とす。

一、本法は既往にさかのぼり效力を有す。

◇クレマンソー氏の葬儀

世界大戰の記憶と共に佛蘭西の歷史に大きな足跡を遺したクレマンソー氏は片田舍のヴアンデーで永遠の眠りについた。十一月二十五日同所においてしめやかな葬儀が行はれたが、何がさて巨人の死とて數千の群集が墓地に押しかけたが警官によつて百碼以內に入る事を許されず、また佛國らしく政府の役人は公式に參列せず個人として列した。この日フランス國中は半旗を揭げ、午前十一時は休戰を傳へた由緖ある大砲で廢兵の手によつて吊砲を轟かせたが、前夜ク翁の家の前に集まり手向けをした者三萬五千人であつた。

◇魚の岸上博士成都に死す

對支文化事業調查會から賴まれて支那長江の魚族を調査してゐた魚の研究の岸上鎌吉博士は四川省成都を中心に魚八十四種を採集成都領事館に滯在中廿二日朝腦貧血を起して逝去した。享年六十三である。博士はその研究の中でも「まぐろ」と「かつを」では世界學界の絕對權威として日本よりはむしろ海外學界の寶とされてゐた。氏はこのまぐろと鰹の生活狀態に從つて永い間居所もつねに變り鹿兒島にゐたかと思ふと翌月は臺灣に、八月はもう北海道に行つて「黑しびの子」などをいちくつて

ゐるといふふうであつた。

◇疑獄・疑獄・疑獄の眞相

攻界頽落の極をもの語る六大疑獄事件の眞相は金で勳章を買つた賣勳事件鐵道會社のワイロ事件などが全部記事解禁になつて十一月廿六日發表され愈々政府大官や資本家の眼もあてられぬ醜さが大衆の前に曝露された。勳章事件では前賞勳局總裁天岡直嘉氏が昨年秋の大典に當つて日魯漁業會社前社長の堤清六（代議士）や東京商工會議所會頭藤田謙一（勅選議員）及び日活社長横田永之助その他から勳賞を授けるからといふ約束のもとにワイロを合計八萬圓受取つた上それ等の人々を敍勳した事實が判明したのである。天岡前總裁以下はいまだに市ケ谷刑務所に收容されてゐるが、藤田謙一氏は判檢事に答へて「二千や三千の事など一々覺えてはゐない。五萬十萬の取引なら明白になつてゐるが」といつたさうだ。天岡前總裁の入獄については田中前政友會總裁の突然の死も小川平吉氏の事件と絡んでそこに大なる原因があると見られてゐる。

◇小川平吉氏の二百萬圓

未來の政友會總裁を夢みてさかんに鐵道會社から收賄しては黨にばらまいてゐた小川平吉氏、その懐に入れた不正な金は約二百萬圓を超へてゐた。北海道鐵道をはじめ東大阪電鐵、伊勢電鐵、博多灣鐵、越後鐵道、いづれの會社も新線敷設や、買收などに際しては多額の運動費をつかつた、みんなそれは小川氏の手から政友會の黨費に使はれたものであつた。司法の調べは發展して現內閣に及び、濱口首相や渡邊法相の必死の運動も效なく、つひに小橋文相も危ふくなつて椅子を去り、新らしく田中氏が文相として納まりせいぜい思想善導をやることになつたが、天岡、小川事件で大得意だつた現內閣の面目もあへなくつぶれ、玆に既成政黨政治の醜狀はイカンなく民衆の前に曝露された。

◇若槻全權一行の渡英

明年一月廿一日にロンドンで開かれる海軍々備縮少會議に出席するため、若槻、財部兩全權は三十余名の、いつに變らぬ大袈裟な一行を從へて十一月卅日サイベリア丸で横濱を出帆、一路アメリカに向つた。ワシントンではフーヴァ大統領を訪問した上クリスマス頃にはロンドンへ乗込む豫定であるが、英、米、日、佛、伊の五ケ國代表者としては、米國は國務長官スチムソン氏、佛はダルヂエ首相とブリアン外相、英はマグドナルド首相にヘンダーソン外相、等々度々の失敗の經驗によつて考へると、この會議が果してどれだけの平和的効果を齎すかは疑はしいものである。

◇秋田の小作爭議暴動化す

秋田縣北秋田郡前田村の豪農庄司家と小作人との間に十一月廿六日激烈な爭議が起り、幾百の警官と暴力團から憲兵隊まで出動しつひに流血の慘を見るに至つた。事の起りは古く大正十四年庄司家が小作人に對し作得米一反歩平均七斗五升に値上（從來は二斗五升から三斗七升五合）を申渡した事に初まり、五年間ひき續いて法廷戰による持久の狀態であつたが、その結果は大審院においても小作人側が破れたので以來險しい對立を示して今日に至つたもので、十一月廿六日、農民組合本部の人々が來援中であつた爭議事務所へ取調べに來た菜巡査部長との爭論が口火となつて双方兇器を以て相搏つ事となり、爭議團では婦人子供まで總動員で焚出しをし、多數の鬪士が必死に事務所を護つて檢束に向つた警官を喰ひとめて鬪つた。庄司地主の家でも一家武裝して暴力團に守らせるやら、至る所で兩者の衝突が繰り返され完全な暴動化となつて悽慘な氣が漲つてゐたが、廿八日つひに爭議團のリーダー可兒氏以下十一名が無抵抗で縛につく事と爭議は極力警察で和解に盡力する事の契約書が兩者に取交はされてとにも角にも鎭靜したが、指導者達の護送される際には婦人達は感極つて泣き悲壯といふより外なかつた。

◇蟹工船從業員の左傾

北洋の寒さをものともせず出漁して毎年夥しい蟹罐詰を製造するかの蟹工船の人夫は、あまりの過激な劣惡な勞働條件のもとにあつていつか反抗にめざめ、近頃は人夫がぞく〳〵赤化するといふので農林省內務省ではひどく怖氣をふるい、今後は嚴重な身許と思想調査をするといふ事になつて、折角餌にかけた人夫を送つた所が、半分以上赤化して逃亡したり組合を作つたり――そこで、もて餘した同省では、蟹の濫獲を防ぐためと銘うつて人夫の募集にも制限を加へる事となり、雖しい改正省令を出したので將來は蟹工船勞働者は應募に相當繁雜な手續が要つて、新しく乗船しやうとする者は非常に困難することゝなつた。

編輯後記

全女性進出の歌をもつたことは大きな悦びである。壹等のないのは殘念だが、いかに我々の希望が高かつたかを頷かれるであらう。作者が松田解子氏である事を知つたときは、偶然や、ことの僥倖でないことを思つた。彼女の全生活が鬪かひ、生み、はぐくみ、力强く働き、希望に滿ちてゐる。作つた詩ではない、息吸と共に敲きつけた眞實の聲である。私はこの力をし、叫びを尊とみ、抱負を悦び迎へ。再びいふ、今回選出された全日本の女性進出行進曲が机上に作られず、腸から絞りだされた、一プロレタリア女性の作であつたことは何を語るか、新興階級の勃然たる覇氣、新春第一の陽光と共にこれを傳へてゐる。猶へ、諸氏、我我はこの歌を高唱して怯懦なる我を追ひ退けよう。そして燦かしき明日の糧とも、新らたなる生命の血ともしよう、私はいま萬歳と叫ぶかくてこそ昭和五年の新春は意義あるものと御同慶に堪えない。猶、多數讀者の希望により作曲をお引受け下さつた山田耕作氏に本誌を支持する女人聯盟員諸氏に心厚くお禮を申述べる。（時雨）

天馬空をゆく――このことばは女人藝術のために用ひられるものと思はれる。一九二九年に築きあげた本誌の礎は、いまや女人藝術をほかにしては日本の女性全般のうごきを大觀し得ないほどの確乎たるものになつた。まづ記憶すべき喜びは女人大衆の生れたこと。女人聯盟の誕生。大衆は新春から擴大し聯盟は六ケ月の間に四支部と五準備會と多數の聯盟員を獲得した。そして三月と十月の小說號では文壇的に見て女流の新らしい境地を拓き、社會時評文藝時評劇評、及び九月以降の論爭は思想界に一つの石を投じたといへるであらう。講演部はまた活躍した。四月の甲府、松本、諏訪、夏の北九州、十月の大阪、甲府等々。しかし白眉は十月の東京における秋季大講演會であつたことはいふまでもない。創刊一週年記念に催した日比谷の藝術祭も盛大であつたが、これ等のすべては女性のみの力によつて生れ、成長してきたものである事を考へたい。いま私達は全女性進出行進曲を高らかに、窓をあけてうたつてゐる。一九三〇年の女人藝術は更にどつしりとした行進を續けるであらう。（秋子）

半年以上も待つた全女性行進曲が、やつと私達の口から叫ばれる事になつた。そして新春早々街頭には私達のこの歌が力強く流れる事であらう。山田耕作氏に始めて歌つて戴いた時、くれぐ〵も云はれた。大地を踏みしめる樣に力强く、わざと綺麗にしたりたるめたりしない事、誰でも歌ひいゝ樣に中音ばかりにしてありますが拍子が速くて少しむづかしい。强く歌つて下さい。山田氏の云はれた樣に皆さん力强く歌つて下さい。私達が集會した時等いつでも手を取あつて歌へるやうに早く覺えやうではありませんか、一九三〇年は我が行進曲の世である樣に。優子

年の暮、校正ずりの中に埋つてたべる編輯室の晩ごはんの白菜をかむと齒にしみる冷たさが、下がむけない位にまでつめこんだお正月の餅腹の後口にたべる一切のおいしさを思ひ出させてお正月の氣になつてゐます。お正月がきたら午年だから斷然跳上がろうと思つてゐます。女人藝術をふりかざして女人一段の飛躍です。（みどり）

此頃の私はやたらに自分の身邊が忙しくなつて、すまないと思ひつゝも社へのお手傳がなほざりになつてゐる。然し現在の私の事情ではこれがせい一杯なのだからゆるしていたゞくより外はない。又後日私らしいやり方でつくせる時は來る[illegible]につてゐる。編輯室皆さんの[illegible]五年度の健康を祈ると共に本誌の進展性について深い期待を持ちつゞけてゆく。內外ともに私の心持に何の他意はない（花世）

今年はといつてもこれを書いてゐるのは去年の部類なんですが――馬の年だから大いに蹴ね上らうと、誰も[illegible]意氣込んでゐます、女人藝術はまづ讀者の熱心な支持を期待して三倍に增刷しました。今後一年の健全な發展を豫告するものとして誇り得るだらうと思ひます。何だか今年はいゝ年のやうな氣がします。（素子）

昭和四年十二月十五日印刷
昭和五年一月一日發行（毎月一回一日發行）

送料一部壹錢五厘

本號に限り定價五十錢（送料二錢）

1部	……40錢
6部	……2.30錢
12部	……4.50錢

誌代の拂込みは成可く振替利用を乞ふ
郵便切手代用は一割增の事。

發行兼印刷者――長谷川時雨
編輯者――素川絹子
印刷所――秀英舍
大賣捌――東京堂　北隆館――大東館　東海堂

東京市牛込區左內町三十一番地
發行所　女人藝術社
電話牛込(24)一七八九
振替東京七五八二五

蒲田撮影所創設十週年紀念特作映畫



進軍

ジエームス・ボイド　原作
野田高梧　脚色
水谷文次郎　撮影
牛原虚彦　監督

鈴木傳明　田中絹代　主演

進軍の曲（兒玉花外氏作詩）　コロムビアレコード　二五七一五
ビクターレコード　五〇九四〇

昭和三年九月六日第三種郵　可
昭和四年十二　十五日印　本
昭和五年一月　（毎月一回一日發行）



第三卷 一號
定 五十錢（送料金二錢）